

孫文全集

第一卷



三民主義

第一公論社版

MG
D693.0
620

外務省調査部譯編

孫文全集
(第一卷)



3 2285 6884 0

三民主義

目次

孫文自序……………六

第一章 民族主義

第一講 總論……………九

第二講 列強壓迫下に於ける中國……………三

第三講 民族主義の喪失とその原因……………六

第四講 民族自決論と世界主義……………六

第五講 民族主義恢復策如何……………六

第六講 民族地位恢復策如何——結論……………二六

第二章 民權主義

第一講	總論	一〇〇
第二講	民權と自由	一〇七
第三講	民權と平等	一〇九
第四講	中國並歐米に於ける民權發達の經過及現狀	一一六
第五講	民權問題解決策如何	一二〇
第六講	完全なる民權政治機關は何か——結論	一二五

第三章 民生主義

第一講	總論	一三五
第二講	地權の平均と資本の節制	一三五
第三講	食糧問題	一四八
第四講	衣服問題	一四二

後記

三
民
主
義



103

孫文全集

三民主義

孫文自序

建國方略の心理建設物質建設社會建設の三書出版後、予は國家建設の起草を志し而して本書を完成せんとした。國家建設の一書は、之を前三書に比較し内容頗る尅大にして、民族主義民權主義民主主義五權憲法地方政府中央政府外交政策及國防計畫の八冊より成つてゐる。而して其中民族主義の一冊は既に脱稿し、民權主義民主主義の二冊も亦その大部分を草就し、其の他各冊の思想の詮索研究の方針に就いても、亦大體規畫その緒に就き、餘暇を見て執筆一氣柯成に書き上ぐる許りの運びに至り、方に全書の完成を俟て出版の上世に問はんとしつつありし處、測らずも十一年六月十六日陳炯明謀叛し、觀音山を砲撃したるに依り、竟に數年の心血を注ぎて成りし各種草稿並に參考洋書數百種を悉く灰燼に歸したるは、殊に痛恨に堪えない。茲に國民黨の改組に



(寧)

際し、同志に於て決心事に従ひ心を用ひて奮闘するには、速に三民主義の奥義及び五權憲法の要旨を需めて宣傳資料とすることが最も必要である。故に毎週一回宛之が講演を爲し、黃昌毅君に於て之を筆記し鄒魯君に於て之が讀校を爲さしめた。今民族主義は已に講義を終りたるを以て、特に先づ單行本に印刷して同志に餉る。惟ふに此度の講演は、これが準備の暇なかりしと參考書のなかりしとに依り、登壇後隨意發言したるため、之を前稿に較べて遺忘せる點が頗る多い。勿論これが上梓に先立ち、訂正増補は爲したものの、本題の情義綏論の條理及び引證の事實に至ては、總て遠く前稿に及ばざるが如く思はれる。尙ほ望むらくは同志諸君に於て、本書を基礎として類推敷衍し、之が闕遺を匡補し、條理を更生し一つの完全なる書たらしめ、以て宣傳の課本たらしむるならば、我民族我國家の幸量り知る可らざるものがあるであらう。

民國十三年三月二十日孫文序於廣州大本營

第一章 民族主義

第一講 總論

諸君、本日は諸君と共に三民主義に就いて語りたいと思ふ。抑々三民主義とは如何なるものであらうか。之を最も簡単に定義すれば三民主義即ち救國主義である。然らば主義とは如何なるものであるか。主義とは即ち一種の思想であり一種の信仰であり又一種の力である。凡そ人類が一事に對しその中の道理を研究せんとするに當つては、先づ思想生じ、思想貫通したる後信仰起り、信仰あつて初めて力を生み出すものである。故に主義とは思想に發して信仰に至り、信仰に依て力を生み出し、然る後完全に成立するものなりと云ふことが出来る。何を以て三民主義即ち救國主義と云ふや。三民主義は中國の國際地位の平等、政治地位の平等、經濟地位の平等を促進し、中國をして永遠に世界に適存せしめんとするものなるが故に、三民主義即ち救國主義なりと言ふのである。三民主義にして既に救國主義なりとすれば、試みに問はんに、我等今日の中國は救濟を要すべきものなりや否や。若し果して救濟を要すべきものとするならば、即ち當に三民主義を

信仰すべきである。三民主義を信仰すれば、即ち其處によく極大なる勢力を生み出すことが出来る。此の極大なる勢力こそはよく中國を救ふことが出来るであらう。

本日は先づ民族主義に就いて語りたい。今次國民黨の改組に當つては、救國方法として宣傳に重きを置いた。國人に對する普遍的の宣傳に最も必要なるは主義の演明である。中國に於ては最近十數年來、多少にても思想を有するものならば、誰しも三民主義に就ては聽き慣らされて居るに違ひない。けれども之を徹底的に了解して居るものは恐らく極めて少ないであらう。依て本日は先づ民族主義に就いて詳細講義したいと思ふ。では民族主義とは如何なるものであるか。之を中國の歴史上社會の習慣等の諸情形に接し、一言以て之を蔽へば、民族主義は即ち國族主義である。元來中國人の最も崇拜するところのものは家族主義と宗族主義である。従て中國に於てはただ家族主義、宗族主義あるのみにして國族主義がない。だから外國の傍觀者達は、中國人は一片の散沙（民族主義参照）であると言ふ。その理由とするところは何處にあるであらうか。即ち一般人民にだけ家族主義と宗族主義とのみあつて國族主義がないからである。中國人は家族及び宗族の團結力は非常に強大であつて、往々宗族を保護する目的の爲には一身一家を犠牲にする。かの廣東兩姓の争鬪に於て、兩族間には幾多の生命財産の犠牲も顧みられず飽く迄鬪を休めやうと

せざるが如きはその一例であつて、之はすべて彼等の宗族觀念の深きに緣因する。そして此の主
義が深く人人の心に喰入つて居るがため、犠牲をも敢て辭せないであらう。然しながら其の國
家に對するや、未だ曾て一度たりとも此の極大の精神を以て犠牲を敢てしたものはない。だから
中國人の團結力は宗族に止まり、未だ國族に迄擴張せられて居ないと言ふのだ。

余は民族主義は即ち國族主義なりと説いた。之は中國にはよく當てはまる。けれども外國には
當てはまらない。外國人は民族と國家とを區別して説いてゐる。英國では民族と言ふことを「ネ
ーション」と言ふ。「ネーション」には二様の解釋があり、一つは民族他は國家と譯する。斯様に
一字に二つの意味はあるが、彼等の解釋は非常に明瞭であつて決して混同する様なことはない。
又中國の文字の中にも一個の字で兩様の解釋あるものが頗る多く、例へば社會と言ふ二字の如き
も、二つの用法があつて一は一般人の群を指して言ひ、他は一種の組織ある團體を意味する。元來
民族と國家とは相互的關係の甚だ多いもので、之を別々に考へることは出来ないが、其の中にも
自ら一定の限界はある。國家とは如何なるものなりや、民族とは如何なるものなりや、我等は必
ず之を區別して置かねばならぬ。余は民族は即ち國族なりと説いたが、それが何うして中國にの
み當てはまり、外國には當てはまらないと言ふのであらうか。中國は秦漢以後すべて一民族が一

國家を造成して來たが、外國では一民族で幾つもの國家を造成するものあり、一國家内に幾つもの民族を包含するものがあるからである。即ち英國の如きは現在世界最強の國家であるが、其の國內の民族は白人を本位とし、之に銅色人、黑人等の諸民族が結合して始めて、大「ブリテン」帝國を形成して居るのであつて、従つてこの場合英國にあつては民族即ち國族なりとの一語は如何にも不適當である。又香港の如きは英國の領土ではあるが、其の中の民族には幾十萬人の中國の漢人があるのであるから、若しも之を香港の英國國族即ち民族と言ふならば、甚だ可怪なものではないか。更に又印度の如き現にやはり英國の領土であるが、英國國族と言へば、其の中には三億五千萬の印度人も當然含まるべきで、而して之を印度の英國國族即ち民族と言へば、之れ亦頗る變なものではなからうか。誰しも知つて居る通り、英國の基本民族は「アングロ・サクソン」人で、此の「アングロ・サクソン」人は英國のみに存在する許りでなく米國にも亦多數存在して居る。斯した譯で外國では民族即ち國族なりと言ふことは出來ないのである。中國でこそ民族即ち國族で通用はするものの、元來民族と國家とはもとと一定の限界があるものである。之を明瞭に區別せんが爲には、我等は如何なる方法に依るべきであらうか。それが爲には民族と國家とが根本上如何なる力に依て造成せられたものであるかを究むるのが、最も適當な方法であら

う。此の方法に随つて簡単に區別すれば、民族は天然力に依り造成せられ、國家は武力を用ひて造成せられたものなりと云へやう。中國の政治歴史を以て之を證明すれば、中國人は王道は自然に顯ふものなりと説く。これを換言すれば自然力即ち王道であるが、此の王道を以て造成せられた團體が民族であり、次に武力は即ち霸道であるが、此の霸道を以て造成せられた團體が國家である。かの香港が造成せられた原因は、決して幾十萬の香港人が英國人を歓迎して出來上つたものではなく、曾て英國と戦つて敗れた中國が香港の人民及び土地を擧げて英國に割讓し、英國人之に割讓し、久しくして纔に現在の香港を造成したのである。又英國が今日の印度を造り上げたのも、其の經過情形を辿つて見れば、亦香港同様で、之等は共に霸道に由つて出來上つたのである。現在英國の領土は全世界に擴張せられて居る。そして英國人の俗語に「英帝國に落日なし」と云ふ一旬がある。換言すれば、日日晝夜太陽の照すところすべて英國の領土ありとでも言ふべきところであらう。例へて見れば、若し我等東半球上にある人が、日出と共に「スタート」するとき、太陽は先づ「ニュージランド」、「オーストラリア」、香港、新嘉坡を照し、次いで西の方「セイロン」、印度を斜照し再び西して「アデン」、「マルタ」更に西して本國を照し、そして再び廻轉して西半球に至り「カナダ」を照して香港、新嘉坡へと再び循環するであらう。これ一日二

十四時間の開太陽の照すところ、必ず英國領土ありと云はれる所以である。斯の如き英國の廣大なる領土は一つと雖も覇道を用ひずして造成せられなかつたものではなく、これは單に英國許りでない。古往今來如何なる國家でも亦、之を造成するが爲には覇道を用ひないものはなかつたのである。併しながら民族の造成に至つては、即ち相同じからず、完全に自然に依り、毫も無理を加ふことは出来ないのである。香港幾十萬の中國人の如きは、自然裡に團結し一個の民族となつたもので、如何に英國が覇道を用ゆればとて改變することは不可能である。だから一つの團體にして王道に依り自然力に依つて結合して成りしものが民族であり覇道に依り人爲力に依つて結合せられて成りしものが國家であつて、これ即ち國家と民族との區別である。

次に民族の起源に就いて語りたい。世界の人類はもと一種の動物であつて、ただ普通の飛禽走獸と異なる點は、人間が萬物の靈長たるところにある。人類の分別法としては、第一は人種別で白色、黒色、赤色、黄色、銅色の五種に分つ。更に之を種によつて細分すれば幾多の族があり、例へば「アジア」民族の如き、その著名なものに蒙古族、馬來族、日本族、滿族、漢族がある。此の種々なる民族を造成した原因は、概括的に言へば自然力である。自然力を分析すれば甚だ複雑であるが、その中最も大なる力と云へば血統であらう。中國人が黄色なる原因は、黄色の血統

に根源して成りしものなるに因る。祖先の血統は如何なるものでも永遠にその一族に遺傳する。これ血統の力が最も大なる所以である。次に大なる力は生活である。生活方法の同じからざる場合、その結成せる民族も亦相同じからず。蒙古人の如く水草を逐ふて居住し遊牧を以て生活をなすものは、水草のあるところ遊牧に便なるところならば、何處へなりとも居を移す。この種遷居の習慣は又一箇の民族を結成し得るものである。蒙古が忽然として強盛を來し得たのは、即ちこれに基く。蒙古族はその最も強盛を極めし時代、元朝の兵を以て西の方中央亞細亞「あらびや」及び歐洲の一部分を征服し、東、中國を統一し日本をも征服せんとし殆ど歐亞を統一した。之をその他の最も強盛なりし民族に就いて見るに、漢族のその武力最も大なりし唐の時代に於てすら、纔に西、襄海に至りしに過ぎず、又羅馬民族の如きも、その最大の武力を傲りし時代でさへも、東部纔に黒海に達したに過ぎなかつた有様で、未だ曾て蒙古族の如く一民族が武力を以て歐亞兩洲を征したものとてはなく、ただ元朝を樹てた蒙古民族のみが斯くも強盛を極めたのである。而して蒙古民族が斯くも強盛を極めた原因こそは、彼等人民の生活が遊牧にあり、日頃の習慣上如何なる遠路をも恐れざるの長所があつたからのことである。第三に大なる力は言語である。若しも外來の民族が我等の言語を會得するものと假定すれば、それ等の民族は容易に我等に感化せ

られ、久しい間には遂に同化されて一民族となつて了ふであらう。又之に反し、若しも我等が外國の言語を知るものと假定するならば、我等も亦容易に外國人に同化せられることとなるであらう。單に言語ばかりでもその通りであるから、更にその上言語と共に人民の血統迄同じきものとしたならば、同化の効力は更に一層容易なるものがあるであらう。これ言語も亦世界に於ける民族造成に大なる力ありと言ふ所以である。第四の力は宗教である。凡そ人類は同じき神を奉拜し或は同じき祖宗を信仰することに依つて、又結合して一箇の民族を成し得る。宗教は民族を造成する力の中に在つて、又甚だ雄大なるものである。かの「アラビア」猶太兩國の如き、灭亡びて既に久しきにも拘らず、「アラビア」人と猶太人とは、今に至る迄依然存在して居るのであるが、彼等の如く國家亡びて民族のよく存在し得る所以は、實に彼等は各自分達の宗教を持つて居るからである。誰しも知つて居る通り、現在猶太人の各國に散在するもの極めて多く、世界に於て極めて有名な學者、例へば「マルクス」の如き「アインシュタイン」の如きは、何れも猶太人である。更に現今英米各國の資本勢力の如きも亦猶太人に操縦せらるるところである。猶太民族は、天質頗る聰明にして加ふるに宗教的信仰がある。故に流離して各國に遷徙すと雖、猶よくその民族を長久に維持することが出來たのである。「アラビア」人のよく存在し得る所以も、やは

り彼等に「モハメッド」なる宗教あるがために他ならない。その他佛教を信奉すること極めて深き民族、例へば印度の如きは、國家は滅びて英國の手に歸しては居るけれども、其の種族はやはり永遠に消滅せしむることが出来ないのである。第五の力は風俗習慣である。若しも人類中に一種特別の相同じき風俗習慣を有するものありと假定せば、久しい間には、又自ら結合して一箇の民族と成ることが出来るであらう。我等は幾多の相同じからざる人種が、そのよく結合して種々の相同じき民族となる所以の道理を研究して、自然之を血統、生活、言語、宗教及び風俗習慣の五種の力に歸した。この五種の力は、天然に進化して成るものであつて、武力征服に依つて得られるものではない。故にこの種の力と武力とを比較することに依つても亦民族と國家とを區別することが出来る。

我等古今の民族生存の道理に鑑みるに、中國を救ひ、中國民族をして永遠に存在せしめんがためには、必ず民族主義を提唱しなければならぬ。民族主義を提唱せんが爲には、必ず先づこの主義を完全に了解することが必要である。然る後初めてよく之を發揮し擴大して國家を救ふことが出来るであらう。中國民族は總數四億人、その中他民族としては數百萬の蒙古人百餘萬の滿洲人數百萬の西藏人百數十萬の回教の突厥人あるに過ぎず、之が總數一千萬に過ぎないから、大體に

於て、四億の中國人は完全に漢人にして、同一血統同一言語同一文字宗教及び同一の習慣を有する完全なる一個の民族なりと言ふことが出来ると思ふ。

我等の此の民族は、現在世界に於て如何なる地位にあるであらうか。之を世界各民族の人数より比較すれば、我等は人数に於て最も多く民族としても亦最大である。四千餘年の文明教化も亦まさに歐米に比して勝れりとも劣るところはない。ただ中國人には家族及び宗教の團體のみがあつて民族的精神がない。従て四億人が結合して一つの中國を形造つては居るものの、實際は一片の散沙であつて、今日世界に於て最も貧弱なる國家となり、國際的には最も低い地位にある。人は刀であり刃であり我は之に料理せらるべき魚であり肉である。我等の地位今日より危険なるはない。若し果して心を留めて民族主義を提唱し、四億人を結合して一個の堅固なる民族と爲すにあらざれば、中國は亡國滅種の憂があるであらう。我等はこの危亡を挽救するため、民族主義を提唱し、民族精神を以て國家を救はねばならぬ。

民族主義を提唱し中國の危亡を挽救せんがため、我等は先ず我民族の危険が奈邊にありやを知らねばならぬ。又その危険の情形をも知らねばならぬ。これが爲には中國人と列強人民とを比較するのが最もいい方法である。比較することに依つて、危険は更に明かになるであらう。歐洲大

戦前世界で列強と稱せられたものは、最大の英國、最強の獨逸、墺國、露國、最富の米國、新興の日本及び伊太利の七八ヶ國であつたが、戦後獨逸露の三國は倒れ、現在のところ一等強國として残るは英、米、佛、日及び伊の五國である。英、佛、露、米の各國は何れも民族を以て國を立てて居る。英國の發達に貢獻した、基本的民族と云へば「アングロ、サクソン」人、基本的土地は「イングランド」及び「ウェールズ」であり、その人口僅に三千八百萬に過ぎず、之を純粹の英國民族と言ふことが出来る。この民族は現在世界に於ける最も強盛なる民族であつて、その造成するところの國家は世界最強盛の國家である。その百年前の人口は凡そ一千二百萬位であつたものが、現在では三千八百萬となり、百年間に三倍に増加した。

我等の東方に、東方に於ける英國とも言ふべき島國がある。この國家こそ日本である。日本も亦一民族を以て造成せられたもので、その民族を大和民族と呼ぶ。建國以來今日迄未だ曾て外國の併合を受けたことなく、元の強盛を以てしても彼等を征服することが出来なかつた。彼等現在の人口は朝鮮、臺灣を除いて五千六百萬である。その百年前に於ける人口の確數は知り難きも、之を近來の人口増加率に依り比較計算して見れば、三倍の増加に當る。故に百年前の日本の人口は約二千萬を上下して居たものと見て差支へない。この大和民族の精神は、今に至るも尙ほ喪失せ

す、故に歐化の東漸に乗じ、歐風米雨の中に在つて、科學の新法を利用し國家を發展せしめ、維新後五十年、よく現在の如き亞細亞最盛の國家を成し、歐米と其の勢を競ひ、歐米人も敢て之を輕視せざるに至つた。

然るに我中國の人口は、如何なる一國に比しても大なるに拘らず、今日に至る迄外人に輕視せらるる原因は何處にあるであらうか。即ち一つは民族主義を有し、一つは民族主義なきに因る。維新前に於ける日本は國勢の衰微甚しく、その領土も四川一省の大きさに過ぎず、その人口も四川一省の多きに及ばず、又弱小國の例に洩れず外國の壓迫的恥辱を受けて來たものである。然しながら、彼等には民族主義的精神があつて、大いに發奮し、五十年を出でずして遂に世界列強の班に列し衰微せる國家を變じて強盛なる國家たらしめた。我等中國の強盛を欲するものにとつて、日本は一つの模範であらねばならぬ。

亞細亞人を歐洲人に比べて見るに、従前世界で聰明にして才智あるものと言へば、白人に限らるるもの如く考へられ、萬事白人に壟斷せられて居たものである。従て我等亞細亞人は彼等白人の長所を會得することが出来ても、一時如何様にも國家を富強にする方法がなかつたのである。だから國家を富強にしやうと云ふ意思是、單に中國人許りでなく、一般に亞細亞各民族から

失はれて居た。ところが近來に至り、日本が忽然興起し、世界一流の富強國となつた。日本がよく富強たり得たため、亞細亞諸國にも無窮の希望が生れた。思ふに日本従前の國勢は、現在の安南緬甸同様であつたが、現在では現在の安南緬甸等逆も日本と比べものにならない。これ程するところ日本がよく歐洲を學んだがために、維新後の短期間に於て、歐洲に追付くことが出来たのである。歐洲大戦休戦後、列強は「ベルサイユ」に於て世界の平和を議したものであるが、その際日本の國際的地位は五大強國の一に列し、列強は事の亞細亞に關する限り、すべて日本の主持するところに聽従したものであつた。惟ふに日本のこの事に就いて見るも、白人のすること位は日本人にも結構出来、世界の人種は顔色の相違こそあれ、その聰明才智に至つては何等區別し得るものでないと言ふことが分かる。かくて今日亞細亞は強盛なる日本を有するがために、世界の白人人種は、敢て日本人を輕視せざるのみならず亞細亞人をも輕視しない。故に日本が強盛となつてからは、大和民族一等民族の尊榮を享けることが出来たのみならず、その他一般の亞細亞人も亦その國際的地位を擡高することが出来たのである。曾ては歐洲人に出来ることも我等には出来ないと思はれて居たものであるが、現在では日本人が歐洲を學び得るとすれば、我等も亦日本を學び得、學んで日本の如きに至り得るとせば、又將來學んで歐洲の如きに至り得るものなる

ことを知ることが出来るのである。

「ロシア」は歐洲大戰中革命が起り、帝制を打破して、從來と全くその趣きを異にする社會主義的な一新國家を打建てた。彼等の民族を「スラブ」と云ふ。百年以前四千萬なりし人口は現在では一億六千萬となり、百年の間に四倍に増加し、国力も亦四倍に増大して、最近百年の間「ロシア」は實に世界最強の國家であつた。日本や中國が彼の侵入を恐れた許りでなく、歐洲の英國獨逸も亦彼の侵入を恐れたものである。彼等は帝政時代、専ら侵異政策を以て領土の擴張に再念し、今や露國の疆土は、歐洲及亞細亞に一半宛を占め、領土は歐亞兩洲に跨つて居る。斯の如き彼等の大領土は、すべて之を歐亞の兩洲より侵略したものだ。かの日露戰役に當り、各國人は齊しく露國が中國の領土を侵略せんことを恐れたが、彼等が露國の中國侵略を恐れた理由は別にあつて、即ち中國が露國に侵占せられた曉、又再び世界各國の侵略を始め、諸國皆之に侵占せらるることゝを恐れたが故に他ならない。露國人はもと世界併呑の志を抱いて居た。それがため世界各國はそれぞれ何等かの對抗方法を講じて來たもので、日英同盟の如き、即ちこの併呑政策の對抗策として出來たものである。だが結局、日露戰爭に依り日本は露國を朝鮮南滿地方より驅逐して、遂に露國の世界侵略政策を覆し、東亞の領土を保持して世界に一大變化を與へた。降つて歐洲大戰後露

國人は自ら帝國主義を推翻し、帝國主義的國家を變じて新しき社會主義的國家たらしめ、世界に更に大なる變化を齎したのである。この種變化は成功後僅に六年に過ぎないが、彼等はこの六年間に内部の組織を改め、従前の武力的舊政策を棄て、平和新政策に改めた。この政策は、各國を侵略する野心なきのみか、進んで強きを抑へて弱きを扶け公道を主持するものであつて、茲に於て世界各國は又しても露國を恐るゝに至り、現在では各國の恐露心理は従前に比し更に激しいものがある。何故ならば、この平和新政策たるものは、露國自身の帝國主義を打破する許りでなく、同時に世界の帝國主義を打破せんとするものであり、世界の帝國主義の打破のみならず更に進んで、現在各國の政權が表面上政府を主とするに拘はらず事實資本家の手に依つて支持せられつゝあるの故を以て、世界の資本主義をも打破せんとするにあるからである。露國の新政策はかく資本主義を打破せんとするものなるが故に、世界の資本家の間に大恐慌を來し、世界が之がため一個の極めて大なる變動を生じ、この大變動に因り、その後の世界の大勢も隨つて改變せられた。

歐洲戰爭の歴史に就いて言へば、従前絶えず發生しつゝあつた國際戰爭の最近のものである歐洲戰爭は、獨逸土「プ」の諸同盟國と英、佛、露、日、伊、米の諸協商國と相争つたもので、四ヶ年

に互る大戦を經過し、筋疲れ力盡きて始めて停戦を見た次第であつた。この大戦後、世界の先知先覺者達は、將來歐洲はその焦點となることはなきも、更に別種の國際戰爭を引起すべきは免がれ難きところなりとなし、或るものは又一場の、例へば黄、白兩人種の戦の如き人種戰爭を豫想した。然しながら露國のこの新しき變動を發生した今日、余（孫文）が個人として既往の大勢を觀察し將來の潮流を豫測するに、國際間の大戦は所詮兎るべからざるものではあるが、その戰爭は異なる種族間に起らずして同種族の間に起り、白種と白種と相分れて戦ひ、黄種と黄種と相分れて戦ふに至るべく、それ等の戰爭は階級戰爭であり、被壓迫者と横暴者との戰爭であり、公理と強權の戰爭であらねばならぬ。

露國革命後「スラブ」民族は如何なる思想を生み出したであらうか。彼等は強きを抑へ弱きを扶け富めるを壓し貧しきを濟はんことを主張したのである。これ専ら世界に公道を伸張して不平を打たんとするに他ならない。この思想の歐洲に宣傳せらるゝや、各種弱小民族は舉つて之を歓迎した。そして現在の處、最も之を歓迎するものに土耳其がある。土耳其は、歐洲戦前最貧最弱の國家で國勢萎微して振はず、歐洲人は彼を呼んで近東の病夫となし、早晚滅亡すべきものと考へてゐた。歐洲大戦には獨國側に加入したが、協商國のために打破られ、各國が更に之を分割

せんとするに至つたので、土耳其の國勢衰々として危く殆ど自存することも覺束ないやうになつた。その後露國出で、不公平を打ち、彼を助けて希臘を敗り、一切の不公平條約を改修した。そして現在では、假令世界の一等國と言ふことは出來ないにしても、既に歐洲二三等國の班に列することが出來たのである。然らば之は如何なる力に依りしものであらうか。これ全く露國人の援助に依るものである。敍上を以て推論すれば、將來の趨勢は必ずや、何れの民族も如何なる國家も、壓迫を受けて居るもの又は屈辱を受けて居るものは、すべて必ず一致聯合して強權に抵抗せねばならなくなるであらう。然らば如何なる國家が被壓迫國家であらうか。歐洲戰前英佛兩國は獨逸の帝國主義を打破せんとし、そして露國も亦彼等の一方に加入した。その後露國は無數の生命財産を犠牲にしたが、遂に中途に師を回して革命を宣布した。之は抑も何が故であらうか。之は露國人の受くるところの壓迫が甚しかつた爲である。故に去つて革命を起し、彼等の社會主義を實行し強權に反抗したのである。當時歐洲列強は、舉つてこの主義に反對し、共同出兵をして彼を打たんとした。幸に「スラブ」民族の精神を有する露國は、終によく列強を打破するを得た。そして今に至る迄列強は露國に對し武力を以て反對し得ず、僅に彼の國家の不承認、てふ消極的抵抗を以てするに止まつて居る（現在では英國は既に正式に露國を承認して居る）。何が故に歐洲各國は

露の新主義に反對するの否か。それは歐洲の各國人は侵略を主張し、強權があつて公理がない。然るに露國の新主義は公理を以て強權を撲滅せんことを主張するからだ。この主張の爲に列強と相反目し、そして列強は今に至る迄、彼を消滅せしめんとの意志を捨てないのである。露國も革命前途は矢張り強權あつて公理なきを主張する一個の甚だ頑固なる國家であつたものだ。ところが現在ではこの主張に反對する。各國は露國がこの主張に反對するが爲に一齊に出兵して露國を打つたのである。以上は世界現下の大勢であつて、この大勢に鑑み、余は今後の戦争は強權と公理との戦争なりと説かんとするものである。今日の獨國は歐洲に於ける被壓迫國家であり、又亞細亞に於ては、日本以外の凡ゆる弱小民族は、すべて強暴な壓制を被り種々の痛苦を受けて居る。同病相憐れむ彼等は將來必ずや聯合して強暴なる國家に抵抗せんとするであらう。多數の被壓迫的國家は必ずや彼等強暴なる國家と身命を賭して一戦せんとするであらう。之を全世界に推し廣めて考ふれば、將來公理を主張する白人と、公理を主張する黄人とは必ず聯合し、強權を主張する白人と強權を主張する黄人とも必ず聯合し、この二つの聯合のあるところ、一場の大戦は免るべくもないであらう。これ即ち世界の將來に於ける戦争の趨勢であらねばならぬ。

獨國は百年前人口二千四百萬を有し、歐洲大戦の爲め多大の減少を見たと言ふものゝ、現在ま

だ六千萬はあるであらう。して見ればこの百年間に二倍半を増加したことゝなる。その人民は「チ
ュートン」民族と呼ばれ、英國人に似て至つて聰明である。故に彼等の國家は強盛を極めたもの
である。だが歐洲戰に武力に失敗して、後は自然公理を主張するの必要に迫られ、強權を主張す
ることが出来なくなつた。

米國の人口は百年前九百萬に過ぎなかつたものが、現在では一億以上に達してその増加率極め
て大なるものがあり、こゝ百年間に十倍に増加した。彼等の斯くの如き多數の増加人口は、大半
歐洲より移民して來たもので、本國に生育せしものではない。これ等歐洲各國人民は、何れも最
近數十年來歐洲の人口過剩に累せられ、本國に居ては生活の途なきために米國に渡來して生活を
謀りしものに他ならない。米國の人口は、これ等の移民に依つて頗る急速に増加したのである。
即ち各國の人口増加は大部分生育に依るけれども、米國の場合は大部分移民の收容に依つたので
ある。故に米國人の種類なるものは、何れの國に比較してもより複雑で、各洲各國の移民が含まれ
て居る。けれども一度其の米國に至るや、そこに鎔化作用が起り所謂「合一爐而治之」で、自ら一
種の民族となつて了ふ。そしてこの民族は、もはや在來の英國人、佛國人、獨國人でもなければ
又伊太利人でもなく、その他南歐人でもなくなつて、こゝに別個の一新民族となる。之を「アメ

リカ」民族と呼ぶことが出来る。斯様に米國には獨立の民族がある。そしてこの民族あるがためによく世界の獨立國家となつたのである。

佛國人は「ラテン」民族である。「ラテン」民族は歐洲諸國に散在し西班牙、葡萄牙、伊太利にあり又「アメリカ」に大陸諸國に移住して墨西哥、「ペルー」、「チリ」、「コロンビア」、「アルゼンチン」、「ブラジル」その他中央「アメリカ」の諸小國に居住する。かく南「アメリカ」大陸諸國の民族がすべて「ラテン」人であるところから、米國人は彼等を「ラテン、アメリカ」と呼んでゐる。佛國の人口増加は頗る緩慢で、百年前に千三萬なりしものが、尙ほ三千九百萬で、百年間に僅かに四分の一の増加に過ぎない。

今世界の人口増加率を比較するに、最近百年の裡、米は十倍、英國は三倍、日本も亦三倍、露國が四倍、獨國が二倍半、佛國は四分の一の増加である。この百年間に於ける人口の増加顯著なりし理由は、科學の進歩、醫學の發達、衛生設備の完成とに依り、死亡減少し生育を増加したるに基因する。然るに願みて中國は如何。各國の人口増加と中國の人口のそれとを比較して來るとき、余は眞に疎然たらざるを得ない。例へば米國人口の如きは百年前九百萬に過ぎざりしもの今や一億となり、更に一百年の後にも、依然舊來の増加率に止まるとしても、尙十億の多きに至るべき

であらう。中國人は常に自ら誇らげに、我人口は多數にして容易に他に消滅せらるべきものではない、例へば、元朝は中國に主となつたが、彼等蒙古族は中國人を消滅し能はざりしのみならず却て中國人のために同化せられ、中國は亡びない許りか蒙古人を吸収して了つた。又滿洲人も中國を征服し二百六十餘年間これを統治してゐたが、やはり中國人を消滅することなく、却て漢族と同化するところとなり、漢人に變成した。現に滿洲人がすべて漢姓を有するが如きも之が事實を裏書するものに他ならないと説いて居る。斯うした理由から多くの學者達は、假令日本人又は白人が中國人を征服するやうなことがあつても中國人は日本人又は白人種を吸収するだけの話であるから、安心して可なりと考へてゐる。さうした彼等は、百年後米國の人口が十億となり、我入口に二倍半すると言ふ事實に就いては、一向氣が付かないで居る。實際、従前滿洲人が中國民族を征服することが出来なかつたのは、彼等が僅か一億十萬の人口を有せしに過ぎず、中國の人口に比して、その數が餘りにも少なかつたがため中國人に吸収せられたのであるが、若しも假りに米國人が來つて中國を征服するとしたならば、かの百年の後には米國人の十の中四の中國人が參雜するに過ぎなくなり、恐らく中國人は米國人の同化するところとなつて了ふに違ひない。諸君は中國の人口四億なりとは、何時頃の調査か御存知であるか。それは滿清乾隆時代の調査に

かゝり、その後調査せられたものはない。乾隆より現在に至るまでに二百年に及んで居るが、依然四億、百年前に四億で現在も四億とすれば、この割でゆくとすれば、百年後も當然亦四億と推定されなければならない。佛國は人口過少のため出産育児を奨励し、一人にて三子を生むものは奨せられ、四五人のものは更に重く奨せられ、雙子を生めば特別の奨あり、男子にして三十歳に至るも娶らず、女子にして二十歳に至るも嫁せざるものに對しては罰ありとのことである。これ佛國の奨励する出産育児の方法である。かくも生育を奨励する佛國ではあるが、その人口は決して減少する譯ではなく、單にその増加率が他國より大きくないと言ふだけで、然も且つ佛國は農業を以て國を立て、國富み民豊かにして、日々皆快樂に耽ると言つた結構な國柄である。百年前「マルサス」なる英國の學者は、世界の人口過剩と物産の供給に限りあることを憂え、人口の減少を主張し一種の學説を創立して謂ふ「人口は幾何級數的に増加し、物産は算術級數的に増加する」と。この學説は快樂を追究して止まない佛國人の痛く共鳴するところとなり、非常な歡迎を受けた。そして男子は一家を扶養するの義務を負はず、女子は子を生み子を育つる必要なしと主張し、彼等は人口減少の方法として、單に種々な自然的方法を用ふる許りでなく、又幾多の人爲的方法を用ふるに至つた。そして百年前何れの國に比しても多數であつた佛國の人口は、「マルサス」學

説を宣傳し大歓迎して一般に人口の減少を實行したため、今日の如く人口過少の痛苦を受けねばならなくなつたのである。これすべて「マルサス」學說の中毒に因るものに他ならない。現今中國の新青年の中にも亦「マルサス」學說に染り人口の減少を主張するものあるは、佛國が既に減少の苦痛を知り、新政策を施行し、人口の増加、民族の保存を提唱し、佛國民族をして世界民族と共に永久に存在せしめんと努力しつゝあるを知らないからである。

我人口は今日果して何の位あるであらうか。人口の増加率は、假令英國日本には及ばないとしても、乾隆時代より算へ來れば、少くとも五億はある筈である。ところが曾て米國公使「ロツクヒル」が中國各地に就き調査したところに依れば、中國の人口は多くも三億に過ぎずと説かれて居る。では我等の人口は結局何れ程であるであらうか。乾隆のとき既に四億あつたのであるから米國公使の調査に據るとすれば、已に四分の一の減少である。そこで現在四億はあるとしても、之を類推すれば、百年後に於ても恐らく依然四億に止るであらう。

日本の人口は現在のところ六千萬であるが、百年後には二億四千萬となるべき筈である。現に彼等に既に人口過剩であつて本國だけでは、とても生活し切れないところから、彼等は各國に向つて訴へて言ふ。島國の人口過多にして海外に向つて發展せざるを得ずと。事實日本は東、米國

に於ては「カリフォルニヤ」州は門を閉して納れず、南、濠洲も、英國人は、濠洲は白人の濠洲なりと説いて別色人種の侵入を許容しないと云ふ有様で、日本は到るところ拒絶せられ、八方塞がりの態にある。だから彼等は又、各國に向つて事情を打明けその諒解を求めて言ふ、日本人は他に行くところがないから滿洲や朝鮮を經營せざるを得ないと。之に對し、各國人も亦明かに日本人の意思を諒とし、彼等の要求を容れて以爲らく、日本が中國に殖民したつて自分等本國には何等關係のないことだと。

一百年後全世界の人口は必ず幾倍にも増加するであらう。獨逸佛國の如き今次の大戦に於て多量の死者を出したが、やはり必ずや戦前の状態を恢復して出生育児を獎勵し二三倍の増加を示すであらうと思はるゝ。百年後の問題はさて措き、單に現在の全世界の土地と人口とを比較して見ただけでも、既に人口過剰の患がある。だから今次の歐洲の大戦の如きも、或る人は之を「打太陽」の地位なりと説いてゐる。と言ふのは、歐洲列強の多くが半ば寒帯に近く、戦争の原因は、互に赤道及温帯地方の土地を争つた點にあり、太陽の光を争つたものと言ふべきであるからだ。中國は全世界中氣候最も温和にして物産最も豊富な地方に位する。この中國を各國が一時に併合することの出来なかつた原因は、彼等の人口が中國のそれに比較して遙かに少なかつたが爲に他

ならない。けれども百年後に至つて、依然我等の人口が増加せず、彼等の人口のみが大なる増加を遂げたとしたならば、彼等の多數を以て少數を征服することとなり、必らずや中國は彼等のため併合せらるゝに至るであらう。そのときに至らば、中國は常に主權を失ふのみか、國も亡びるであらう。そして中國人も同時に彼等の民族に消化せられて、種族の滅亡を招來するであらう。従前蒙古滿洲が中國を征服したるが如きは、少數が多數を征服し多數の中國人を利用し彼等の奴隸たらしめんとしたに過ぎなかつたのであるが、若し將來果して列強が中國を征服せんとするやうなことがあれば、多數を以て少數を征服することとなり、彼等は我等を奴隸とする必要さへもないのである。我等中國人は、そのときに至つては奴隸にさへもなり得ないであらう。

第二講 列強壓迫下に於ける中國

古より民族興亡の原因は、人口の増減に由るものが甚だ多い。これ天然の淘汰である。人類は天然の淘汰力に遇へば抵抗することが出来ない。故に古より幾多の民族あり、幾多の有名なる民族があつたけれども、現在の人類中には悉くその跡を絶つて居る。我中國民族も亦甚だ古い民族で、記録の存する限りの歴史に就いて見るに、既に四千餘年を経て居る。故にこの點から推究す

れば、我民族は發生以來少くとも五六千年は經たものと必せられる。その間幾多の天然力の影響を受け來り、遺傳して今日に至つたが、毫も我等の消滅を來たさざるのみか、却て我等を繁盛せしめ四億人に生長せしめた。之を世界の民族と比較すれば、我等は依然最多にして最大なる民族である。これ我等民族の受くるところの天恵が他の民族に比較して獨り厚きに他ならず。故に天時人事共に幾變遷を経過せるにも拘はらず、有史以來四千年、たゞ文明の進歩を見て民族の衰微を見ず、代々相傳へて今日に至り、依然として世界最優秀の民族たるを失はないのである。故に一般の樂觀主義者は以爲らく、中國民族は之迄災害を経過すること幾許なるやを知らざるに、今に至る迄滅亡せず、從つて今後とても如何なる災害を経過するとも決して滅亡には至らざるべしと。この種論調は、この種希望は、余の見解に従へば間違ひである。何故ならば、單に天然の淘汰力のみより云へば、或は我民族は生存し得るであらう。けれども世界の進化力は、天然力許りではなく天然力と人爲力が湊合して成るものであり、然もこの人爲の力量たるやよく天工を巧奪することの出来る位偉大なる力のあるもので、所謂人事天に勝つである。この人爲力の中最大のものが二つある。即ち一つは政治力にして他は經濟力である。この二つの力の民族の興亡に及ぼす關係は、天然力に比し、遙に大なるものがある。今日我民族は、世界の潮流の中にあつ

て、この二つの力の壓迫を受くるのみならず、深くこの二つの力の禍害に中毒して居るのである。

中國は幾千年來政治力の壓迫を受け二度も完全に滅亡して居る。即ち一回は元朝に依り、他は清朝に依つてである。去り乍ら、この兩次の亡國はすべて少數民族に依つて亡ぼされたのであつて、多數民族により亡ぼされたものではない。従つてそれ等少數民族は總じて我等多數民族の同化するところとなつた。故に中國は政權上では二度迄も亡びては居るが、事實民族そのものは何等大損失を蒙むつて居なかつたのである。列強の民族の現狀に至つては従前と大いに相同じからざるものがある。一百年以來列國の人口増加は甚だ多かつた。既に比較して置いた通り、英露兩國の人口の如きは三四倍に増加し、米國は十倍に増加した。この過去一百年間の増加率に照して今後一百年の増加を推測すれば、我民族は一百年後に於ては、如何に天恵が深厚であらうとも、到底列強民族と世界に並存することは困難であらう。例へば百年前九百萬に過ぎざりし米國の人口が、現在では一億以上となり、更に百年後には十億以上となるべく、英獨露日の人口もすべて幾倍加せんとするのである。だから之に由つて推測すれば、百年後には我等の人口は少數と變じ列強の人口が多數となるであらう。そのときに至らば中國民族は、敢て政治力や經濟力の壓迫が

なくとも、單に天然の進化力のみを以て推論するも、中國の人口はもはや滅亡の他はない。況や百年後に於ては、我等は天然力の淘汰を受くるのみならず、同時に政治力經濟力の壓迫を受けねばならぬ。然もこの二つの力は、之を天然力に比較して、更に速かにして且つ激烈である。

天然力は極めて緩慢なものではあるが、やはり大民族を消滅せしめ得る。即ち今から百年前の一先例を引用して之を證明して見やう。かの南北「アメリカ」大陸の紅蕃の如きはその一例であらう。「アメリカ」大陸は二三百年前に在つては完全に紅蕃の土地であつて、彼等の人口は非常に多く到る處に生存して居たものであつたが、白人の「アメリカ」大陸に移住するに伴ひ、その人口は漸次減少し始め、現在に至つて殆ど消滅した。之に由ても天然の淘汰力も亦大民族を消滅し得るものなることが判かるであらう。

政治力と經濟力とは、天然の淘汰力に比して、更に速かに更に容易に大民族をも消滅せしむる。今後中國民族が若し果して單に天然力の淘汰のみを受くるものとせば、猶一百年を支持し得るであらう。けれどもその上に政治力と經濟力との壓迫を同時に受けたならば、恐らく十年を保つことも難しからう。故に今後十年間は中國民族は生死關頭に在りとも云ふべく、何等かの適切なる方法を講ずることに依つて、此處十年以内に政治力經濟力の壓迫から解脱し得たならば、我民族

は今後とも列強民族と併存することが出来るであらうが、若し然らずして、我等に之等政治力經濟力の壓迫を解脱する方法がなかつたならば、我民族は列強民族の爲に滅ぼされなければならぬであらう。假令之が爲め直に全部滅亡することは無いにしても、又天然力のために徐々に淘汰せらるゝに至るであらう。故に今後中國民族は、同時に天然力、政治力及び經濟力の三種の壓迫を受くることとなる。即ち中國民族生存の危険の大なるを見るを得べきである。

中國の歐米の政治力經濟力の壓迫を受くる、まさに百年に及ぶ。百年前に於ては滿人が我國家に據り尙強盛を極めて居つた。當時英國は印度を滅したが、敢て來つて中國を滅ぼさんとせず、却て中國の印度に干渉するを恐れて居たものである。けれどもこの百年以來は何うであらうか、中國は幾多の領土を失つたのである。之を最近より過去に遡つて見るに、最近失つたものに威海衛、旅順、大連、青島、九龍及廣州灣がある。歐洲戰後列強は最近の領土を還附せんとするに至り、青島は先づ還附せられ、威海衛も亦近く還附せられんとして居る。併し乍ら、之等は中國の一小地方に過ぎない。従前列國は、中國は永遠に振ふ能はず、自らの力を以てしては再び自己を管理することは出来ないものと考へて居たので、先づ中國の沿海地方の大連、威海衛、九龍等の如きを占領して一個の根據地とし、以て中國を瓜分せんとしたのである。その後中國に革命起り、

列強は中國の尙爲すべきあるを知つて、遂に中國分割を斷念した。列強が中國分割を企圖しつゝあつた頃、一般の中國の反革命の人々は革命が却て分割を招來すべきを説き、その後革命の結果列強の分割を招來せざるのみか、却つて列強の中國分割の野心を打消すことにならうなどは考へ及ばなかつたものである。之より少し以前に失つた土地としては朝鮮、臺灣、澎湖島がある。これ等の地方は日清戰爭の結果日本に割讓したもので、これがため列國の中國分割論を引起した。更にその少し前に緬甸及安南を失つて居る。安南を失つた頃、中國は未だ多少の抵抗力を有し、鎮南關の一戦には戰捷を得たものであつたが、その後佛國に恐嚇せられて、之と講和し、喜んで安南の地を割讓した。けれども實際に於ては、講和の數日前中國の軍隊は、立派に鎮南關に於て大捷し、佛國の全軍殆ど覆滅と言ふ状態であつたのだ。斯様に戰爭に勝ち乍らも後になつて中國から和を求めたものだから、佛國人も頗る奇怪に感じたものらしい。で嘗て一佛國人が中國人に對して斯う云つたことがある。中國人のやるところは全く不思議で堪らない、各國の慣例では戰勝國が必ず戰勝の尊榮を表示して戰敗國に向つて土地の分割及賠償金を要することになつて居る、然るに中國は戰勝の日却て地を割いて和を求め安南を佛國に送り、又種々なる苛虐な條件を定め、これ眞に歴史上戰勝國から和を求めた先例であると。中國が斯様な先例を開いた原因は、滿

清政府の甚しく無智なりしに因る。安南緬甸はもとと皆中國の領土であつたが、安南を割讓して後、中國の足許をみすかした英國は緬甸を占據したけれども、中國は一向これを責めやうとしなかつたものである。又少しく遡つて失はれた土地に就いて言へば、黑龍江、烏蘇里の地があり更にその以前には、先頃遼露國極東政府の所在地であつた、伊犁流域、霍罕 (Kokand) と黑龍江以北の諸地方とがある。之等も亦中國は手を拱いて外人に送り敢てこれを問はんとはしなかつたものだ。この外琉球、暹羅、「ポルネオ」、「スマトラ」、「ジャワ」、「セイロン」、「ネパール」、「ブータン」等の諸小國も、曾ては皆中國に朝貢して居たものである。斯様な次第で、中國の最強盛時代には、その領土は頗る廣大で、北は黑龍江以北に、南は「ヒマラヤ」山以南に至り、東は東海以東、西は葱嶺以西に至り、すべてこれ中國の領土であつた。「ネパール」の如きは民國元年に至るも、尙四川省に進貢して居たが、元年以後西藏の道路が不通となつたため、遂に再び來なくなつた。斯くの如く中國の最強盛時代には政治力亦四隣に威を振ひ、亞細亞大陸の西南各國は一として藩と稱し朝貢するを榮となさざるものなき有様であつた。その頃歐洲の帝國主義は未だ亞細亞に侵入して居らず、當時の亞細亞に於ては帝國主義とも云ふべきものは中國の他になく、故に諸弱小國は何れも中國を恐れ、中國の政治力を以て壓迫せらるることを恐れて居たもので、そ

の餘勢の存するところ、今尙「アジア」各弱小民族は中國に對し餘り安心して居らないらしい。現に蒙古の如きは今回我國民黨が廣州に大會を開くや代表を派遣したが、これは我等南方政府の對外主張が依然舊來の帝國主義を踏襲するものなりや否やを見んとするにあつたらしい。けれども彼等代表は到着後案に相違して、我等大會所定の政綱が弱小民族の扶持にあり、毫も帝國主義的意思なきを見たので大いに安心し、極力賛成の意を表し、互に聯絡して一東方の大國を建設せんことを主張したことである。斯の如く我等の主張に賛成するものは、單に蒙古のみではない。その他弱小民族は悉く同様である。それは兎に角として、歐洲列強は、その帝國主義と經濟力を以て中國を壓迫し、中國の領土は逐次漸く縮少し本部十八省内さへも幾多の地を失つたと言ふのが今日の狀態である。

中國革命後、列強は政治力を以ては中國を分割することの極めて容易ならざるを覺つた。従前滿清は中國を征服したけれども、我等中國人は革命を知つて居た。だから若し果して列強が依然としてその政治力に依つて中國を征服せむとしたならば、我等中國が將來必ずこれに反抗するに至るべく、斯くては列強にとつては頗る不利であると言ふところの考へが變つて行つた。従つて彼等は現在では幾分その政治力を以て我等を征服するの手を緩めて、改めて經濟力を以て我等を

壓迫せんとし始めた。そして彼等は政治力さへ用ひずして中國を分割すれば各國間の衝突を免れ得るであらうと考へたものである。けれども彼等は中國に於ける衝突は或は免れ得るとするも、歐洲に於ける衝突は遂に免るべきもないであらう。何故なれば、「バルカン」問題は歐洲大戰を生んだではないか。そして彼等はこの戦争に於て自ら巨多の損失を受け、又幾多の例へば獨逸の如き強國は皆倒壊したにも拘らず、彼等の帝國主義は今尙依然として改革せられて居ない。英、佛、伊の如き依然舊帝國主義を以て繼續進行しつつあり。米國すらも亦「モンロー」主義を棄てて列強に参加し一致的行動を執るに至つたではないか。歐洲大戰經過後彼等の中には一時歐羅巴に於てこそ帝國主義的行動を中止したものもあるが、中國に對しては、數日前各國が二十餘隻の軍艦を廣州に派遣して示威を試みたやうに、相變らず帝國主義の力を以てその經濟力を發展せしめんとしつつある。經濟力の壓迫は政治力の壓迫よりも一層その力は猛烈である。政治力の壓迫は看破され易い。例へば、恰度今次列強が二十數隻の兵船を以て示威した際の如きは、廣州の人民は立どころに痛痒を感じ民衆の公憤を生み出し、惹いては全國人民の公憤を起すことも出來た。これ政治力の壓迫は容易にその痛痒を感じ得ると言ふ譯である。けれどもそれが經濟力の壓迫となると仲々普通のものには容易に感ぜられない。宛も中國が、既に幾十年來列強の經濟力の壓迫を受け

つゝあるにも拘はらず、一般にさして痛痒を覺えず、結局中國各地は擧げて列強の完全なる殖民地と化して了つて居るにも抱はらず、各國人は今尙列強の半殖民地となつたことを知つて居る許りであるやうに。この半殖民地の名詞は自慰的のもので、その實中國は列強の經濟力の壓迫を受けて、實に半殖民地ならざるのみか、本當の殖民地に比し、更に不利なる立場に置かれてある。例へば、、、、の殖民地、安南は佛國の殖民地であつて、、、、となり、安南人は佛國人の奴隸であるが、之に對し我等は、動もすれば亡國奴の三字を以て、、、及び安南人を譏つてゐるが、それは我等が單に彼等の地位のみを知つて、實際に於て我等自身の地位が、、、安南人にも劣つてゐることを知らないからのことである。今概括的に中國は半殖民地なりと説いた。然らば中國は果して如何なる國の殖民地であるか。これは既に條約を締結せる各國の殖民地であるのだ。凡そ中國と條約ある國家は皆中國の主人である。從て中國は、一國の殖民地でなくして各國の殖民地であり、一國の奴隸ではなくして各國の奴隸なのである。單に一國限りの奴隸と各國共通の奴隸とを比較すれば何れがいいであらうか。一國限りの奴隸であれば、水旱等の天災の際には、主人格たる國家は早速救濟金を支出して之を救助する。そして彼等は金を送つて救濟することこそは、主人たるべきものの義務にして分に應じて當然なすべきものと考へて居り、又奴隸

となつた人民も主人は當然救濟すべきものと考へてゐる。然し乍ら、列國共同の殖民地たる中國が前年北支一帯が天災を受けたとき、各國は義損金を送つて之を救濟することをその當然の義務とは思はなかつた。ただ中國内地に居住する各國人が義損金を募つて災民を救濟せんことを主張したに止まる。そして中國人に於ても之を看て各國の大なる慈善であつて彼等の義務ではない、主人格たる國家が奴隸たる人民に對するとは非常な相異であると説いた。斯様な譯で、其實中國は安南などよりも不利な地位に置かれてゐる。故に一國の奴隸たるものは、各國共通の奴隸たるものよりも、その地位遙かに高くその利益亦遙かに多しと言はなければならぬ。從て中國を半殖民地と言ふのは適當ではない。余は之を名付けて「次殖民地」と呼ぶのが至當だらうと思ふ。この次と言ふ字は化學の名詞から得たもので、例へば次亞磷は藥品中磷に屬するものであるが、磷よりその質一等低きものを亞磷と名付け、それよりも更に一等低いものを次亞磷と稱する如く、又各部官制に於て、總長の一級下のものを次長と呼ぶのと同様である。中國人は從來唯その半殖民地たるを知つて非常な恥辱と心得て居たものであるが、その實際的地位は、安南の如き眞の殖民地よりも一段低いのである。故に我等は之を半殖民地と言ふことは出來ない。次殖民地と呼ばなければならぬ。

此度廣東と外國とは關餘を争つてゐるが、この關稅餘款なるものはもともと我等のものなるに何故争ふのであらうか。中國の海關が各國に横領されてゐるからである。従前我等は海關のあることなどは知らず、關を閉じて自ら守つて來たものであつた。その後、英國が來つて關を叩いて通商を求めた。當時中國は關を閉して之を拒絶したものであるが、英國はその帝國主義と經濟力を以て中國の關を打開し、中國の門戸を無理矢理に開放させたのである。當時英國の軍隊は既に廣州を占領し、後廣州の足場に適せざるを見て、之を棄てて香港に去り同時に又賠償金を要求したものである。そのとき中國には賠償金とする程多額な現金がなかつたので、海關を抵當として英國をして收税を取扱はしめた。當時滿清政府の計算では、償金の金額支拂のためには長年月を要する見込みであつた處、豈料らんや、英國人が海關をその手に收め自ら收税を開始するや、數年ならずして、要求額の賠償金は「ケレイ」に手に入れることが出來たのであつた。元來海關は清朝の皇帝が、清朝官吏の腐敗甚しく従前關稅の經理徵收に中飽の大惡癖のあることを知つてゐたがため、全國海關を擧げて英國の管理に歸せしめ稅務司亦英國人を派して之に當てることとしたものである。その後各國も皆それぞれ商務關係を有するに至つたので、英國人との間に海關管理權を争ふに至り、英國之に讓歩して各國商務の大小に比例して各國人を用ふることとなり、斯く

て今日に至る迄全國海關はすべて外人の手にあるやうな狀勢を誘致した。中國は外國と條約を締結する毎に損失を重ね、條約中の權利は總じて不平等である。從て海關の稅則の如きも悉く外國の定むるところであつて、中國の自由に更改することが出來ず、中國の關稅は中國人自ら收め自ら用ふることも出來ないのである。これ我等が争はなければならない所以である。

今各國の外來經濟力の壓迫に對し、我等は如何に之に對峙すべきであらうか。平時各國に於ては外國經濟力の侵入に對しては、恰も海口に外來軍隊の侵入を防止するため砲臺を築くと同様、彼等は海關を以て武器となし、本國の經濟的發展を保護して居る。故に保護稅法なるものは、即ち關稅を以て外貨を抵制するものであつて、本國の工業は之に依り初めて發達し得るものである。米國の如きも紅蕃を滅して後、歐洲諸國と通商してゐたが、當時米國は農業國で歐洲諸國は工業國であつたがため、農業國を以て工業國と通商すれば、工業國の勝利となるは必定、そこで米國では保護稅法を創設して本國の商工業を保護したのである。保護稅法とは他國の輸入貨物に對し特別重稅を課するものであつて、例へば輸入貨物一百元のものに對し海關稅は各國の通例で五六十元のものとするれば、それ以上の一百元乃至八十元の高稅を課するにある。斯様な重稅を課する結果は他國の貨物の價格を騰貴せしむることを得、本國にては到底販賣することが出來なくなり、一方

本國の貨物は無税なるため價格低廉となり、從て賣行を良好ならしむることが出来るのである。然らば我中國の現狀は如何に。中國は外國と通商開始前に於ては、人民の所用貨物は一切自ら手工を以て製造してゐたもので、古人の所謂男耕女織とて農業と紡織工業とは中國固有のものであつた。その後外國貨物の輸入せらるるに及び、海關稅の輕い結果外來の洋布の價格低廉にして本地產の土布の價格高きため、一般人民は好んで洋布を買ひ土布を用ひず、結局土布工業は洋布のために壓倒せられて了つた。本國の手工工業も亦之に隨つて失敗し、人民は働くべくも職業なく多數の游民と變じた。之れ外國經濟力壓迫の情形である。今中國には依然手工織布はあるが、原料にはやはり洋紗を用ひてゐる。近來追々本國の棉花を用ひ外國製の機械で糸を紡ぎ布を織るやうになつた。即ち上海の數ある大紡績工場大紡織工場の如き之である。本來なれば、これ等紡績紡織工場は漸次外國品を抵制し得べき筈であるが、何分海關が未だ外國人の手中にあり、我等の土布は重稅を課せられ、然も單に海關が重稅を課する許りか、内地各處でも亦釐金を課せられて居り、中國は獨り保護稅法なきのみか、事實に於て却つて土貨に重稅を課することに依つて洋貨を保護するの結果となつて居るのである。歐洲戰爭當時、各國はその製品を中國に輸入することが出来なかつたため、一時上海の紡績紡織工場は異常な發達を示し、所得利益も亦極めて多額に上り、

利益分配に與つた資本家が非常に多かつたが、歐洲戰後、再び各國の貨物が中國に輸入せられ中國品を壓倒したため、曾ては非常な利益を上げて居た上海の各紡績紡織工場は、何れも損失續きの憂目を見るに至つた。斯くの如く土貨が洋貨に打敗られても中國の税關は特に自らを保護しない許りでなく、恰も自ら掘つた戰壕を敵に與へて自らを打たしむると同様、却て外人を保護しつゝあるのである。故に政治力の壓迫は有形であるから如何に愚笨なるものでも容易に看破し得、應急の對策を講ずることも出来るのであるが、經濟力の壓迫に至つては、無形にして一般に之を發見することは仲々容易なことではなく、却て自分の力で自分を壓迫する結果となる。斯様な有様であるから、中國の通商開始以來の輸出入貨物を比較するに、實に江河日に下るの勢にあり、十年前の調査では、中國の輸出入貨物の差は二億元に過ぎざりしものが、最近の検査にかかる海關報告表に據れば、一九二一年度輸入貨物は輸出貨物に超過すること五億元、十年前に比較して既に二倍半の増加を示し、この分にて行けば十年後にも亦二倍半を増加することとなるべく、その輸入超過はまさに十二萬五千萬元に達すべきであらう。換言すれば即ち十年後には中國は、單に貿易關係のみに於て毎年外國に對し十二億五千萬元づつ進貢することとなる譯である。諸君何んと大きな損失ではあるまいか。

經濟力の壓迫には、海關の外にまだ外國銀行と云ふものがある。現在中國人は本國人の銀行を信用せず、外國銀行を馬鹿に信用したがる心理がある。恰度この頃我廣東に於て中國銀行は毫も信用なく、外國銀行が非常に信用があるのと同様な譯だ。従前我廣東省立銀行は紙幣を發行し相當流通してゐたが、この頃では「サツパリ」通用せず、我等は現に現銀のみを用ひてゐると言つた有様である。従前中國紙幣の信用は外國紙幣に及ばなかつたものであるが、最近では中國の現銀すらも外國紙幣に及ばないこととなつた。現に廣東に流通する外國紙幣の總數は幾千萬に達すべく、一般人民は一途に外國銀行紙幣の收藏を願ひ、中國の現銀の收藏を望まず、上海、天津、漢口の各貿易港に於ても、おしなべて皆同様である。この原因を推究すれば、外國の經濟的壓迫に中毒し居るがために他ならない。我等は日頃から、外國人だと言へば、皆金持だと思つてゐるがそれは實際のところ、彼等が紙を持つて來て我等の貨物と交換して行くことを知らないからだ。元來彼等は決して金を持つて居る譯ではなく、多くは我等が彼等に賣いででもやつてゐるのと同じやうなものだ。外國人が現在使用してゐる金は、印刷せられた幾千萬枚の紙に過ぎず、我等が彼等を信用するため彼等が幾千萬の金を持つことになるのである。あの外國銀行の紙幣一元の印刷費と言へば、ただの幾文に過ぎないであらうに、印刷されて出來上つた紙の價値は一元と稱し

十元と稱し又百元とも稱するのである。斯様に外國人は、最少の價值を以て幾千萬元の紙を印刷し、その幾千萬元の紙を用ひて我等の幾千萬元の貨物と交換に來るのである。諸君試みに思へ、この損失は何んと大きいものではないか。然らば彼等のみ斯くも多くの紙を印刷し得るに拘はらず、我等には之が出来ぬとは、又如何うした譯であらうか。これ實に普通人がすべて外國の經濟的壓迫に申毒して、ただ外國を信用して自己を信用せず、我等の印刷した紙を通用させることが出来ないからである。

外國紙幣の外に尙爲替の取組がある。我等中國人は各貿易港に在て爲替を取組むにも亦外國銀行を信用し、中國の金を悉く外國銀行に持つて行つて爲替の取組をなし、外國銀行は中國人に代つて爲替を取組む。この外國銀行の爲替取組たるや、その取組に當つて先づ千分の五の爲替手数料を取り、外に無理矢理に兩地の錢價の差を取る。又その支拂に當つては、その銀元と銀兩との割引で儲ける。かくの如き錢價の差及元と兩との割引による損失は、送金及支拂の兩方を合算すれば、必ず百分の二三以上に上るであらう。ここに例へば、廣東の外國銀行から一萬元を上海に爲替で送金するとすれば、外國銀行は、先ず五十元の爲替手数料の外毫銀を上海の規元銀の錢價に計算する。そして彼等は必ず廣東の毫銀の價格を低く計算し上海の規元銀の價格を高く見積り

彼等の自由計算に依つて最少必ず一二百元は儲ける、而して上海に至つて金を支拂ふとき規元銀は渡さないうで大洋を渡す、彼等は規元銀を以て大洋を割引し必ず銀兩の市價を無理に低からしめ大洋の市價を釣上げて少くとも亦一二百元を儲けるであらう。かくて上海廣州の兩地間に一萬元を爲替に取組むものとすれば、毎次少くも二三百元の損失となる。従つて二萬元の金も、上海廣州兩地間を往復して爲替を取組む場合は、最大三十回位で完全に烏有に化して終ふであらう。人民のかくも大なる損失を受くる原因はと言へば、やはり外國の經濟的壓迫に中毒した結果に外ならぬ。

外國銀行の中國に於ける勢力は、紙幣の發行爲替の取組の外、尙預金に在る。中國人は金さへあれば兎角銀行へ預けたがるが、その際彼等は中國の銀行の資本の大小利息の多少などを問はずして、一途に中國人經營の銀行と言へば、不完全なるを恐れて敢て預金しやうとしない。之に反し、外國銀行に對しては、その信用の有無利息の多寡を問題とせず、唯外國人が經營し、外國の看板を掲げて居さへすれば、定心丸を喫したるが如く安心し切つて了ふ。そして金さへあれば之を持つて行き、利息は極めて少くとも非常に満足して居る。ここに最も奇怪なるは、辛亥の起義以後滿清の皇室や一般滿清の官僚達は、革命黨が彼等の財産を沒收せんことを恐れ、凡ゆる金銀

財寶を擧げて各處の外國銀行へ無利息で預け、外國人がそれを受取つて預かつて置いて呉れさすれば心から満足して居たもので、甚しきに至つては、清兵が革命軍と武昌に戦つて敗れたあの數日と言ふものは、北京東交民巷の外國銀行に滿人の預けた金銀財寶はそれこそ夥しい額に上り、その數も分らない程で、遂には北京の凡ゆる外國銀行は何れも滿錢の患あり、再び預け入るの餘地ないと云つた状態に至り、ここに於てその後の預金には、外國銀行は預金に對して利息を支拂はざるのみか、却て預金者から保管料を取ることとなつたが、何分預金者は外國銀行が預かつて呉ればいゝと云つた有様であつたので、この保管料の如きも外國銀行の言ひなり法題であつたとのことだ。當時の調査に據れば、外國銀行が中國人の預金を受け入れた額は總計十億乃至二十億に達したとのことである。その後中國人は多少これを引出したであらうけれども、この十數年來馮國璋、王占元、李純、曹錕の如き一般軍閥官僚が到る處でかき集め横領して蓄財したものは各人幾千萬元に及び、彼等はその莫大な横領した財産を子子孫孫萬世の用に供せんが爲め、やはり之を外國銀行に預け入れて居るから、今でも外國銀行の中國人の預金受入總額は、辛亥の年と比べて大した増減はない筈である。外國銀行の有するこの十億乃至二十億の預金は、年年預金者に與ふる利息は極めて少なく最高四五厘に過ぎず、而も之を外國銀行は、中國の小商人に轉貸し

て年年最低七八厘甚しきは一分以上の利息を借入人より収めてゐるのである。斯様に外國銀行は、ただ經營の勞に任ずるのみにて、専ら中國人の資本金を用ひて、中國人から年年數千萬元の利息を儲けて居る。これ中國人が外國銀行に預金するがために受くる無形の損失である。かく一般のものの外國銀行に預金する心理は、中國銀行の不安全にして外國銀行の頗る安全なるを思ふからのことであつて、彼等はその休業したりつぶれたりすることに對しては頓と無頓着だ。ところが事實は何うであるか試みに問ひたい。現に申法銀行は營業を停止し中國人の預金は拂戻しせられないのであるが、申法銀行は外國銀行ではなかつたか。これでも外國銀行の預金は安全であると言へるか何うか。外國銀行にして既に不安全なりとせば、何故に我中國人は、尙も甘んじて中國の金を外國銀行に預金するを願ひ、年年かくも莫大なる利息を損失しつつあるのであるか。この原因を推研するに、やはり外國の經濟的壓迫の中毒による。實に外國銀行の一つのみにても中國に在て獲得する利益は、紙幣爲替取組及び預金の三種に依り、まさに一億元前後にも上るであらう。

外國銀行の外に尙ほ運賃がある。中國の貨物を外國に運送するは固より外國船に依る。又漢口、長沙、廣東の各内地に運送するにも外國船に依る場合が多い。日本の航業は近來非常に發達したが、最初の頃は日本郵船會社があつた許りだ。その後段々と東洋汽船會社、大阪商船會社、日

清汽船會社が出来、中國内地を航行して全世界に航行するやうになつた。日本の航業が斯の如く發達した所以は、彼等の政府が補助金を支出し、又政治力を以て特別に保護したために他ならぬ。これを中國に就いて見れば、國家が商船に補助することが何れ丈けの利益があるであらうか。恐らく何等利益はないであらう。日本は各國の經濟勢力と競争せんとして、水上の交通方面にあつても、亦各國と條約を締結し、運賃に就いても之を協定し毎噸の價格を定めてゐる。例へば歐洲より亞細亞に貨物を運送する場合、先づ上海に至り更に長崎、横濱に至ることになつてゐるが、歐洲、上海間は、歐洲、長崎横濱間の路程に比較すれば、大分近いのである。けれども歐洲長崎横濱間の毎噸運賃は、各汽船會社で協定せられ非常に低廉であるが、歐洲、上海間のそれは、中國の航業が未だ彼等と對抗する迄に至つて居ないために、各汽船會社の規定では非常に高い。従つて歐洲から長崎、横濱迄の運賃は、歐洲上海間のそれよりも、毎噸幾らか安いことになつてゐる。斯うした譯で、歐洲の貨物が日本の市場で販賣せらるる價格は、上海に比べてやはり低廉である。之と反對に、中國の貨物を上海から歐洲に運ぶ場合も亦、長崎、横濱よりの運賃に比べて幾何か高くなる。だから若し中國から一億元に相當する貨物を歐洲に運送するときは、中國は運賃のため一千萬元だけ餘計に要する譯である。斯様は計算すれば、一億元で一千萬元の損失とな

り、中國の輸出入貨物は毎年十億元以上に達するから、この十億元中の損失も亦一億を下らないであらう。

此の外更に租界及割讓地に於ける賦課地租地價の三項がある。この數も亦實に少くなくない。例へば香港、臺灣、上海、大連、漢口の如き幾多の租界及割讓地内の中國人が、毎年外國人に納めてゐる賦税は少くも二億元以上に上るであらう。例へば臺灣の如きは、従前日本に納めて居た税は毎年二千萬に及び、現在では一億に増加して居り、香港の従前英國人に納めた税は、毎年數百萬に達し、現在では三千萬に増加してゐる。そして今後もこの割合で増加するであらう。

その中地租の一項は、中國人の收むるものあり外國人の收むるものもあつて各々幾何を得て居るか、未だ正確な調査がないから知ることが出来ないが、總じて外國人の收むるところの多きは問ふを待たないところであらう。この地租の數は之を地税に比ぶるときは十倍に達してゐる。地價も亦年々増加の趨勢にある。そして外國人は既に經濟上の權を握つてゐることとて、自然その財力も豊富となり商賣も圓滑に行くやうになり、租界の土地を安く買つては之を高く賣る。故にこの賦税地租地價の三項だけでも、中國人の受くるところの損失は年々五億元を下らないであらう。

又中國の内地に於て、外人の團體及個人の營業が、その條約上の特權を振廻し、我等の利權を侵奪するものに至つては、更に計算し難いものがある。單に南滿鐵道の一會社のみを就いて言ふも、年々の純利は五千餘萬に達し、その他各國人の種々なる營業利益を併せ推算すれば、その數將に一億以上に上るであらう。

更に一損失がある。即ち投機事業である。租界の外人は常に中國人の貪婪なる弱點を利用し、日日小投機を行ひ、數年に一度の大投機を行つて中國人の賭博心を激發し熱狂せしむる。「ゴム」の投機「マルク」の投機の如き即ち之れで、その結果損をするのは何時も中國人で、その額は最少數千萬元に達する。而して日々の小投機事業は少を積んで多きを成し。その額の幾何なるかを知らない。斯様な損失も亦數千萬元以上に上るであらう。戰敗の賠償金に至つては、日清戰爭の結果日本に送つた賠償金二億五千萬兩、庚子義和團事變の賠償金は九億兩の巨額に達するが、之は政治上武力壓迫の範圍に屬し經濟壓迫に依るものと同日に論ずることは出來ず、而も之は一時のものので永久的のものではないから尙小事に屬する。その他藩屬の損失出稼移民の損失に至つてはその幾許なるやを知らないのである。

見來れば、これ等經濟的壓迫は眞に激しいものである。

總てこれを合算すれば、その一、洋貨の侵入に依つて年々奪はるる利権五億元、その二、外國銀行紙幣の我が市場侵入爲替取組に依る割引及び預金の轉借等に依り奪はるる利権一億元見當、その三、輸出入貨物の運賃の割高に依り奪はる、我利權約數千萬乃至一億元、その四、租界及割讓地の賦稅地租地價の三項目に依り奪はるる利權總計四五億元、その五、特權營業に依るもの一億元、その六、投機事業及びその他により剝奪せらるるもの數千萬元、以上六項の經濟壓迫に依つて受くる我等の損失總計は十二億元を下らない。この年々十二億の大損失にして救ふべき法なしとせば、今後は年々増加する許りで、これが自然的減小は斷じて期待し得られないのである。故に中國は今日既に民窮財盡の地位にあり、若し速に之を救ふに非らずんば、必ずや經濟的壓迫を受けて國家種族共に滅亡の外なきに至るであらう。

中國の強盛なりし時代に於ては、列邦より年々進貢し歳々來朝したものである。そして毎年の貢は値大約百數十萬元に過ぎなかつたが、我等はそれを非常な光榮としたものであつた。宋朝に至り中國は衰へ、却て金人に向つて進貢せねばならなくなつた。そしてその金人に納めた貢物も亦毎年大約百數十萬元に過ぎなかつたが、我等はこれを以て非常な恥辱と考へてゐたものである。ところが現に我等は、外國に對して毎年十二億元の貢物を送りつつある。一年十二億とすれ

ば、十年に百二十億である。この種經濟力の壓迫、かかる大なる進貢は實に我等の夢想だにし得ざるところであつて、之を看破するのは仲々容易なことではない。従て一般人は未だに之を大恥辱と考へないのである。若しも我等がかくも莫大なる貢物を送らなくてもよく、毎年十二億の我等の自由に處分なし得る大金があつたと假定したならば、我等には爲すべき事業が何れ程あることか。そして我等の社會は如何に進歩することか。この經濟力の壓迫がある許りに年々かくも大なる損失を受けつつあり、故に中國の社會事業は發達する能はず、普通人民の産業も亦興らないのである。實にこの種壓迫のみに就いて言ふも、幾百萬の兵を以て我等を殺すよりもその害更に甚しいものがある。況んや外國は、背後に更に帝國主義を把持して彼等の經濟的壓迫を實行しつつあるに於てをやだ。かくて中國人民の暮しは自ら日に蹙まり游民自ら日に多く國勢自ら日に衰ふることなる。

中國は最近一百年來既に人口問題の壓迫を受け、中國の人口は餘り増加せず寧ろ減少して居るのに外國の人口は日々増加しつつある。加之今や又、政治力經濟力に壓迫せられ、我等は同時に三種の力の壓迫を受けて居る。若し果して更に適當なる辦法に依り之が對策を講じ得なかつたらば、中國の領土如何に大なりとは云へ、人口如何に多しとは言へ、百年後には必ずや亡國滅

種、我等四億人の地位を永く萬古に存することは出来なうであらう。試みに看よ、曾て「アメリカ」大陸到るところに存在せし紅蕃は、今や全く滅亡せんとしつつあるではないか。故に我等は政治的壓迫の激しきを覺ゆると同時に、經濟的壓迫の更に激甚なるを曉らねばならぬ。幾千年來中國は未だ曾てこの三つの力から一齊に壓迫せられた經驗はないのであるから、我等に四億人あり容易に人に滅ぼさるるとはなかるべし等と高を括つて居る譯には行かないのである。故に中國民族の前途の爲めに工夫を凝し、將に適當なる方法を案出してこの三種の力を打消さなければならぬ。

第三講 民族主義の喪失とその原因

民族主義なるものは國家の發達を圖り種族の生存を圖るための寶物である、中國は今日已にこの寶物を失つてゐる。何が故にこの寶物を失つたのであるか。余が本日語らんとする大意は、即ち中國は何が故に民族主義を失つたか、その原因を推究し、同時に我等中國の民族主義が果して眞に失はれてゐるか何うかを研究せんとするに在る。余の觀察に依れば、中國の民族主義は明かに數百年前既に失はれてゐると思ふ。試みに看よ、我革命以前凡ゆる革命反對の激しい言論は、

悉くこれ民族主義に反對ではなかつたか。再び數百年前を回想する。當時既に中國の民族思想は完全に無かつたのである。ここ數百年間に於ける中國の書物の中には、全然民族主義を見出すこと能はず、ただ滿清の功を歌ひその徳を頌し、如何に深仁厚澤なりしか如何に生活が豊なりしかを見るのみにして、從て敢て滿清とは何ものであるかと説いたものはなかつたのである。近年革命思想の發生後も、中國の學者文人を以て自任する人々は依然日々滿清に代つてこれを擁護したものである。例へば余が以前東京に於ける民報經營時代、我等は民族主義を提唱したが、その頃我民族主義を駁する人々は、滿洲種族中華に入るも我等は亡國とは思はない、何故ならば滿洲は明朝の龍虎將軍の封號を受けてゐるから滿洲が明朝を亡ぼしたところで、歷代朝廷相傳の接着に過ぎず、朝を易ふと言ふべきで亡國ではないと説いたものであつた。果して然らば曾て中國の總稅務司となつた英人「ロバートハート」は、彼も亦曾て中國の戶部の尙書の銜を受けたことがあるが、若し「ハート」が來つて中國を滅ぼし中國の皇帝となるが如きことがありとするも、我等は中國は亡國に非らずと言ひ得るであらうか何うか。斯様に人々は口先き丈で滿清を擁護する許りでなく、尙その上に保皇黨なる一結社迄も組織し、専ら大清皇帝を保護し漢人の民族思想を消滅した。彼等保皇黨のものが滿洲人とすれば何の不思議もないが、それが悉く漢人であつた

のだ。そして保皇黨を歓迎するものは海外の華僑の間に殊に多かつた。その後革命思想の盛に行はるときになつて、之等華僑も漸次宗旨を變更して革命に賛成するやうになつた。華僑は海外に在て多數の會黨を組織してゐたもので、洪門三合會即ち致公堂はその一つである。彼等の本来の目的は、清朝に反對して明朝を復興せしめんとするにあり、種族主義を抱懐してゐたものであるが、保皇主義が海外に流行してから後は、彼等もすつかり保皇黨に歸化して専ら大清皇室の安全を保護することとなり、種族主義の會黨も却て滿洲皇帝保護に變じて了つた。此の一事を見ても中國の民族主義が完全に亡びてゐることを證明することが出來やう。

余は今會黨に言及したが、會黨の起源については知つて置く必要がある。會黨は滿清康熙帝のときが最も盛んであつた。順次帝が明朝を滅して入つて中國の主となるや、明朝の忠臣義士は各處に起つて抵抗し康熙初年に至つても尙抵抗をやめなかつた。だからその頃はまだ中國は完全に征服せられてゐなかつたと言へる譯だ。康熙帝の末年以後、明朝の遺民も漸次滅びて行つたが、その中の民族思想を豊富にもつてゐた一派の人々は、大事既に去り再び滿洲に拮抗すべき能力なきを覺つて、即ち社會狀態を觀察しここに一方法を案出して會黨をん結したのである。彼等の眼光は極めて遠大で思想は甚だ透徹して居り、社會の情形を觀察するや、又頗る明瞭を極めたもので

あつた。彼等が結合して種々な會黨を組織してゐた頃と時を同じうして、康熙帝は博學鴻詞科を開いて明朝の知識學問ある人を殆ど滿清政府の下に網羅して居つたものである。だがそれ等民族思想を有する人々は、専ら文人に依て民族主義を維持することの不可能なるを知つて、去つて下流社會及江湖の歸へるべき家なき人々を糾合して團體を結成し、民族主義をその團體の中に生長せしめ存続せしめんとした。この種團體の分子は社會上最下位にある人々で、彼等の行動は甚しく鄙陋でありしため一般に閑却され勝であり、又文人の語らざる言葉を以て彼等の間に宣傳したため、餘り注意も惹かなかつたものであつた。そこに想到したこれ等明朝の遺老なるものは實に眞知灼見ありしと言はなければならぬ。彼等が斯様にして民族主義を保有せむとした手段は恰も太平時代には金持などはその寶物を非常に貴重な鐵箱の中に藏してゐるが、一旦強盜などに襲はるるや、置き場所を換ふる必要を感じ、之を鐵箱の中より取出して人の注意せざるところへ藏せんとするに至るべく、もし危急の極まるが如き場合には、如何にもしてその安全を計らんがため、これを或は汚穢の中にでも投ずるに至るであらう例にも比し得べきである。故に當時民族主義の存亡の危機に際し彼等明朝の遺老も中國の寶物を保存せんがために、之を甚だ鄙陋なる下流社會の中に藏せざるを得なかつたのであらう。故に滿清二百餘年の專制下に於て、中國の民族

主義は、これ等會黨の間に口頭を以て傳へられ尙よく保存することが出来たのである。當時洪門會は清朝を顛覆して明朝に復せんとしたが、何が故に彼等の主義を智識階級の中に保存せんとしなかつたのであらうか。何が故に文章を作つて傳ふることを太史公の所謂「之を名山に藏し之を其人に傳ふ」が如くしなかつたのであらうか。何故なれば當時明朝の遺老は、滿清の博學鴻詞料が開かれ一時智識あり學問ある人は殆どすべて網羅せられたるを見、それ等の智識階級なるものが當てにならず、之を名山に藏し之を其人に傳ふると言つたやうな譯にゆかないことを知つてゐたからだ。だから彼等は之を下流社會の中に藏せんとして多數の會黨を結合したのである。會黨の中にあつては彼等の聯絡は非常に便利であつた。彼等の結合に依て滿清の專制下によく民族主義を保持することは出来たが、それは文學に依つた譯でなく口頭を以て傳へたのである。だから余が今話した會黨の起原に就いても、何分ただ彼等の口頭に依て傳えられた故事に依る外なかつたので、講義に甚だしく困難を覺えた次第である。勿論當時は文字で傳へられたものにはあつたが。乾隆時代に至つて御多分に洩れず消滅せられて了つた。

康熙雍正の頃は明朝遺民の排滿が尙仲々熾烈であつた爲めに、大義覺迷錄等の如く多少の書物も出版せられて漢人は滿洲人の皇帝たることに反對すべきではないと説いた。そしてこの理由

とするところは、舜も東夷の人文王も西夷の人であるから、假令滿洲人が夷狄であるとは言へ、やはり中國人の皇帝たり得る筈だと言ふにある。之に由ても康熙雍正の如きは自ら認めて滿洲人となし多少忠厚な點もあつたらしい。その後乾隆時代に至り、滿漢といふ二字は口にすることさへも許されず、史書は皆改められ凡そ宋元及び明清の歴史關係のものは一切刪除せられ、凡ゆる滿洲匈奴韃靼關係の記事ある書物は一律に禁書に定められ全部消滅し、之を藏することも看ることも許されなくなつた。當時違禁の書のため幾回となく文字獄が起り、中國の民族思想にして文字の中に保存せられたるものは完全に滅ぼされて了つた。清朝の中葉後會黨中に於ても民族思想を持つて居たものは、只洪門會黨のみで、洪秀全の起義に當り之を相呼應して起ち、こゝに民族主義の復興を見たのである。こゝに注意すべきは洪門の名であるが、洪秀全の洪を取つて付けたのではなく、一般に朱洪武又は朱洪祝（康熙のとき人あり朱洪祝を奉じて義を起す）から得てゐると謂はれてゐる。がこれも亦當てにはならない。洪秀全に依て恢復せられた民族主義は、その失敗後更に流れて軍隊に傳はり游民に傳つた。當時の軍隊は、湘軍（湖安軍）淮軍（安徽軍）の如きも多くは會黨に屬して居たもので、即ち今日の青幫紅幫等の如き名目も亦軍隊から傳つて來たものである。

明朝の遺老は民族主義を下流社會に宣傳したが、何分にも下流社會は、知識極めて幼稚にして自らこの主義を利用することを知らず、却つて人から利用されたものである。例へば洪秀全時代反清復明の思想は軍隊の中に傳はつたが、洪門の子弟は彼等軍隊を利用することが出来ず、従て彼等軍隊は依然清兵であつた。之に就いては更に一つの故事を引例して證明して見やう。當時左宗棠は兵を率ひて新疆遠征の道すがら、漢口より西安に赴かんとし多數の湘軍准軍を率ひて長江を過ぎたることがある。その時代、會黨の珠江流域に散在せるものを三合會と言ひ、長江に散在せるものを哥老會と云つて居た。哥老會の頭目を大龍頭と呼んで居た。恰度その頃、一人の大龍頭が長江下流に於て法を犯し漢口へ逃れて居た。清朝の驛站の消息は固より非常に早かつたが哥老會の馬頭の通ずる消息は更に速かつた。左宗棠は途上一日彼の軍隊が自ら移動集中し始め十數里に亘る長列を作つたのを見て、頗る奇異の感じを抱いたものゝ頗と何事か判からなかつた。間もなく「一著名な匪首が漢口から西安に逃れてから捕縛の上處分せられたい」との兩江總督の文書を受取つた。左宗棠は當時別段之を捕へて處分すべき方法とてもなかつたので普通文書同様の考へで本件はその儘放つて置かれた。その後、彼の軍隊の移動が一層激しくなり隊の排列が更に長くなつて、兵士達は皆口々に大龍頭を歓迎するのだと言ふてゐたが、彼等にはそれでもまだ

事情が判明しなかつたものである。後になつてその兵士達の歓迎した大龍頭こそは、兩江總督が彼に依頼して捕縛處分せんとした匪首であつたことを知り、彼はすつかり狼狽して、彼の幕僚某に哥老會とは何であるが、哥老會の大龍頭とこの匪首とは如何なる關係ありやと尋ねた處その幕僚の曰く、我軍中の兵士から將軍に至る迄悉く哥老會員である、而してあの大龍頭は我輩哥老會の首領であると云ふ譯であつたので、左宗棠は、果して然らば我等の軍隊は如何にして維持し得べきやと再問した。之に對し幕僚は若しこの多數の軍隊を維持しやうとすれば大帥も亦大龍頭となつたらしい、大帥が若し大龍頭となることに不承知ならば我等も新疆へ行く譯にはゆかないと語つた。そこで左宗棠はこの話を聞いて即座に別段いゝ方法も想ひ付かなかつたし、その上その多數軍隊を利用してやらうと云ふ下心もあつたので、その幕僚の言ふなりに開山堂に赴き大龍頭となり、その多數の會黨を悉く收めてその部下として了つた。斯様な譯であるから、その後左宗棠がよく新疆を平定し得たのも清朝の威風を利用したのではなく、寧ろ實際上明朝の遺老の主義を利用したものであると言つた方が至當だと思はれる。中國の民族主義は清初以來久しく保存せられて來たが、左宗棠が大龍頭となりその詳細なる内情を知るに及んで、馬頭は破壊せられ會黨の各機關も悉く滅ぼされて了つた。故に我等が革命に際しては利用すべき機關もなかつたので

ある。斯の如くこの洪門會黨の人の利用すところとなつたがため、中國の民族主義は夙に滅びて了つたのである。

中國の民族主義は既に亡びた。本日はその滅亡の原因に就て語りたいと思ふ。この原因は甚だ多いが其の最大の原因と言へば、異民族の征服であらう。凡そ一民族が他民族を征服した場合、他民族が獨立思想あるを許さないのは自然である。恰度朝鮮を征服した日本が、朝鮮人の思想を改變せんとして、凡ゆる朝鮮の學校の教科書から、民族思想に關するものを一切削除して終つたが如きはその一例で、斯くして三十年後には、朝鮮の兒童は朝鮮の存在してゐたこと自分達が朝鮮人であることも知らなくなるであらう。従前滿清が我等に對して採つた政策も亦同様であつた。故に民族主義滅亡の第一原因は即ち我等、異民族に征服せられたからと言ふ譯だ。征服民族は被征服民族の凡ゆる寶物を悉く消滅せんとするが常であるが、滿洲人はよく這間の道理を心得てゐて非常に巧妙な手段を執つて來たものである。康熙帝のとき文字獄は興しはしたが乾隆帝程は狡猾ではなかつた。彼は漢人の民族主義を完全に消滅せんがために、自ら天來の中國皇帝と稱し、人に勸めて天に逆ふを不可とし、謂はゞ天を藉りて人民を諭したものである。乾隆に至つては、更に狡猾であつて滿漢の限界を完全に消滅して了つた。故に乾隆以後は、智識階級の人も過半は

民族思想あるを知らずしてたゞ下流社會のみに傳はつた。がその下流社會なるものは鑿子を殺すべくその當然なるを知つてはゐたが、何故が然るかを知らなかつたものである。だから中國の民族思想は數百年前に滅びたのである。かく滅びて了つたのも滿洲人の方策宜しきを得た結果であらねばならぬ。

中國の民族主義の滅びた原因は元來國が亡びたからである。外國人に征服せられたからである。併し乍ら、世界の民族中他から征服せられたものは、敢て中國許りに限つたものでもない。猶太人も亦亡國の民である。猶太人は耶蘇生誕前既に他國に征服せられて居たが、耶蘇の傳教時代に及び彼の門徒等は彼こそは革命家であるとして耶蘇を革命の首領に推戴したものである。だから當時彼を猶太人の王と稱してゐた。耶蘇門徒の父母は曾て耶蘇に對し「我王成功せば我長男は主の左邊に二男は主の右邊に生せしめん」と語り、嚴然として中國の所謂左右の丞相に擬してゐたものである。こんなやうな風に猶太人は國亡びて後も耶蘇の門徒は耶蘇は革命家であると信じてゐたものだ。當時耶蘇の傳教は或は多少政治革命的色彩を帯びてゐたかも知れず、そんな關係から彼の十二人の門徒中の一人が耶蘇の政治革命は既に失敗に歸したものとて彼の老師たる耶蘇を賣ることゝなつたのであるが、彼は耶蘇の革命なるものは、その國が天國と稱せられてゐるのでも

判かる通り、實は宗教革命であつたことを知らなかつたのだ。宗教革命であつたが故に耶蘇が殺されてから後猶太の國は滅亡したが猶太民族は今尙存在して居るのである。又印度の如きも亦亡國であるが、彼等の民族思想は、中國のその如く、一度び外國の武力に壓服せらるゝや、忽ち滅びて了つたことは大分その趣を異にしてゐる。次は波蘭であるが、これ亦百餘年國は亡びて居たが、その民族思想が永く存在してゐたため、歐洲戰後彼等は舊國家を恢復し今では歐洲二三等國の班に列した。斯くの如く中國と猶太、印度、波蘭とを比較すれば何れも一樣に亡國である。然るに外國に於ては國亡びて民族主義の猶よく存在するものあるに拘はらず、中國は兩度の亡國を経過して民族思想が減じた原因は何處にあるか。誠に奇怪千萬な話である。その間の道理を研究することは、頗る興味深き問題であらねばならない。中國は亡國以前に於ては非常に文明な民族であり極めて強盛な國家であつて、常に自ら大國と稱し文物の邦と聲明しその他の國はすべて蠻夷であつた。中國は世界の中央に居るを以て自ら呼んで中國となし自ら大一統と稱した。所謂「天無二日、民無二王」又所謂「萬國衣冠拜冕旒」とて、すべてこれ中國の亡國前に於ける状態であつて、當時既に、中國は漸く民族主義より世界主義へと進みつゝあつたのである。故に歴代は總じて帝國主義を以て、恰も漢朝の張博望、班定遠が三十餘國を滅し、又英國印度會社の一ク

ライプ」が印度幾十國を收服したやうに別種民族を征服したものであるが、大體に於て中國幾千年來、平天下主義を實行し亞細亞大陸各小國を完全に征服したものであつた。けれども中國の他國を征服する場合は、現在の歐洲人のやうな野蠻なる手段に依らず多くは和平手段を以て感化した。所謂王道である。常に王道を用ひて諸弱小民族を收服して來たのである。之に由つて推尋すれば、我等民族思想滅亡の道理を發見することが出来る。然らば、他の民族例へば猶太の如きは國亡びて二千年、然も彼等の民族は依然として存在せるにも拘はらず、我中國は國亡びて僅か三百年に過ぎずして完全にその民族主義が亡びて了つた理由は何處から知ることが出来るか。この原因を考察することは恰も病人に就いて考察すると同様であつて、如何なる病氣でも先天的なものはなく病氣に罹る以前に於て既に何等か身體に不健康の原因が起つたのである。中國の民族思想の消滅に就いても之と同じことが言ひ得る。即ち中國も亡國以前に病氣になるだけの根源があつたので、だから他から征服せらるゝや否や民族思想は忽ちにして滅びて了つたのである。この病源は即ち中國が幾千年來帝國主義的國家たりし點にある。現在の英國及び革命以前の露國の如きはすべて世界の最強盛の國家である。そして英國の帝國主義は今尙ほ益々發達しつゝある。ところが我中國の従前の帝國主義なるものは、之をしも凌駕してゐたかも知れない程であつた。

のだ。

英露兩國に於ては有識の學者の間に民族主義反對の一個の新思想が提唱せられた。この思想に依れば民族主義は偏狹であつて寛大ではないと言ふにある。即ち端的に云へば、世界主義である現在の英國、革命以前の露國、獨國現在及び中國の新文化を提唱しつゝある新青年は皆この主義に賛成し民族主義に反對してゐる。余は日頃多數新青年が、國民黨の三民主義は現在の世界の新潮流には適應しない、今世界で最新であり且最良の主義は世界主義であると説くのを聴く。果して世界主義は是か非か。若し果してこの主義にして是ならば、中國は一度び國亡びて忽ちその民族主義が消滅したのは何故であるか。世界主義は即ち二千年前中國に於て唱へられた天下主義である。我等は今この主義が果して是であるか非であるかを研究して見やう。理論上から云へば、勿論悪いと言ふことは出來ぬ。従前中國の知識階級の人々は世界主義的思想を抱懐してゐたものである。故に滿清の入關するや全國は忽ち滅びたのである。康熙帝も亦世界主義を説いた人で、彼は舜は東夷の人なり文王は西夷の人なり東西の夷狄の人もすべて中國に皇帝たり得ると説いて居る。即ち中國と夷狄華夏とを分たない。夷狄華夏を區別せなければ即ち世界主義ではないか。凡そ思想は、我等の用に適するか否かを見なければその是非善惡を斷ずることは出來ない。若し

我等の用に合すれば善である。合せざれば悪である。全世界の用途に合すれば是であり、合せざれば即ち非である。世界の各國家は帝國主義を以て他を征服し、その特殊地位を保全し全世界の主人翁たるがために世界主義を提唱し全世界を服従せしめんとしたのである。従前中國が世界主義を主張したのも亦全世界の主人翁となり萬國の上に立たんことを願つたがために他ならない。けれども普通社會にこの主義があつたがため、滿清の入關に際しては一人の之に抵抗するものもなく國が亡びたのである。滿清の入關するとき、その人数は極めて少數で總數十萬に過ぎなかつた。この僅か十萬人を以て何うしてよく數億の漢人を征服することが出来たのであるか。これ當時大多數の漢人は盛に世界主義を提唱し民族主義を説かず、何人が中國皇帝たるを論ぜず均しく之を歓迎したために他ならない。故に史可法が滿人に反對せんとしても彼に賛成するもの極めて少なく、結局何等の抵抗を試みる迄もなく、滿人は全國人の歡迎裡に安穩に中國皇帝となり得たのである。その頃漢人は滿人を歓迎する許りでなく、その上その旗下に投じて滿人に歸化せんとした。これ所謂漢軍旗である所以である。

現在世界最強盛の國家は英米二國である。世界には一強國のみならず所謂列強と稱し幾つもの強國がある。けれども列強の思想なり性質なりは今以て何等改變せらるることがない。將來英國

なり米國なりが或は列強を打破して獨強となるかも知れない。そのときになれば中國も或は英國に征服せられ中國民族も英國民族と變つて了ふであらう。それでも我々はいいのであるか。若し中國人にして英國籍なり米國籍なりに入つて、英國又は米國を助けて中國を打破せんとし、我等は世界主義に服従するものなりと説かんとするものあらば、我等は自己の良心に果して安んじ得らるるや否やを問ふて見たいのである。若し果して我等の良心が安からざるものあらば、それは我等に民族主義的感情があるからのことだ。民族主義はよく我等良心をして不安ならしむるに足る。これ即ち民族主義が人類生存上の寶物たる所以でなければならぬ。例へば讀書人は何によつて生計を謀るのであるか。即ち手中の筆を以て生計を謀るのである。筆は讀書人の生計を謀る道具なのである。民族主義は即ち人類生存の道具なのである。若し果して民族主義を存在せしむることが出来なかつたならば、世界主義が發達の膽は我等は生存する能はず、人のため淘汰せられて了ふであらう。古來曰ふ「三苗を三危に竄す」と。漢人は彼等を雲南貴州の邊境に驅逐しその種族は現に殆んど絶滅せんとし生存の危機に瀕してゐる。三苗と言へば、やはり中國固有の土民であつた。我等中國民族の將來も亦三苗と同じやうになるのではなからうか。

中國民族の起源に就いては、西方より來り嶺々を越え天山に到り新疆を経て黃河流域に達した

百姓民族なりと説くものがある。中國文化の發祥地説に照してこの議論は相當理由があるやうに思はれる。若し中國の文化が外來のものでなく、本國に發生したものとすれば、即ち天然の原則に照して云へば、中國の文化は當然黃河流域ではなくて珠江流域に發源したものでなくてはならぬ。何故なれば、珠江流域は氣候溫和物産豊富にして、人民の生活に適し文明の發生にもつて來いの土地であるからである。然し乍ら歴史を考究するに、堯舜禹湯文武の時代は、何れも珠江流域に生れたものではなく、悉く西北に生れた。而して珠江流域は漢朝になつても依然蠻夷の地であつた。斯様に考へて來ると、中國の文化は西北方から來たものであり、外國から來たものであると言ふ説は、大體に於て正しいもののやうに思はれる。そして中國人が人民のことを百姓と言ふが、これ等も外國人が、西方に古時一つの百姓民族あり其後中國に移住して中國固有の苗族を滅し又は之を同化して中國今日の民族を造つたと言ふ説を裏書するものではあるまいか。

進化論の自然の法則に依れば、適者は生存し不適者は滅亡する、優者は勝ち劣者は敗るとある。

我民族は果して優者であるか或は劣者であるか。又適者であるか又は不適者であるか。諸君は我民族の滅亡を願はないのは自然であらう。そして只管本民族の生存と勝利を望むであらう。これ人類天然の思想である。今我民族は非常な困難な地位にあるから將來必ず滅亡するであらう。そ

の原因は外國の人口増加とその政治及び經濟力の三つの壓迫を同時に受けるからである。我等が現に受けつつある政治及び經濟力の壓迫は、已に極點に達してゐるが、ただ我民族は現在のところまだ大であり、外國の人口増加の壓迫をまだまだ痛切に感じてゐる譯ではなく百年後になつて始めて感ずる程度のものであるから、此の點やや安心は出来る。ところが我等は現に斯様な大民族を持つてはゐるが、殘念乍ら民族思想を失つて了つてゐる。だから外國の政治力經濟力だけでも我等を打破することが出来るのだ。これが若し民族思想さへ失はれてゐなかつたならば、外國の經濟力政治力も必ず我等を打破することは出来なかつた筈だ。だが我等は何う言ふ譯で民族主義を失つて了つたのであらうか、この點を攻究して見たい。蓋し之は甚だ難しい問題である。余は一場の故事を藉りて比喩へて見やう。勿論この比喩は不倫不類にして我等が語るところの道理とは毫も關係のないことで單に例として借りて來るに過ぎないものであるが、又この間の原因を説明することが出来るかと思はれる。この故事は余が香港で親しく目撃したところのものである。曾て一人の苦力があつて、日々船着波止場で一本の天秤棒と二筋の繩とを持つて旅客に代つて荷物を持ち、毎日荷物を増ぐことに依て暮しを立てて居た。その後彼は十數弗の貯金をした。當時「ルソン」彩票が盛んに賣出されてゐたが、彼もその貯金を以て一枚買ったものである。もと

とその苦力は歸るべき家とでもなく、何物に限らず藏つて置くべきところもなく、従てその買った彩票も亦藏ぶところもなかつたのである。彼の商賣道具としては一本の竹の天秤棒に二筋の繩許りその二つは彼の行くところへ何處へもお伴してゐたから、彼はその買った彩票を竹の天秤棒の中に入れて置くことにした。ところが彩票を竹の天秤棒の中へ藏ひ込んで終つては、臨時取り出して見るといふ譯には行かなかつたので、彼はその彩票の番號を死にも狂ひで暗記し、絶えずそれを口づさんで居たものである。さて抽籤日になつて彼は彩票店に赴き當籤番號表を見たところ、思ひがけもなく自分が一等に當籤して居り、十萬元儲かつてゐるのを知つて、彼は氣も狂はん許りに喜び、竹の天秤棒や繩を以て苦力をする必要もなく、永久に大金持たることが出来ると思ひ、歡喜の極、手中にある竹の天秤棒と繩とを一齊に海中に投げ込んで終つたのであつた。

以上の比喩に従へば、差當り「ルソン」彩票は恰も世界主義に比すべく、これで大儲けが出来たのである。竹の天秤棒は恰度民族主義であつて唯一の生活の道具である。又この一等に當籤したときは、恰も中國の帝國主義が極盛時代から進んで世界主義の時代に至り、我等の祖先が中國は世界の最強にして所謂「天無二日、民無二王、萬國衣冠拜冕旒、世界從此長太平矣」と有頂天

となり、以後はただ世界主義を説きさへすればいい、全世界のものは中國人は進貢せねばならぬ、今後民族主義は不必要だと考へ、苦力が天秤棒を海中に投せんとせしと同様民族主義を抛擲せんとしたに比すべく、その後滿清のために滅さるるに至つて、世界の대主人翁となることが出来なかつた許りか、自己の小さな家産すら安心して保守することが出来ず、人民の民族思想も一齊に消滅して了つたことは、恰も竹の天秤棒を海中に投げ込んだのと同様である。

故に滿清兵を率ひて入關するや、吳三桂これが嚮導となり、史可法が民族主義を提唱し福王を推戴して、南京に於て恢復を圖らんとしたのに對し、滿洲の多爾琿は史可法に對し云ふ、我等の江山は之を大明に得たものではなく、闖賊から得たものであると。彼のこの意味は、明朝の江山は明朝自身の手で失くなつたものであると言ふのであつて、これ恰も苦力が自分で竹の天秤棒を失くしたのと同様である。近來新文化を語る學生も亦、世界主義を提唱し民族主義は世界の潮流に合はないと言ふ。若しこの議論が英國米國或は我等の祖先あたりから發せられたるものなれば頗る適はしいであらう。けれどもこれが現在の中國人から發せらるると言ふのであるから、まことに不釣合である。獨逸は従前壓迫を受けなかつたから民族主義を説かずして唯世界主義のみを説いたのである。だが今の獨逸は余の見るところでは、恐らく世界主義を説かずして民族主義のみを説

くであらう。我等の祖宗にして若しあの天秤棒を失くしなかつたならば、我等は尙ほその一等の彩票を取り戻すことも出来たであらうに、彼等の天秤棒を失くするのは餘りに早かつた。知らず、その幸運なる彩票は尙ほその中に藏せられて居るであらうか。故に既に外國人の政治力及經濟力の壓迫を受けつつある我等は今後更に又天然の淘汰に遭ふやうなこともあれば、亡國滅種の憂があるであらう。

今後我等中國人に果して適當なる方法が發見せられ、民族主義を恢復し一本の竹の天秤棒を探し出すことが出来たならば、外國の政治力經濟力の壓迫が假令如何に激しくても、我等は千萬年の後迄も決して滅亡することはないであらう。天然の淘汰に至つては、天既に我等四億人を生み今日に保存して來た以上、從前天は中國を亡ぼさうとは考へて居なかつたに相違ない。天意の存するところ、我等民族は長へに存在することが出来得ると信じたい。若し果して將來中國が滅亡するやうなことがあつたならば、罪は我等自身にある。即ち我等は將來世界の罪人とならねばならぬであらう。天は既に重任を中國人に付托してゐる。若し中國人にして自愛せずんば、これ天に逆ふものと云はなければならぬ。故に中國が今日の地位に至つたことに付ても我等に負ふべき責任がある。今天既に我等を淘汰せず、これ天が世界の進化の發展を欲するからである。若し

果して將來中國が亡びるやうなことであれば、それは必ずや列強が亡ぼすのであつて、これ即ち列強が世界の進化を阻止せんとするものに他ならない。(以下十行削除)

第四講 民族自決論と世界主義

現在世界の人口は十五億前後である。この十五億の中中國はその四分の一を占め、即ち四人毎

に一人の中國人がゐる譯である。歐洲に於ける白種民族の合計はやはり四億である。目下世界に於て最も發達せる民族は白人で、白人の中に四種の民族がある。歐洲中北部にあるのが「チユートン」民族で、この民族は數個の國家を建立してゐるが、その最大のものが獨逸、之に次ぐものは奧國、瑞典、諸威、和蘭、丁抹である。東部には「スラブ」民族があり、又數個の國家を建立してゐるが、その最大のものは露國にして、歐洲戰後新しく發生したものに「チエツク、スロバキア」と「ユーゴスラビア」の二國がある。歐洲の西部には「サクソン」民族があり、「アングロサクソン」と呼び英米の二大國を建立してゐる。南部には「ラテン」民族あり數個の國家を建設し、その最大のものは佛國にして、その他は伊太利、西班牙、葡萄牙である。「ラテン」民族は又南「アメリカ」大陸に移住して數個の國を建立し、「アングロサクソン」民族も亦北「アメリカ」大陸に移住して「カナダ」と米國とを建てた。四億に過ぎない歐洲の白色民族が四大民族に分かれ、この四大民族がかくも幾多の國家を建設した原因は、彼等白人の非常に發達した民族主義にある。白人の民族主義が非常に發達したため、彼等の民族は歐洲に充滿し擴充して、西半球南北「アメリカ」大陸に至り、又東半球の東南方「アフリカ」大陸、濠州に至つたのである。現在世界民族中地球上の最大の領土を有するものは「サクソン」民族である。この民族は是初歐洲に發源し、

その歐洲に於て占むる領土は、「イングランド」、「スコットランド」及び「アイルランド」の大「ブリテン」三島に過ぎなかつたものである。この三島の大西洋に於ける位置は、恰度日本の太平洋に於けると同様である。その後「サクソン」人の擴張した領土は、西は北「アメリカ」大陸、東は濠洲「ニュージールランド」、南は「アフリカ」大陸に及んだ。だから世界で最大の領土を有するものは「サクソン」民族であり、世界最富最強の人種も亦「サクソン」人である。歐洲戰前世界に於ける最も強盛なりし民族は「チユートン」と「スラブ」の兩民族であり、就中「チユートン」民族はその聯明才力最も優れてゐた。故に獨國は二十幾個の小邦を聯合して大獨逸聯邦を建設することが出来たのである。その成立當初は本來農業國であつたが、後工業國となり、工業の發達に伴ひ、陸海軍亦之に隨て強盛に赴いた。

歐洲戰前歐洲民族は、すべて帝國主義の害毒を受けざるはなかつた。帝國主義とは如何なるものであるか。即ち政治力を用ひて他國を侵略する主義で中國の所謂動遠略である。この種侵略政策を現在名付けて帝國主義と云ふ。歐洲に於ける各民族は、何れもこの主義に染つてゐたがため、戰爭は絶間なく發生し、殆ど必ず十年に一度の小戰、百年に一度の大戰ありと言つた有様であつた。その中最も大なるものは即ち數年前の歐洲大戰である。今次の戰爭は世界的大戰争と言ふこ

とが出来る。何故ならば、戦争の擴大するところ、全世界に影響し各國人皆その渦中に捲き込まれたからである。今次の大戦構成の原因は、第一に「サクソン」民族と「チニートン」民族との海上覇権の争奪である。即ち獨國近來の強盛は漸次その海軍を擴張し世界第二の海権の強國となつた。ところが一方、英國は自己の海軍を以て獨り全世界に覇たらんとの野心に燃えてゐたのであるから、第二の海軍國たる獨逸と兩立せず、之を打破せんとした。英、獨兩國の海上覇権の争奪こそ戦争の第一原因であらねばならぬ。次に第二は各國の領土争奪である。即ち東歐の一弱小國土耳其(即ち突厥)は百年來近東の病夫と稱せられてゐた。内政は紊亂し皇帝は專制にして、その國勢衰弱の極に達し、從來歐洲各國はこれが分割を策し、百餘年來未解決の儘懸案として殘されてゐたものである。歐洲各國はこの問題を解決せんとして戦争を引き起したのである。故に歐洲大戦の原因は、第一は白色人種の優越争ひであり、第二は世界問題の解決にあつた。歐洲大戦にして若し果して獨國の勝利となり世界の海上權を舉げて獨國の手に歸してゐたならば、恐らく英國の大領土も完全に喪失して、必ずや羅馬の二の舞を演じ四分五裂して滅亡して了つたであらう。けれどもその結果は獨國の戦敗に歸し、その帝國主義の目的も達するに由なかつた。此の歐洲大戦は實に世界有史以來の最も劇烈なりしもので、參加軍隊四五千萬、年を闊する四年の久しきに及び、

戦争最後のときに至つても尙勝敗を分つことが出来なかつたのである。戦争の兩當事者の一方を協商國他方を同盟國と言ふ。同盟國側は最初獨逸二國だけであつたが、後土耳其、ブルガリアが之に加入した。協商國側は始めは「セルビア」、佛、英及び日本で、その後伊太利及び米國が加入した。米國参加の原因は全く民族問題にある。戦争當初一二年、獨、逸は連りに勝利を獲、佛の巴里及び英國海峡は殆ど兩國の軍隊に攻め入れ、「チユートン」民族は英國必ず亡ぶべしとなし、英國人自身も亦頗る之を憂慮し、米國の民族が彼等と同じきを見「サクソン」民族の關係から米國を煽動したものである。米國は自己と同民族の英國が特に異民族たる獨逸に滅ぼされんとするを見、物その類を傷むは蓋し免れざるところ、遂に戦争に加入して英國を助け「サクソン」人の生存を維持し、同時に自己の力のみを以てしては力の足らざるを慮り、全力を竭して全世界の中立民族を煽動し、これ等と共同して参加し獨逸を打ち敗つたのである。戦争當時最も世人の歡迎を受けた一大言論がある。米國「ウイルソン」の民族自決の主張即ちこれである。獨逸は武力を以て歐洲協商國民族を壓迫したため、「ウイルソン」は獨逸の強權を打滅し世界各弱少民族をして以後自主の機會を與へんことを主張したのである。ここに於て此の主張は全世界到る處に歡迎せらるることとなつた。故に印度は英國のために滅ぼされ、一般人民は英國に反對して居たにも拘

らず、多くの小民族は「ウイルソン」が今回の戦争は弱小民族自由のための戦なりと説くを聽いて、彼等は喜んで英國を助けて戦つた。又安南は、佛國に滅ぼされ、日頃人民は佛國の専制を痛恨してゐたが、歐洲戦争に當つては、尙佛國を助けて戦つた。之れ亦「ウイルソン」の主張の正しきを認めたが故に他ならない。かの歐洲弱小民族たる波蘭、「チエツコスロバキア」、「ルーミアニア」が協商國側に参加し同盟國と戦つた原因の如きも亦、「ウイルソン」の民族主義的主張を聞きしがためであつた。我中國も亦米國に煽動せられ、戦争に参加し出兵こそしなかつたが、幾十萬の勞働者を戦線に送つて戦壕を掘り、後方勤務に従事したものである。協商國側がこの好題目を創出したため、歐亞の區別なく一切の被壓迫民族は一致聯合して彼等を助けて同盟國を打破したのである。當時「ウイルソン」は世界平和を維持せんことを主張し十四ヶ條を提出したが、その中最も重要なものが民族自決であつた。之に對し、戦争の勝敗逆賭し難きときには、英、佛共大賛成であつたものゝ、一旦戦後講和會議の開かるゝや、英、佛は勿論伊太利も、「ウイルソン」の民族解放の主義が帝國主義の利益と衝突することの極めて大なるを覺り、講和會議に當つて種々なる手段を弄して「ウイルソン」の主義を欺瞞し去つた。結局講和會議に於て定められた條件は最も不公平なものとなり、世界弱小民族は自決することも出來ず自由を得ることも出來なかつ

た許りか、更にその後受くるところの壓迫は従前に比して一段と激しくなつた。これに依ても、強盛なる國家と、有力なる民族とは既に全世界を雄占し、如何なる國家如何なる民族の利益もすべて彼等に壟斷せられつゝあるを見るべきであらう。彼等はこの壟斷の地位を永遠に維持し、再び弱小民族の復興を許さざらんとして、日々世界主義を鼓吹し、民族主義は範圍餘りに狹隘であると言ふのである。何んぞ知らん、彼等がかく主義するところの世界主義こそは、帝國主義及侵略主義の變形に過ぎないのである。然し乍ら「ウイルソン」の主張が一旦提出せられた以上之を撤回することは出来ない。各弱小民族が協商國を幫助して同盟國を打倒したのは、戰勝後の自由を希望してゐたからであつたが、その後講和會議に於て得た結果は、彼等を非常に失望せしめた。だから安南、緬甸、「ジャワ」印度、南洋群島及び土耳其、波斯、「アフガニスタン」、埃及等歐亞幾十の弱小民族は何れも大いに覺醒するところあり、列強の當日主張せしところの民族自決なるものは、全然彼等を騙つたものに他ならないことを知つた。故に彼等は約せずして同一態度に出で自ら民族自決を實行したものである。

數年に亘る歐洲大戰の結果も、やはり帝國主義を消滅せしむることは出来なかつた。何故なれば當時の戰爭は、一國の帝國主義と他國の帝國主義と相衝突せしものにして、野蠻と文明との戰

十二億五千萬人は少數民族たる二億五千萬人のために壓迫せられて居ると語つたが爲めであると云つたのだ。「レニン」はこの種の説をなせしのみか、且被壓迫民族の自決を提唱し、世界の被壓迫人のために不公平を攻撃した。列強が「レニン」を攻撃するのは、彼等自らの安全を求めんがために、人類の先知先覺を消滅せんとするものにあらずして何ぞやだ。然し乍ら今や人類はすべて覺醒し、列強の造る謠言は悉く伴であることを知つてゐるから、再び彼等は欺瞞せられないであらう。これ即ち世界民族の政治思想が進歩して光明ある地位に迄至つた爲である。

我等は今尖はれたる中國の民族主義を取戻し、これ四億の力を以て世界人類の爲に不公平を打つことを、我等四億人の天職としなければならぬ。列強は我等にこの思想あるを恐れて、一つの似て非なる道理を生み出して、世界主義を主張し我等を煽惑せんとし、世界の文化は進歩し人類の眼光は遠大ならざるべからず、民族主義は狹隘に過ぎ餘りに適當ならず、故に世界主義を提唱すべきであると説く。最近中國の新青年も新文化を主張し民族主義に反對するものあるは、即ちこの種理窟に誘惑せられたからのことである。けれどもこの道理は被壓迫民族の語るべきものではなく、我等被壓迫民族としては、何よりも我民族の自由平等の地位を恢復すると言ふことが必須的先決問題であつて、世界主義を語るのはそれからのことである。余の前述せし、苦力の

彩票を買ひし比喩は、己に發揮せられて甚だ明かである。彩票は世界主義、竹の天秤棒は民族主義、苦力が一等に當籤して商買道具の竹の天秤棒を失つたのは、宛も我等が世界主義に誘惑せられて民族主義を失はんとするに比すべきである。民族主義は何處から發生したものであるか、我等はその民族主義より發生したものなることを知る。故に我等にして世界主義を發達せしめんとせば、先づ民族主義を鞏固にせねばならぬ。若し果して民族主義にして鞏固なる能はざれば、世界主義も亦發達することが出来ないであらう。これに依ても世界主義なるものは、丁度苦力の彩票が天秤棒の内に藏せられたと同様、實は民族主義の中に藏せらるるものなることを知ることが出來よう。若し民族主義を棄てて世界主義を説かば、之も恰も苦力が彩票を藏したる竹の天秤棒を海中に投ぜしにも比すべく、眞に本末を顛倒した事ではないか。余は先日我等の地位は安南人にも及ばずと説いた。安南人は亡國の民にして他國人の奴隸である。然も我等はこれにさへ及ばずとせば、我等の地位は奴隸にさへ及ばないと云ふことになる。かかる地位にあり乍ら、猶も世界主義を説いて民族主義を説くを要せずと云ふならば、余は諸君の頭腦を疑はざるを得ない。歴史に就いて言へば、我等四億の漢族は何づれの路を歩いて來たか。やはり帝國主義の一路を歩いて來たのではなかつたか。我等の祖宗は、従前常に政治力を以て弱小民族を侵略して來た

のではなかつた。ただ當時經濟力未だ大ならざりしため、我等は未だ經濟力を以て他民族を壓迫したことがないと言ふだけのことである。更に文化に就いて言へば、歐洲に比し早きこと幾千年である。歐洲文化の最盛時代は希臘羅馬であつて、羅馬に至つて最も隆盛を極めた。羅馬は中國の漢朝と同時代に過ぎない。當時中國の政治思想は頗る高遠にして且つ深淵であつた。一般の大言論家は、何れも極力帝國主義に反對し、帝國主義反對の文學が多く見受けられたもので、その中最も著名なるものに「棄珠崖議」がある。この文章は、即ち中國の領土擴張に反對せしものにて、南方の蠻夷と地を争ふのを不可としたものであつた。斯様に中國は漢朝の頃には外人との戰爭を主張しなかつたものだ。

中國の平和思想はかくて漢朝に至つて既にその頂點に達して居た。宋期に至つては、中國人は外人を侵略せざるのみか、却て外人の侵略するところとなり、故に宋朝は蒙古の爲に滅ぼされて了つた。宋の滅亡後明朝に至り纔に國を恢復したが明朝の復國後も矢張り外國を侵略しなかつた。當時南洋の諸小國が中國に進貢せんとしたのは、彼等が中國の文化を仰慕し自ら歸順を願つたもので、決して中國が武力を以て彼等を壓迫した譯ではない。巫來由及び南洋群島の諸小國の如き、我中國が彼等をその版圖に編入し進貢を許したのを以て非常な光榮としたもので、若し彼

等に進貢を許さなかつたならば、彼等は非常な恥辱と考へたに違ひない。斯の如き尊い榮譽は、今の世界の最強盛の國家でも逆も到り得ないところであらう。米國の「フリッピン」を待つや、「ヒ」人自ら議會を組織せしめ、その自治を許し、華盛頓國會に對しても亦非人議員の選出派遣を許し、然も米國は毎年「フリッピン」の進貢を求めない許りか、却て「フリッピン」に對し多額の補助金を支出し、道路を修築し教育を興辦して居る。仁慈寛厚斯の如く、優待至れり盡せりと云ふべきである。然も「フリッピン」人は、今尙ほ米國に歸化するを以て榮とせず、日獨立を要求すると言つた状態にある。又印度の「ネパール」國の如き、「ネパール」民族は「廓爾額」と呼んで居るが、この民族は頗る勇敢にして戰をよくする。英國は印度を征服したけれども、今尙廓爾額人を恐れて居る。で之を非常に優待し、恰度宋朝が金人に送つた金は進貢と云ひ、英國の廓爾額と同様年々に金を送つて居る。ただその間、宋朝が金人に送つた金は進貢と云ひ、英國の廓爾額に送る金は或は補助金と云ふ相違があるに過ぎない。然し乍ら、この廓爾額人も亦中國に對しては民國元年に至る迄尙ほ進貢して來たもので、之に因ても中國四隣の小民族が今尙中國を羨慕しつつあることが判からうと云ふものだ。十餘年前、余は暹羅外交部に於て外交次長と東亞問題に就いて談話したことがあるが、かの外交次長は、若しも將來中國がよく革命を成就し富國強民と變

じたならば、我暹羅も亦中國に復歸し中國の一行省となり度きものと語つた。余の彼との談話の地が暹羅政府の公署であり、彼亦その外交次長である以上、彼のこの話は、單に彼の個人的意見と言ふ許りではなく、暹羅國人全體の意見を代表するものと見て差支ない。之に依ても暹羅が、その頃尚ほ如何に中國を尊重して居たかが判かるであらう。その後十數年來、暹羅は亞細亞の獨立國となり、各國間の苛酷なる條約はすべて修正せられ、國家的地位も亦高まつて來たので、今後は恐らく再び中國に復歸することを望まないであらうけれども。更に一段と興味ある故事も諸君にお話しすることが出来る。歐洲戰爭の最も劇烈なりし頃、余は廣東に護法政府を設立して居た當時の話であるが、或日一英國領事が大元帥府に至り余に面會して余と南方政府の協商國加入及びその對歐洲出兵問題に就き商量したことがあつたが、余は英國領事に向ひ何が爲に出兵するのであるかと理由を反問したところ、彼は貴國に請ふて獨國を打たんが爲に於て、中國の領土を侵略して青島を占領した獨國を打つて領土を回收すべきためであると答へたので、余は、青島は廣州を去ること甚だ遠く廣州に最も近きところには香港があり、稍遠きに緬甸「ブータン」、「ネパール」があるが、これ等諸地方は曾て何處の國の領土であつたらうか、現に貴國はその上西藏をも取らんとしつゝあるではないか。我中國は刻下のところ、領土を恢復する力がないから如何

とも致方ないが、若し力さへあらば、恐らく先づ英國の占領せる領土を回收するであらう。緬甸に至つては青島よりも大、西藏は青島に比して更に大である。我等にしてもし領土を回收せんとするならば、まさに先づ大なる地方から始めるであらうと、説いたものである。彼は余の反駁を受け怒りを抑へることが出来ないで云ふには、自分のこの地に來りしは公事を語らんがためにあらざりしやと。そこで余も直に答へて、余も亦公事を談ずるにあらずやと。兩々相對して下らず。暫くあつて余は再び彼に向つて、我等の文明は貴國などに比すれば進歩すること二千餘年、我等は現に貴國などの前にあつて、あなた方の追従して來るのを待つてゐるのである。我等は後へ退くことも出來ず、亦貴方をして我々を引卸させる譯にもゆかぬ。我等は二千餘年前既に帝國主義を築いて平和を主張したため、今や中國人の思想は完全にこの目的に到達してゐる。あなた方が現に標榜する戰爭の目的なるものも亦、平和を主張するものであつて、我等の固より双手を擧げて賛成するところである。併し乍ら、實際上あなた方はまだ戦ひを説いて和を説かない。専ら強權を説いて公理を語らない。余はあなた方の専ら強權を説く行爲は誠に野蠻極まるものと思ふ。故に戦ふことは之を諸君に譲つて我等は参加せず、諸君が戦ひ厭きるを待つて、將來或は眞に平和を講ずるの日に至らば、我等は初めて諸君の一方に参加して共に世界の平和を求むるために協力を惜

ではないであらう。且つ余が中國の出兵参加に反對するには一つの最大の理由があるのである。それは我等が、中國も亦諸君のやうに、強權を説き公理を説かざる強國となることを願はないからである。若し果して貴下の主張に随つて、中國が協商國側に加入したならば、諸君は、中國に軍人を派し、兵を練り、諸君の經驗に富む軍官と精銳なる武器とを補充することに依て、六ヶ月内に必ず三十萬乃至五十萬の精兵を得ることが出来、之を歐洲に送つて戰場に立たしめ獨國を打敗ることが出来るであらう、その結果は必ずやよくないからだと。すると英國領事は、何故よくないかと質問したから余は、諸君は今日迄幾千萬の兵を用ひ數年の時を費しても獨國を打敗つてゐない、そこへただ數十萬の中國兵が加入したと云ふのみで獨國を打敗ることが出来たならば、更に之に依て中國の尙武の精神を振起することが出来、この幾十萬の兵を根本として之を幾百萬の精兵に擴張することが出来ることとなり、その曉には諸君にとつて非常に不利となるであらう、現に日本は諸君側に参加し既に世界列強の一となり、彼等の武力は亞細亞に覇を稱し、彼等の帝國主義は列強と同様で諸君の非常に恐るるところである。而も日本の人口及び富源に至つては遙かに中國に及ばず、若し果して餘の本日説きし方法に依り、唯中國が諸君の一方に参加したならば、中國は十年ならずして日本のやうになることが出来るであらう。中國のこの多數人口と領土とを

以てせば少くとも十個の日本となることが出来るであらう。そのときになつては、諸君全世界の強盛を以てするも、恐らく中國人を打倒するに足りないであらう。我等は既に諸君よりも二千餘年も進歩してゐるがために、戰を語るが如き野蠻な風習を離脱して現在に至り、纔かに眞の平和思想を構成した。余は中國が永久に和平の道徳を保守せんことを希望する。故に今次大戦に参加するを願はないのであると説いた。その英國領事はつい半時間前まで盛に我に武を用ひんことを求めたるに拘はらず、この話を聽いてすつかり感服し、若しも自分が中國人であつたならば必ず貴下の思想と相同じかるべしと語つたことである。

諸君は革命なるものは、元來流血の悲惨事であることを知つてゐるであらう。湯武革命の如きは、一般に皆彼等が天に順ひ人に應じたと説くけれども、當時用兵の情況を説けば、矢張り彼等も曾て血流漂杵の悲惨事を経過したのである。滿清を覆滅した我等の辛亥革命は何れ程の血を流したのであらうか。流血の多からざりし原因は、即ち中國人が平和を愛する、平和を愛すると言ふことが中國人の一大道徳であつたからだ。中國人こそ、世界で最も平和を愛する人間である。余は従前常に世界の人々に我中國に見習ふべきことを勸説して來たものである。今露國の「スラブ」民族も亦平和を主張するやうになつたが、これ即ち「スラブ」人が我中國人に見習つたのである。

故に露國一億五千萬人は、今日では我等と合作せんとしつゝある。我等中國四億の民は單に大なる平和民族である許りか、又實に大なる文明の民族である。近來歐洲に盛んに行はれつゝある新文化及び説かるる無政府主義及び共產主義は、何れも我中國幾千年以前の舊物である。例へば黃老の政治學説の如きは即ち無政府主義である。又列子説くところの「華胥氏之國其人無君長無法律自然而已」は無政府主義ではないか。我中國の新青年は未だ曾て中國の哲學説を仔細に考究することなくして、この種學説を以て、世界の最新學説なるが如く思惟してゐるが、それは歐洲に於てこそ最新であつても、中國には幾千年前にあつたものなることを知らないからのことだ。従前露國の行ふところも、その實純粹の共產主義ではなく、「マルクス」主義である。「マルクス」主義は眞の共產主義でない。「ブルードン」、「バクーニン」の主張することこそ眞の共產主義である。共產主義は外國に於ては今尙議論時代であつて、實行時代には入つてゐない。而も中國では既に洪秀全時代に實行せられた。洪秀全の行つた經濟制度は共產の事實であつて言論でない。歐洲の我中國に凌駕する所以のものは政治哲學ではなくて物質文明である。彼等は近代物質文明の顯著なる發達に依り、人生の日用衣食住行關係の種々なる設備は、非常に便利となり非常に迅速となつた。又陸海軍關係の種々なる武器毒藥も非常に完全となり猛烈となつた。これ等凡ゆる新設備と新武

器は、科學の發達に依て齎らされたものである。この種科學は、十七八世紀「ペーコン」、「ニュートン」等の大學者の主張するところの、觀察と實體とを以て萬事萬物を研究する學問である。斯様に歐洲の科學の發達及び物質文明の進歩に至つては、近々二百餘年來のことに過ぎず、數百年以前に於ては歐洲は未だ中國に及びばなかつたものである。我等が今歐洲に學ばんとする點は、中國に無きものを學ばんとするにあり、中國に無きものは、科學であつて政治哲學ではない政治哲學の眞諦に至つては、歐洲人は猶これを中國に求めなければならぬ。諸君も知つてゐる通り、世界に於て最も學問の發達した國と言へば獨逸であるが、その獨逸の學問を研究する人でも、やはり中國の哲學を研究しなければならぬ。甚しきに至つては印度の佛理を研究し、彼等の科學に基く、偏見を補はんとするの状態である。世界主義は歐洲に於ては近世の所産にかゝるが、中國に於ては二千餘年の夙の昔説かれたものである。歐洲人には我等固有の文明を今尙ほ見出すことが出来ず、彼等は單に政治哲學的世界文明を説くに過ぎない。我等四億人は古來幾多の發明をした。即ち世界的大道徳に就いて言へば、我等四億の民も亦平和を酷愛する。ただ然し我等は民族主義を失つたがために、固有の道徳文明もすべて表現する能はず現在では寧ろ退歩さへもしつゝある。歐洲人の現に説くところの世界主義に至つては、その實強權あつて公理なきの主義である。英語で

言ふところの能力は即ち彼等の公理である。即ち戦つて勝つものを以て道理ありとする。中國人の心理は從來戦つて勝つことを以て正しとはせず、戦を説くを野蠻とした。この戦を説かざる道徳こそ、世界主義の眞の精神であらねばならぬ。我等はこの精神を保守し、この精神を擴充せんがためには、何を以て基礎とならざるべからざるか。民族主義を以て基礎としなければならぬ。露國の一億五千萬人を如きは、歐洲世界主義の基礎であり、中國四億の人民は亞細亞世界主義の基礎である。基礎あつて然る後始めて能く擴充し得る。故に我等にして以後世界主義を説かんとせば、必ず先づ民族主義を説かねばならぬ。所謂天下を平にせんと欲するものは先づその國を治むである。従前に失つたところの民族主義を新しく恢復し、更に之を發揚擴大せねばならぬ。然る後再び世界主義を談ずる、乃ち之が實際的である。

第五講 民族主義恢復策如何

今日は、如何なる方法を以て民族主義を恢復すべきかと言ふ問題に就いて語りたい。前に述べたる如く中國が現在の地位に迄退化したる原因は、民族的精神を失つたからである。故に我民族は他民族のために征服せられて二百餘年間統治されて來た。従前滿洲人の奴隸となり今は各國人

の奴隸となつた。そして各國人の奴隸として受くる苦痛は従前よりも猶更に甚しいのである。この儘で、何等適當な方法を以て民族主義を恢復せずに行つたならば、中國の將來は、國が亡びるのみならず、種族迄も滅びて了ふであらう。故に我等は中國を救はんがため先づ一個の完全なる方法を考へて民族主義を恢復しなければならぬ。

今日話さうとする民族主義恢復の方法に二種ある。第一は四億の人民をして我等の現地位如何を知らしむることである。我等は今生死關頭にある。この生死關頭にあつて、須く禍を避けて福を求め死を避けて生を求めんとするか。須くこの點をはつきり知つて置かねばならぬ。さうすることに依て自然所期の目的を達することが出来るであらう。諸君は「知るは難く行ふは易し」の道理を知らねばならぬ。之は余の學説を参考にすればよく判ることである。中國は従前國の亡びんとするを知らなかつたがために國家が亡びたのであつて、若し豫知することが出来てゐたならば、或は亡びなかつたであらう。古人説ふ「敵國外患なき國は恒に亡ぶ」と又説ふ「難多くして邦を興すことを得」と。この二句は完全に心理作用に基く。例へば前者の所謂敵國外患なしとは、自己の心理上に外患なきを覺えて自ら非常に安全なりと考へることであり、世界中に於ける最強大なる國家が外國は敢

て來り侵さないから國防を講ずる要なしとすることである。故に一度び外患に遇へば即ち國が亡びるのである。次に難多くして邦を興すことを得と言ふのも亦、自ら國家の多難なるを知つて發奮して雄をなすと言ふことで、これ亦完全に心理作用である。従前四回に亘つて説いたところの狀態に鑑み、我等にして民族主義を恢復せんとしたならば、即ち現在の中國が多難なる境地にあり不快極まる時代にあることを自覺せねばならぬ。かくてこそ、既に失はれたる民族主義の恢復を圖ることが出来るであらう。若し心にこれを知らずして、恢復を圖らんとしても、それは永遠に望なかるべく、中國民族は久しからずして滅亡するであらう。前四回に亘つて説きたる情形を統結すれば、我民族は如何なる禍害を受けてゐるか、受くるところの禍害は何處より來りたるか、即ち列強より來れるものであると言ふことを知り得るであらう。禍害に就いて詳細に言へば、一は政治の壓迫、二は經濟力の壓迫、三は列強人口の壓迫を受けたのである。この三つの外來の大禍は既に我等の頭上に臨み我民族の現地位は甚しく危險に瀕しつゝある。例へば第一の禍害に就いて言へば、政治力は一朝にして他の國家を滅ぼすことが出来る。今中國は列強の政治力の壓迫を受けたならば何時でも亡びる今日有つて明日の生死を知らない危機にある。

政治力を以て他國を滅ぼすには兩様の手段がある。一つは兵力で他は外交である。何うして兵

力で一朝にして國を亡ぼすと云ふのであるか。歴史を以て證明すれば、従前宋朝は如何にして亡びたか。崖門の一戦に元朝に亡ぼされたではなかつたか。又明朝は如何にして亡びたか。揚州の一戦に清朝に滅ぼされたからでなかつたか。之を外國に就いて見るも、「ウォータロー」の一戦に「ナポレオン」第一世の帝國は亡び、「スダン」の一戦に「ナポレオン」第三世の帝國は亡びたのである。斯くの如く唯の一戦にて國は亡びなければならぬ。中國は何時でも亡ぼすことが出来る。我等の陸海軍と各險要の地には何等國防の準備はないから、外國は隨時衝入し得、隨時中國を亡ぼし得る。最も近距離に在つて我中國を亡ぼし得るものは日本である。彼等の陸軍は當時一百万、戦時には三百萬迄増加することが出来る。海軍も亦頗る強大にして殆ど英米と雄を争はんとしてゐる。「ワシントン」會議でその戰艦は三十萬噸に制限せられたが、その他の巡洋艦潜水艇驅逐艦の如き大戰艦も何れも極めて堅固で戰鬪力亦頗る大である。例へば今回白鵝潭に派遣せられた日本の兩驅逐艦の如き、中國には之に抵抗し得べき大なる戰鬪力を有する船はないが、此種驅逐艦の如き日本には百幾十隻もある。日本にして假りにこの軍艦を以て我等と戦ふならば、何時でも我等の國防を破り、我等の死命を制することが出来るであらう。加之沿海の各險要の地には國防を鞏固にし得べき大なる砲臺もないから、東隣の日本は彼等の陸海軍を隨時長驅直入する

ことが出来る。唯日本は時機至らざるため、暫く動かかないのであらうが、若し果して動かば、何時でも中國を亡ぼすことが出来るであらう。そして日本の動員の日より中國を撃破するの日迄十日とはかゝらないであらう。故に若し日本と絶交したならば、日本は十日以内に中國を亡ぼすことが出来るのである。再び日本より更に太平洋東岸を望めば、最強の米國がある。従前米國海軍は日本の三倍以上もあつたが、近來華盛頓會議に束縛せられ戰艦は五十萬噸に減少した。その他潜水艇、驅逐艦等種々の新軍艦も皆日本より多い。陸軍に至つては、米國の教育は非常に發達して居り、小學教育は強制制度であつて、全國の男女はすべて學校に入つて讀書せねばならぬことになつてゐる。そして國民の多數は中學教育及び大學教育を受けてゐるが、彼等は中學大學在學中何れも軍事教育を受ける。斯様な譯であるから、米國政府は隨時多數の兵を増加することが出来る。かの歐洲戰爭に参加する際などは一年足らずの間に、二百萬の兵を出征せしむることが出来たのである。故に米國は平時の常備軍は多くはないが、軍隊の潛勢力は非常に大きく、隨時數百萬の兵を出すことが出来る。故に若し假りに中米絶交するやうなことがあれば、米國は動員の日から中國を攻撃する日迄僅か一ヶ月を要するのみ。故に中米絶交すれば一ヶ月の後には中國を亡ぼすことが出来るであらう。再び米國より更に東を望めば、歐洲大陸と大西洋との間に位するも

の、即ち「イングランド」の三島がある。従前英國は海上の霸主と號稱し、彼等の海軍力は世界最強であつた。これ亦華盛頓會議にその戰艦を五十萬噸に制限せられた。けれどもその他普通巡洋艦驅逐艦潜水艇に至つては米國以上に多數である。英國より中國に至るには四五十日を要するに過ぎず、且つ中國に於て既に根據地を有する。かの香港の如きは經營既に幾十年、地甚だ小なりと雖、商務頗るよく發達し、この地勢は軍事上中國南部數省の咽喉を掌握し、訓練せられた陸軍あり海軍もある。香港の陸海軍を以て來攻しても、我等は一時に亡國するやうなことはないが、之に抵抗すべき力はない。香港の外、最も近きものに印度、濠洲があり、これ等殖民地の陸海軍を以て一齊に攻撃したならば、動員の日より二ヶ月に過ぎずして全部中國に至り得る。故に兩國にして若し假りに國交斷絶するが如きことあらんか、多くとも二ヶ月以内には英國は中國を亡ぼすことが出来るであらう。更に歐洲大陸を望めば、現に最強の佛國がある。彼等は陸軍は世界最強である。目下二三千の飛行機を有つて居るが、戰時には尙増加出来る。彼等も亦中國に最も近き地に安南の根據地を有し、且つ安南から鐵道を敷設して雲南省城に通じて居る。假りに中佛にして絶交することあらんか、佛國兵も亦四五十日にして中國を來攻し得るであらう。故に佛國も亦同様に多くて二ヶ月足らずの間に中國を亡ぼすことが出来るであらう。斯様に説いて來ると

單に軍事上の壓迫のみに付て云ふも、世界の何れの強國でも中國を亡ぼすことが出来る譯だ。而も何が故に今日迄よく存在することが出来たのか。今日迄中國が存在し得た理由は、中國自身に力があり、抵抗することが出来たからではなく、列強が皆それぞれ中國を亡ぼさんとし、彼此來り親つて相讓らず、各國の中國に於ける勢力が平衡状態を保つて居たことにある。これ中國が今後も尙ほ存在し得る所以でもある。中國の愚かなる人々は、列強は中國の利權に對し互に嫉視反目してゐる、然も列國の中國に在る勢力は大體平均してゐて統一することが出来ない、だからこの儘で行けば中國は自分から抵抗等しなくとも國は亡びないであらうと考へて居る。斯の如く専ら他人に依つて自己に依らざるものゝ如きは、豈天を望んで占ひを爲すものではないか。天を望んで占ひをしても當てにはならない。斯様な愚かしい考へを持つてゐるやうでは誠に困つたものである。列強が中國を亡ぼさんとする意志には依然變りはない。ただ列強は兵力を以て中國を亡ぼさんとすれば、恐らく中國問題のため、再び第二の歐洲大戰を發生し、その結果列強は共に敗れ俱に傷き自身に何等大なる利益もない。外國の政治家は執れも此間の事情を充分心得てゐるため、兵力を用ひないと言ふだけの話だ。即ち列強にして兵力を用ひて中國を亡ぼさんすれば彼此の間に何うしても戰爭を免るゝことが出来ないのだ。其他權利上の平均不平均の一切の問題は

或はよく衝突を免れ得るかも知れぬ。然しそれもその統治せらるゝの時期に至らば、所詮衝突を免るゝことは出来ないであらう。既に衝突免るべからざるものとせば、衝突することは、彼等自身にとつては非常な不利益であらねばならない。列強はこの邊の利害をすつかり見抜いてゐる。だから、現に彼等は戦争を主張せず、軍備縮少を主張して、日本海軍は戦闘艦三十萬噸、英米兩國海軍は各五十萬噸と言つた具合に制限したのである。この會議は表面上は軍備縮少問題に在つたが、その實中國問題が主題であり、中國の利權を分割せんがためには如何なる方法に依らば、彼此の衝突を免れ得べきやと言ふことを研究したのであつた。

先程お話しした通り、政治力を以て他國を亡ぼすには元來兩様の手段が有り、一は兵力他は外交である。兵力は銃砲を用ひることである。彼等が銃砲を用ふれば、我等も亦抵抗の必要なることが判かる。けれども外交手段を用ふる場合は、單に一枚の紙一本の筆が有ればよい。この一枚の紙と一本の筆とを以て中國を亡ぼすのであるから、我等には抵抗しやうにもする術も分らない、華盛頓會議には中國からも代表を派遣し、議するところ中國の事に關する限り、表面上はすべて中國の利益を謀るためと説かれたものであつたが、華盛頓會議終了後、間もなく各國新聞に共管説が發表せられた。この事實を何んと見る。この共管説は日一日と歩を進め各國の熟慮研究の結

果、必ずや最も完全なる方法を以て中國を亡ぼすに至るであらう。彼等は以後陸軍を動かす必要もなく、海軍を出動せしむる要もない。たゞ一片の紙と一本の筆とを以て互に妥協して中國を亡ぼすこと出来るのである。假令陸軍を動かし軍艦を出動せしむるとするも、尙ほ中國を亡ぼすには十日乃至四五十日を要するのであるが、この妥協方法を以てすれば、たゞ各國外交官が一堂に會し、各々一個の「サイン」さへすれば、中國を亡ぼすことが出来るのである。「サイン」する位は一朝を要するに過ぎない。故に妥協的方法を以てすれば中國を亡ぼすには一朝を要するのみ。一朝にして他國を滅ぼすことが出来るのである。従前かうした先例がないではない。例へば従前の波蘭の如きは露、獨、澳三國に分割せられたものであつたが、その分割當時の情形に就いて見るに、彼此一朝の協商に依り妥協成立と共に即ち亡びたのであつた。この先例に照せば、若し假りに英、佛、米、日の諸強國が一朝妥協することありとせんか、中國も亦滅亡しなければならぬであらう。故に政治力が他國を亡ぼす情態に付て云へば、中國の現地位は甚だ危険なりと云はねばならぬ。

第二の禍害に就いて云へば、中國の現に受けつゝある經濟壓迫の害毒は、余の前に述べたる如く、年々外國人に依て十二億元の金錢を奪ひ去られつゝあることである。この種奪ひ去らるる

金錢は、尙ほ日一日と増加しつつあり、海關の十年前の輸出入貨物を比較すれば二億元の輸入超過であつたものが、現在では五億元に達し十年毎に二倍半の増加である。この割合で計算すると十年後には我等は年年三十億元の金錢を外國人に奪ひ去らるることとなるであらう。若しこの三十億元を我等四億人に於て分擔するとせば、毎年一人に付七元五角を負擔せねばならぬ。我等は毎年一人に付て七元五角を負擔し外國人に與へることとなる。換言すれば、我等は毎年一人に付七元五角宛の人頭税を外國に納むべきこととなるのだ。況んや四億の中二億は女子であつて、現在の女子の能力狀況から言へば、女子がこの七元五角の人頭税を負擔することはまづ不可能であることが明白であつて見れば、結局男子に於て一倍だけ餘計に負擔せねばならぬこととなり、毎年男子一人の負擔額は十五元に達するわけである。又男子の中にも三種あつて、一つは老弱のも一つは幼稚のもので、この二種のもは男子ではあるが、利益を分配して貰ふ方で儲けることは出来ず、従て又この負擔を望むことは出来ない。十五元の人頭税を負擔すべき男子の中、これ等負擔に堪えざる三分の二のものを除けば、負擔し得るものは完全に中年の働きのある男子のみとなり、この中年の男子は老幼各十五元の負擔額をも同時に負擔するものとせば、一中年の働きある男子は、年年一人宛四十五元の人頭税を負擔すべきこととなる。考へても見るがいゝ我等の一中年の

働きある男子が、四十五元の人頭税を負擔して外國へ與へなければならぬとは、何んと恐るべきではないか。その上この人頭税は、増加して止まないとこのものであつて見れば、猶更ではないか。故に余の見るところでは、中國人が何時迄も覺らずしてこの儘日を送つて行けば、外國の政治家等が毎日睡つて居ても十年も経たない裡に國が亡びるであらう。現在でさへも民窮し財盡きてゐるものを、更に十年も経てば、人民の困窮は想像に餘りあり、その負擔額は現在に比較して二倍半にも増加するであらう。これでも諸君は中國は亡びないと想ふか。

列強は今次の歐洲大戰を經過したから或は再び戰爭を想はず、暴動を想はず、以後は靜を好んで勤を惡み、我等も之に依つて軍事的壓迫は免れ得るかも知れない。けれども外交的壓迫は免れることは出来ない。よしんば外交的壓迫をも僥倖にして免れ得べしとするも、斯の如き大なる經濟的壓迫に依り日日侵入せられ日日吸收せられ、然も我等は猶惰眠を貪りつつある。如何にして滅亡を免れ得るであらうか。

更に第三の禍害に就いて言へば、我等中國の人口は既往一百年間餘り増加しなかつた、若し以後一百年も何等人口増加の方法を講じなかつたならば、多きを加へ難きは當然である。地球上を見渡すところ、あの米國は十倍に、露國は四倍に、英日兩國は三倍に、獨國も二倍半に増加し、

最も少ない佛國ですら尙ほ四分の一の増加を示してゐる。若し彼等にして逐日増加し我等が却つて依然舊の如く、甚しきに至つては或は減少するものとせば、我國の歴史を藉りて考察するに、漢族の大を以てしたからこそ先住の土人であつた苗獠獠獠等の民族が滅亡したやうに、我民族も彼等の人口増加に壓迫せられて久しからずして滅亡すべきは、又豫見し得べき顯然たる事實である。故に中國は今や政治的壓迫を受けて朝に夕を測るべからず、經濟的壓迫を受けて十年経つか經たぬかに亡國するであらう。そして又人口増加の問題に就いても中國の將來亦甚だ危険なりと言はねばならぬ。故に中國は外國の政治經濟及び人口の壓迫を受けて居り、この三つの大禍は既に我等の頭上に臨んでゐるのである。我等は自ら先づ知るを要する。自らこの三大禍が頭上にあるを知つたならば、到る處に之を宣傳し、國人をして亡國の慘禍は、天地の間に逃れ難き中國の持つ運命なるを知らしめねばならぬ。人々がすべて大禍の頭上に臨めるを知るに至らば、將に如何にすべきか。俗話に言ふ、困獸猶ほ鬪ふと。その逃免すべきなきのとき逼るや、當に發奮して敵人と死命を賭して鬪かはねばならぬ。大禍は既に我等の頭上に臨みつつあり。我等よく鬪ひ得るや、否や。必ず鬪ひ得る。然し乍らよく鬪はんがためには先づ自己の死期將に至れるを知らざるべからず。死期將に至らんとするを知つてこそ、よく奮鬪することが出来るのである。故に我等が民

族主義を提唱するには、先づ四億の人々をして皆自己の死期近きを知らしめねばならぬ。死期將に至らんとするを知るや困獸すら尙且つ鬪はんとす。我等死に瀕する民族は鬪ふべきか、鬪を要せざるか。諸君は學生であり軍人であり政治家であつて、すべて先知先覺者であるから率先して、四億の人々をして、我民族の今極めて危険なるを知らしめねばならぬ。若し果して四億の人々が悉く危険を知るならば、我等の民族主義の恢復は決して困難ではないであらう。

外國人は常に中國人は一片の散沙であると云ふ。成る程、中國人は國家觀念に對してはもともと一片の散沙であり、もともと民族團體もない。けれども民族團體の外に別の團體はないのであらうか。余が従前説けるが如く、中國には非常に堅固な家族及び宗族の團體があつて、中國人の家族及び宗族に對する觀念は眞に深いものである。例へば中國人は路上で遇つて話をするとき、必ず「請問貴姓大名」とやる。そしてお互に同宗なることが判れば、同姓の伯叔兄弟同様非常に親密になる。この善良なる觀念を推廣すれば、宗族主義から國家主義に擴大することが出来るであらう。我等の失へる民族主義を恢復せんとせば、團體がなければならぬ、非常に大きい團體がなければならぬ。我等が若し大團體を結成しやうとするならば、即ち先づ基礎の小さいものを互に聯合することに依つて容易に成功する。我中國が利用し得る小基礎は、即ち宗族團體である。この

外尙ほ家郷の基礎もある。中國人の家郷觀念も亦非常に深いもので、同省同縣同郷村の人の如きは一般に特に聯絡し易い。余の見るところでは、若しこの二つの善良なる觀念を以て基礎とするならば、全國人を悉く聯絡することは極めて容易に出來ると思はれる。この目的を達せんが爲めには先づ諸君が之を行はねばならぬ。中國人が斯様にして民族主義を恢復することは、外國人に比較して遙に容易である。何故ならば、外國人は個人を以て單位とし、彼等の法律は父子、兄弟、姉妹夫婦各個人の權利に對しそれぞれ單獨に之を保護してゐる。そしてその訴訟の際は、家族の情態如何を問はずして、たゞ個人の曲直如何のみを問ふと言ふ有様で、個人から直接國家であつて、個人と國家との中間に非常に堅固な普遍的な中間社會がない。これ外國の國民と國家との構成關係が中國に如かないと言ふ所以である。中國では、個人の外に家族に重きを置いたため、何事があつても、即ち之を家長に問ふことを要することとなつてゐる。この組織に對する批評は賛否相半するが、余の見るところでは、中國の國民と國家との構成關係は、先づ家族があつて宗族に至り然る後國族と云つたやうに、この組織は一級一級と大きくなり、條道があつて素れず大小構成關係の内部は實によく出來てゐると思ふ。若し宗族を以て單位とし、その中の組織を改良し、再び聯合して國族を合成するならば、外國が個人を以て單位とせるに比較し、當然遙に容易に聯絡し

得るであらう。之に反し若しも個人を單位とすれば、一國の中少くも幾千萬の單位があり、中國の如きは四億の單位があることとなり、かかる多數の單位を皆聯絡せんとするならば、自然困難であらう。若し宗族を以て單位とすれば、中國人の姓は普通百家姓と云はれてゐるが、何しろ年代が非常に古いので一つの姓の中でも、先祖は或は違つてゐるかも知れない、之に由て出来上つてゐる宗族は或は一族にも足らず、何んなに多くても精々四百族に過ぎないであらう。各宗族中にはすべて連帶關係があつて、例へば各姓が家譜を修する場合の如き、常に祖宗幾十代より幾百代前に遡り幾千年以前を追求するが、先祖の姓氏は過半は別姓に改められて居るものであるから、最古の姓を考求すれば甚だ少ないものであらう。如斯き宗族中の源を窮め流を極むる舊い習慣は中國に在ること幾千年、牢として破ることが出来ない。外國人が見たならば或は無用なことだと思ふかも知れぬ。けれども、この敬宗收族の觀念は、中國人の腦裡に込み込んで幾千年にもなる。國が亡びても、彼等は一向お構ひなしであり得る。而して人は誰れでも皇帝たり得ると考へ、誰れが皇帝にならうと同じ様に納税する。そう云つた彼等ではあるが、一旦種族が滅亡すると言ふことにでもなれば、彼等は祖宗の祭を斷絶することを恐れ、生命を賭しても奮闘する。閩粵地方には各姓間の争闘が多いが、之は多くは一姓が他姓に對し、名分上又は私人上の少しの凌辱侵占

等のことで、無数の金銭と生命との犠牲を惜まず姓の爲めに氣を吐かんとするに起因する。事は野蠻と雖も、その義は買つてやらねばならぬ。だから若し彼等に、外國の目前の種々なる壓迫が久しからずして民族を亡ぼすに至るべく、民族亡びて家族亦存在しないと云ふこと、例へば、中國先住の土人苗獠等の種族は今日に至つては祖宗の祭も夙に絶えて居るが、若し我等にして眼光を大にして各宗族の力を合して一個の國族となし外國に抵抗するにあらざれば、苗獠等の民族が今日祖宗を祭らざると同様、我等も亦他日祖宗を祭ることが出来なくなるであらうことを知らしむることが出来たならば、一面各宗族間の争ひを化して外族に對する争ひとなし、國內の野蠻なる各姓間を争鬪を消滅せしめ得ると共に、他面彼等が宗族を滅亡を恐るゝがため結合を容易且つ堅固ならしめ、非常に有力なる國族を造ることが出来るであらう。宗族を以て小基礎とし國族に擴大するの工夫は、例へば、中國現有の四百族は恰も四百人に對する工夫と同様で、一姓毎にその在來の宗族的組織を用ひ、同宗族の名義を以て先づ一郷一縣の聯絡から始め、擴大して一省一國に至らしむることゝすれば、各姓は一個の非常に大なる團體となり得る。例へば姓陳なる人は、その在來の組織に依て、一郷一縣一省の中に住する専ら陳姓の人を聯絡したならば、兩三年足らずの中に陳姓の人の非常に大なる團體が出来らう。斯くして各姓の大團體が出来たな

れば、關係各姓を相互に聯合せしめ多數の極大團體を造るのである。更に各姓の團體をして大綱の頭上に臨み死期將に至らんとするを知らしむるならば、悉く結合して一つの極大なる中華民國の國族團體とすることが出来るであらう。國族團體さへあれば外患恐るゝに足らず、邦の與る能はざるを恐るゝには及ばない。尙書にも堯時代に關し「克明俊德、以親九族、九族既睦、平章百姓、百姓昭明、協和萬邦、黎民於變雅」とあり、堯帝の治平の工夫も亦家族より着手し、逐次百姓に擴大し、萬邦協和し、黎民を雍んずると言ふにあつたらしい。之れ實に宗族を團結し國族を造成し、以て邦を興し外敵を禦ぐの好模範ではないか。若し果して四百の宗族團體を基礎とせず、四億人を以て工夫するとせば、知らず一片の散沙を如何にして聯絡せんとするか。従前日本は、藩閥諸侯の關係を以て聯絡して大和民族を造つたが、當時日本が藩閥諸侯の關係を用ひんとした原因は、余が中國民族の聯成に宗族關係を用ひんことを主張するのとその軌を一つにする。

諸君にして、若し自己が披壓迫民族であり、己に忍受すべからざる時代に至れることを知つたならば、各姓の宗族團體を先づ聯合し、更にこの宗族團體を結合して、一つの民族的大團體を造らなければならぬ。我等四億人に民族的大團體があつたならば、外國人に抵抗するにも自ら積極的辦法がある筈である。現在この辦法のない原因は團體がないからのことだ。團體さへあれば、

外國人に抵抗する位のことには左程難しいことではない。例へば印度の如きは英國の壓迫を受け英國人に統治せられてゐるが、印度人は政治的壓迫に對しては辨法がないが、經濟的壓迫に對しては、「ガンジー」の主張する「不合作」の方法がある。「不合作」とは何かと云へば、英國人が需要するものを印度人は供給せず、英國人の供給するところのものは印度人は需要しないと云ふ譯で、恰度英國人が勞働者を需要するとき、印度人は彼等と共に働かず、英國人が印度に許多の洋貨を供給しても、印度人は彼等の洋貨を用ひず専ら自製の土貨を用ひると言つたやうなものだ。「ガンジー」のこの主義が始めて發表せられた頃は、英國人は余り之を重要視せず、之を取締らうと思しなかつたが、永い間に、段々と多數の不合作團體が出現して、英國の經濟方面は非常なる影響を受けた。故に英國政府は「ガンジー」を捕へ獄に下したものである。印度が斯くもよく不合作の効果を擧げ得た原因を推究するに、全國民がよく之を實行し得たるに因る。印度は國既に亡びたるにも拘はらず尙ほ且つよく不合作を實行し得たのである。我等中國は今未だ亡びては居ない。だから、普通國民が何か事業を經營すると言ふことは仲々容易ではないが、外國人の仕事をせず、洋奴とならず、外來の洋貨を用ひずして國貨を提唱し外國銀行の紙幣を用ひずして専ら中國政府の金を使ひ、經濟絶交を實行すると言ふことは、誰にでも極めて容易に出来ることであ

る。若しそれ人口増加の問題に至つては、その解決は更に容易である。中國の人口は從來非常に多く物産亦頗る豊富である。然も外國の壓迫を受けざるべからざりし病源は、一般人民が知らずして醉生夢死せしにある。眞に若し國民全體が印度人同様の不合作を爲し、又宗族團體を基礎とし、一つの大民族團體を聯成することが出来たならば、如何に外國が兵力經濟及び人口を以て壓迫し來るも、何等我等の恐るゝところでない。故に中國の危急存亡を救ふ根本的方法として、先づ團體を造り三四百の宗族團體を以て國家を守つたならば、方法は幾らでもある。そして何國に對しても抵抗することが出来る。外國に抵抗するには次の二方法がある。

一つは積極的で、この方法は即ち民族精神を振起し民權民生の解決を求め外國に向つて奮闘することであり、二は消極的方法であつて即ち不合作である。不合作は消極的の抵制ではあるが、外國の帝國主義的作用を減少せしめ、以て民族的地位を維持し滅亡を免がるゝことが出来る。

第六講 民族地位恢復策如何―結論

諸君、本日は如何にして我民族地位を恢復すべきかの問題に就いて語りたいと思ふ。我等は我民族地位恢復策を研究するが爲には、前數回に亘つて述べたところの、究竟するに我民族は現在如

何なる地位にありや、我民族と國家とは現在の世界に如何なる状態の下に置かれたるや、を忘れてはならない。一般に思想の豊富なる人、所謂先知先覺者は、中國を以て半殖民地的地位にありとなしたが、余の前數次の研究に依れば、半殖民地どころではない。殖民地の状態より云へば、例へば安南は佛國の殖民地であるが、既に半殖民地と云ふ以上、中國は完全なる殖民地たる安南などよりもその地位稍高きに似てゐるが如く思はれるが、結局中國の現地位は安南に比較して何うであらうか。余の研究に照せば、現在の中國は完全なる殖民地の地位にも猶ほ及ばない。完全なる殖民地の地位に比較して更に一段低い。だから余は一つの新名詞を創造して中國を呼んで次殖民地として置いたが、これ即ち中國の現位である。之が種々なる理論は既に以前充分に徹底するやうに説いて置いたから、今日は再説しない。

昔中國は世界で何んな地位にゐたであらうか。中國は従前は強盛を極め非常に發達した文明を有し、世界第一等の強國であつて、現在の英米佛日の如き列強よりも、その處る地位は尙遙かに高かつた。當時中國は世界唯一の強國であつた。我等の祖宗は従前已にその地位に迄達してゐたのである。然も現在に至つては殖民地にも如かないと言ふ、一體何が故に従前そんなに迄高かつた地位が、今になつて一落千丈したのであるか。この最大の原因に就いては、この前已に述べて

置いた通り、我等が民族精神を失つたことに起因する。即ち民族主義を失つたがために、國家は一日の退歩したのである。我等にして今我民族地位を恢復せんがためには、先づ民族精神を恢復することを要する。我等にして民族精神を恢復せんとするには二個の條件がなければならぬ。第一の條件は、我等が現在極めて危険な地位に屬することを知ることであり、第二の條件は、我等が既に非常に危険な地位にあることを知つた以上、中國固有の團體即ち家族團體宗族團體の如きものを善用し、聯合して一つの大國族團體を作らねばならぬことである。國族團體が結成せられ、四億人の大力量があり、共同して奮闘したならば、我民族が現に如何なる地位にあらうとも、必ず恢復することが出来るであらう。故によく知ることゝ群を合することは民族主義恢復の方法であると言へる。諸君は先づこの方法を知つたならば、更に推廣して全國四億人に宣傳し、皆に之を知らしめねばならぬ、人々皆之を知つたならば、そこで曾て失はれた我等の民族精神を恢復することが出来るであらう。従前失はれた民族精神は恰度睡つてゐるやうなもので、今この民族精神を恢復せんとするならば、之を喚び醒さなければならぬ。眠が醒めたならば始めて民族主義を恢復することが出来る。民族主義にして恢復せられたならば、我等は一步を進めて我民族的地位の恢復策に就いて研究することが出来るのである。

中國が會て、能く強盛な地位に到達し得たのは、單に一個の原因に由るものではない。凡そ一國のよく強盛たり得る所以は、當初武力に依つて發展し、之に繼ぐに種々なる文化の發揚を以てし然る後成功すると云ふのが普通の階梯である。けれども民族と國家の地位を長久に維持せんとするには、猶ほ道德問題が残されて居る。非常に善良な道德を有する國家にして始めて長治久安たり得る。亞細亞大陸に於て古代最も強盛なりし民族は元朝の蒙古人に過ぐるものはない。蒙古人は東邊中國を滅し西邊又歐洲を征服した。之に比し、中國はその最も強盛なりし時代に於ても、國力は裏海の西岸以上に及ばず精々裏海の東邊迄であつた。中國はその最強盛時代に於てすら、一度も歐洲に達することは出來ず、従て殆ど全歐洲を併呑した元朝の時代は中國の最強盛時代よりも尙ほ遙かに強盛であつた譯だ。けれども元朝の地位は永く維持せられず、却て各代の、國力に於て元朝に比すべくもなかつた中國の方が、その國家的地位を各代共に長久たらしむることを得たのであるが、その原因を推究すれば、元朝の道德が、中國その他の各代道德の高尙なりしに及ばなかつたがためである。従前中國民族の道德は、外國民族の道德に比し遙かに高尙であつた。故に宋朝のとき一度は亡國し外來の蒙古人のものとなつたが、その後蒙古人はやはり中國人に同化せられた。明朝のとき再度亡國して滿洲のものとなつたが、後滿洲人も亦中國人に同化

せられた。これ我等中國の道德が高尙であつたがため、國家は亡びても民族は依然よく存在することが出来、そして自己の民族が存在し得たのみならず、同時にその力を以て外來の民族を同化する事が出来たのである。故に本を窮め源を極めて我等が今我民族的地位を恢復せんとするに、人民が聯合して一つの國族團體を造る外に、固有の舊道德を先づ恢復せねばならぬ。固有の道德あつて然る後始めて固有の民族的地位の恢復を圖ることが出来るのである。

中國固有の道德と言へば、中國は今も尙忘るゝ能はざるところのもの、第一に忠孝、次に仁愛、その次は信義、その次は和平である。これ等道德は今も尙常に説かれつゝあるものであるが、現在では外來民族の壓迫を受け新文化浸潤し、これ等新文化の勢力は、今や中國を横行し、新文化さへあれば舊道德の如きはなくても可なりとなし、我等固有のものが果していゝか悪いか、若し良ければ當然之を保存し、悪いときに始めて之を棄つべきものであると言ふことを一向考へない。將に今中國は新舊潮流相衝突し、一般國民は何れともその適從するところがない状態にある。余は數日前田舎へ行つたが、疲れたので一祠堂に參詣した序に奥まつた一室で休息した。そのとき部室の右側に一つの孝の字があり左側には有るべきと宇がない。余は必ず以前には忠と言ふ字があつたのであらうと考へた次第であつたが、斯うした事實を見たことは一度許りでは

なく、許多の祠堂又は家廟にも皆同様見受けられた。たゞ數日前に見た孝の字は、特別に大きく左側の取り去られた痕跡が、まだまだまざりと新しかつたので特に注意を惹いた迄である。この毀ち去つた行爲を推究するに、田舎の者が自分でしたのか、それとも泊り合せた我等の兵士達がやつた仕事か判らないが、余が従前多數の祠堂廟宇に、兵が駐屯したこともないのに忠の字が悉く毀ち去られてあつたのを見たことがあるから、恐らくこれなども田舎の者のした業であらう。之に由ても現在の一般人民の思想を見ることが出来ると思ふ。即ち恐らく彼等は民國になつたから忠の字を説かなくてもいゝと考へて居るに違ひない。従前の忠と云ふ字は、君主に對する所謂忠君であつて、今民國には君主がないから忠の字は使はなくてもよいと考へて居るに違ひない。だから忠の字を毀して了つたのであらう。然しこの理論は實に誤解である。何故なれば國家には君主は無くてもいゝが、忠の字は要らないと言ふ譯にはゆかないからだ。假りに忠の字が不要でいゝと云ふならば、試に問ふて見たい。我國には國があるか何うかと。我等の忠の字は之を國に用ひてよいものか悪いものかと。我等は現在君に忠と云へば固よりよくないが、民に忠と言つたらいいだらうか悪いだらうか。事に忠と言つたら又何んなものであらう。我等が一事を爲すには始終渝らざれば成功するものがあるが、若し成功しなかつたならば、生命を犠牲にしても亦惜

むところにあらずと云つたやうなのが忠である。故に古人は忠の極點は即ち死であると云つた。古へ説かれたところの忠は皇帝に忠なることがあつたが、今は皇帝がないからとて、忠の字を忘れて何事でも爲し得ると思つたら、それを大間違だ。此頃民國になつて諸道徳が悉く破壊したと言ふことは誰しも口にするところであるが、その根本の原因は實に此處にある。我等は民國内に住んで居ると云つてもやはり當然忠を盡すべきだ。君に忠たらずして國に忠たらねばならぬのである。國に忠たらんとせば四億人に忠を效さねばならぬ。四億人のために忠を效すことは一人のために忠を效すよりも自然遙かに高尚なことに違ない。故に忠と言ふ善良なる道徳はやはり保存しなければならぬことになる。孝の字に至つては、我中國の特長とするところで、各國よりも遙かに進歩して居る。孝經の説くところの孝の字は、殆ど包まざるところなく至らざるところはない。實に現在の最文明の國家に於ても孝の一存を説くこと中國の如く、かくも完全なるものはないのである。故に孝の一字は更に必要であると言はねばならぬ。國民にして民國の内に在つてよく忠孝の二字を説いて極點に至ることを得たならば、國家は自ら強盛たり得るであらう。

仁愛も亦中國の善良なる道徳である。古時最も多く愛の一字を説いたもの黒子に過ぐるものはない。黒子説くところの兼愛は、耶蘇の博愛と同じものである。古へ政治方面で説かれてある愛

の道理には所謂「愛民如子」とか「仁民愛物」と云ふのがあつて、何事に對しても總て愛の一字を以て之を包括した。故に古人が仁愛に對し果して何のやうに之を實行したか知ることが出来る。中外交通開始後、一般の人々は中國人の説くところの仁愛を以て外國のそれに及ばないとする。何故なれば、中國人は中國に學校を設立し醫院を開辦して中國人を教育し救濟すると言つたやうな接配に、すべてが實行のための仁愛であるからだ。成る程、斯様な實行方面から説いて來れば、仁愛の道徳に就いては如何にも中國人は遙かに外國に及ばないかのやうに思はれる。併し乍ら、中國が斯様に外國に及ばないと言ふ理由は、中國人が仁愛に對し外國人のやうに實行しないと云ふ點に過ぎず、仁愛は何處迄も中國の舊道徳であることには變りはない。たゞ我等の外國に學ばんとする點は、彼等の實行方面にあらねばならぬ。仁愛を恢復して更に之を發揚し擴大すれば、即ちこれ中國固有の精神である。

義と云へば、古時中國は隣國に對しても朋友に對しても、すべて義を説いた。余の見るところでは、信の一方面の道徳に就いては、中國人は實際外國人よりも遙かに勝れて居るやうに思はれる。何の點からそれが見出されるかと云へば、商業取引上から見ることが出来る。中國人の取引には何んの契約書もない。たゞ互に口頭の一言を以て非常に信用する。例へば外國人から品物を

買ふ場合、互に契約書を取交す迄もなく、單に帳簿に記入しただけで事足れりとする。然し乍ら、中國人が外國人から買ふ場合には、お互に非常に詳細な契約書を取交はさねばならぬ。若し辯護士もなく外交官も居ないところでは外國人も亦中國人を眞似て同じ様に帳簿に記入するだけで事足れりとする。が之は極めて稀な例に過ぎず、普通はすべて契約書を作る事になつて居る。契約書が作つてないとき、互の契約濟貨物の引渡しに當り、若し貨物の價格が非常に廉くなる場合、その貨物を引取らんがためには自然損をしなくてはならぬ。例へば或る貨物の値段が契約當時一萬元であつたとし、それが貨物引渡の時になつて價值が五千元しかしなくなつたとすると、若しその貨物を受取れば、みすみす五千元の損失と云ふことになる。この場合、當初貨物の賣買契約をしたとき契約書を作らなかつたのであるから、中國人は本來ならば、註文した貨物を要らないと斷つてもいゝ譯であるが、中國人は之を履行してその貨物を買ふ。信用が第一で五千元位の損失のために註文を辭むるやうなことはない。だから外國人で、中國の内地に永く商賣をやつてゐるものは常に中國人を讚美して、中國人は一言で外國人が契約書を取交した以上に信用を守ると言ふ。けれども外國人で日本で商賣するものが日本人と貨物の賣買契約をするとき、假令契約書を作つても日本人はやはり何日も履行しない。例へば、貨物を註文した際契約價格が一萬元であつ

たものが貨物引渡の時になつて五千元に値下りしたとすると、もともと契約書があつても、日本人はやはりその貨物を引取らず契約を履行しない。だから外國人は日本人と訴訟沙汰ばかり起してゐる。東亞に非常に永く住んで居る外國人で、中國人とも日本人とも商賣したことがある人は皆中國人を讃めて日本人を讃めない。

(十九行 削除)

中國には、更に一種の平和を愛すると言ふ至極結構な道徳がある。現在世界の國家及び民族の中で、平和を説くものは中國だけで、外國は皆戰爭を説く。帝國主義を主張して他國を滅ぼす。けれども近年數多の大戦を経過して澤山の人間を殺したので、やつと戰爭を忌避の主張するやうになつて幾度か平和會議は開かれた。即ち従前の海牙會議の如き、歐洲戦後の「ベルサイユ」會議、「セネバ」會議、華盛頓會議及び最近の「ローザンヌ」會議の如き之である。けれども之等の會議で

は各國人が平和を説くのは、戦争を恐れるため已むを得ずして説くのであつて、一般國民の天性から出づるものではない。中國人は幾千年來平和を酷愛し、すべて天性より出てゐる。個人の謙讓を重んじ、政治では「不嗜殺人者能一之」と説いて居るが如きは、外國とは大いにその趣を異にする。故に中國従前の忠孝仁愛信義等種々の舊道德が外人を凌駕してゐるのは勿論のこと、平和の道德も亦外國人を凌駕して居るのである。この種特別の良道德こそは我等の民族精神であらねばならない。今後我等は、この精神を保存する必要ある許りでなく、更に之を發揚擴大しなければならぬ。然る後始めて我等の民族的地位を恢復することが出来るであらう。

我等舊有の道德を恢復せねばならないのは勿論であるが、その他固有の智能も亦まさに恢復しなければならぬ。我等が滿清に征服せられて後は、四億のものはすつかり眠つて了つた。道德が睡つて了つた許りでなく、智識も亦眠つて了つた。今日民族精神を恢復せんとする我等は固有の道德を喚び醒ます許りでなく、固有の智識も亦喚び醒まさなければならぬ。中國には如何なる固有の智識があつたであらうか、即ち人生國家觀念に對しては古時非常に優れた政治哲學があつたものだ。我等は近時に於ける歐米國家の非常なる發達は認める。けれども彼等の新文化に至つては、まだ我等の政治哲學の完全なるには如かない。中國には外國の大政治家達もまだ未見

のものであり、又斯くも整然と説かれたことのない、最も系統立ちたる一つの政治哲學がある。即ち大學の「格物致知誠意正心修身齊家治國平天下」の所説である。之は一個の内より發揚せられ外部に至り一個の内部より起つて推して平天下に至つて止むの謂である。斯の如く精微に開展する理論は、外國の如何なる政治哲學家達にとつても、未見のものであり、また未見のものであつて、これ即ち我等の政治哲學の智識中、我等のまさに保存しなくてはならぬ獨特の寶物である。

元來これ等正心誠意修身齊家の道理は道德の範圍に屬するものであるが、今日これ等を智識の範圍内に置いて語ることが適當であらう。従前我等の祖宗はこれ等道德上の工夫をしたものであるが、民族精神を喪失してからは、この智識的精神も亦當然失はれねばならなかつた。故に一般の讀書には、その一句は口頭禪として常用されてはゐたが、多くは習つて察せず、その解釋を求めず、その妙を明かにすることが出来なかつたのである。正心誠意の學問は、これ内治の工夫であつて口で話すことは仲々容易ではないが、従前宋の儒者はこれ等の工夫を最も講究したもので、彼等の著書に依れば、大體彼等が至り得た地歩を知ることが出来る。然し乍ら、修身齊家治國等の外面的修養の工夫に至つては、恐らく我等は今日尙ほ一つとして出来てゐないであらう。専ら外に表

はれたるものに就いて云へば、所謂修身齊家治國は、最近數百年來一つとして爲し得たものはなく、本國も自治することが出來ず、外國人は中國人の國を治め得ざるを見て共同管理を試みんとした程である。

我等は何が故に中國を治むることが出來ないのであらうか。外國人は何處から斯うした觀察を下したものであるか。余の個人的觀察に依れば、外國人は齊家の一方面からは、或は中國の家庭の様子をはつきり見ることが出來ないかも知れないが、修身の一方面から見れば、我中國人にはその工夫が非常に缺乏しその一舉一動はすべて注意を欠いて居るので、中國人との一度の往き來ではつきり判つて了ふ。外國人の中國に對する印象は、中國に二三十年も住んで居るものか、さもなくば極めて大なる眼光を以て一度び中國に來れば忽ち中國の文化が遙かに歐米のそれに超越せるを發見し中國を讚美し得る。例へば「ラッセル」か又はそれと同様な極めて偉大なる哲學者でもない限り、普通の外國人は、中國人には教化がない非常に野蠻であると言ふ。この原因を推究すれば、皆が修身の努力が甚しく缺乏して居るが爲に他ならぬ。大きいことは勿論、一舉一動の極めて尋常の努力迄も、すべてに考へが足りないからだ。

例へば中國人が最初米國に行つたとき、米國人は本來平等に待遇して何等中米人の區別も附け

なかつたものであるが、その後米國の大「ホテル」では中國人の宿泊を許さず、大きい「レストラン」等も中國人のお客を斷はるやうになつた。これ即ち中國人に自修の工夫のないために他ならない。余は曾て船で一米國船長と話をしたことがある。彼の云ふには、曾て中國の一公使が恰度この船に乗つたことがあるが、その公使は船中處構はず手涕をかみ痰を吐き、この貴重の絨氈の上さへも痰を吐いて實に厭やな感じがしたと語つたので、余は彼に、あなたはそのとき何んな方法を執つたかと問ねたところ、彼が言ふには、別にいい方法も考へつかなかつたが、ただ彼の面前で自分の「ハンカチ」で絨氈の痰をきれいに拭いた、ところがそうして自分が痰を拭いてゐるのに彼は一向平氣で少しも意に介する様子も見へなかつたが、あの公使でさへも、あの貴重な絨氈の上へ痰を吐き散すのであるから、普通の中國人は誰でも大抵あの通りであらうとのことであつた。この一事から見ても、如何に中國人の舉動に自修の工夫が缺乏してゐるかがよく判ると思ふ。孔子は曾て「席正しからざれば坐せず」と説かれた。之によつても彼が如何に平常身を修める上には一坐立の微も非常によく講究してゐるものであるかを知ることが出來やう。何が故に外國の大「レストラン」が中國の客を斷はるのであらうか、之に就いて或る人が説ふところに依れば、曾てある時、一外國の大「レストラン」で食事時間にきれいに着飾つた紳士淑女

が一堂に聚つて音楽を楽しんでゐた際、突然一中國人が尻をひつたため同席の外國人は急に解散して了つた。で、その店の主人はその中國人を店外へ逐ひ出したが、その後外國の大「レストラント」では中國人の客を断はるやうになつたのであると。又こんな話もある。ある時上海の一大實業家が外國人を招待して宴會をしたことがあるが、彼はその席上突然尻をひつたので満座の外國人はすつかり赤面して終つたが、彼はそれを氣にかけないのみか、却つて起ち上つてバツバツと着物をはたき臭いのを追ひ出しながら、外國人に向つて「エキス、キユーズ、ミー」どやつたものであると。この種の舉動は全く野蠻陋劣極まるものであつて、中國の文人學子の中にも亦常にこの鄙陋な行爲があるが、實に解し難い行爲であると言はねばならない。或は「ガス」が溜れば必ず出る、出れば音がする、衛生的だなどと言ふものがあるかも知れないが、ここに至つては更に惡劣な譯見である。國人の切に之を戒めて以て修身の功夫の第一歩たらしめんことを望む。この外國人は常に指の爪を長くしたが、長いものは一寸以上もあつて、ちつともこれを剪らないで甚だ文雅のものとして考へてゐる。この爪を長くして置く習慣は佛國人にもあるが、佛國人のは長くて精々一二分に過ぎず、彼等はこれを以て自分が荒仕事をしてゐるものではないことを表示することが出来ると言ふにあるらしいが、中國人の爪を長くするにも亦斯した考へが多分にある

やうだ。若し果して人々皆荒仕事をしたがらなくなつたならば、我等國民黨の勞工尊重の原理とは喰ひ違つて了ふ。その外中國人の齒は何時も非常に黄く黒くなつてゐて、きれいに磨いてないが、是れ亦目修上の一大缺點である。

痰を吐いたり屁をひつたり爪を長くしたり齒を磨かないのは、すべて修身尋常の工夫を皆が注意しないからである。故に我等に如何に修身齊家治國平天下の大智識があつても、外國人は一見して非常に野蠻だと思ひ込み詳細に我等の智識を考察しやうとしないのである。外國人にして中國の文明を知り得るものは、「ラッセル」か之と同様の大哲學者の如く一見にて觀察し得るものを除いては、中國に何十年も住んだ人でもない限り中國幾千年の舊文化を知ることが出来ない。假りに若し諸君が、修身の工大を爲すに條理あらしめ、内に誠にして外に形はれ、如何に微細な舉動迄もよく注意し、外國人に遇つても鄙陋なる行爲を以て他の自由を犯するが如きことがなかつたならば、必ず外國人は非常に尊重するやうになるであらう。本日修身のことを説いた所以は各位青年が外國人の新文化を學ばねばならぬは當然であるが、ただその前に身を修むることが必要であり、身修つて後、齊家治國を説くべきであると言はんがために外ならない。現在各國の政治は何れも進歩し唯中國のみ退歩して居る。何故に中國は退歩したか。即ちそれは外國の政治經

濟の壓迫にも依るが、その根本の原因を推究すれば、やはり中國人が身を修めず、中國従前の修身を講ずるを知らざりしに歸する。正心誠意格物致知に至つては極めて精密なる智識、一貫せる道理である。然も斯の如き極めて精密なる智識と一貫せる道理とは共に中國固有のものである。我等にして今、家を齊へ國を治め外國の壓迫を受けざらんとせば先づ身を修めて中國固有の智識と一貫せる道理とを恢復することが絶對的に必要である。然る後、我等の民族精神も民族地位も初めて恢復することが出来るであらう。

我等は智識の外に尙固有な能力を持つて居る。現に中國人は外國の發達せる機械、昌明なる科學を見て、中國人の現在の能力は當然外國人には及ばないであらうと考へてゐる。然し乍ら幾千年前中國人の能力は何んなであつたらうか。従前中國人の能力は外國人に比して遙かに大なるものがあつた。現在外國で最も重要なものは悉くこれ會て中國で發明せられたものである。例へば指南鍼（磁石）の如き、今日の如く航海業の發達した世界に於ては殆んど一時一刻も無くてならないものであるが、この指南鍼の起源を尋ねれば、やはり中國人が幾千年前に發明したものである。若し果して従前の中國人に能力がなかつたならば、磁石を發明することは出来なかつた筈である。然るに中國人は夙に磁石を發明し外國人は今尙之を使用してゐる。中國人固有の能力が外國

人より高かりしを見るべきである。次に人類の文明中最も重要な印刷術であるが、現在外國に於て改良せられ一時間に幾萬枚の新聞を印刷し得る印刷機も、その起源を尋ねれば、やはり中國の發明にかかる。又次に人類の日用品たる磁器も亦中國に於て發明せられたもので、この磁器は中國の特産で、今日迄外國人は随分模倣に力めたが、中國の精美なるには猶ほ遠く及ばない。近來世界の戰爭に用ひらるる無煙火薬も、その源を推究すれば有煙黒薬の改良せられたもので、その有煙黒薬も亦中國で發明せられたものである。中國で發明された指南鍼、印刷術及火薬等これ等重要なるものは、今日外國の利用するところとなり、故に彼等はよく今日の強盛を致したのである。若し夫れ人類享くるところの衣食住行の種々なる設備に至つては、これ亦従前我等の發明せしところ、例へば飲料に就て云へば、中國人は茶葉を發明して今では世界の一大需要品となつて文明諸國も皆争つて之を用ひ茶を以て酒に代へてゐる。而して之に依て酒の害毒を免がるを得、その人類に裨益する決して少なくない。次に衣服であるが外國人が、最も珍重するは絹織物で、現世界では絹織物を用ふる人は日一日と多くなつてゐる。蠶の吐くところを以て人の衣服となす、之を推究すれば又中國で幾千年前に發明せられたものである。その次に住に就いて云へば、現在外國人の建造する家屋は頗る完全なものであるが、その建造の原理及家屋の重要部

分に至つては、すべて中國人の發明に係り、例へば拱門の如きは中國が最も早く發明したものである。最後に行に就いて云へば、現在外國人の用ふる吊橋は、極く最新式の工事で非常な技術でもあるやうに考へられてゐるが、外國人が中國内地に來て川邊西藏に行けば、中國人が大山を過り大河を横切つて多くの吊橋を用ひてゐるのを見るであらう。彼等は、従前中國の吊橋を見ない間は、外國の方が先に發明したやうに考へて居たが、中國の吊橋を見るに及んで、この發明の功を中國に歸するのである。斯様に昔から中國人には能力が無かつた譯ではない。その後この能力を失つたがために、我等の民族地位も亦漸次退化したのである。今固有の地位を恢復せんとすれば、先づ我等固有の能力をも一齊に恢復しなければならぬ。

然し乍ら、我等が固有の道德智識及能力を恢復すればとて、今日の世では、猶中國を世界一等の地位に迄進ませることは出来ないのである。若し我等が我等の祖宗の當時の如く世界獨強の國家たらんとするならば、我一切の國粹を恢復した後、尙歐米の長所を學ばねばならぬ。斯くて始めて歐米と肩を併べて競争することが出来るであらう。若し外國の長所を學ばずんば、我等は依然退歩を続けなければならぬであらう。畢竟するに、外國を學ぶことは困難であるか、困難でないか。中國人は從來外國の機械は非常に難かしいもので學ぶことは容易でないと考へてゐた。外

國で最も難しいものは、空中を飛ぶことであると考へられてゐたが、最近飛行機は發明せられ、そして今我等は毎日大沙頭の上空に飛行機の飛ぶのを見ることが出来る。そしてその操縦者は中國人でないのか。

中國人は天上を飛ぶことを學んで到り得たのである。その他に學んで到り得ないやうな難事があるであらうか。何故ならば、數千年來中國人は非常に立派な根底と文化とを有する。故に外國人に學んだならば、如何なることでも悉く學んで到り得ないことはないのである。我等の本來の能力を以てすれば、外國人の長所を學ぶこと位は至極易々たることでなければならぬ。外國人の長所は科學である。それは二三百年の工夫を以て研究し發明せられたもので、長足の進歩を遂げたのは最近五十年來のことに過ぎない。この種の科學が進歩したが爲に、人力を以て天工を巧奪するやうになり、天然の凡ゆる物力も人工でこれを造り得るやうになつた。最新に發明せられた物力は電力の使用である。従前物力を得るには石炭を用ひて居た。石炭に依て蒸氣力を發動せしめたものである。現在では進歩して電力を使用する。故に外國の科學は既に第一歩より第二歩に進んだと言はなければならぬ。現に米國に於ては全國の機械工場所有の電力、即ち馬力を統一せんとする大計畫がある。彼等全國の幾萬の機械工場には、各一個の發動機があり、すべて石炭を

燃料として動力を起してゐる。だから各工場で、一日に使用する石炭とそれに使用する人間は夥しい數に上り且つ各工場の石炭の使用が莫大なるため、全國幾十萬哩の鐵道は唯一の石炭運送の用にも足らず、農産物運送の工夫がつかなくなつて了ひ、之が爲め各地の農産物を運び出して賣捌くことが出来なくなつて了つた。石炭の使用には斯うした二つの不利益が伴ふため、米國では現に一中央發電所を設けて全國幾萬の工場の電力を統一せんことを計畫しつゝある。この計畫が將來果して成功したならば、これ等幾萬の工場の發動機はすべて一個の總發動機に統一せられ、従て各工場は石炭と澤山の石炭、たきの労働者とを必要としなくなり、ただ一條の鋼線がよく動力を傳導し各工場の作業を爲さしめ得るであらう。この方法の利益は、恰度現在講堂にゐる幾百人が一人一人單獨に鍋で飯を煮て食ふことは非常に面倒であり非常な浪費であるけれども、皆一緒になつて、一つの大鍋、煮て食へば非常に便利でもあるし多大の浪費を省くことも出来るのと同様である。斯様に現在米國では電力を以て全國の工場の一計畫を考へて居るが、若しも中國が外國の長所を學ばんとするならば、眞先きに石炭を使用せずして電力を用ひ、一大原動力を以て全國に供給しなければならぬ。斯の如き學び方は恰も軍事家が敵の頭を迎へて截撃すると同様である。若し果してよく彼等のなすところを直にとつて之を學んで行つたならば、十年の後には假

令外國を超越することは出来ない迄も、必ずや彼等と比肩することが出来るであらう。

我等が外國を學ばんとするには、彼等の爲すところを直に取つて一步づつ先きへ進むやうに心懸け、彼等に追随してはならぬ。例へば、科學を學ぶにも彼等のなすところを直にとつて之を爲せば二百年の光陰を節約することが出来るであらう。若し果して我等が今日の地位に至つても、尙惰眠を貪つて奮闘しなかつたならば、國家の地位は恢復せられず、今後は亡國滅種の外ないであらう。我等は今、世界の潮流に隨つて外國の長所を學べば、必ず外國より以上に更に好きことを學ぶことの出来ることを知つた。所謂「後の雁が先になる」である。従前數百年も後れて居たものが、今では數年ならずして之を追ひ越すことが出来るのである。日本はその一つのいゝ手本ではないか。日本は従前の文化は中國より學んだもので中國に比較して低かつた。けれども近來日本は專心歐米の文化を學んで幾十年ならずして世界列強の一つとなつたのである。余の見るところでは、中國人の聰明才力共に日本人に劣らない。我等が今後歐米を學ぶことは、日本よりも更に容易な筈である。故にこの十年間、即ち我等の生死關頭に在つて、我等が覺醒して日本人の如く協心協力臥薪嘗膽して民族地位を恢復したならば、十年以内に外國の政治經濟及人口の種々なる壓迫と禍害とを一齊に消滅せしむることが出来るであらう。日本は歐米を學んで幾十年な

らずして世界列強の一となつた。けれども中國は人口に於て日本に十倍し富源は更に莫大である。だから、若しも中國にして學んで日本に至り得るとすれば、即ち變じて十の列強となるであらう。現在世界には英米佛日伊の五大強國あるのみで、その後恢復せる獨露を數へても六七個の強國があるに過ぎない。若し中國がよく學んで日本同様になることが出来たならば、一國は變じて十個の強國となり、そのときに至らば、中國は第一等の地位を恢復することが出来るであらう。

けれども中國が第一等の地位になつたときは、如何なる態度政策を執るべきであらうか。古時中國は常に弱きを濟ひ傾くを扶けて來た。此の正しい政策があつたがため中國は幾千年の強盛を傲り得、安南緬甸朝鮮暹羅の諸小國もよく獨立を保持し得たのである。今は歐風東漸し、安南は佛國に緬甸は英國に滅ぼされて了つた。故に中國にして若し果して強盛となることが出来たならば、我等は民族地位の恢復のみならず尙ほ世界に對して一大責任を負はねばならぬ。若し果して中國にしてこの責任を負擔し得なかつたならば、中國の強盛は徒らに世界に大害を與へるのみで、何等利するところはないであらう。中國は世界に對し、究竟するに如何なる責任を負はねばならないのか、現在世界列強が歩ける路は他國を滅すところのものである。若し中國が強盛と

なつて他國を滅ぼさんとするならば、又列國の帝國主義を學ばんとするならば、歩むは同じき路であり、彼等の覆轍を踏むものでなくして何であらう。故に我等は先づ豫め一種の政策を決定して置かねばならぬ。弱きを濟ひ傾けるを扶くる、之こそ我民族の天職のすべてである。我等は弱小民族に對しては之を扶持し、世界の列強に對しては之に抵抗しなければならぬ。若し果して全國民の總てが志をこゝに立てたならば中國民族は始めて發達することが出来るであらう。若し然らずして志をこゝに立てなかつたならば、中國民族には前途何等の希望もないであらう。我等は發達せざる今日に於て、先づ傾けるを扶け弱きを濟ふの志願を立て、將來強盛となつたとき、今日我等の身に受くる列強の政治經濟的壓迫の苦痛を將來の弱小民族も亦之を受けなければならぬのであらうことに想到したならば、我等は之等帝國主義を消滅しなければならぬ。それでこそ始めて治國平天下である。

我等は將來よく國を治めて天下を平にせんとするならば、先づ民族主義と民族地位とを恢復し、固有の道徳を以て平和の基礎と爲し、世界を統一して一個の大國の治を成さねばならぬ。これ即ち我等四億人の大責任である。諸君は皆四億人の中の一人である。すべてこの責任を負担しなければならぬ。これ我等が民族の眞精神であらねばならぬ。

第二章 民權主義

第一講 總論

諸君、本日は民權主義の講義を開始したいと思ふ。民權主義とは如何なるものであらうか。順序として今民權と云ふ字の解釋を定めてかからねばならぬ。それには先づ民とは如何なるものであるかを知らねばならない。凡そ團體があれば之を組織する衆人がある。團體を組織する衆人即ち之を民と呼ぶ。次に權とは如何なるものであるか。權は即ち力であり威勢である。その力が國家同様の大きになつたとき呼んで權と言ふのである。力の最も大なる諸國家を、中國語では列強と云ひ、外國語では列權(The Powers)と言ふ。又機械の力を中國語では馬力と言ひ、外國語では馬權(Horse Power)と言ふ。故に權と力とは實際は同じものだ。命令を行使する力、群衆を制服する力を權と呼ぶ。民と權とを合せて言へば民權即ち人民の政治力である。何うして政治力と言ふのであらうか。我等にしてこの道理を明白ならしめんがためには、先づ政治の何たるかを明白にしなければならぬ。一般に政治と云ふものは、非常に奥妙にして艱深なもので普通のもの

には仲々難解なものと考へて居るものが多い。だから中國の軍人達は常に言ふ、我等は軍人である、政治は判らないと。何故彼等には政治が判らないのであらうか。即ち彼等が政治と言ふものを非常に奥妙にして難解なものと考へ、政治の非常に淺顯にして明瞭なることを知らないがためである。それも若し、軍人が政治に干渉しないと云ふのならば話は判かるが、政治が判らないは一向お話にならない。何故ならば、軍人は政治の原動力であつて、軍人たるものは當然政治が解らなければならず、政治の何たるか位は明白に知つて居なければならぬ筈だからだ。政治と云ふこの二字の意味は、淺言すれば政は即ち衆人の事、治は即ち管理である。衆人のことを管理すること、即ち政治である。衆人の事を管理する力が即ち政權である。人民を以て事を管理すること即ち民權と云ふ。

今民權の意義は既に明白になつた。そこで民權とは如何なる作用を爲すものかを研究しなければならぬ。偏く近世を觀、往古に遡つて權の作用を簡單に説明すれば、權は即ち人類の生存を維持する作用である。人類が生存せんがためには、最大の二大事が具はらねばならぬ。第一は保であり第二は養である。保と養との二大事は、人類が日々爲さねばならぬところのものである。保は即ち自衛である。その個人たると或は團體たると或は國家たるとを論ぜず、自衛の能力なくし

ては生存することは出来ない。養は即ち食を覚むることである。この自衛と食を覚むることとは人類の生存を維持すべき二大事である。併し乍ら、人類が生存を維持せねばならぬと同様他の動物も亦その生存を維持しなければならぬ。人類が自衛を必要とすれば、他の動物も亦自衛を必要とする。人類が食を覚めなければならぬと同様他の動物も亦食を覚めなければならぬ。故に人類の保養は動物の保養と衝突し、ここに競争を發生する。人類がこの競争の中にあつて、生存を求めんがためには、奮闘しなければならぬ。故に奮闘のこの一事は人類あつてこの方、二日として息まざるところのものである。之に依ても、權は、人類の奮闘のものであることが分かると思ふ。實に人類は、初生以來現在に至る迄日日これ奮闘の中にある。

人類の奮闘を數個の時期に分つことが出来る。第一期は大古洪荒歴史あらざる以前の時期である。その時期の長短は、現在でもよく分つて居ないが、近來地質學者が地殼に就て研究し人類の遺跡ある地殼を基礎として研究調査した結果に依れば、二百萬年に過ぎず、二百萬年以前の地殼には人類の遺跡は存在せずと云ふことになつて居る。普通人には幾百萬年も以前のことを言へば、甚だ渺茫として見常もつき兼ねる程であるが、近來地質學が非常に發達した結果、地質學者は地殼を幾多の層に分ち、一つの層が出来上る迄には何れ丈の年數がかかつて居るとか、何の層は最古の

地殻であるとか、何の層は近代の地殻とか云ふやうに地殻を區別して居る。我等が如何にも遠いことこのやうに考へて居る二百萬年前のことも、地質學者に依れば、一短時期に過ぎず、二百萬年前にも尙幾多の地殻があり、更に二百萬年以上より地殻構成前に至れば、別に調べる由もないが、普通には地殻の構成前は一種の流動體にしてその以前は一種の氣體であつたと云ふやうに説かれて居る。故に進化哲學の道理に照して云へば、地球は元來氣體であつて太陽とも一體であつた。始め太陽と氣體とは共に空中に在て一團の星雲を成して居たが、太陽が收縮するときになつて、幾多の氣體が分れ久しく時間の経過する間に凝結して液體となり、更に液體から固つて地殻を形成したのである。最古の地殻が出来てから幾千萬年になるか、現在地質學者が信すべき地殻に就いて研究した結果に依れば、二千有餘年とされて居る。故に彼等は地球が當初氣體から液體に變ずる迄に幾千萬年を要し、液體から地殻を構成する迄にも亦幾千萬年を要し、最古の地殻から今日に至る迄少くとも二千萬年を経過せるものと推察して居る。二千萬年前には文學の歴史がなかつたがために、我等は之を非常に久遠のことのやうに考へて居るが、地質學者にとつてはそんなに古いことでもない。

余が語りつつある之等地質學と我等の今日の演題とは如何なる關係があつたのか。地球の來源

を説けば、之に依り我等は人類の來源を推究することが出来ると思つたからである。地質學者は研究の結果、人類の初生は二百萬年以内であるとした。その後今を距る二十萬年前始めて文化が生れたのである。當時人は禽獸と何等大した區別はなかつたものである。故に哲學者等は、人は動物より進化したもので偶然出來たものではないと云ふて居る。かくて二十萬年來、人類萬物は漸次進化し、始めて今日の世界を形成するに至つた。然らば現在の世界とは如何なる世界であらうか。即ち民權の世界である。

民權は二千年前希臘羅馬時代に萌芽した。がその確立して搖がざるに至れるは、僅に一百五十年來のことに屬する。それ以前は君權時代で、君權以前は神權時代であつた。而して神權の前は即ち洪荒時代であつて人獸鬪争の時代であつた。當時に於ては、人類も生存を圖らねばならず、獸類も亦生存を圖らねばならなかつた。人類が生存を保全する方法の一は、食を覓むることであり他は自衛である。大古時代に於ては、人間は獸を食ひ獸も亦人間を食つて互に相競争して居たものである。到る處すべて毒蛇猛獸、人類の周圍はすべて禍害であつた。故に人類にして生存を圖らんとせば何うしても奮闘せねばならなかつた。去り乍ら當時の奮闘は人獸鬪る處に混亂するの奮闘であつて、大團體を結合するに至らず、所謂各々自らの爲めに戦つたのである。人類の發生地

方に就いて見るに、數個地方に過ぎないと云ふものがある。けれども又地質學者のやうに、人類發生以來世界で人の住んで居なかつたところはない、何故ならば、何處を掘つても人類の遺跡を發見するからであると言くものもある。人獸の競争に至つては今尙完全に消滅して居ない。若しも南洋未開の地に至らんか、人獸の鬪は今猶發見することが出来るであらう。又我等にして荒寥たる山野の外、人煙絶えたる土地に至らんか、太古時代に於ける人獸の狀態が如何様であつたかが判るであらう。斯の如く我等が古代のことを推測し得る所以は、古代の痕跡が遺存して居るからのごとで、若しも古跡にして遺存せずんば、我等は古代の事を知る術もないであらう。

普通古代のことを研究するには書を読み歴史を看る。ところが歴史は文字を用ひて記載せられたるものなるが故に、人類の文化は、文學發生後でなければ歴史に就いて尋ねることが出来ない。文學の歴史は中國に於ても今に至る迄僅に五六千年に過ぎず、埃及でさへ一萬餘年に過ぎない。凡そ世界に於ける萬事萬物を攻究する方法としては、中國では専ら讀書に依て居るが、外國人は單に讀書のみによらず、彼等は小中學の間だけは讀書に依り大學に進めば讀書の外實地に就いて攻察する。専ら書物上の歴史のみを見ずして、地殻を見、禽獸を見、又各地方の野蠻人の狀態を見やうとする。即ち彼等は斯くしてこそ祖先が如何なる社會狀態に在りしやを推知することが

出来るのであつて、例へば「アフリカ」大陸及南洋群島の野蠻人を觀察すれば、未開化の人間の生活状態が如何なるものが判ると云つたやうなものだ。故に近來の大科學者は萬事萬物を考察するには書物のみに依らない。彼等の著書の如きは彼等の研究して會得したところに依り人類の記録に貢獻せんとするものに過ぎない。彼等の攻察の方法に二種ある、一は觀察を用ふるもの即ち科學である。他は判斷を用ふるもの即ち哲學である。人類進化の道理はすべてこの二つの學問から得られたのである。従前人と獸とが闘ふにはただ個人の體力を以てしたが、その頃でも同類相助けると云ふことはあつた。例へば、此處に幾十人の人間と幾十の猛獸とが闘つて居るとする、又別な處でも亦幾十の人間と幾十の猛獸とが闘つて居るとする。この場合、兩地の人類は互に同類であつて猛獸と異なるを見るや、互に同類相集合して同類ならざるものと闘争したものである。そして決して同類ならざる動物と一緒にあつて、人間を食ひ同類を害するやうなことはなかつたものである。當時同類の集合するや、約せずして同じ毒蛇猛獸と戦つたものである。この種の集合は天然であつて人為ではない。毒蛇猛獸を完全にやつつけて了へばもと通りばらになつて了つたものであつた。當時はまだ民権が發生して居なかつたので、人類は毒蛇猛獸と戦ふには各人各その氣力を用ひたのであつて、その権力を用ひた譯ではなかつた故にその時代は人と獸と争

ふには氣力を用ひた時代である。

その後毒蛇猛獸は殆んど人類に完全に征服せられ、人類の環境も稍よくなり、住むところの土地も人類の生存に好適となり、人群は一ヶ所に集り住むやうになり禽獸を飼養して人類の使用に供することとなつた。故に人類が毒蛇猛獸を殺して仕つてからは牧畜時代となる。これ亦人類文化の初生時代でもある。當時の人類は現在尙牧畜時代にある蒙古又亞細亞大陸西南の「アラビア」人争と殆ど同様の生活をしてゐたものである。この時代になつて人類の生活状態に一大變動が起つた。即ち人類の闘争が終熄したが故に、文化が始めて生れたのである。この時代を太古時代と言ふことが出来やう。この時代に至り、人類は何物に向つて奮闘したか。人類は天然の物力と闘つたのである。簡言すれば、世界の進化は第一期はと人類と争ひその用ふるところは氣力であつて人々が同心協力して毒蛇猛獸を完全に征服した時期であり、第二期は人と天と争つた時代である。人類闘争の時代には何時毒蛇猛獸が來犯するやも測られざりしたため、人類は時々刻々の生死さへも測られなかつた。當時人類の自衛力と云へば、兩手兩足がその全部であつた。唯その頃でも人類は獸に比べて幾分聰明であつたがため、獸と闘ふには兩手兩足のみを以てせず、棍棒や石などを用ふることを知つて居たので、最後の結果は人類の勝利に歸し、獸類を殺滅し盡し、始めて人類の

生命は一日一日と計算することが出来るやうになつた。かの人獸鬭争の時期には人類の安全は、殆ど一時一刻と雖も保つことが出来なかつたものである。

人類の禍害が失くなつてから人類は逐次蕃盛し始め、人類の棲息に好適な土地には人口が充満した。當時如何なる地方が人類棲息の好適地であつたか。風雨を避け得る地方が好適地と言はれたもので、即ち風雨到らざる地方とは埃及の「ニール」河の兩岸及び亞細亞大陸の「メソポタミア」地方の如き地方であつて、土地極めて肥沃に四時殆ど降雨がなかつた。「ニール」の河水は年一度宛氾溢し、その減水後は河水の齎せる肥泥が兩岸一帯の土地に撒布せられ、植物の生長を容易ならしめ、多量の米穀を産したものである。斯様な好適の地はただ「ニール」河及び「メソポタミア」地方のみに限られて居た。普通「ニール」河及び「メソポタミア」を世界文化の發祥地であると云ふ。この兩岸は土地肥沃にして常年風雨なく、耕作播種に適し又牧畜も行はれ、河中に棲息する水族動物も亦頗る豊富なりしを以て、人類の生活は極めて容易にして、心力を勞せずして優遊日を送るを得、子子孫孫の蕃盛も容易であつた。人類は蕃殖が盛んになつてからは、それ等地方だけでは住み切れなくなり、即ち「ニール」河「メソポタミア」以外の土地で多少不適な地方も亦移り住まねばならなくなつた。不適な地方には風雨と云ふ天災があつて、恰度黃河流域にも比すべき

ところである。

黃河流域は中國古代文化の發源地ではあるが、一面風雨の天災あり、又他面氣候寒冷にして、元來文化等の發生しさうにもない所である。然るに中國の古代文化は、何うして黃河流域に發生したものであるか。黃河兩岸の人類は何れも他地方から移住して來たもので、彼等に依つて中國古代文化は發生したのである。例へば「メソポタミア」の文化は中國より早きこと一萬餘年であるが、中國の三皇五帝以前黃河流域に移住し中國の文明を發生せるものの如き之れである。彼等はこの地方に在て、毒蛇猛獸を完全に驅逐してからも、天災があり、風雨の禍患を受けねばならなかつた。人類が天災に遇ふとき、その災害を免がれんが爲には天と争はねばならなかつた。風雨を避けんが爲には家屋を造らねばならなかつた。寒冷を禦がんが爲には衣服を作らねばならなかつた。かくて人類は家屋を建て衣服を作ることが出来るやうになつた。即ち進化して著しく文明となつたのである。然し乍ら天災は豫測し難く、之が防備も仲々容易なことではない。時あつては一陣の大風は家屋を推倒し、大水は家屋を掩没し、大火は家屋を燒滅し、大雷は家屋を打壞する。この四種の水火風雷の災害に對しては古人は全然その妙を明かにせず、且つ古人の家屋は何れも草木を以て造られ、到底水火風雷の天災に對し抵抗し得べくもなく、従て古人はこの四天災に

對しては之を豫防すべき方法もなかつたものである。人獸鬪争時代に於ては人類は尙ほ氣力を以て鬪ふことが出来たが、人天鬪争時代に至つては専ら鬪のみを以てしては之に打克つことは出来なかつたので、當時の人類は非常な困難を覺えたものであつた。その後聰明な人が現はれて人民に代つて幸福を謀つた。大禹の治水の如き、人民に代つて水患を除去し、巢氏は民に樹上に居室を造營することを教へ人民に代つて風雨の災害を避けんことを謀つたのである。之より以後、文化は漸く發達し人民も亦逐次團結するに至つた。

又當時は地廣く人稀少なりしたため食を覓むることは非常に容易であつた。そして當時唯一の彼等の問題と云へば天災であつた。故に彼等は天と争はねばならなかつたのである。けれども天と争ふには獸と争ふに汽力を以てするの比ではない、ここに於てか神權は發生した。極めて聰明なる人は神道を提唱し人民を教育し祈禱の方法に依つて禍を避け福を求めしめんとした。彼の祈禱の工夫は當時有效であつたかは無効であつたか判らない。けれども既に天と争ふ以上、萬策盡きたときには神權を用ひざるを得なかつた。一個の非常に聰明なる人を、恰も「アフリカ」に於ける野蠻人の酋長の如く、これを推戴して首領としなければならなかつたのである。彼の職務は専ら祈禱することであつた。又中國の蒙古及び西藏の如きも何れも活佛を奏じて皇帝となし神を以

て人民を治めて居る。故に古人は國の大事は祀と戎にありと云ひ、又國家の第一は祈禱第二は戰爭である云つたのである。

中華民國成立後十三年になる。皇帝を傾覆したので現在では君權はない。日本は現に尙君權的國家にして尙神を拜して居る、故に日本皇帝を彼等は天皇と稱する。我等も亦従前中國皇帝を天子と稱したものである。この時代に於ては、發達後既に年久しい君權ではあるが、尙神權から脱離することは出来なかつた。日本の皇帝は幾百年前一時政權を武人に委ねられたが、六十年前明治維新に依り徳川を打倒し王政復古を見た。故に日本では今尙君權と神權とを併用して居る。従前の羅馬皇帝も亦一國の教主であつた。羅馬滅亡後皇帝の地位は傾覆せられ政權も亦奪去せられたが、教權のみは依然保存せられ、教主として今尙各國人民の尊奉するところである。これは恰も中國の春秋時代に列國が周を尊奉したのと同様な譯だ。斯の如く人類は、人獸鬪争時代を經過した後も天災があり、天と争はねばならず、そこで神權の發生を見るに至つたものである。

有史以來現在に至り神權時代を經過した後は君權は發生した。そこで有力な武人及大政治家は教主皇帝の權力を奪ひ、或は自立して教主となり、或は自稱して皇帝となつた。此處に於て人天鬪争時代は變じて人と人との争となつたのである。人と人と相争ふに至つては、單に宗教的信仰

の力のみには依ては、人類社會を維持する能はず、人と競争するに足らず、政治を修明し武力を強盛にするに非ずんば他人と競争し得ざることを覺つたのである。有史以來世界は、すべて泣れ人と人との争である。従前人と人との争には一半は神權を用ひ一半は君權を用ひたものであるが、その後神權漸次減少し、殊に羅馬分裂後は、神權漸く衰へ君權漸く隆盛に起き、法王「ルイ」十四世に至つて極盛時代に達した。彼は皇帝と國家とは別なものではない、我は皇帝である、故に國家であると説いた。彼は國家の凡ゆる權を悉く自己の手中に收め、その專制は恰も秦の始皇同様、その極點に達したのであつた。君主の專制が日一日と激しくなるに連れ、人民は之を忍受することが出来なくなつた。この時代に至り科學も亦日一日と發達し、人類の智識も日一日と進歩した。ここに於て人民は覺醒せざるを得ない。彼等は君主と言ふものは大權を總攬し國家と人民とを彼一個人の私有物とし彼一人の快樂の用に供し、人民の受くる苦痛には一向無關心なることを知つた。人民が忍従し能はざるに至れるとき、彼等が日一日と覺醒し、君主の專制は無道である、人民は之に反抗せねばならぬ、反抗は即ち革命であると覺つたのは蓋し當然でなければならぬ。故に百餘年來革命的思潮は著しく發達し民權的革命が發生したのである。民權革命とは抑も誰が誰と争ふのであるか。それはとりもなほさず人民が皇帝と相争ふのである。

我等は民權の來源を推究して、之を幾つかの時代に分かつことが出来ると思ふ。即ち再び概括的に言へば、第一期は人と獸と争ひ權を用ひず氣力を用ひた時期である。第二期は人と天と争ひ神權を用ひた時期である。第三期は人と人と争ひ、國と國どが争ひ、民族と民族どが争ひ、君權を用ひた時機である。その後現在に至る迄が第四期で、國內相争ひ人民と君主と相争ふの時期である。これは又、善人と惡人と争ひ公理と強權と争ふ時代と言ふことも出来やう。この時代になつて民權は漸次發達した。故に之を民權時代と呼ぶ。この時代は餘り古いことではない。この極めて新しい時代に到つて舊時代の君權を推倒した。

君權の推倒は果して是か非か。従前人類の智識未だ開けざるの時代に於ては、聖君賢相に依て指導せられ、君權は非常に有用なものであつた。君權發生前は、聖人が神道を以て人民を教化し社會を維持した。當時に於ては神權も亦非常に有用なものであつたに違ひない。現在では神權君權共に過去の遺物である。民權時代に至つて、君權に反對し必ず民權に依らざるべからずとは、果して如何なる道理に因るものであるか。それは、近來文明の進歩著しく、人類の智識亦顯著となり、新に自己意識に眼覺めたからであつて、恰も我等が幼年時代には父母に手を提いて貰はねばならぬのが、成人して一人前の生計を立てるときになれば、何時迄でも父母に頼つて居る譯には

行かず必ず自ら獨立しなくてはならないのと同様な譯である。尤も現に尙多數の學者は君權を擁護し民權を排斥せんとし、日本等には殊にこの種の學者が多く、歐米にも亦この種學者がある。中國の多くの舊學者も亦同様で、從て一般の老官僚は今猶復辟を主張し帝國を恢復せんとして居るのだ。全國の學者の中には、君權を主張するものであり、民權を主張するものもあつて、今尙ほ政體を決定することが出来ないと言ふのが中國の現状である。我等は民權政治を主張するものである。この主張を貫徹せんが爲には、世界各國の民權の情形を明かに考察することが必要である。

二十萬年前から一萬數千年前に至る迄神權が用ひられ、よくその時代の潮流に適應して來た。例へば若し現在の西藏に突然君主を立てやうとしたならば何うであらう。人民は必ず反對するであらう。何故なれば、彼等は教主を崇信し活佛を擁戴し活佛の權威を尊仰して活佛の命令に服従するを無上の光榮として居るからだ。歐洲幾千年前の情形も亦その通りであつた。中國文化は遙かに歐洲に先んじ、歐洲の神權時代既に中國に於ては君權時代であつた。故に中國は餘程古くから君權時代であり、民權と言ふ名の傳つたのは未だ近代のことに屬する。諸君は今余の革命に賛成する以上、民權を主張するのは當然である。一般の老官僚は復辟して皇帝を擁立せんとする

ものであるから民権に反對して君權を主張するのも蓋し當然である。然らば君權と民権とは果して何れが現在の中國に適應するのであるか。この問題は頗る研究に値する。根本から論じて來れば、君權と言ひ民権と言ふも、共に之れ政治を管理し衆人の爲めに事を辨せんとするものに他ならず、ただその間各時代の政治的環境を異にするため用ひらるる方法も亦各異なるものありしと言ふに過ぎなう。

故に結局の處問題は、中國の現在に民権を用ふることが果して適當であるや否やの點にある。中國人民の程度は非常に低く民権には適しないと云ふものがある。米國の如きは元來民權國であつたが、袁世凱の皇帝たらんとするとき「グッドノウ」なる一大學教授は中國に來つて君權を主張して、中國人民の思想未だ發達せず文化亦歐米に及ばない、故に民権を用ふるは不適當であると説いた。袁世凱は彼のこの種言論を利用して民國を打倒し自ら皇帝と稱したのである。今我等は民権を主張せんとする。之が爲め是非とも民権と言ふものを充分に理解して置かねばならぬ。有史以來中國は民権を實行したことはなく、民國十三年來亦之を實行したこともない。我等四千年來の歴史はその間治もあり亂もあつたが、一様に君權を用ひて來たものである。然らば結局、君權は中國に對して有利であつたか或は有害であつたであらうか。中國の受けた君權の影響は利害

相半ばしたと云ふことが出来やう。けれども中國人の聰明才智に基いて考ふるならば、若しも民権を應用して居たならば、更に一段と適切なるものがあつたであらうと思はれる。故に二千餘年前孔子孟子は民権を主張したのである。孔子曰く「大道之行也天下爲公」と。即ち民権的大同世界を主張したのだ。又彼は口を開けば必ず堯舜を稱へた。即ち堯舜は家天下にあらず、名は君権たりしも、その實民権政治を行つたがため、孔子は常に彼等を崇仰して己まなかつたのである。孟子曰く「民爲貴、社稷次之、君爲輕」と。又曰く「天視自我民視、天聽自我民聽」と。文曰く「聞誅一夫紂矣、未聞弑吾也」と。彼は當時既に君必ずしも必要ならず、君主の必ず長久たり得ざることを知つて居たのである。故に彼は民の爲めに福を造るもの、即ち聖君なりと稱し、それ等暴虐無道のを一夫となし人民の之に反抗するも亦怪むに足らずとしたのである。斯の如く中國人の民権に對する見解は二千餘年前早くも定められて居たのであつて、當時に於ては尙ほ實現し難きものと思惟せられて居たのに過ぎないのである。恰も外國人の所謂「ユートピア」が理想上の天國であつて即時に實現出来ないものであると同様に。

外國人の中國人に對する印象は、「アフリカ」南洋等の野蠻人に對すると同様である。從て中國人が外國人と語り、談民権のことに及べば、彼等は極力反對する。そして中國はまだまだ歐米と

共に民権を語るに足らずとして居る。之等誤れる見解は、すべて外國の學者が中國の歴史及國情を考察せず、事實民権が中國に適するか何うかに就いて充分知らないのに基因する。又中國の歐米留學生も、外國人と共に中國に民権の適せざるを説いて居るが、この種見解は錯誤も甚しと言はなければならぬ。余の所見に依れば、中國の進化は歐米のそれに優り、民権論の如きも既に幾千年の昔行はれたるものにして、ただ當時之を言論に見、事實として現はれなかつただけのことである。今歐米諸國は既に民権を建設した。そして民権を實現してここに二百五十年になる。中國の古人にも亦この種思想はあつたのである。故に我等にして國家の長治久安と人民の安樂とを希望するならば、世界の潮流に順應して民権を用ふるに非ずんば不可である。去り乍ら民権はその發生後日猶淺く世界の各國は今も君権を用ひて居るものが多い。又民権を實行して中途挫折した國もある。失敗した國も多い。中國に民権論が發生して既に二千餘年になる。ところが歐米は民権を恢復したのは僅々一百五十年前のことに過ぎず、現在に至つて一時に流行するに至つたのである。

近代事實上の民権が、始めて發生したのは英國である。英國に民権革命の發生した時期は、正に中國の明末清朝に相當する。當時革命黨の首領は「クロムウエル」で、英國皇帝「チャールス」一世を殺したものである。本革命の發生は、一般歐米人に異常の驚動を與へ、有史以來未曾有の

出來事とし謀反叛逆同様に取扱はれたものであつた。勿論それ迄も暗闇裡に君主を弑することは敢て珍しくもなかつたが、「クロムウエル」が「チャールズ」二世を殺したのは暗殺ではなかつた。即ち彼を法廷に引出して公開裁判を爲し、彼の國家及び人民に不忠なる所以の罪狀を宣布し、然る後之を理由として殺したのであつた。斯様な状態であつたが爲當時歐洲に於ては英國人は當然民權に賛成すべきものとなし、之より民權も發達の途に就くべしと考へられて居た。ところが焉んぞ知らん、英國人民は依然君權を歡迎して民權を歡迎せず、「チャールズ」二世は死んだが、人民は猶も君主を思慕して居たものである。果して十年ならずして英國には復辟起り、「チャールズ」二世を迎へて皇帝としたのであつた。その頃は恰度、滿清入關すれど明朝未だ滅びずと言つたときで、今を距る二百餘年に過ぎない。故に二百餘年以前英國に發生した第一次民權政治は、久しからずして消滅し、君權は依然隆盛を極めた。爾後一百年來國に革命起り、英國から脱離し、獨立して米國聯邦政府を建設し、現在に至る迄凡そ一百五十年である。これ世界に於ける最初の民權實行の國家である。米國の共和建立後十年ならずして佛蘭西革命を惹き起した。佛國革命勃發前の情形を見るに、當時「ルイ」十四世政權を總攬し專制を極め人民の苦痛堪え難きものあり、次で彼の子孫の皇位を繼承するや、更に暴虐無道を極めたがため、人民は遂に忍ばんとするも忍ぶ能はざる

に至つた。ここに於て革命は發生し、「ルイ」十六世は殺された。佛國人の「ルイ」十六世を殺したのも、英國人が「チャールズ」一世を殺したときと同様、彼を法廷に引出し審判を公開し彼が國家及び人民に不忠なる罪狀を宣布したものであつた。佛國皇帝が殺された後、歐洲各國は彼のために復仇せんとし、大戰十餘年に亘つた。従て當時の革命は先づ失敗と言はねばならぬ。そして帝制は再び恢復せられたのである。併し乍ら、佛國人民の民權思想は、之より更に發達を極めたものである。

民權史を繕いたものは誰しも知つてゐる通り、佛國に「ルッソー」と云ふ一學者がある。「ルッソー」は歐洲に於て極端なる民權を主張した人で、彼の民權思想に基いて佛蘭西革命は發生したのである。「ルッソー」の一生に於ける民權思想に關する最も緊要なる著書は民約論であらう。民約論の立論の根據は、人民の權利は生れながらにして自由平等である、人にはすべて天賦の權利がある、ただ人民が從來その天賦の權利を放棄した迄のことであると云ふにある。故にこの言論に依れば、民權は天が生み出したものなりと云ふことが出来る譯だ。併し乍ら歴史上の進化の道理に就いて言へば、民權は天の生み出したものではなく、時勢と潮流とに依て造成せられたものだ。従て進化の歴史には、「ルッソー」所説の如き民權の事實は全然なく、即ち「ルッソー」の言論に

は根據がないと言へる。であるから民權反對の人々は、「ルッソー」を以て無根據な話の種にする。去り乍ら、我等が民權の主張は、必ずしも先づ言論を以て主張するを要しない。何故なれば、宇宙間の道理はすべて先づ事實在つて然る後言論を發生し、決して言論あつて後初めて事實が發生する譯ではないからだ。

例へば陸軍の戰術學にしたところで、現在では既に系統ある學問となつては居るが、この學問の成立ちを研究するに、果して最初から學理があつたものであるか、それとも先づ事實が存在して居たものであるか。現在の軍人は、皆學校に入つて戰術學を研究し成業の隣國家の爲めに戰鬥するので云ふ。この種の考へ方から行けば、當然言論あつて然る後事實ありと云はねばならぬ。けれども世界の進化の情況から云へば、最初人と獸と闘ふこと百幾萬年、然る後これ等毒蛇猛獸は纔に消滅したのであるが、その頃人と獸と闘ふに當り、果して戰術はなかつたものであらうか。當時或は戰術があつたかも知れぬ、たゞ文字にて記載せられなかつたため取調べる方法がないだけのことではなからうか。その後人と人とが相争ひ國と國とが相争ふに至つて二萬餘年になる。その間又多少の戰爭を経過しなかつたであらうか。歴史に記載せられる爲、これ亦後世に於ては知る由もない。中國の歴史に就いて考究するに、二千餘年前の兵書十三篇がある。十三篇の兵書は

即ち當時の戰術を解釋したものに他ならぬ。その十三篇の兵書から中國の軍事哲學は成立した。故に、その十三篇の兵書に照せば、先づ戰術的事實があつて然る後始めてその兵書が出来たものであると云はずばなるまい。即ち今日の戰術も亦古人の戰術の事實に基き漸次進歩して來たものであらねばならぬ。最近無煙銃の發明後我等の戰術に非常な大變化を齎した。従前の戰術に於ては、兵士は敵影を認めても、尙且つ隊伍を組んで堂々前進したものである。ところが近來の戰術では、敵を見れば即座に伏せをして鐵砲を打つ。つまり之は無煙銃のあるがために我等は伏せをするのではあるまいか。これ即ち先づ事實があつて然る後始めて書物ありと言ふものではなからうか。それとも猶書物あつて然る後始めて事實ありと言ふのであらうか。従前外國にこの戰術が始めて行はれたのは、南「アフリカ」の英「ボ」戦争である。當時英國兵は「ボ」人と戦ふにも亦隊伍堂々と應戦したものであつたが、「ボ」人は地に伏せて戦つたため英國兵は莫大な損失を蒙むつた。即ち伏地戰術は「ボ」人から起つたものである。「ボ」人はもと和蘭から「アフリカ」大陸へ移住したもので、當時の人口は僅か三十萬に過ぎず、何時も土着の土人と戦つて來たものである。最初「ボ」人が「アフリカ」大陸に到着したとき土人と戦つたが、土人は何れも伏せをして戦つたため、「ボ」人は少なからざる損害を受けた。即ち彼等は土人から伏地戰術を習

つたことになる。後それを覚えて了つてから英人と戦つた。英人の損害の少からざりしは蓋し當然であらう。故に英人は「ポリア」人から伏地戦術を習つたことになる。その後英國兵は本國に歸還して之を全國に轉教し、更に英國は之を全世界に傳へた。故に現在各國に於ける戦術學にはすべて之を採用してゐる。これに依つても先づ事實あつて然る後始めて言論が發生するのであつて、言論あつて後事實が發生するものではないことが判かるであらう。

「ルッソー」の民約論所説の、民權は天賦なりとの主張は、本來歴史上の進化の道理と相衝突する。故に民權反對の人々は、彼のこの種根據なき言論を捉へ來つて口實とし、「ルッソー」の所謂民權天賦説は元來不合理であると云ふ。併しながら彼に反對する人々が、彼のあの根據なき一旬の言論を以て、直に民權に反對するそのことも亦不合理である。我等は宇宙間の道理を研究せんとすれば、須く先づ事實に據らなければならぬ。専ら學者の言論のみに據るは不可である。「ルッソー」の言論は既に根據がない。然も何うして當時の各國が尙それを歡迎せんとしたのであらうか。又何が故に「ルッソー」はあの様な言論を發表することが出来たのであるか。彼は當時既に民權の潮流が湧き上りつつあるを看取した。故に彼は民權を主張したのである。彼の民權の主張は恰度當時の人民の心理にピタリと適合したので、人民は彼を歡迎したので。彼の言論は歴

史進化の道理と衝突しては居たが、當時の政治状態には既に彼の所説を歓迎するやうな事實があつたのである。その種事實があつたが爲に、引證の誤つた彼の言論も尙一般の歓迎するところとなつたのである。「ルッソー」の提唱した民権の始意に至つては更に政治上千古に傳ふべき大功勞たるを失はぬ。

世界有史以來政治上に用ひられた權は、各代時勢の潮流を夫々異にして居たため、各その間の區別を然るべく明かにして置かねばならぬ。例へば神權時代に於ては、神權を用ふるに非ずんば不可であり、君權時代に於ては、君權を用ふるに非ずんば不可であつたと云ふやうに。中國の君權は秦の始皇帝のときに至つて殆どその發達の極點に達した。然し乍らその後の君主も尙も彼を學ばんとした。即ち當時の人民は君權の大小に論なく君權でさへあれば依然衷心之を歓迎したものであつた。現在世界の潮流は民權時代に到達した。我等は將に速に之を研究しなければならぬ。そして前人の發表せる民權に関する言論は、例へば「ルッソー」の民約論の如く稍不合理な點があるからと云つて、民權のいいところ迄も反對してはいけない。又英國が「クロムウエル」の革命後復辟があり、佛蘭西革命が延長したからとて民權の實行は不能であると考へることも亦宜しくない。佛蘭西革命は八十年を經過して漸く成功し、米國革命は僅か八年ならずして大成功し

たではないか。ただ英國の革命は二百餘年を経過した今日尙依然として皇帝を戴いてゐるが之は例外だ。斯うした例外はあるが、種々の方面から觀察すれば、世界は大體に於て日一日と進歩して居る。我等は現在の潮流が既に民権時代に達して居り、將來如何やうに挫折し如何に失敗することがあつても、民権は世界に永く維持し得るものなることを信ずる。

故に三十年前、我等革命黨同志は、この決心を固め、中國を強盛ならしめ革命を實行せんとせば、即ち民権を提唱するに非ずんば不可なりと提唱したのである。併し乍ら、當時この主張を露表するや、多數中國人の反對のみならず、外國人の非常な反對を受けたものである。中國革命勃發當時、世界には猶ほ勢力の強大なる專制君主が存在し、君權教權を一身に統べて居たもので、露國皇帝の如き之であり、次に非常に強力なる陸海軍を一身に統轄して居たものに獨國奧國の皇帝があつた。當時世人は、歐洲に斯くも盛大なる君權の存在する今日、何うして亞細亞に民権を實行するなど云ふ事が出来やうかと考へて居たものである。袁世凱の皇帝、張勳の復辟等が容易に行はれた所以も此處にある。然し乍ら、當時最も有力なりし露獨兩國の皇帝は今や覆滅せられて在らず、露獨兩國共に共和國と變つて了つた。之を以ても世界の潮流が事實上民権時代に入つて居ることが判かるであらう。従前中國人は、民権に反對し、常に我等革命黨には果して如何

なる力があつて滿清皇帝を倒覆することが出来るであらうか等と問ねて居たものであつた。ところが辛亥の年の一撃で忽ち滿清皇帝は轉覆して終つた。これ世界の潮流の效果でなくて何んであらう。實に世界の潮流の趨勢は、恰も長江黄河の水流にも比すべく、水流の向ふところ、或は許多の曲折があり、北に向つて流るときあり或は南に向つて流るときもあるが、流れて最後に至れば必ず東に向ふが如く、如何様にも之を阻止することが出来ないのである。故に世界の潮流は神權より流れて君權に到り君權より流れて民權に到ると云ふやうに、流れ流れて現在の民權に至つたのであつて、之に反抗すべき方法はなかつたのである。若しもこの潮流に反抗したならば、假令袁世凱の如く絶大な力を持ち、又張勳の如く野蠻にして慍悍極まる軍隊を有し居たとしても、誰も彼も變ては失敗しなげばならない。現在の北方武人の專制は世界の潮流に反抗するものであり、我等南方の主張する民權は即ち世界の潮流に順應するものなるが故に、假令南方政府は力量薄弱、軍隊の訓練及び兵糧彈藥の補充等に於て、すべて北方に及ばないと云へ、潮流に順應する我等は、よしんば一時失敗することがあつても、將來必ずや成功するであらう。そして同時にその成功を永遠ならしむることが出来るであらう。之に反し世界の潮流に反抗し、すべて物事を逆に逆にと行つて行く北方は、今如何にその力が大であり、假令一時の僥倖に依り成功する様

なことがあつても、將來必ずや失敗に終るであらう。その上再び永遠に恢復を企圖し難きは想像に難くない。現に神權を供奉する蒙古でさへも、既に革命が起つて活佛を打倒し神權の失敗せる今日である。西藏の神權の如きも將來人民のために打倒せらるべきは必定である。蒙古西藏の活佛は即ち神權の最後のものであるが、時期一度到來せんか、如何やうに之を維持しやうとしても、久しくこれを保守することは出來ないであらう。現在歐洲の君權も漸次減少しつつある。例へば英國の如きは政黨に依て治められ皇帝自ら治めてゐる譯ではなく、從て皇帝を有する共和國と云ふことが出來やう。斯の如く世界の潮流は今や神權の存在を否定しつつあるのみか、君權も亦永遠の存在性を失ひつつあるのである。現在の民權時代は希臘羅馬の民權思想にその源を發して居るが、民權が復興してから今日迄僅かに一百五十年に過ぎない。然し乍ら將來の時期は長遠であり、必ず日一日と發達して已まないと恐るるものであらう。故に我等は一面世界の潮流に順應せんがため、他面國內の戰爭を短縮せんとして、中國革命に民權制度の採用を決定したのである。

古來大志あるものは多くは皇帝たらんことを想ふ。劉邦の如き秦皇の出御を見て曰く「大丈夫正に斯の如くなるべし」と。又項羽曰く「彼取つて代るべき也」と。斯様な野心家は代々絶えな

いのである。余が革命提唱の當初その來り賛成するものの中、十中殆んど六七人迄は、一種の皇
帝思想を持つて居たものである。けれども我等の革命主義は單に滿清を覆滅するものに非ず、同
時に共和を建設せんとするにありと宣傳した結果、それ等十中六七人のものも漸次感化せられ、
その皇帝思想は段々除去せられて行つた。が、やはりその中一人二人のものは、民國十三年にな
つても、尙皇帝たらんとする舊思想を棄てることが出来なかつたものだ。我等革命黨のものが相
互に殘殺し合つたのも之がために他ならない。我等革命黨は宣傳の當初に於て民權主義を標榜し
共和國を建設せんとした。そして共和國さへ建設すれば、皇帝を争ふがための戦争を免れ得るも
のと考へて居た。ところが惜しいことには、依然頑迷未開化の人があつて、之亦實際如何ともす
ることが出来なかつたのである。

従前の太平天國は即ち前車の鑑である。洪秀全は當初廣西に事を起し、湖南、湖北、江西、安
徽を席捲して南京に建都し、滿清の天下は大半彼の所有に歸した。けれども太平天國は何が故に
失敗に歸したか。その原因は幾つもある。その最大の原因を、或るものは外交に無理解なりしに歸
すると言ふ。即ち當時英國は大使波丁渣(Pottinger)を南京に派遣して洪秀全と條約を締結し太
平天國を承認し大清皇帝を承認せざらんとしたが、波丁渣の南京到着後、東王の楊秀清には會ふこ

とが出来たが、天王たる肝心の洪秀全に會ふことが出来なかつた。何故なれば、洪秀全に會はんが爲には叩頭の禮を執らねばならなかつたので、波丁渣は到頭會ふことを承知しなかつたのである。そこで彼は北京に赴き滿清政府と條約を締結した。その後彼は「ゴルドン」を派して兵を率ひて蘇州を攻撃した。そして洪秀全は之がために失敗した。故に人は彼の失敗は外交の無理解に基くものと云ふ。成程或は之も彼の失敗の一原因であつたかも知れない。又或るものは、洪秀全失敗の原因は彼が南京を得た後、勢に乗じて長驅直進して北京を衝かなかつたからであるとも云ふ。成程洪秀全の北伐をしなかつたことも亦彼の失敗の一原因であるには違ひない。けれども余の觀察に依れば、この二原因なるものは何れも非常に小さいものであつて、最大の原因は彼等一味のものが南京入城後互に皇帝を争ひ城を閉して自ら相殘殺し合つたことにあると思ふ。即ち第一は楊秀清と洪秀全との權力争奪である。洪秀全が既に皇帝たりしに拘らず楊秀清も亦皇帝とならうとしたのである。當初楊秀清は南京の基本軍隊たる六七萬の精兵を率ひて居たが、皇位争奪の内亂が発生したため、章昌輝は楊秀清を殺し彼の軍隊を討滅して了つた。ところが章昌輝も亦洪秀清を殺してからは急に専横となり又復洪秀全と權力争ひをするやうになつたので、後皆が奇つてたかつて章昌輝を滅して了つた。當時石達開は南京に内亂の發生したるを聞き、江西より念

き南京に至り、之が調停を試みんとしたが、後逆も物になりそうにもないのを見、又その上、人から自分が如何にも皇帝を狙つてでも居るやうに猜疑せられたので、到頭南京を逃げ出し軍隊を率ひて四川に入つたが、間もなく又清兵のために滅ぼされて了つた。斯様に當時洪秀全と楊秀清との皇帝爭奪が原因となつて、太平天國の洪秀全、楊秀清、韋昌輝及び石達開の四の基本軍隊は完全に消滅し、太平天國の勢力も之より大いに衰へたのである。太平天國の勢力衰弱の原因を推究して見れば、その根本は楊秀清が皇帝たらんとした一念にある。洪秀全は革命當時まだ民權主義のあることなんかは知らなかつたので、彼は起義の際五王を封じたのであつた。南京入城後楊秀清、韋昌輝の内亂に懲り懲りして二度と王を作るまいと考へたが、何分にもその後李秀成、陳玉成が屢々大功を樹てたこととて、勢ひ王に封じない譯に行かなくなり、而も洪秀全としては、彼等を王に封じて見たところで恐らくは餘り頼りにもなるまいと考へてゐたので、いつそやるならと云つたやうな譯で同時に又三四十の王を封じ、彼等の位號を相等しからしめ互に牽制せしめんとした。ところが却てその後は李秀成、陳玉成等と云ふ連中が各王を自由に引廻すことが出来ず、さつぱり押が利かなくなつて統一がとれず、結局洪秀全は之がために失敗したのである。故にこの失敗の原因は完全に皆が皇帝とならうとした點にあると言はねばならぬ。

陳炯明は一昨年廣州に於て叛旗を翻したが彼は何故かかる舉に出でたのであるか。一般に彼は兩廣に割據せんがためと言つたやうに考へられて居るが、その實仲々さうではない。陳炯明の謀叛前余は北伐を主張して彼に對し北伐の利害を剴切に説明したことがあるが、彼は頭から之に反對したものだ。後になつて余は彼が争はんとするのは兩廣である、或は余の北伐に依て彼の地盤を妨礙せらるることでも心配して居るのかも知れぬと考へたので、最後の一日余は物柔かではなつたが遠慮會釋なく露骨に彼に向つて、我等の北伐が若し成功したならば將來政府は武漢ではなく南京に移轉して必ず歸つて來ない積りだ、従て兩廣の地盤は貴公に付託する考へでゐる、斯様な譯であるから何うか折角我等を後援して貰ひたい、若し不幸にして北伐が失敗しても、我等には二度とおめおめ歸つて來る顔がないのだ、その時になつたならば貴公が何のやうな外交手段に依らうと、隨意に北方政府と妥協して兩廣の地盤を保存することも出來やうと言ふものだ、即ち貴公が北方に投降しやうと我等の關するところでもなく、又貴公の責任でもないのだと言つたものだ。そのとき彼には何か胸に言ひ難い一物があつたやうに見受けられたが、由之觀之彼の志は單に兩廣の地盤だけではなかつたらしい。その後北伐軍が贛州に進んだとき彼は叛旗を翻したのであつた。彼は如何なる原因で、その時分になつて謀叛を起したのであらうか、それは他でも

ない、彼が皇帝たらんがためには、先づ極端に皇帝と相容れない革命軍を滅ぼさねばならなかつたからである。革命軍を滅してこそ、彼は何等かの方法を講じてその基礎を造り皇帝となることが出来るからである。この外陳炯明が皇帝思想の持主であつたことを證明するに足る一事實がある。辛亥革命後彼は常に人に向つて、幼時彼は常に片手に太陽を抱き片手に月を抱く夢を見たものであると語つてゐたもので、彼の詩の中にも「日月抱持真少年」と言ふ一句があつて、自ら之に註して、この段は夢に見た故事を誌し週く人に示すとあり、又彼の名もこの夢から考へ付いたものである。諸君、彼の部下を見るがいい。葉舉、洪兆麟、楊坤如、陳炯光等の如き一人として革命黨であるものはなく、唯一の革命黨員であつた鄧鏗は夙の昔に彼のために殺されて了つたではないか。之を要するに陳炯明は皇帝にならんがために革命に附和したもので、従て皇帝にならうとする野心は今に至る迄失くならないのである。この外尙従前の皇帝志願者は數人は居た。民國になつて十三年彼等の心理は果して何んなであらうか。我等には今それを研究する時間がな

5。

余は今民権主義を説かんとしてゐる。だから諸君は民権とは究竟するに何う言ふ意味を持つて居るかを明白にしなければならぬ。若し果してこの意味を明白にすることが出来なかつたならば、

皇帝志願の心理は永遠に消滅することは出来ないであらう。諸君にして若し、皇帝たらんとするが如き心理があつたならば、一には同志が同志と戦はねばならず、二には本國人が更に本國人と戦はねばならぬ結果となり、全國は何時迄も相争ひ相戦つて人民の禍害はその止まるところがないであらう。余は従前この種禍害を免れんとするの見地から、革命を發起するに當つて民権を主張し共和國を建設すべく決心したのである。共和國家が成立したならば誰が皇帝となるのであるか。人民が皇帝となるのである。四億人全體を以て皇帝とするのである。斯様な方法を以てすれば皇帝志願者達の相争ふのを避けることが出来、従て中國の戰禍を減少することが出来るであらう。中國の歴史に就いて見るに、朝を代ふる毎に何れも戰爭があつた。例へば專制なる秦の始、皇帝は人民の悉く反對するところであつたが、その後陣涉、吳廣の義を起すや、各省皆之に響應した。これ本來民権の風潮である。劉邦、項羽が出現するに至つて、楚漢の争ひが發生した。劉邦と項羽とは何を争つたであらうか。彼等は皇帝を争つたのである。漢唐以來一朝と雖も皇帝を争はなかつたものとはなかつた。中國の歴史は常に一治一亂の歴史である。その亂るるに當つては、すべて皇帝を争ふ以外何物もなかつたのである。外國では嘗て、宗教のために戦ひ自由のために戦つたが、中國では幾千年來戦ふところはすべて皇帝と言ふ一個の問題であつた。我等革

命黨は將來戰爭を免れんとするの見地より、革命を起すに當り共和を主張して皇帝を不要とした。そして今共和は既に成立してゐる。然も尙ほ皇帝志願者は絶えない。即ち南方の陳炯明の如き、北方の曹錕の如き、何れも皇帝志願者である。又廣西の陸榮廷の如きも皇帝の志願者ではあるまいか。この外皇帝志願者は何れ程あるかも知れないのである。中國歴代政朝の姓を換ふるのとき兵權の大なるものは即ち皇帝を争ひ兵權の小なるものは王を争ひ侯を争つた。然も現在の一般軍人は敢て大なるものも王たらず小なるものも侯たらんと志すものはなくなつたが、これ等は歴史上競争の一進歩かも知れない。

第二講 民權と自由

民權と言ふこの名詞は、外國の學者は常に自由なる名詞と並稱する。故に外國の多くの書物又は言論の中では、一般に民權と自由とを並列してある。歐米で、この二百年來、その人民が奮闘するところ競争するところのものは、何物でもない、即ち自由の爲であつた。故に民權は之に依て發達した。佛蘭西革命の際、彼等革命の口號は自由平等博愛の三つであつた。恰も中國革命に民族民權民生の三主義を用ひてゐると同様に、之に依ても自由平等博愛は民權に根據するもので

あり、民権は又この三つに依つて初めて發達したものであると言ふことが出来ると思ふ。我等にして民権を説かんとするならば先づ自由平等博愛の三つに就いて語らなければならぬ。

近來革命思潮の東漸に伴ひ、この自由なる名詞も亦傳來した。新思潮を提唱する幾多の學者志士は非常に之を重要視し、自由を説くこと極めて詳細である。この種思潮は歐洲に於ては、二三百年前極めて重要な地位を占めて居た。歐洲二三百年來の戰爭は、殆どすべてが自由を争つたものであるが故に、歐米の學者は自由を極めて重要視し一般民衆も亦立派に自由の意義を理解して居たものである。然し乍ら中國では、近來この名詞が傳はつたものの、ただ一般の學者が曾て工夫し研究した結果、やつとのことで自由の如何なるものかが判つた位のもので、一般民衆に至つては、假令我等がそれ等の人々に對して自由を説いたところで、きつと判らないであらう。従て中國人は自由のこの二字に對しては實際全然理解がないと云つても多した間違ひはあるまい。この名詞が中國に傳つてから日尙ほ淺く、現在一般の新青年と留學生或は歐米の政治時務に關心しつあるものが日頃から耳に聽き書物の上で見たりしてゐるので多少判かる位のところ、之とても如何なるものが自由であるかと言ふその自由の妙に至つては、彼等は未だ充分明かにするところ迄行つてゐない。故に外國人は中國人を批評して、中國人の文明の程度は眞に世

い、思想も甚だ幼稚である、自由の智識が全然なく自由の名詞さえもないと云ふ。然し乍ら外國人は一面中國人を批評して自由の智識がないと云ふかと思へば、又一面に中國人は一片の散沙であると批評する。

外國人のこの二つの批評を見るに、一面中國人は一片の散沙であつて團體がないと云ひ、又他面に於て自由が判らないと言ふのであつて、この二つの批評は如何にも矛盾して居るかのやうに思はれる。何うして矛盾して居るのか。例へば外國人は中國人は、一片の散沙であると云ふが、つまり一片の散沙と云ふ意味は何のやうな意味であらうか。即ち個々に自由があり、人々に自由ある場合に、人々は自己の自由を極端に迄擴充することが出来る。だから一片の散沙を形成するのである。然らば一片の散沙とは何ぞや。假りに我等が一握りの砂を手を取つて見るとき、その多少の論なく、砂の一粒一粒は夫々常に活動して何等束縛せらるるところがない。これ即ち一片の散沙である。若しこの散沙に「セメント」を加ふれば石を結成する。一つの堅固な團體に變つて石となる。この團體は非常に堅固であつて散沙は自由を失ふ。であるから散沙と石とを比較すれば、本來石は散沙の結合して出来たものであることが直に分かる。けれども散沙は石の堅固な團體の中に在つては活動することが出来ず即ち自由を失ふのである。自由の解釋は簡言すれば、一個

の團體の中に在つてよく活動し來往意の如くなり得るもの即ち自由である。中國にはこの名詞がなかつたがため、皆その妙を明かにしなかつた。けれども我等にはこの自由に彷彿たる一個の國有名詞がある。即ち放蕩不羈と言ふ言葉である。既に放蕩不羈である以上、即ち散沙と同様で各個が非常に大きい自由を持つてゐる譯である。従て外國人が、中國人を批評して、一面に於て結合能力がないと言ふが、既に結合能力のない以上當然散沙であり非常に自由でなければならぬ。然るに中國人に結合能力がないと言ふ彼等は、又他面に於て中國人は自由が判らないと言ふ、即ち彼等は我等中國人が皆自由を有つて居ればこそ一片の散沙であるが、若し之が一個の堅固な團體を結成して居れば、一片の散沙と看破することが出来ないと言ふ點には一向お氣付きがないのだ。故に外國人が斯様に我等を批評する點は即ち自ら矛盾に陥つてゐるものに他ならぬ。

最近二百年來、外國では極力自由を争つたものであつた。だが結局、自由とはいいものであるか何うか。そして自由とはつまり如何なるものであるか。余の見るところに依れば、我中國の一般人には、ここ二百年來の外國人の所謂自由の爲めの戦ひなるものの妙は、大體に於て判つて居ないのではないかと思はれる。彼等外國人は、自由を争ふときに當り自由主義を鼓吹し、自由主義を以て神聖なるものと稱し、甚しきに至つては、自由を與へよ然らざれば死を與へよ等と云ふ言葉

が、自由を争ふときの口號となつて居たものである。中國の學者も外國人の學說を翻譯し、この言葉その儘を中國に持つて來て、且つ自由を擁護し非常なる決心を以て奮闘したもので、その當初の勇氣は殆ど従前の外國人のそれにも劣らなかつた。けれども、中國の一般民衆は、依然自由の何ものたるかを了解することが出来なかつたのである。諸君は自由と民權とは同時に發達したものであることを知らねばならぬ。故に今日民權を説くに當つては自由に就いて説かねばならないのだ。

我等は歐米に於て自由を争ふが爲に、何れだけの血が流されたか、何れだけの多くの生命が犠牲にせられたかを知らねばならぬ。余が前回に説いて置いた通り、現在世界は民權時代である。歐米に民權が發生してから既に一百餘年になる。民權は自由を争つて後始めて獲得せられたものである。最初歐米の人民が生命を犠牲にしたのは、本來自由を争ふが爲めであつた。そして自由を争得した結果始めて民權を獲得することが出来たのである。當時歐米の學者が自由を提唱して戦つたのは、恰度我等が民族民權民生の三主義を提唱するのと同じ理窟である。之に由つても歐米の人民の最初の戦は自由のためであり、自由を争得した後、學者が始めてこの結果を民權所謂「デモクラシー」と稱したものであることが判かるであらう。この「デモクラシー」と言ふ言葉は希臘の古い名詞であつて、然も歐米の民衆も亦現在ではこの名詞に對して左迄關心せず、政治上の

一術語として取扱はれて居るに過ぎず、之を自由の二字が、命懸けに取扱はれて居るのに比ぶれば雲泥の差である。民権は希臘、羅馬時代已にその端を發してゐる。當時の政體は貴族共和政體であつて、既にこの名詞は存在して居たのであるが、その後希臘羅馬の滅亡と共にこの名詞も自然忘れられて了つた。最近二百年來自由の爲戦争が行はるるに連れ、民権と言ふこの名詞も復活せられ、殊に最近數十年來民権を説くもの益々増加し、中國に迄も流行して、又民権を説くものが非常に澤山出來て來た。尤も歐洲二百年來の戦争は民権を争ふとは言はず自由を争ふと言つたものだ。自由の二字を言へば、歐洲人は誰でも容易に解かり、當時の歐洲國民が自由の名を聞いて容易に合點のついた有様は、恰度中國人が發財(金モウケ)と言ふ言葉を聽くと同様、一般の人々の心には非常に貴重なものと考えられて居たものである。今若し中國人に對し自由を争へと言つても彼等には何のことか頓と解からないであらう。従て附和することも願はないであらう。けれども若し、彼等に對し發財と言へば、それこそ大勢のものが隨いて來ようとするだらう。

當時歐洲に於ける戦争には、「自由を争ふ」といふ文句が標題にされて居た。そして彼等はこの名詞をよく了解して居たために、人民は自由のために奮闘し、自由のために犠牲を惜しまなかつたのだ。實際彼等は非常に自由を崇拜して居たのである。何が故に歐洲人民は、かくも自由を

歡迎したのであるか。現在の中國人民は、自由には無理解であり乍ら、發財と聞けば、何うしてそんなに歡迎するのであらうか。その間の幾多の道理は、之を詳細なる研究に俟つて、始めて明かにすることが出来るであらう。中國人が發財と言ふことを聽けば、直に非常な歡迎振りを示す理由は、中國が現在民窮財盡の時代にあるがため人民の受くる苦痛は貧窮であり、而も發財と言ふことは貧窮を救ふ唯一無二の良法があるからである。發財には何んないところがあるか。即ち發財すれば貧窮を救ふことが出来、貧窮さへ救はるれば苦痛は受けなくても済む。所謂救苦救難の特効がある。人民が貧窮の苦痛を受けつつあるときに、誰かが、彼等に對して發財して彼等の痛苦を解除するのだと言ひさへすれば、自然に彼等は隨いて來るであらうし、又當然生命懸けの奮闘もするに違ひない。

「アメリカ」は一二百年前自由のために戦つたが、當時「アメリカ」人民の自由を聽くことは、恰も現在の中國人が發財を聽くのと同様であつた。彼等は何が故に斯くも自由を歡迎せねばならなかつたか。當時歐洲に於ては君主專制が極度に發達してゐたからだ。當時歐洲文明は中國周末の列國同様であつた。中國の周末の頃は歐洲に於ける羅馬と同時代である。羅馬が歐洲を統一したのは恰度中國の周秦漢の時代である。羅馬は初時共和を建立したが後帝制に變じた。羅馬滅亡後

歐洲列國相對峙するに至れることは、中國の周朝亡びてより東周の列國となつたことと同様である。だから一般學者は、周朝滅亡後七雄長を争つたのを、羅馬の滅亡後列國に變成した情形と並べ論じて居る。羅馬が列國に分裂して封建制度は樹立せられた。當時大なるものは王、小なるものは侯と言ひ、最小なるものには伯子男迄あつて何れも專制を極めたものだ。その種封建政體は中國周朝の封建制度に比較して專制振りは更に激しかつたもので、歐洲人民が、その專制下に受けた苦痛は、今日我等の到底想像も及ばざるところ、之を中國歷朝の人民が受けたところの專制の苦痛に比べて、更に悲惨なものであつたに違ひない。この原因は、中國に於ては秦朝の時代直接人民に對するや、誹謗するものは罪一族に及び偶語するものは殺して屍を市中に曝らすと云つたやうな專制を極めたものであるが、遂に之がためその滅亡を促すこととなり、以後の歷朝の政治は、大體に於て人民に對しては寛大な態度を執り、人民は納税の外は殆ど官吏とは無關係であつたのに反し、歐洲に於ては、何事にも一々直接人民を拘束すると云つた專制振りであり、又その時間も長くその方法も年と共に嚴密なるものがあつて、實際その專制の進歩は中國に比べて餘程激しかつた。故に歐洲では二百年前、その様な極めて殘酷なる專制の苦痛を、恰度現に中國人が貧窮の苦痛を受けつつあると同様、受けたものである、人民は斯様な殘酷な專制を久しく受

けて深く不自由の苦痛を味つた。従つて彼等の生きるがための唯一の方法は、即ち奮闘して自由を争ひ、その苦痛を除去するにあつたのである。故に一度び人の自由を説くを聴くや、之を非常に歡迎したのも無理からぬ次第である。

中國古代の封建制度が破壊せられてからは、封建の淫威は一般人民に迄及ばなかつた。秦以後歴代皇帝の專制の目的は、第一は、彼等自らの皇位を保守し、永遠に家天下たらしめ、彼等子子孫孫をして萬世迄も安享ならしめんとするにあつた。故に人民の行動に對しては、これがため皇位を脅かさるときに及んで始めてその絶大の力を用ひて之を懲治した。故にこの場合或る一人のものが謀叛したときにはその九族までも誅戮せられたのである。斯様な嚴重な刑罰を以て人民の謀叛を禁止したその用意の存するところは、即ち專制皇帝が永遠に皇位を保守せんとするにあつた。之を逆に言へば、人民は皇位さへ侵犯しなければ、彼等が何んなことをしようとも何等皇帝の構ふところではなかつたのである。故に中國に於ては秦以後歴代皇帝は、ただただ皇位に許り氣を取られ、人民のことは一向お構ひなしで、人民の幸福なんて云ふことはてんで問題にせられなかつたものである。現在民國になつて十三年になるが、政體の混亂に禍せられ今以て建設の工夫がなく、人民と國家との關係も今以て理解せられてゐない。

我等は民國以前清朝の皇帝の專制が何んなであつたか、十三年以前人民と皇帝とは何んな關係にあつたかを回想して見やう。清朝時代には一省毎に上に督撫あり中間に府道あり下に州縣があつて、皇帝を輔佐して居たもので、人民と皇帝との關係は至つて少なかつた。唯一つの人民對皇帝の關係と言へば、納税であつた。田賦を納める以外政府とは全然無關係であつた。之が爲め、中國人民の政治思想は非常に薄弱であり人民は誰が來て皇帝にならうと無關心で、ただ田賦を納めさへすれば人民の責任は、これ終れりとしたものだ、又政府も政府で人民が租税を納めさへすれば彼等のことには一向お構ひなしと云つた按配であつた。ただ其間、人民は間接の苦痛を受けねばならなかつた。と云ふのは國家の衰弱のため、外國の政治經濟の壓迫を受けても之に抵抗する力がなく、結局民力財力とも兩つ乍ら窮り盡きて、人民は貧窮の苦痛を受けねばならなかつたからだ。この種苦痛は間接の苦痛であつて、直接のものではない、従て當時の人民の皇帝に對する怨恨はまだ少なかつた。

併し乍ら、歐洲の專制は、中國のそれとその趣を異にして居る。歐洲は羅馬滅亡後、二三百年以前に至り、君主の專制は非常に進歩した。故に人民の受くる苦痛も亦非常に大きく人民は逆も耐え切れなくなつた。當時人民は斯様な苦痛を受けて色々不自由なことが多かつたが、就中甚

大のものは、思想の不自由言論の不自由及び行動の不自由であつた。この三種の不自由は現在では已に過去の遺物となつて、その詳細の情形がどのやうであつたか、我等之を見る由もないが、行動の不自由に就いては、その幾分を窺ひ知ることが出来ると思ふ。例へば現在我華僑が、南洋の和蘭又は佛蘭西領に在つて、その來往の際受けつつある不自由の苦痛で以て、その一端を窺ひ知られると思ふ。即ち瓜哇の如きは、本來中國の屬國で曾ては中國に進貢して居たもので、その後和蘭に歸屬した土地であるが、和蘭政府の管理に歸してからは、中國の商人にしる學生にしる又は勞働者にしる瓜哇地方へ行くものは、誰でも上陸前、和蘭の巡查がやつて來て査問し、それから中國人を小さい一室に入れて衣服を脱がせて醫者に頭の先から足の先きまで検査せしめ、その上指紋を取り體重を計つてやつとのことを出して呉れ、それから彼等の上陸を許す。上陸後は住所も明かに申告しなければならぬ。そして住所移轉の際は通行證を貰はねばならず、晩は九時以後は通行證があつても通行は許されず、別に夜間通行證を貰はなければならず且つ手提「ランプ」を携へねばならぬと云ふのが瓜哇に居住する華僑が和蘭政府から受ける待遇であつて、即ち行動の不自由である。斯様な不自由な待遇は、必ずや従前の歐洲皇帝が人民に對して用ひたところのものが、今日迄殘存してゐて、和蘭人が中國人を待遇する際使用するのであらう。我等は

我華僑が現に受けつつあるこの種待遇から、従前歐洲の専制がどのやうであつたかを類推することが出来ると思ふ。この外尙ほ人民の營業工作及び信仰等種々皆不自由なものがあつた。例へば信仰の不自由に就いて云へば、人民は何處に住んで居らうと人民が願はうが願うまいが一律に一宗教を信仰すべきやう強迫せられたものである。これに依る苦痛も人民も仲々に忍受し難きところであつた。斯様に當時歐洲人民の受けた種々なる不自由の苦痛は眞に水深火熱とも云ふべき甚しいものであつた。であるから彼等が一度人の自由を争へと提唱するものあるを聴くや、極力之を歓迎し之に附和したのも蓋し當然である。これ即ち歐洲に於ける革命思潮の起源である。

も歐洲の革命は自由を争はんとするにあつた。人民は自由を争はんがために、無数の碧血を流し無数の生命家庭をも犠牲にしたのである。だから一度び争つて之を獲得した後は、人々が之を奉じて神聖なものとし、即ち今日に至つても亦依然之を非常に崇拜して居るのも無理からぬところだ。この種自由の學説は、従來中國に傳はり一般學者も亦頗る熱心に提唱したため、多數人民も亦中國に於ても自由を争はねばならないといふことを知つた。今日我等は民權を講じつつあるが、民權の學説は歐米より傳來したものである。諸君は是非とも民權とは一體如何なるものであるかを明かにせねばならぬ。そして同時に又民權と同類項の間柄なる自由とは如何なることかを

明かにしなければならぬ。従前歐洲人民の受けた不自由の苦痛は忍ばんとしても忍ぶ可からざるものであつた。ここに於て萬衆は心を一にして自由を争つた。自由の目的に到達して後、民権は即ち之に隨つて發生した。従て我等にして民権を説かんとせば、先づ自由を争つた歴史から明かにしてかからねばならない。近年歐米の革命風潮中國に傳來するや、中國の新學生及び許多の志士は、何れも起つて自由を提唱した。彼等は以爲らく、歐洲の革命は、従前の佛蘭西のその如くすべて自由を争ふにあつた、我等現在の革命も亦正に歐洲人を學んで自由を争はねばならぬと。けれどもこの言論は、人の云つたことを亦云ふ所謂口眞似とも言ふべきもので、民権と自由とに對して心力を盡して研究したこともなければ、徹底的に了解して居ないもの云ふことである。我等革命黨は從來三民主義に依る革命を主張し、革命を以て自由を争はんと主張したことはないが、之には深い意味がある。従前佛蘭西革命の口號は自由であり米國革命の口號は獨立であつた。そして我等革命の口號は即ち三民主義である。三民主義は、多大の時間を費し工夫に工夫を重ねて始めて出來たもので、人の口眞似ではないのだ。何が故に一般の新青年が自由を提唱することが間違であると言ふのか。そして何が故に當時歐洲で自由が説かれたことは正しいと云ふのか。この道理は既にお話した筈である。一個の目標を提示して民衆を奮闘せしめんがために

は必ず人民に膚を切る程の切實なる苦痛があらねばならぬ。斯様な苦痛があつて後始めて人民は熱心に附和して來るものである。歐洲の人民は、従前深酷なる專制の苦痛を受けて來たもので、従て一度び自由の提唱せらるるや、萬衆は心を一にして賛成したのである。假りに若し、中國に自由を提唱したとすれば何うであらう。從來この種苦痛を受けたことのない人民から、何等の理解が得られないのは必定であらう。之に反し若しも中國に發財を提唱せんか、必ず人民は之を衷心歡迎するであらう。我等の三民主義は、即ち發材主義のやうなものだ。この道理を明かにするには、繰返し解釋しなければならぬ。繰返し解釋することに依つてその道理も理解出來るであらう。それならば何故我等は直接に發財を説かないのであるか。即ち發財だけでは三民主義を包括し得ないからだ。三民主義に依つてこそ、發財をも包括することが出來るのである。露西亞革命の當初共產を實行したのは發財と似たもので、即ち直接にして單簡な富を獲得する主張であつた。我等革命黨の主張し目指すところは、一事に止まらない。故に單簡に發財の二字を以て包括する譯には行かないのだ。自由の名詞など使へば猶ほ更である。

近來歐洲の學者が中國を觀察して何時も、中國は文明の程度が極めて低い、政治思想は甚だ薄弱である、自由でさへもてんで分らない、我等歐洲人は一二百年前自由のために戦つた、自由の

爲めに犠牲を敢てした、そしてどの位驚天動地の大事をしたかも知れない、それに中國人に今尙ほ自由が何ものであるかさへ分らない、之に依つても我等歐洲人の政治思想は中國人よりも遙かに優れてゐることが判からう、中國人は自由を説かないから政治思想が薄弱であると云はねばならぬと云ふ。この種の議論は、余の見るところでは、通用しないと思ふ。歐洲人が既に自由を尊重するからには、何故又中國人は一片の散沙であるなどと言ふのであらうか。従前歐洲人が自由を争はんとしたとき、彼等の自由の觀念は頗る濃厚であつたに違ひない。ところが自由を獲得し目的已に達せられてからは、悉く彼等の自由の觀念は漸次薄らいで行つたのではあるまいか。若し假りに現在再び自由を提唱して見ても従前のやうには歓迎せられないであらうと余は考へる。而も且つ歐洲の自由を争つた革命は二三百年前の舊式な方法であつて、現在では逆も實行出来るやうなものではない。一片の散沙に就いて論ずれば、それは如何に精采であることか。精采なることは、即ち充分な自由のあることである。若し不自由であるとすれば一片の散沙たり得ないではないか。従前歐洲は民権萌芽時代には自由を争はんことを主張し、目的の已に達せらるるや、各人は皆自己の自由を更に擴大せんとした。かうなると自由は兎角度を過しやすく、果して幾多の流弊は發生した。故に英國の「ミル」なる一學者は、一個人の自由は他人の自由を侵犯せ

ざるを以て範圍とする。斯くてこそ眞の自由である、他人の範圍を侵犯するが如きは決して自由ではない、と説いた。歐米人の自由を説くや、従前その範圍なく、英國の「ミル」氏に至つて始めて自由の範圍が定められた。而してそこで自然自由は非常に減少せらるることとなつた。斯様に彼等の中の學者は、己に自由は一個の神聖にして侵すべからざるものではなく、従て或る範圍を定めてそれを制限しなければならぬことを漸次覺つて來て居たのである。若し外國人が中國人を批評して、一面中國人は自由が判らないと云ひ、又他面中國人は一片の散沙であると云ふのならば、この種の批評は實際に於て相互に矛盾して居るもので、中國人が既に一片の散沙である以上、本來充分自由である筈だ。然し若し一片の散沙であることが悪いと云ふのならば、我等は早きに及んで水と「セメント」とを加へ、散沙と「セメント」とを結合して石となし堅固なる團體を造らなければならぬ。だがそのときになれば散沙は活動することが出來ず、即ち自由を失ふことになる。故に中國人の受けつつある病氣は自由を欠いて居るが爲めではない。若し果して一片の散沙が中國人の本質であるとすれば、中國人の自由はとくの昔充分でなければならなかつた筈で、ただ在來中國人には自由と言ふ名詞がなく従つてこの思想がなかつたと言ふことだけに過ぎない。尤も、中國人にこの思想がないと言ふことは、政治と何んな關係があるか。結局中國人に

は自由があるか無いか。

我等是一片の散沙の事實を以て研究すれば、即ち中國人には自由が極めて豊富であつたことが分かる。自由が餘りに多過ぎたがために、皆が不注意になり、氣にも留めず、この名詞さへも無關心であつたのだ。之は一體何うした譯からであらうか。これ恰も、我等が日常生活に於て最も重要なものは衣食であり、一日二回の飯、年二着の衣服は何うしても必要であるが、實は尙もそれよりも更に重要な一事であるのであるが、一般の人々は皆飯を食はねば死ぬ、故に飯を食ふことは最も重大なことと考へて居て、飯を食ふことよりも一萬倍以上も重要であるその一事に氣が付かずに居り、従つて之を重大視しないのと同様な譯である。この一事とは何であるか。即ち空氣を食ふことである。空氣を食ふことは即ち呼吸である。何が故に空氣を食ふことが飯を食べることよりも、その重要性に於て一萬倍以上だと言ふのであるか。飯を食ふのは、一日二度又は一度でも生を養ふことが出来るが、我等は空氣を食べて生を養ふがためには、一分間に少くとも十六回呼吸しなければならぬ。それで始めて氣持よく生きられる。若しそうでなければ、逆も辛棒出来るものではない。誰でも本當に思へないものは、實地に試験して見るがいい、鼻孔を一分間塞いで十六回の呼吸を止めて見ると、余が今試験したやうに一分もたたない裡に、とても辛棒し切れない

くなるであらう。一日を二十四時間に、一時間を六十分に分ち毎分十五回呼吸するとせば、一時間には九百六十回、一日には二萬三千〇四十回呼吸しなければならぬ。故に空気を食ふことは、飯を食ふことよりも一萬倍の重要性があると言つても實際間違はないであらう。斯様に大切なものであるにも拘らず、我等が之を感ぜない原因は、即ち空気は到る處に存在し、之を取るも盡きず之を用ゆれど竭きず、一日中朝から晩迄吸ふのに、何等の工夫も要らないからであつて、飯を食べるのに人手でつきかへたりするのは比喩のものにならない。従つて我等は食に有付くことは非常に困難であるが、空気を探して食ふことは至つて容易である。餘りに容易過ぎるため、つい人が注意をしなくなるのである。鼻孔を閉じ空気を吸ふことを停めて、空気を吸ふことの重要性を試験することは、小試験に過ぎない。若し大々的に試験して見ようとするとすれば、この講堂の四方の窓を全部閉め切つて終へば、我等の吸ふ空気は段々減少して數分ならずして、現在この數百の人は辛棒し切れなくなるであらう。又一人を小さい部屋に一日中閉込んで置いたならば、室外へ出されたときには非常な快さを覺るであらうが、これ等も亦同じ理窟である。中國人は自由が充分過ぎたために、之を知らずに居たので、恰度室内の空気が豊富な間は我等はその重要性を覺えないが、窓を締めて空気が入らないやうにすると、始めて空気の重要性も判かると同じ理

猶なのだ。歐洲人は、二三百年前專制の苦痛を受けて、全然自由と言ふものがなかつたからこそ、彼等は自由の貴ぶべきを知り生命を棄ててでも之を争はんとしたのだ。自由を争はなかつた以前は、恰度小部屋に閉込られてゐると同様、又争つて自由を獲得した後は、恰も小部屋から急に外へ出されて新鮮な空氣に遇つたのと同様であつた。故に彼等は、自由の如何に貴重なものなるかを覺つたのである。故に彼等は常に「自由を與へよ、然らずんば死を與へよ」との一句を口にしたのである。

けれども中國の情形は之と趣を異にして居る。中國人は自由を知らず、ただ發財を知つて居るのみだ。中國人に對して自由を説くは、恰かも廣西の深山に住む猶人に發財を説くと同様である。即ち猶人は常に深く山中に住し、熊膽鹿角を携へ人里に出て來り物々交換をする。初めの頃、里の人が彼等に錢を以て交換せんとしても、彼等は之を受取らず、ただ食鹽又は反物と交換することを樂しみとして居たものである。我等の觀念から言へば、發財と言ふことは最もいいことになつてゐるが、猶人の觀念では、ただ役に立つ品物でさへあれば満足して居たのである。彼等には發財と言ふことは判からず、從て錢を得ることを喜ばなかつたのである。中國の一般の新學者が、中國の民衆に對して自由を提唱するのは、恰も猶人に向つて發財を説くと同様である。中國

人には自由なんか必要ないので、學者達は尙も自由を宣傳しやうとする。眞に時務を識らざるものと謂ふべきである。歐米人は百五十年前に在ては自由を得ることが困難であつたが故に、彼等は生命を棄てて争つたのである。彼等が争つて目的を達した後、例へば佛國、米國の如きは、我等が常に民權實行の先進國家と稱するところではあるが、果してこの二國家の人民達は、皆自由を持つことが出来たであらうか何うか。即ち學生軍人官吏及二十歳以下の未成年者の如きは何れも自由はないのである。故に歐洲二三百年前の戦争は二十歳以上の人及び軍人官吏學生たらざる人が自由を争つたのに過ぎず、自由を獲得してからも、その自由は彼等この數階級の人以外のものみに限られ、これ等數階級の人々には、今尙ほ自由は存在しないのである。中國の學生は自由思想を抱懐するに至つてからも、別に之を用ふるところもないので學校へ持つて行つて用ひたものだ。ここに於て學潮は生れた。自由を争ふと言へば、その名は美しいが、而も元來歐米人の説くところの自由には極めて嚴格な限界があり、人々皆自由ありと言ふことは出来ないのであるが、中國の新學生の説く自由は、凡ての限界を打破して了つたものである。この種學説が社會で歓迎せられやう筈もなく、遣り場に困つて頭學校内へ持込んで使用した。斯うした譯から、學校騒動の風潮が絶間なく發生することとなつたが、之は全く自由の用法を履違へた爲に外ならな

い。中國の歴史を識らず、中國人民が古來充分の自由を持つて居たことを知らない外國人なれば別に不思議もないが、中國の學生迄が、竟に「月出而作、日入而息、鑿共而飲、耕田而食、帝力於我何有哉」と云ふ、この先民の自由歌を忘却して了つたのは、これこそ却つて非常な奇怪事ではないか。この自由歌に依つても、中國には古來自由の名こそなければ、確かに自由の實があり且極めて之が充分であつて、それ以上を求むる必要のなかつたことが分るではないか。

我等が民権を説かんとするには、民権は自由から發生したるものなるが故に、歐洲人民が當時自由を争つた情形を明かにしなければならぬ。若しも之を明白にしなかつたならば、自由の如何に貴ぶべきものかと言ふことが判らないであらう。當時歐洲人の自由を争つたのは、一時の熱狂に過ぎず、其後熱が冷め漸次冷靜を取り戻すと共に、自由にいい點もあり悪い點もあつて、決して神聖なものではないと言ふことが分つて來たのである。従つて外國人の所謂中國人は一片の散沙であると言ふ、この點我等は之を承認する。けれども中國人には自由が分らない、政治思想が薄弱であると言ふ點に就ては、我等は之を承認することが出来ない。何故に中國人は一片の散沙であるか。如何なるものによつて一片の散沙は形成せられて居るのであるか。即ち各人の自由が餘りに多く、中國人の自由が餘りに多過ぎるがために他ならぬ。だから中國には革命が必要なの

だ。だが中國革命の目的は外國のそれと異つて居る。従つて方法も自然亦違ふ譯だ。それならば結局中國革命の目的は如何。率直に之を言へば、歐洲の革命とは目的が相反して居るのだ。つまり歐洲は従前殆ど自由といふものがなかつたからして、革命に依り自由を争はねばならなかつたのであるが、我等は之と反對に、自由が餘りに多過ぎるがために、團體がなく抵抗力がなくそして一片の散沙を形成して居る。そして一片の散沙であるが故に、外國の帝國主義の侵略を受け、列強の經濟商戰の壓迫を受けて、現在の我等は之に抵抗することが出来なくなつた。だから若し將來外國の壓迫に抵抗することが出来るやうにと思ふならば、即ち各人の有り餘る自由を打破して、例へば「セメント」を散沙に加へて一つの堅固な石を造るやうに、我等も亦極めて鞏固なる團體を結成しなければならぬのだ。現在中國人は餘り自由すぎるがため、自由病と言つたやうなものに罹つて居る。之は單に學校に通つて居る學生許りではなく、我等革命黨の中にも亦この病氣がある。斯うした病氣があるがために、従前滿清を推倒はしたものの、今日に至る迄民國を建設する方法がないのである。即ちこれ自由の使ひ所を履き違へた爲でなくてはならない。我等革命黨が従前袁世凱に打敗られた原因も亦之に他ならぬ。民國二年袁世凱は國會の協賛を経ずして大外債を興し、又宋教仁を殺し、その他種々惡事を働いて民國を破壊した。當時余は各省に直に袁

を討たんことを催促したが、何分党内部に於ては何れも自由を説いて團體がなく、例へば、西南各省の如きは師長旅長より下は一兵卒に至る迄各々各自の自由を説かざるものなしと言つた有様であつたので、逆も互に團結など出来そうにもなかつた。そして又大にしては各省は各省で、それ／＼各省の自由があると云つた状態で、彼此聯合することが出来なかつた。當時南方各省は革命の餘威に乗じ轟々烈々と表而仲々威勢のよかつたものであるが、その實内部は前述の如く全く四分五裂し、號令を統一することが出来なかつたのである。然るに袁世凱は舊日の北洋六鎮の系統を持つて居り、その六鎮内の師長旅長及び一切の兵卒に至る迄よく之に服従して號令も一致してゐた。簡言すれば袁世凱は非常に堅固なる團體を持つて居るに反し我等革命黨は一片の散沙であつたと云ふことになる。故に袁世凱は革命黨を打敗つたのである。之に依ても外國で適當なもの、必ずしも中國で適當であるとは限らず、外國の革命方法が自由にあつたからとて、中國革命は自由を争ふものであると言ふことは出来ないと云ふ道理が判からうと言ふものだ。若しこの上自由を争ふとでも言はふものなら、更に一片の散沙振りを發揮することとなり、逆も大團體を造ることは出来ず、従つて我等革命の目的は永遠に成功することは出来ないのであらう。

外國の革命は自由を争ふに起り、奮闘すること二三百年、大風潮を生じ纔に自由を獲得し初め

て民権を發生したのである。従前佛蘭西革命の口號には、自由平等博愛が用ひられ、我等の革命の口號には、民族民権民生が用ひられて居るが、究竟するに、我等三民主義の口號と自由平等博愛の口號とは、何んな關係があるものか。余の所説に照せば、我等の民族主義は彼等の自由と同様である。何故ならば、民族主義の實行は即ち國家の爲めに自由を争ふことであるからだ。尤も當時歐洲では個人の爲めに自由を争つたのではあるが今日に至つては當時とは自由の用法が同一ではない。然らば今日自由なるこの名詞は、果して何のやうに應用せられて居るのであるか。若し之を個人に用ふるならば、一片の散沙となる許りであらうから決して再び之を個人の上に用ひてはならない。國家の上に用ひなければならぬ。個人が餘り自由過ぎてはいけない。國家が完全なる自由を得なければならぬ。國家行動が自由になつてこそ、中國は強盛なる國家となることが出来るであらう。斯くの如くせんには、人民はその自由を犠牲にしなければならぬ。學生たるものはよくその自由を犠牲にしなければならぬ。それでこそ日日の勉強にいそしむことが出来るのである。即ち學問に對しては勉強を専らにして學問を成就し、知識を發達せしめ能力を豊富ならしめてこそ始めて國家の爲めに事をなすことも出来るのである。軍人たるものもよく自由を犠牲にすることに依つて、命令に服従し忠心國に報ゆることが出来、國家をして自由あらしむることが出

來るのである。若し學生軍人にして自由のみを説かんとするならば、自由の相待名詞である中國の放任放蕩と言つた状態となり、學校に校規なく、軍隊に軍紀がなくなつて了ふであらう。學校に於ては校規を説かず、軍隊内に於て軍紀を説かなかつたならば、何うして學校と云ひ軍隊と稱することが出來ようぞ。

我等は何が故に國家の自由を求めんとするか。それは中國が列強の壓迫を受け、國家的地位は失はれ、嘗に半殖民地たるのみならず、既に次殖民地となり、緬甸安南などにも及ばなくなり、その上緬甸安南などはただ一國の殖民地で一主人の奴隸に過ぎないのに、中國は各國の殖民地であり、そして各國の奴隸と云へば、中國は現に十數個の主人の奴隸であるが爲に、現に國家は非常な不自由な位置に置かれてあるからだ。我等にして國家の自由を恢復せんとせば、自由を集合して一個極めて堅固なる團體を造らねばならぬ。革命的方法を以て國家を一つの堅固なる大團體と成さんとするには、革命主義に非ずんば成功しない。我等の革命主義は即ち砂を固むる「セメント」である。四億人が革命主義の下に集合し一個の大團體を造ることが出來たならば、この一個の團體は自由たり得、中國の國家は當然自由であり、中國民族は始めて眞に自由となることが出來るであらう。我等の三民主義の口號と佛蘭西革命の口號とを比較すれば、佛國の自由は

我等の民族主義に相當する。何んとなれば民族主義は國家の自由を提唱するからである。平等は我等の民權主義に相當する。何んとなれば民權主義は人民の政治的地位は平等である君權を打破して人々皆平等たらしめねばならぬと提唱するからである。之れ民權主義は平等と相對峙すると説く所以だ。この外博愛の口號がある。この名詞の原文は兄弟の意味であつて、中國の同胞と言ふ字と同様に解釋せられ普通は博愛と譯されて居る。之に含まるる道理は、我等の民生主義と相通するものがある。何故ならば我等の民生主義は四億人の幸福を謀るにあり、四億人の爲めに幸福を圖ることは、とりもなほさず博愛であるからだ。この間の道理は民生主義の講義に當り、改めて詳細に解釋するであらう。

第三講 民權と平等

民權の二字は、我等革命黨の第二の口號であつて、佛蘭西革命の口號平等と相對してゐる、何故ならば、平等は佛蘭西革命の第二の口號であるからだ。故に本日は専ら平等を主題として研究したいと思ふ。平等のこの名詞は、普通自由なる名詞と並べ論ぜられて居る。従前歐洲各國の革命には、その人民は平等を争ひ自由を争ふにも、すべて一様に努力し一様の犠牲を敢てした。従

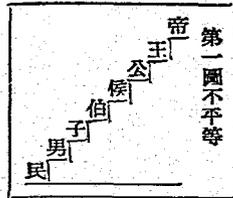
つて彼等は平等と自由とを一樣に重大視してゐる。更に多くの人々は自由を獲得しきへすれば必ず平等たり得ると考へて居たものである。そして若し平等に到り得なかつたならば、自由を實現する由もない。平等と自由とを比較すれば、平等の方が一層重大視せられなければならないと考へてゐたものである。然らば何をか平等と言ふか。平等は何れより來るものか。歐米の革命學說に依れば、すべて平等は人類の天賦であると説く。例へば、米國革命のときの獨立宣言、佛蘭西革命の人權宣言の如き何れも特筆大書して平等と自由とは天が人類に賦へた特權であつて、人類の侵奪することの出來ないものであることを強調して居る。

天の人を生むや果して平等の特權を賦與したものであるか何うか。諸君は先づこの問題を明瞭に研究して置かねばならぬ。第一講に於ては民權の來渡に遡つて、人類の初生幾百萬年以前より近來の民權の萌芽時代に至る迄推究したが、天が平等を賜與した道理を發見するに至らなかつた。例へば天生の萬物に就いて見るに、水面以外は一物として平かなるものはなく、平地と云はるるところでも、亦一ヶ所として眞に平かなるものとはないのである。恰度粵漢鐵路に乗つた場合、黃沙、銀盞拗間の一段は、元來平野に屬するものの、汽車の窓から仔細に沿道の高低狀況を考察するに、人工を以て修築し纔に平路たらしめたものでないものは一里もない。所謂天生の平原で

さへも、その平かならざること如斯しである。尙ほ手近かなものに就いて云へば、机上の花瓶に挿さされてある花に就いて見るに、今余の手にする一枝の花は槐花であるが、之をざつと見たときは何の葉も何の花も同じやうに思はれるが、之を仔細に考察し或は顯微鏡にでもかけて見たならば、一つとして全然同じの葉も花もないであらう。即ち一株の槐樹の幾千萬片の葉も亦一つとして完全に相同じきものはないのである。之を推し廣めて空間と時間との關係に就いて見るも、此處の槐葉と彼處の槐葉とは更に同じものはなく、今年生えたところの槐葉と去年の槐葉とはそれはぞれ異つてゐる。之に由つても、天地間に生ずるものは、總て相同じきものがないことが分からう。既に相同じきものなしとすれば、自然平等と言ふことは出来なくなる、自然界にさへ平等なしとせば、人類に亦何うして平等などのあらう筈があらうか。

天人類を生むや本來又平等ではなかつたのである。そして人類の專制發達後は、專制なる帝王は元來の不平等を更に激しからしめ、その結果天生のそれに比して一段と平等となつた。この種帝王に依つて造成せられた不平等は、人爲的不平等である。人爲的不平等とは果して如何なる状態を指して云ふのか。今講壇の黒板に圖を書いて表はして見やう。諸君よく第一圖を見るがよい。之で明白にすることが出来るであらう。この人爲的不平等あるが爲に、特殊階級の人は暴虐

第一圖 不平等



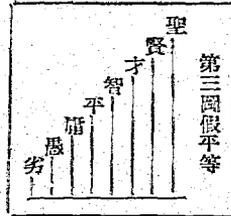
無道を極め、人民は之に壓迫せられ自ら容るるの地もなかつたのである。故に革命風潮が発生し不平等と戦つたのである。革命當初の目的は、本來人爲的不平等を打破するにあつた。だから平等になつた以上事了れりと云ふべき筈であつた。ところが帝王の地位にあるものが、常々天意を假造して彼等の保障となし、彼等の處るところの特殊地位は天の授與するところ、人民が彼等に反對することは天に逆ふものに他ならないと説いたものだ。無智なる民衆は此の話を合理的であるか何うか碌に研究もせず、ただたゞ盲從附和して君主のために權利を争ひ有識の人民が平等自由を説くのに反對したのもあつた。斯様な有様であつたから、革命に賛成する學者としては、天賦の人權が平等自由であると言ふ説を創造して、以て君主專制を打破せざるを得なかつたのである。學者がこの説を創造したのは、元來人爲的不平等を打破せんとするにあつたが、天下の事は確に行ふは易く知るは難しである。當時歐洲の民衆は、帝王の天生にして天賦の特權を受けてゐるものなるを信じ、多數の無智なる民衆は擧つて彼等を推戴したものであるから、少數の有識の學者達が如何に適切なる方法と力とを以てすればとて仲々彼等を推倒する譯には行かなかつたのである。



第二圖假平等

その後人々は天の人類を生むやすべて平等自由であり、平等自由を争ふことは當然のことであると信ずるやうになつた。そして以後歐洲の帝王は、推倒されずとも一つ一つと自ら倒れて行つた。専制なる帝王が倒れてから、民衆は又深く人々は天生平等なりとの一説を信じ、日々工夫を凝し、何とかして平等に到達せんと努力した。彼等は平等にしようと云ふことが到底不可能であることには、頓と氣が付かず、只管平等に到達せんものと努力したのである。近來科學の發達するに伴ひ、人類は大いに覺るところあり、纔に天賦平等説の道理なきことを知つた。假りに若し、民衆の相信じて居た天賦平等説を以て押通して行つたならば、或は眞理が顧みられずして無理矢理にもその目的を達することが出来るかも知れない。だが之はやはり一種の假平等であつて、即ち第三圖と同様、必らず地位高きものを無理に下に押しつけ頭だけ揃えて平等にしたもので、その各者の立脚點はやはり彎曲を描き結局平等であることは出来ないものである。この種平等は眞の平等ではなく假平等である。社會的地位の平等と言ふのは、最初の起點即ち生れたときの地位が平等であると言ふことだ。そしてその後各人の天賦の聰明才力に根據して自分と言ふものを造り上げる譯であるが、各人の聰明才力には天賦の不同がある

第三圖 假平等



我等が民権平等を説き、又世界の進歩あらしめんがためには、人民の政治上の地位をして平等ならしめねばならぬ。平等は人爲的であつて天生ではない。そして人の造つた平等なるものはたゞ政治上の地位の平等あるのみだ。故に革命後は各人の政治上の立脚點は必ずすべて平等であらねばならぬ。恰も第三圖の底線の如く一律に平等でなければならぬ。斯くてこそ眞の平等であり、斯くてこそ自然の眞理に適ふ。

歐洲従前の革命には人民は、平等自由のために非常なる努力を敢てし、多大の犠牲を費した。我等が今、彼等が何が故にかくも努力しかくも多大の犠牲を費さねばならなかつたか、その理由を知らんがためには先づ歐洲が革命前に於て何んな不平等な状態に置かれてあつたかを知らねばならぬ。即ち第一圖は歐洲命革前に於ける政治上の不平等の事實を表示せる

ものにして、圖中示すところの帝、王、公、侯、伯、子、男等の一級一級の階梯は、即ち従前歐洲に於ける政治地位上の階級である。この種階級は以前の中國にも亦存在して居たもので、十三年前革命が起り專制を打倒して、始めてこの種不平等な階級を剷除したものである。けれども中國従前の不平等は、従前の歐洲のそのやうに、そんなに激しくはなかつた。歐洲は二三百年以前はまだ封建時代で中國の二千年以前と恰度同じであつた。中國の政治的進化は歐洲よりも遙かに早かつたがため、二千餘年前既に封建制度を打破して居たのである。歐洲は今日尙ほ完全に封建制度を打破することが出来ないでゐる。二三百年前やつと不平等の缺點に氣が付いて始めて平等思想が発生した。中國は二千餘年前この種思想があつた。故に中國の政治的進歩は歐洲よりも早かつた譯だ。けれどもここ二三百年來歐洲の政治的進歩は、嘗に中國が及びもつかぬのみか、遙かに中國を超越した。所謂「後の驪が先きになる」であらう。

歐洲に於ける革命前の状態を中國に比較すれば、歐洲の專制は中國よりも遙かに激烈であつた。その原因は何處にあるのであらうか。即ち世襲制度にある。當時歐洲の帝、王、公、侯等の貴族は代々すべて世襲貴族であつて他の職業に携はらず、人民亦代々すべて一つの職業を世襲し、他の職業に従事することが出来なかつたものである。例へば田を耕すものは、その子子孫孫は農夫

とならねばならず、工を爲すものは、その子子孫孫亦苦工とならねばならぬと言つた有様で、子孫は絶対に父祖の職業を變へることが出来なかつた。この職業を變へることが出来ないのが、即ち當時歐洲の不自由であつた。中國は古代封建制度の破壊後、この種の制限も亦完全に打破せられた。斯様に、従前の中國と外國とは何れも階級制度存在し不平等ではあつたが、たゞ中國のいいところは、皇帝のみは、人から打倒せらるれば勿論世襲は出来ないが、然らざる限り一般に代々世襲であり改朝姓を換ふるのときに至つて始めて皇帝を換へると言ふ例外があつた外、皇帝以下の公、侯、伯、子、男は、中國の古時に於てはすべて換へることが出来たもので、平民から宰相となり王侯に封ぜられたもの極めて多く之等な代々世襲でなかつた點である。勿論歐洲の平民の間にも或は宰相となり王侯に封ぜられたものなきにしもあらずだが、その大多數は皆世襲であつて、人民の職業は自由であり得なかつたものだ。職業の選擇が不自由であつたが爲め平等は夫はれ、單に政治的階級の不平等のみではなく、即ち人民の間の階級も亦不平等であつたのだ。斯うした譯で、人民は、一つには公、侯、伯、子、男の地位になることも困難であり、二つには亦自己の職業を自由に改變し更に上進を求むることも出来ないで、非常な苦痛を感じとても辛穡し切れなくなつた。だから生命を抛つても自由を争ひ、職業上の不自由なる束縛を解除し、以て

上進を求め、生命を賭しても平等を争ひ階級専制の不平等を打破せざるを得なかつたのである。

この種戦争や奮闘は、從來中國には曾てなかつたところのもので、中國人は假令不平等な制度を受けたことがあつても、一身一家を犠牲にして迄も平等の代價にするやうなことはなかつた。歐洲人民二三百年以前の革命は、すべて自由平等の二つに集中せられて居たが、中國人には從來自由平等を争ふとは何んなことか判からなかつた。その原因は、即ち中國の専制は歐洲のそれと比較して、實際左程激しくはなかつたからだ。且つ中國古時の政治は専制ではあり、二千餘年來進歩こそしなかつたものの、以前改良せられたものも非常に多く、専制の淫威も亦大分減除られて居たため、人民は十分に苦痛を覺えず、苦痛を覺えなかつたからこそ、自由平等のために奮闘すると云ふやうなことはなかつたのである。

近來歐洲文化東漸し、彼等の政治、經濟、科學等何れも中國に傳來したが、中國人はその歐洲の政治學理を聽いても、多くはその儘受け賣りするだけのこと、之を改良するなど云ふことは全然知らない。従つて歐洲の二三百年前の革命が自由を争つたと云へば、亦中國人も自由を争はねばならぬと云ひ、又歐洲が従前平等を争つたと云へば、中國人も亦その通りに平等を争はねばならぬと考へる。併し乍ら、中國今日の病弊は不自由不平等と言ふ點にあるのではない。假り

に専ら自由平等のみを以て民氣を提唱したならば、それは餘りに事實から遠去かつたものであり、又人民に膚を切るが如き痛切な苦痛がなければ、彼等はそれを感覺もしないであらう。そして感覺がなければ必ず附加しても來ないだらう。歐洲では、二三百年前、人民の受くるところの不自由不平等の苦痛なるものは、眞に水深火熱とでも云ふやうな激しいものがあり、自由平等を争ふに非ずんば、如何なる問題もすべて解決し得ないものと考へられたがため、生命を賭して迄自由を争ひ平等のために戦つたのである。この種の風潮があつたが爲にここ二三百年、第一に英國革命、第二に米國革命、第三に佛蘭西革命と順次革命が発生したのである。米國革命及び佛蘭西革命は何れも成功したが、英國革命はどちらかと云へば、まあ不成功であつたと言はなければならぬ。従つてその國體は今尙ほ改變されて居ないのである。英國革命の時期は、恰度中國の明末清初に當り、當時英國人民は皇位を推倒し皇帝を殺したが、十年足らずの間に又復辟が発生し、その後引續き今日に至り、彼等の國體は依然舊の如く君主國にして貴族階級も亦依然存在してゐる。英國の羈絆を脱離した米國は、獨立後従前の政治的階級も完全に打破して共和制度を創立した。その後佛蘭西革命も亦米國同様、従前の階級制度を根本的に破壊して了つた。延いて今から六年前に至り、又露國革命發生し、彼等も亦階級制度を打破して共和國を樹立した。米國、

佛國、露國は共に之れ世界最強盛の國家であるが、彼等の強盛たり得た來歴を尋ねれば、何れも革命に成功したがために他ならない。この三個の革命に依つて成功した國家を比較すれば、（以下三行削除）

我等は再び米國に就いて語らねばならぬ。米國革命のとき人民の目指す目標は獨立にあつた。彼等は何が爲に獨立せんとしたか。當時彼等の十三州は悉く英國の領土にして英國の管理に歸して居た。當時の英國は一個の專制國家であつたが、米國人に對しては本國人民に對するよりも更に激しく壓迫したものである。そこで米國人民は、彼等が自分等と英國人民とを同じく一英國政府の管理の下に置き乍らも、本國人に對しては極めて寛大に、それに引かへ米國人民に對する待遇は非常に刻薄なるを見て、餘りに不平等過ぎるのを痛感した。故に英國から脱離して自己の手で自らを管理し一個の獨立國たらしめんとしたのである。彼等は獨立せんが爲に英國に反抗し、英國と八年に互つて戦つたのだ。その後獨立に成功するや、政府は米國に居住する凡ゆる白色人種に對し一律に平等に待遇した。然し乍ら有色人種に對しては非常な差別的待遇をしたもので、當

時米國に居住して居た「アフリカ」黑人を奴隸扱した如きはその一例である。故に米國獨立後白人の政治的地位は平等となつたが、黒人と白人と比較して平等ではなかつたのである。この種事實は米國の憲法及び獨立宣言と符合しない。何故ならば、獨立宣言はその劈頭に於て、人々は生れながらにして平等である。天賦の徳かすべからざる權利がある、この權利は自由を生命とし幸福を求むるにあると言ふて居る。そして又、その憲法を制定するに當つても亦この道理に基いたものである。米國の人類の平等を尊重する憲法は既に成立してゐたが、依然黒人を奴隸とする風は熄まなかつた。故に米國の平等自由を主張する學者はこの事實を視て、立國の精神と甚しく矛盾するものとなし、即ち平等自由の共和國內に於てさへも尙ほ多數の人類を奴隸としなければならぬのかと反對したるものである。當時米國の黒人待遇振りは、果して何んな状態であつたか。従前米國人の黒人に對する待遇は刻薄を極めたもので、全く牛馬同然であつた、彼等を奴隸として激しい勞働に従事せしめ毎日過度の仕事をさせる許りか、辛苦を重ねた結果、漸くその仕事が付いても、一文の勞銀を支拂ふでもなく、ただ飯を食べさせるだけであつた。斯様な殘酷な情態を見た全國人民は之では、餘りにも不公平道である、不平等も甚しい開國の憲法の趣旨と全然相容れないものであると覺り、そこで一般に人道主義は提唱せられ、この種不平等なる制度を打破せん

とするに至つた。その後この主張は、各地各人の間に傳へられ廣まつて、賛成者も非常に増加した。ここに於て多數の熱心な人々は、黒人の受けつゝあつた苦痛を調査して、多數の記録を作つたものである。就中最も著名なものに「黒奴額天録」(The Uncle Tom's Cabin)と言ふのである。この本は黒人の受けて居る苦痛の種々な事實を基礎として興味本位に作られた小説であるが、この小説の出版後は、一般に愛讀せられ、人々は黒人苦痛の真相を知り、黒奴に代つて不平を抱くやうになつた。當時北部諸州は黒奴を使用して居なかつたが爲黒奴の解放を主張し、南部諸州には幾多の大農場があり、日頃から専ら黒奴の手に依つて耕種せられて居たため、若し黒奴を解放することにすれば、激しい勞働に従事するものがなくなり耕種も出来なくなると言つた譯で、南方の人々は、さうした利己的な立場から奴隸の解放に反對した。そして言ふ、黒奴制度は我々だけから起つたものではないと。従前米國人が「アフリカ」の黒人を連れて來て奴隸としたのは、恰度數十年前歐洲人が中國人を米大陸及び南洋に運んで猪狩としたのと同様で、黒奴は當時「アフリカ」の猪狩であつたのだ。南方各州は奴隸解放に反對して云ふ、黒奴は我等の資本である、若し之を何うしても解放せねばならぬと言ふなれば、自分等としては必ず資本を回收しなくてはならぬと。當時黒奴一人の値段はさつと五六千元見當で、南部諸州幾百萬に達する黒奴の總額は幾

百億に上り、當時の國家には、到底斯様な莫大な金を黒奴の所有主に對し償還する力もなかつたので、黒奴解放の風潮は随分以前から發生して居たものの、醜態又醜態、漸く六十年前に至つて始めて爆發して南北戦争となつたのである。

この戦争は非常に激烈を極め双方の死者幾十萬人、五年間に亙つて行はれ世界最大戦争の一つに數へられてゐる。この戦争は黒奴に代つて不平等を打ち、人類に代つて不平等と戦つたのであるから、平等を争つた戦争と云ふことが出来る。従前歐洲に於ては平等を争つた問題はすべて自ら覺醒し自己の利害のために戦つたものであつた。米國の南北戦争は黒奴のためにその平等を争つたもので、黒人自身には、争はねばならぬ理由が判かつて居た譯ではない。彼等は永年奴隸生活をして來て別に智識と言つてはなく、ただ主人から飯を貰つて食ひ、衣服を貰つて着、家を貰つて住みさへすれば、それで心から満足して居たものである。當時主人の間には非常に寛厚なものもあつたが、黒奴はただ、若しい主人であればひどい虐待を受けなくても濟む位に考へてゐて、決して主人に反抗して解放を要求し、自ら主人にならうなどと云ふ考は毛頭なかつたものだ。故に南北戦争で平等を争つたところの人は白人で、白人が黒人に替つて争つたのであり、自己の團體以外のものが争つたのであつて、黒奴自身の覺醒に基いて居たものではなかつた。

戦争の結果は、南方敗れ、北方の勝利に歸した。そこで聯邦政府は直に全國の奴隸を解放すべく命令を發し、戰敗の南部諸州は其の命令に服従するの外なく、爾後黒奴を一向世話せぬことになつた。そして解放の日から黒奴に飯もやらなければ衣服もやらす家も給與しなくなつた。爾後黒人は、白人には解放せられるし自由も出來たし、米國の共和國民となつて政治上に平等自由を得て、非常に希望に滿ち滿ちてはゐたもの、これ迄は、主人に代つて勞働したため、飯も衣服も家も自由に支給せられてゐたのに、解放後は主人に代つて勞働しないため、食ふべき飯なく着るべき衣服なく住むべき家もないと云つた有様となつたから、一時は五里霧中で、黒奴は恰も泰山の支へを失つたもののやうに非常に失望し、痛く苦痛を感じたものであつた。之がため奴隸解放した各州、殊に北方の奴隸解放を主張した。大統領を怨むやうになつたその奴隸解放を主張した大統領とは誰人であるか。誰しも知つてゐるやうに、米國には最も著名な一大統領がある。一人は建國の大統領で「ワシントン」その人である。現に世界の人は、建國の元勳と云へば、常に「ワシントン」に指を屈する程である。何故なれば彼は人類の平等闘争史上に非常な功勞があるからだ。今一人の大統領こそ、即ち當時の奴隸解放に最も力を盡した「リンカーン」その人である。彼は黒奴を解放して人類のために平等を求め絶大の功勞を樹てた。故に世界の人は今に至る迄彼

の徳を稱頌へて已まない。然し乍ら、當時解放せられた黒奴は一時衣食住なき痛苦を味つたため非常に彼を恨んだもので、今尙ほ一つの歌謡があつて、彼「リンカーン」を罵つて居る。歌謡に言ふ、彼は洪水猛獣であると。それは「リンカーン」の心理を歌つたもので、恰も今中國に於て革命反對のものが革命黨を罵しると同様だ。勿論現在では有識の黒人の間には、解放の有難さをよく知つて居て自然「リンカーン」の徳を稱頌へては居るが、無智な黒人は、彼等の祖先同様、今尙ほ「リンカーン」を恨んで居る。それはさてをき、實に黒奴の解放こそは、米國史上に特筆せらるべき平等を争つた事業であらねばならぬ。

故に米國の最も光輝ある歴史と言へば、第一は英國の不平等待遇を受けて人民が獨立戰爭を起し八年に亘つて戦ひ纔に英國を脱離して平等を獲得し一個の獨立國家たらしめた時期であり、第二は六十年前發生した南北戰爭である。この戰爭の理由とするところは、第一次の獨立戰爭同様で、五年に亘つて戦つた。五年と八年であるから、時間の點では第一次の戰爭と大した差はなく寧ろ短い位であるが、其の損失に至つては、前の八年間の戰爭に比して、更に大なる犠牲と更に多くの血を流したものであつた。簡言すれば、米國第一次の大戰爭では米國人民が自己の獨立を要求し自己のために平等を争つたものであり、第二次の大戰爭は米國人が黒奴のために自由を

求め黒奴のために平和を争つたものである。自己のために平等を争つたのではなくして他人のために平等を争つたのである。そして他人のために平等を争つて自己のために平等を争つたときよりも更に大なる犠牲と更に多くの流血を敢てしたのである。故に米國の歴史は一種の平等を争つた歴史であり、この種平等を争ふ歴史は、世界歴史に於ける大なる光榮であらねばならぬ。

米國が平等を獲得して後、佛國にも亦革命が起り平等を争ひ、その間反覆幾次、争ふこと八年の久しきに及んで、漸く大體に於て成功した。けれども平等を争つて成功した後、被等人民は平等の二字を履き違へ極端に趨り、第二圖に於て説ける平等と同様、如何なる種類のものも總て平等たりとなし、平等の地位を立脚點に置こうとはせず、頭だけ揃へんとした。即ち假平等となつたのである。

中國の革命思潮は歐米に發源する。平等自由の學說も、亦歐米から傳來したものである。ところが中國の革命黨は、平等自由を争はんことを主張せずして、三民主義を争はんことを主張する。三民主義を實行することが出来れば、そこに自由平等はあると主張する。歐米は平等自由のために戦ひ之を争ひ得た後、常に平等自由に引かれて歧路に入つた。我等の三民主義はそれを實行し得た時、そこに眞の自由平等は存在する。如何なる方法に依つてよく正軌に歸せしめ得べきか。

第二圖の如く頭を平等線上に揃えることは平等の正軌には合つて居ない。第三圖の如く立脚點を平等線上に置いてこそ、平等の正軌に合ふものと言はねばならぬ。故に我等の革命に用ふるところの主義が適當であるか、何うか正軌に合つてゐるか何うかを知らうと思へば、どうしても先づ、歐米の革命の歴史に就き根本に遡つてこれが明瞭なる研究を遂ぐるに非ずんば成功しないであらう。人民たるもの、我等の三民主義が果して的確にいい處があるか何うか、國情に合つてゐるか何うかを徹底的に明かにせんと欲せば、そしてよく我等の三民主義を信仰し始終變らざらんが爲めにも、亦歐米の革命の歴史を根本的に明瞭に研究せねばならぬ。

米國は平等自由の二個の名詞のために、兩次の戰爭を経過し第一次は争ふこと八年、第二次は五年にして纔かに其の目的を達した。從來中國は平等自由のために戰爭を起したことはなく、幾千年來歴史上の戰爭と言へば、悉くこれ皇帝を争はんとし、毎次戰爭をする人々の思想は、すべて一個の皇帝を争はんとする點に存して居た。ただ此次我等の革命は滿清を推倒し皇帝を争はざるの第一次の戦ひであり得た。けれどもこの種皇帝を争はざるの思想は、ただ眞の革命黨の人才に限られ、革命黨以外のものに至つては、例へば北方の曹錕、吳佩孚の如く、名は共和に賛成して居ても實際に於て武力統一を主張し依然專制の夢に憧がれてゐる。若し果して彼等の武力統一

にして成功したならば、誰も反抗することが出来なくなり、彼等は必ずや皇帝たらんことを考へるであらう。例へば袁世凱の如き、辛亥の年滿清を推倒するときに在つては、彼は嘗て一度たりとも共和に賛成しなかつたことはなかつたではないか。そして彼は又、嘗て何時帝制を主張したことがあつたか。當時全國人民は、再び帝制の發生するやうなことはあるまいと考へてゐたものであつた。ところが民國二年に到り、袁世凱は武力を以て革命黨を敗り、之を海外に放逐し、國體を改變して皇帝となつた。軍閥の思想の腐敗甚しく、往年の袁世凱と同様の此頃である。將來再び此の種危険の發生せずと、誰かよく敢て保證し得るものぞ。故に中國の革命が今に至る迄成功しないのは、即ち皇帝たらんとする思想が未だ完全に剷除せられず、充分に肅清されてゐない故に他ならずと言はねばならぬ。我等にしてこの種皇帝思想を完全に剷除し、悉く肅清せんとするならば、即ち更に奮闘し再び革命せざるを得ないのである。

現在中國の幾多青年志士は、やはり平等自由を争はんことを主張する。歐洲に於ては一二百年以來平等自由を争つて來たものである。がその争得した結果は、實際は民權であつた。何故ならば、民權があつて始めて平等自由が存在し得るからであつて、若し果して民權がなかつたならば、平等自由は一つの空虚なる名詞に過ぎなくなるであらう。民權の思想は遠く二千年の昔、希

臘羅馬にその源を發して居り、近來發生したのではない。當時希臘羅馬は何れも共和國にして、之と時を同じうして又地中海の南方に「カーセーズ」と呼ぶ大共和國あり、その後相繼いで幾多の小國が興つたが、すべて共和國であつた。當時希臘及び羅馬は、名は共和國であつたが、その實民權が實行されて居らなかつたがために、何等眞正の平等自由に到達して居なかつた。希臘に奴隸制度が存在してゐたが如きそれ一例で、當時貴族は何れも多數の奴隸を畜ひ、全國人民の約三分の二は奴隸と言つた状態であつた。「スバルタ」武士の如きは、一人に付五人の奴隸の服侍すべきことを國家に於て規定して居たものである。従つて當時の希臘には、少數の民權を有するものを除き、大多數は民權のないもの許りであり、羅馬も亦之と同様の状態にあつた、であるから二千餘年前の希臘羅馬は、名は共和國であつたが、その實奴隸制度の存在に依り、尙ほ充分に平等自由の目的を達することが出來ず、漸く六十年前になつて、米國が黒奴を解放し奴隸制度を打破し人類の平等を實行して後始めて現在の共和國に、眞の平等自由の希望が漸次生れて來たのである。然し乍ら、眞の自由平等の立脚點は何處にあるか。如何なるものに附屬してゐるか。即ち民權の上に立脚し、民權に附屬すべきものである。民權が發達してこそ、平等自由は長なへに存在し得る。若し果して民權なくんば、如何なる平等自由もすべて之を保守することは出來ないであら

う。従て中國國民黨が革命を發起した目的の平等自由を争ふにあるは勿論であるが、所定の主義及び口號にはやはり民権を用ひなければならぬ。民権を争得してこそ人民の平等自由なるものは事實となつて顯はれ、そこで平等自由の幸福を享くことが出来る譯で、平等自由なるものは實際に於て民権の内に包括せられて居るからだ。平等自由が民権の内に包括せられてゐるが故に、本日は民権問題の研究に附帯して平等自由の問題を研究することとなつたのである。

歐米の革命は平等と自由とを求むるために戦はれ、無数の生命を犠牲にし幾多の碧血を流した。平等自由を争得して後今日に至る迄、この平等自由の名は、如何に貴く仰がれねばならなかつたか。この平等自由の事實は、如何に慎み深く取扱はれねばならなかつたか。決して隨意に濫用すべきものではなかつたのである。然るに現在では果して何うであるか。自由に就いて言へば、前に述べた如く彼等は自由を争得した後自由の幾多の流弊が生れた、米國革命も佛蘭西革命も、今日迄に一百餘年を経過し平等は争得せられたが、結局自由と同じ途を辿りやはり幾多の流弊を生み出したのではなかつたか。余の見るところでは、やはり同様幾多の流弊を生み出したのである。我等は彼等が既往に於て経験した流弊に鑑み、新しき革命の途を歩み、再び彼等の覆轍を踏んではならない。専ら平等の爲めに奮闘し、民権の爲めに奮闘しなければならぬ。民権が發達し

てこそ眞正の平等もある。若し民権が發達しなかつたならば、我等永遠に不平等であらねばならぬであらう。然らば歐米の平等の流弊とは果して如何なるものであるか。簡言すれば、即ち彼等がこの平等の二字に對し餘りにも無自覺であつたこと之れだ。歐米は平等を争得して後、何が故に流弊を發生したのであらうか。即ち民権が充分に發達して居なかつたがため、自由平等が正しき軌道を歩むことが出来なかつたからだ。自由平等が正軌に復歸しなかつたがために、歐米人民は今尙ほ民権のために奮闘しなければならぬ。奮闘するがために、自然團體を結ばねばならぬ。人民は團體を結ぶことの重要なことを知つたがために、奮闘の結果集會結社の自由を得た。この自由を得た結果幾多の團體は生れた。政治上には政黨が生れ労働者の間には労働黨（組合）が組織せられた。

現在世界に於ける團體の中最大なるものは労働黨であるが、労働黨は革命後人民が自由を争得するに及んで、始めて發生した。その發生の情形は何んなであつたか。最初の頃、労働者には智識なく覺醒もせず自分達が不平等の地位に置かれてゐることも薩張り知らず、又資本家の壓迫が如何に激しいものかも知らなかつた。恰も米國の黒奴が、ただ祖先からの人の奴隷となるものであることを知るのみで、奴隷の地位がいいか悪いか、又奴隷の外に別に自由平等な階級のものがある

ることを顧と知らなかつたと同様に、當時各國の労働者は、元來自己は如何なる地位にあるか知らなかつたものであるが、その後労働者以外の幾多義を好む人士が労働者に代つて不平を抱き、労働者と資本家との不平等なる道理を労働者の間に宣傳し、彼等を喚び醒し、彼等の團體を組織せしめ、貴族及び資本家に對し抵抗せしめんとするに至つた。ここに於てか世界各國の労働黨は始めて發生したのである。労働黨が貴族及び資本家に對抗する場合、彼等は如何なる武器を以てしたか。労働者の抵抗の唯一の武器は、即ち消極的不合作である。不合作の動作は即ち罷工である。この武器は軍人の戰爭に用ふる武器よりも更に一段と有力である。若し労働者の國家又は資本家に對する要求が容れられないとき彼等は聯合して一齊に罷工する。この種罷工の影響は全國人民に及び、普通の戰爭に比較して劣るところはない。労働者以外の、智識極めて高邁なる義を好むの士が領袖となつて、労働者を指導し、彼等に鞏固なる團體を組織すべきことを教へ、罷工の方法を教ふるが故に、彼等罷工の一度び發動するや、社會的に絶大なる力を發生する。この偉大なる力が出來たために、労働者は始めて自らの存在を意識し、平等を説かんとしたのである。英佛労働者はこの意識に基いて平等を説いたのである。團體の内部を見るに、之を指導する領袖は、何れも本職の労働者ではなく、勿論貴族でもない、即ち學者であつて、皆外部から入つて來た

ものである。従て労働者は團體がその目的を達するときになると、それ等領袖を排斥する。斯うした領袖排斥の風潮は、歐洲に於ては最近數十年來漸次發生したものであるが、抑もかゝる風潮の起つた原因と云へば、即ち労働者が平等の迷路に入り込み、平等の流弊に陥つたからのことで、斯様な流弊が發生した後、労働黨は彼等を引導指揮すべき良領袖を失ひ、のみならず労働者も亦自己を引導すべき智識を持たないために、團體としては非常に大きい團體ではあつたが、一向退歩しない計りか、その大力量を發揮することも出來ず、且つ遂には之を維持してゆく人もなくなつて了つた。ここに於て労働黨の内部は漸次腐敗し、大團體としての力を失つて行つた。労働者の團體は外國には非常に多いが、中國にも亦最近十餘年來少ならず成立した。中國に於ては革命後、各業労働者が聯合して團體を成立したが、それ等團體の領袖も亦大多數労働者出身ではなかつた。従て之等領袖は、その誰も彼もが労働者の爲めに利益を謀ることが出來ないのは固より當然ではあつたが、中には團體の名義を藉りて労働者を利用し、自己の爲めに私利を圖るものが非常に多かつた。そうは云ふものの、眞に大義の爲めに労働者に代つて力を竭したのも亦勿論少くはなかつた。斯う云ふやうな状態であつたから、労働者としては、その領袖の善惡を明かにし之を區別する必要は確かにあつた。

現在中國の勞働者達も、平等と言ふ點に就いては、御多分に洩れず、平等の流弊が発生しつつある。一例を擧げて見れば、余は數日前漢口から送つて寄越した勞働新聞を受取つたが、その中に二つの大標題があつて、第一の標題は「我等勞働者は長衣を著るものを領袖とせず」、第二の標題は「我等勞働者はただ「パン」を求むるがために奮闘するものであつて政治を問はない」と云ふのであるが、この標題に依ても彼等の口調が歐米の勞働黨が領袖を排斥するとき用ゐると同一であることが分からう。歐米の勞働者は非勞働者出身の領袖を排斥はしても、彼等の目標はやはり政治を問はんとするにあるのであるから、漢口勞働者の第二の標題は歐米の勞働者の口調と全然同一であるとは言へない譯だ。

凡そ一國の内人民一切の幸福は、何事に限らず政治問題に歸する。國家の最大問題は即ち政治であらねばならぬ。若し果して政治にして不良なりとせば、國家の如何なる問題も一つとして解決することは出来ないであらう。例へば中國は現在外國の政治經濟の壓迫を受け一年間に十二億元の損失を蒙りつつあるのであるが、これとりもなほさず、中國の政治が不良にして經濟の發達し得ざるが爲め、毎年かくも大なる損失を受くるものに他ならない。この十二億の中最大のものは輸入超過に依る年五億元の損失であり、この五億元の貨物はすべて勞働者に依て生産せられた

ものであるが、中國の工業の發達せざるが爲めに、已むを得ずこの損失を受けて居るのだ。我等がこの問題について研究するに、中國労働者の所得勞銀は世界中最も低廉であり、然もその労働は之と反對に世界中で最も苦しいものであつて、一日の労働は十數時間に達する。中國の労働にして既に斯の如く最も低廉であり、労働亦最も勤苦するものとせば、外國の工業と競争して勝算あるべきは理の當然であらねばならぬ。然も何が故に中國労働者の生産する輸出貨物が、外國労働者の生産にかかる輸入貨物に敵し得ないのであるか。何が故に我等は、この工業關係に於て年々五億元からの損失をしなければならぬのか。即ち中國の政治が不良にして我等政府の無能なることがこの最大原因でなければならぬ。若しも政府にして有能ならば、五億元の損失をしなくても濟む筈である。我等がこの五億元の損失を避け得たならば毎年五億元だけの「パン」が餘計に得られるのだ。然らば中國の政府が有能であるとして、如何にして五億元の損失を免れ得るであらうか。即ち若し果して政府が有能であれば、關稅を増加することも出来るであらう。關稅を重加すれば、外國品は自然輸出困難となり、中國の土貨は販路を擴張することが出来るであらう。そして之に依て全國の労働者は年々五億元からの金を餘計にその懐に入れることが出来るのである。けれども漢口の労働者から送つて來た新聞の標題のやうに、労働者が政治に關與しない

と言ふのであれば、既に政治に關與しないと云ふ以上、自然政府に向つて關稅の増加を要求し、之に依て外國品を抵制して土貨の提唱をしないと云ふ譯になり、外國品を抵制し土貨を提唱しなかつたならば、中國の土貨は製造せられず、土貨にして製造せられなかつたならば労働者の働くべき仕事は失くなつて了ふであらう。労働者の仕事迄もなくなつて了つたならば、何處に「パン」を求めやうとするのか。之に依ても労働者に良領袖のない結果は、彼等の言論が事毎に錯誤し、然も斯の如き労働者の團體は断じて發達すべきものでなく、久しからずして、必ず消滅すべきものと云ふことが想像せられる。實際彼等は非常に無智なるがため、「パン」の問題即ち經濟問題であり、經濟問題と政治問題とは連帶關係に在ると云ふことが判からぬのだ。政治に關與せずして果して如何にして經濟的の「パン」の問題を解決し、「パン」を要求せんとするのであるか。漢口労働者のかかる標題は、錯つた平等の生んだ流弊を説きつつあるのだ。故に我等の革命は單に平等を争ふと云ふことは出来ない、民權を争ふと主張しなければならぬのだ。民權にして若し果して完全なる發達を遂ぐる事が出来なかつたならば、假令平等を争得しても、やはりそれは一時的のものに過ぎず、近き將來に消滅せねばならないであらう。我等の革命は民權を主張する。平等を標題として居ない。平等は民權の中に包括されて居るのである。若しも平等がよ

い場合があれば當然之を採用し、悪いときには必ず之を除去しなければならぬ。斯の如くしてこそ、民権を發達せしめ平等を善用することが出来るであらう。

余は曾て一個の道理を發明した。即ち世界の人類をその天賦に依て大約三種に分ち、先知先覺あるもの後知後覺あるもの及不知不覺のものとした。先知先覺あるものは發明家である。後知後覺あるものは宣傳家である。不知不覺なるものは實行家である。この三種の人が相互に作用し協力進行すれば、即ち人類の文明の進歩は、必ず一日千里たり得るであらう。

天の人を生むやその聰明才力は不平等であるが、人心は則ち必ず之を平等ならしめんと欲する。これ道德の最高目的であり、然も人類がまさに努力進行しなければならぬところのものである。然し乍らこの道德の最高目的を達せんがためには、結局如何なる方法に依らなければならぬのか。この點我等は人類の兩種の思想を比較對立せしむることに依て、之を明白にすることが出来ると思ふ。兩種の思想、即ち一は利己であり他は利他である。利己を重んずるものは、常に他を害することは一尙お構なしである。斯様な思想の發達した結果は、即ち聰明才力の人は専らその才能を利用して他の利益を奪取し漸くにして積んで專制階級となり、政治上の不平等を生み出すこととなる。これ民権革命前の世界である。又利他を重んずるものは、常に自己を犠牲に

し、然も之を樂しんで爲す。この種思想が發達すれば、即ち聰明才力の人は専らその才能を利用して他人の幸福を謀り漸くにして積んで博愛的宗教慈善の事業となる。ただ宗教力も及ばず慈善事業を以てしても救濟出來ない場合は、之が根本的解決のためには、何うしても革命を實行して專制を推翻し、民権を主張して以て人事の不平等を平かにしなくてはならないこととなる。かくて以後、三種の人を調和して之を平等ならしめんとすれば、即ち人々は服務を以て目的とし、奪取を以て目的とせず、聰明才力の愈大なるものは、まさにその能力を盡して千萬人の務に服し、千萬人の幸福を造らねばならぬ。聰明才力の稍小なるものも亦當然その能力を盡し十百人の務に服し、十百人の幸福を造就しなければならぬ。所謂「功者拙之奴」は即ちこの道理を云つたものだ。而して聰明才力の全然なきものに至つても亦當然一己の能力を盡して一人の務に服し、一人の幸福を造らねばならぬ。斯の如くして始めて、天生の聰明才力の不平等は、人の服務道德心の發達に依り、必ず之を平等たらしむることが出来るであらう。これ即ち平等の精義である。

第四講 中國並に歐米に於ける民権發達の經過及び現狀

前數次に互つて説いたところに依て、我等は歐米の人民が民権を争ふこと己に二三百年になる

ことを知つた。彼等は二三百年の間争つて來たが、果して何れ程民權を得たであらうか。即ち本日は、歐米人民が最近二三百年間に如何程の民權を争得したるか、及び彼等の民權は現に何の程度迄進歩してゐるかとの二つの題目に就いて語りたうと思ふ。民權思想は既に中國に傳染してゐるが、中國人の民權に對する智識なるものは、之を書物及び新聞紙の中から得たものである。ところが民權を主張するその書物及び新聞紙なるものは、元來必ず民權賛成の側に立つもので、自然日頃から、民權を研究してゐるものはすべてこの民權賛成の側に立つ書物及び新聞紙から觀察することとなり、然もその賛成側に立つ書物及び新聞紙たるや、必ず民權風潮の如何に轟々烈々であるか、民權思想の如何に蓬々勃々たるかを説いて居るものであるから、之等書物並に新聞紙を見、彼等の鼓動を受け、民權思想を發生した我等が、歐米人の民權を争ふこと二三百年、その都度最後の勝利を得て來た、從て今後の世界各國の民權は必ずやその極點に迄發達するであらう、我等中國も亦この世界の潮流の中に在つて民權主義を提唱して民權を發達せしめなければならぬと考へることとは極めて當然のことである。又之と同時に、一般に中國の民權を提唱して歐米と同程度に迄發達せしむることが出来るならば我等が民權を争ふの目的は既に達せられたものである。民權がその地步に迄發達し得れば、國家は非常に文明となり非常な進歩をしたものと言はなければならぬ

と考へるも亦極めて當然であらねばならぬ。併し乍ら歐米民権の實狀は、それ等書物及び新聞紙等から觀察した事實とは、非常に相異なる場合が多い。歐米に於ける民権の實狀を考察するに、彼等所謂先進國即ち米國佛國の如きは、革命後一百餘年を経過して居るが、彼等人民は果して何れだけの民権を獲得したであらうか。民権を主張する人々の見解に従へば、彼等の獲得した民権は尙非常に少ないのである。當時歐米の民権を提唱した人々は、すぐにでも民権の充分なる目的に到達し得るものと考へてゐたから、一切を犠牲にし同心協力し一致して生命を抛つて争つたものである。ところが勝利の曉、彼等の争得したところの民権なるものは、革命當初彼等が希望してゐたものとは雲泥の差であつて、尙民権の充分なる目的を達することは出来なかつたのである。

今米國獨立戰爭の情形を回顧して見やう。戰爭は八年に互つて行はれ、纔に最後の勝利を得初めて民権の目的に到達した。米國の獨立宣言に言ふ「平等と自由とは人類の天賦である。如何なる人もこの人類の平等自由を奪ひ去ることは出来ないと。當時米國革命の目的は、本來充分なる自由平等を争はんとするにあつた。ところが八年に互つて戦ひ争得した民権は、案外尙極めて少ないものであつた。何が故に八年の久しきに互つて争ひ争得した民権は、案外尙極めてあつたか。その理由は如何に。當初米國の民権に反對したものは英國皇帝である。一方米國人民は

英國皇帝の壓迫を受けたればこそ、獨立を主張し英國と戦つたのである。故にこの戦争は君權と民權との戦争であつた。戦争の結果は、元來民權の勝利に歸したのであるから、當然充分な民權が獲得せられなければならなかつた筈であるが、何うして充分なる目的を達し得なかつたであらうか。それは獨立戦争に勝利を得て君權を打破することはしたものの、民權を主張する人々の間に、民權の實施に關する問題、即ち民權を果して何の程度迄行ふべきかの問題が発生したからである。この問題の研究に當り、民權を主張する同志の間に各その見解を異にするものを生じ、之がため内部が二大派に分裂した。米國革命に開國の元勳として有名な「ワシントン」のあつたことは衆知の事柄であるが、當時彼を輔けて英國の君權に反抗したものの中には、幾多の英雄豪傑があつたもので、就中「ワシントン」の財政部長たりし「ハミルトン」、國務部長たりし「ゼフアーンソン」の如きはその大なるものである。この二大人物は民權の實施問題に對して各その見解を異にし、各自黨員も極めて多數に上り、遂に分裂して絶對相容れざる二大黨派となつて了つた。「ゼ」氏一派は、民權は人類の天賦である。人民にして果して充分なる民權を有し人民に於て之を自由に使用せしめたならば、その間必ず自ら節度あり、そして民權を使用するときは必ず許多の善事を爲し國家的事業を充分進歩せしむるに足るであらうと信じて居た。「ゼ」氏のこの言論は

人の性善説を主張するものに他ならず。人民に充分なる民権ある場合、假令時あつてその善なる性を充分發達せしめ善事をなし能はず、却て民権を誤用して惡事をなすことがあらうとも、それは人民が障礙を遇つて一時己むを得ざるに出でた舉動であると言ふにあらう。之を要するに、人には既に天賦の自由平等の存する以上、人々は當然政權を持たなくてはならぬ。然も且つ人々には聰明がある。若し果して彼等に充分なる政權を與へたならば、そして個々をして國事を管理せしむることが出來たならば、必ずや幾多の大事業を成就するであらう。人々が皆その責任を負ふて立ち國家を治むるならば、國家は長治久安であらうと云ふにある。これ即ち「ゼファアソン」一派の民権に對する信仰である。

次に「ハミルトン」一派の主張するところは、恰度「ゼ」氏一派の主張と正反對である。「ハ」氏は、人性は完全にすべて善ではあり得ない、若し果して人々が充分なる民権を持つてゐたならば、性惡のものは政權を濫用し惡事を働くであらう、如斯き惡人が國家の大權を得るに至らんか、彼等は國家の利益を自ら私し自ら利し自己の同黨のものに分配するに至るであらう、そして國家の凡ゆる道徳も法律も正義も秩序も一切顧みられず、その結果一國三公どころではない、暴民政治と化し、即ち自由平等は極端に趨り無政府となつて了ふであらう、斯様に民権を實行する

が如きは、常に國家の進歩を不能ならしむるのみならず、却て國家を搗亂し國家を退歩せしむるに至るであらうと考へて居たのである。従て「ハ」氏は國家の政權は完全に人民に與ふると言ふ譯にはゆかない。政府に與ふべきものである。即ち國家の大權を中央に集中し普通人民にはただ制限的民權があれば充分である。若し果して普通人民の無制限に民權を賦與するならば、人民は皆惡事をなし、而もこの積惡事の國家に及ぼす影響は、皇帝の惡事よりも更に甚しいのであらう。何故ならば、皇帝の惡事をなす場合に於ては尙多數人民が之を監視し之を防止し得る。然るに若し一般人民が無限制的民權を得て皆が惡事を爲すに至らんか、誰も之を監視し防止するものがないからであると主張する。故に「ハミルトン」の説に依れば、従前の君權は勿論制限しなればならないが、現在の民權も亦當然制限を加ふべきものであると言ふにある。彼はこの主張に基き、一派を創立して聯邦派と稱し、中央集權を主張し地方分權に反對したのである。

米國は獨立戰爭以前十三州より成り、悉く英國の統轄に歸し、自らこれを統一することが出来なかつたものである。その後、英國の專制愈激烈を極はめ忍受せんとするも能はざるに至り、遂に英國に反抗することとなつたが、當時に於ては、一般人民は英國に反抗するといふ共同の目標を持つてゐたがため、その英國と戦ふや協心協力し得たのであつた。戰勝後各州は依然

分裂甚しく依然統一することは出来なかつた。革命當時十三州の人口は三百萬に過ぎず、その三百萬の中英國に反抗したものはただの二百萬人で、その他一百萬のものは依然英國皇帝に賛成してゐた。換言すれば當初各州の人民中三分の一は英國の保皇黨であり、残り三分の二が纔に革命黨と言つた次第であつた。そしてこの三分の一の保皇黨が内部で奮動したため、米國獨立戦争も完全に戦勝する迄に實に八年の長年月を費したのであつた。戦勝後保皇黨の著名なるものは、身の藏すべきところもなく、北方に逃れ「セントローレンス」河の北部に移住し、「カナダ」大殖民地を建設し、今に至る迄英國の屬領として英國に忠勤を拔んでゐる。

米國は獨立後國內に敵はなくなつたが、三百萬人が十三州に分れ毎州平均二十餘萬人に過ぎず、各々割據して下らず統一することが出来なかつた。従てその國力たるや、依然薄弱極まるもので、將來とても容易に歐洲のために吞滅せられ得べき状態にあり、前途の生存は、眞に危険極まるものであつた。ここに於て各州の先知先覺者は、この種危険を免がれ國家の永遠の生存を圖らんとし、大いに國力の増加に努力したものである。國力を増大せんとしたが故に各州を聯合して一大國家を建設すべきことを主張したのである。當時提唱せられた聯合の辦法には、専ら民權を行はんとするもの及び専ら國權を行はんとするものとの二派があつた。前者の主張するところは

即ち地方分権であり、後者の主張は即ち中央集権であつて即ち民権を制限し各州の大権力を聯合して中央政府に集中せんとするもので、又聯邦派と云ふことも出来る。この兩派は互に言論に文章に論争し、その争は随分久しく繼續せられ、且つ激烈を極めたものであつたが、結局最後の勝利は制限的民権を主張する聯邦派の手に歸した。かくて各洲は聯合して一合衆國を建設し、聯邦憲法を公布することとなつたのである。米國は建國以來引續き今日迄、すべてこの憲法を用ひて來た。この憲法は即ち三權分立の憲法で、立法權司法權及び行政權を明瞭に區別して、彼此相侵犯することなからしめたものである。これ世界人類の有史以來、始めて行はれたる完全なる憲法である。米國は即ち、三權分立の成文憲法を實行した最初の國家であり、同時に世界に於ける成文憲法を有する國家の中にて、第一に破天荒の先例を開いた國家と言はなければならぬ。この憲法を我等は米國聯邦憲法と稱する。米國は聯邦を結合し憲法を制定してから、世界最富の國家となり、更に歐洲大戰を經過して世界最強の國家となつた。

米國が今日かくも富強となり得た原因は、聯邦憲法が成立し、地方人民の事はこれを各州をして自治せしめた點にあるところから、十數年來我國一般文人志士にして中國現下の問題の解決に志すものは、何等根本的に中米兩國の國情に就き比較することなく、ただただ米國の富強たり得た

結果のみに就いて論じ、中國の希望するところは、ただ國家を富強ならしむるにある。そして米國が富強たり得た所以は聯邦組織にある。だから中國にして若し米國同様に富強たらんがためには、是非とも聯省を行はねばならぬ。米國聯邦制度の根本的長所は各州自ら憲法を定め自治を行つてゐる點にある。我等にして若し米國の聯邦制度を學んで聯省を行はんとするならば、各省自ら憲法を定め、分省自治を行ひ、省憲法の實行さるるを俟つて、然る後再び聯合して國家憲法を成立することがその根本であらねばならぬと考へてゐる。質して之を言へば、即ち本來の統一ある中國を以て二十幾個の獨立單位となし、一百年前米國に於ける十幾個の獨立州同様の状態に置き、然る後再び之を聯合せしめんとするに他ならない。この種見解と思想は眞に極端なる誤解に陥れるものにして、全く人の口眞似であり習つて察せざるも甚しと言はなければならぬ。斯の如くただ米國が聯邦制度を行つて世界最富強の國家たり得たのを見て、今中國を富強ならしむるが爲めには我等も亦米國の聯邦制度を學ばざるべからずと言ふが如きは、即ち前述の歐米人民が民權を争ふや、民權を争ふと云はずしてただ自由平等を争ふと説けると同然、すべて之れ同じく盲從で革命に當り又歐米人の口號を學んで自由平等を争ふと説けると同然、すべて之れ同じく盲從でなくて何であらう、すべて之れその妙を明かにせざるものと言はずして何であらう。聯省自治を

主張する人々は、米國は幾多の小州を基礎とし、之を聯合して各自治を實行し富強となり得た、中國も亦その地方基礎として許多の行省を持つて居り、又當然自治も出來、富強たり得ねばならぬと極めて皮相なる觀測を下し、米國が獨立當時果して如何なる状態にあつたかに就いては何等知るところがない。米國は獨立後何が故に聯邦せんとしたであらうか。之れかの十三州が從來完全に分裂状態にあり、何等統一聯絡するところがなかつたがために聯合せざるを得なかつたのではなかつたか。

が中國の状態は又何のやうであらうか。中國の本部は從來形式上十八省に分れ、之に東三省及び新疆省を加へて合計二十二省とし、この外尙熱河、綏遠、青海の多數特別區域及蒙家古、西藏の各屬領があり、これ等地方は清朝二百六十餘年間完全に清朝政府下に統屬せられ、明朝のときも亦各省は非常によく統一され、更に遡つて元朝の頃には、單に中國の版圖を統一してゐた許りでなく殆ど歐亞兩洲を統一し、その以前宋朝の頃にも各省は非常によく統一せられて居た。南渡以後に至つても、南方各省は又統一されてをり、更に上代に遡つて唐朝漢朝時代にも中國各省の統一せられなかつたことはない。之に依ても、中國各省は歴史上從來すべて統一せられて居り、分裂して居らず統屬不能ではなかつたことが判るであらう。而して統一のときは即ち治であり不統一のと

き即ち亂であつた。米國の富強たり得た所以は、各州が獨立自治を實行したためではなく、やはり各州聯合した後、進化して統一的国家となつたことに緣由する。故に米國の富強たり得たのは各州統一の結果であつて各州分裂の結果ではない。中國は元來既に統一せられた國家であつて各省を再び分開すべきではない。

目下中國は一時統一する能はず、暫時亂象を呈しては居るもの、之は武人の割據に依るものに他ならない。この種割據は我等の割除せざるべからざるもの、決して聯省の如き謬れる主張を繰返し、武人割據のために變符を作るが如き愚を敢てしてはならない。若し之等武人が口實を作つて各一方に割據したならば、中國は二度と再び富強たることは出來ないであらう。米國の聯邦制度を以て富強の原因なりとするが如きは、全く因果を顛倒したものと云はなければならぬ。何が故に外國人は現に中國の共管を行はんとするのであるか。彼等は何處に中國の缺點を見出したか。即ち彼等は中國の智識階級者の言論及主張が事毎に斯の如く世界の潮流に相反しつつあるを見るからである。故に彼等は中國はとて再起は難かしからうと考へ、そして言ふ、中國のことは中國人自らの力では管理することは出來ない。列強は我等に代つて共管を實行しなければならぬと。

我等現在の東亞に於てこの現下の潮流に處し、若しもこの聯邦の二字を正當に使用せんがためには、中國は日本と聯合しなければならぬ、或は中國及び從來統一したくない安南、緬甸、印度、波斯、「アフガニスタン」は聯合せねばならぬと説くべきである。今若し亞細亞を富強たらしめ歐洲に抵抗し得るが爲めには、一個の大國を聯成しなければならぬと云ふのなれば、それでこそ話も判かると云ふものである。中國の本部十八省東三省及び特別區に至つては、既に清朝時代統一され聯屬して居た。そして我等は清朝を覆滅し清朝の領土をその儘繼承して纔に今日の共和國が出来たのであつて、何が故にこの從來の統一ある國家を態々分裂せしむる必要があらうぞ。思ふに中國の分裂を主張するものは、必ず各省に自ら割據せんとの野望を抱く野心家であつて、唐繼堯が雲南に、趙恒惕が湖南に、陸榮廷が廣西に、陳炯明が廣東に夫々割據するが如き、何れもその類に他ならぬ。この種割據式聯省は軍閥的聯省であり、人民の自治的聯省ではない。この種の聯省は中國に有利に非ずして個人に有利である。我等はよくこの間の區別を明瞭にして置かねばならぬ。

米國は獨立當時に於ては十三州は毫も統一なく、之を統一ある國家に聯成することは實際非常に困難なことであつた。だから「ハ」氏「ゼ」氏の激烈なる論争となつたのである。その後聯邦

憲法を制定して本憲法に基き各州の自由投票を行つた結果、最後に「ハ」氏一派勝利を占め、これより「ゼ」氏一派の主張は漸次失敗して行つた。聯邦憲法頒布前に於て全國人民の主張が二大派に分れてゐたために、憲法を頒布して兩派の主張に對する一種の調和物たらしめ、全國的大政權の中、憲法に明白なる規定あるものは中央政府に屬し、憲法規定以外のものは地方政權に屬せしむることとしたのである。例へば幣制の如きは、當然中央政府の辦理すべきもので地方政府の關與すべき筋合のものでなく、又外交の如きも中央政府に於て處理すべきやう規定せられ、各州は自ら直接外國と條約を訂定することの出来ないことになつてゐる。その他國防に關する陸海軍の訓練及地方關係の民團の管理等の如き大權もすべて中央政府の辦理に歸し、たゞ複雑なる事業にして、未だ憲法に中央政府に歸すべき旨の規定なきものに關しては、各州政府に於て夫々處理すべきことになつて居る。この種の劃分こそ即ち中央と地方との調和方法である譯だ。米國のこの種調和辦法に依て人民は果して何れだけの民權を獲得したであらうか。當時彼等が得たところ方の民權は、僅に一制限的選舉權に過ぎなかつた。その選舉たるや、たゞ議員及び一部地官吏の選舉に限られ、大統領及び上院議員の選舉に至つては依然間接選舉制度を用ひ、人民に於て選舉人を選擧し更に其の選舉人に依て大統領及び上院議員を選擧したるものであつた。其の後民權

漸次發達し進歩して今日に至り、漸く大統領及び上院議員並地方人民が直接利害關係を有する地方各官吏を人民に於て直接選舉することとなつた。これ普通選舉と言はれるものである。故に米國の選舉權は制限選舉から漸次普通選舉へと變遷して來たものである。けれどもこの種普通選舉權を享受し得るものは男子に限られ、女子は二十年前迄は、まだこの種普通選舉權はなかつたものである。

歐米に於て女子の選舉權獲得運動の風潮が非常に激烈となつたのは最近二十年來のことに屬する。當時歐米に於ては、女子の選舉權獲得運動が、女子の聰明才力及び始能力の點に於て到底男子には及ばないとの理由の下に、一般にその成功が絶望視せられ、一般の反對―即ち單に男子のみでなく多數の女子の間にも―に遇ひつゝあつたことは周知の事柄である。斯様な有様であつたから、全國の婦人が舉つて如何に激烈な運動を持続しても、その成否は、まことに豫測し難き状態にあつたのである。七八年前に至つて英國婦人は初めて此の運動に成功した。そして其の後米國も亦成功した。思ふにこの成功の原因は、歐洲戰爭當時男子は悉く兵士となつて力を戰場に致し、國內の許多の事業に男子勞働者の缺乏を來し、即ち兵工廠の職員職工、市街電車の運轉手車掌及び一切の後方勤務と言つたやうなものに對し男子を分配し切れず、何れも女子を以て補充したのであるが、

之がため従前女子の選舉權に反對し女子には男子の事業をすることは出来ない」と云つてゐた人も、其のときになつては最早彙の反對論の根據を失つて反對するを得なくなり、女子にも選舉權を與へよと主張してゐた人々は漸く完全なる勝利を占め得た。かくて女子の選舉權は歐洲大戰後始めて確定せられたのであつた。

斯の如く歐米の革命の目標は、元來すべて民權に到達せんとするにあつた。かの米國獨立戰爭の如きも即ち民權を争ふにあつたが、獨立後民權を主張した同志が又兩派に分裂し、一は充分なる民權を實行すべきを主張し、他は民權を制限し、國家に於て極大の政權を保有すべきが當然であると主張した。その後幾多の事實は一般人民には充分なる民權を行使すべき智識も能力もなきことを確實に證明した。かの「ゼファーソン」及びその一派が民權を争ひ、その結果争はんとした民權は却つて失敗に終つたが如きその一例で、即ちこれを以ても一般民衆が政權の運用に如何に無知であつたかを證明することが出来よう。斯うした譯で從來二百年來の歐米革命の標題は悉く民權を争ふにあつたに拘はらず、その争ひ得た結果は、たゞ男女の選舉權の獲得したに過ぎないのである。

次に佛蘭西革命に就いて云へば、當時主張せられたものも亦民權を争はんとするにあつた。従

て民権を主張する學者は、例へば「ルッソー」等の如く、人には天賦の權利があつて君主の侵奪し能はざるものなることを主張したのである。そして「ルッソー」の學說から佛蘭西革命は發生した。佛蘭西革命後民権は實行せられた。之がため一般の貴族及び皇室は何れも非常な打撃を受け、殊に佛國のその如きは、遂に立つ能はず外國に亡命したものである。當時佛國人民は、充分なる民権を以て第一次の試験を試みつゝあるのであるが、全國人の中誰一人として敢然として民衆の無智と無能を指摘して充分なる民権に反對しやうとするものはなかつた。何故ならば、若しそんなことを口にしやうものなら、一般民衆から反革命と見られ、早速斷頭臺上に上されねばならなかつたからだ。故に其の頃は全くの暴民專制に陥り、無政府状態を現出し、社會上に異狀な恐慌を與へ、人々の生命は朝に夕を測り難きに至り、即ち眞の革命黨さへも、時に不用意に一言口を洩らせたがために、大衆の反感を買ひ死刑を受くと言つた状態に立ち至つたものである。従て當時充分なる民権の試験時代に於ては、單に王公貴族のみならず幾多の人士が殺されたもので、即ち「ダントン」の如き一流人物を始め、平時非常に熱心なる革命志士さへも、たゞ一言民衆の意見と合はなかつたがために、人民のために殺されたものも少くない。その後流石の佛國人民も斯様な行爲が余りにも暴虐に過ぐることを自覺し、従前民権に賛成した人も、その熱の冷めて來

るに従ひ、却つて民権反對論者に變じ、遂に「ナポレオン」を推して皇帝とするに至つた。之に依つて民権の極大なる障礙は生れたのである。この種障礙は君權から發生したのではない。前數回に亙つて述べたるが如く、民権の風潮は一百年前既に澎湃たるものがあり、然も今や世界の大勢は民権時代に到達してゐるのであるから、今後とても日一日と發達すべきものであるが、この民権時代に至つて、君權が消滅したにも拘はらず却つて、かくも極大なる障礙が發生したとは何うしたことか。之は如何なる原因に依つて造られたものか。即ち民権贊成の所謂穩健派の人々が、制限的民権國家集權を主張して充分なる民権に反對した、それは確かに民権障礙の一原因であつたに相違ない。けれども此の一派の人々の民権を阻止する力は左迄大きくはなく民権の進歩を阻礙することも余り多くはなかつた。そして却つて充分なる民権を主張した人々こそ、皮肉にも民権障礙の重要な原因をなしたのである。佛蘭西革命の如き人民が充分なる民権を有してゐたがために領袖は排斥せられ、幾多の有識にして専門的な領袖も悉く殺されて了ひ、残るは一班の暴徒ばかり、然も彼等暴徒は事物に對する明瞭なる觀察を缺きその上非常に人に利用せられ易かつた。既に良指導者を失つた全國人民は、何事が發生しても誰が是であるか非であるかが頼と解らず、たゞ人から煽動せらるれば一致して盲從附和すると云つた有様であつた。斯様な現象は寔に

危険千萬であつたと言はなければならぬ。故にその後人民は皆覺醒して再び民權を主張するものがなくなつたのである。この種反動力に依つてこそ、民權の極大なる障礙は生れたもので、然も此の種障礙は、謂はゞ民權を主張した人々自ら招いたものである。

歐洲に於ては佛國以外、丁抹、和蘭、葡萄牙、西班牙の諸小國の如きも知らず知らずの間に又民權風潮を發生した。民權の潮風は歐米に於ては障礙に遇ひ君權の反抗を受けたけれども消滅せず、民權自身の障礙にぶつつかつても亦自然に發達して之を阻止することが出来なかつたが、そは如何なる理由に依るものであらうか。大勢の趨くところ潮流の至るところ、之を阻止すべき方法がなかつたからである。この道理に基いて幾多の專制國家は、潮流に順應して風を見て事を行ふたものである。例へば英國の如きは、従前の革命に於て皇帝を殺しその後十年ならずして再び復辟した國であるが、機を知り變に善處する英國の貴族達は、民權の力の大にしてとても反抗出来なことを知つてゐたから、皇室及び貴族は民權に反抗せず之を調和することに苦心したものである。民權は本來英國に發生したものであるが、復辟後は民權を推倒して貴族政を執り、國事を處理するものは貴族に限られその他の階級のものは一切之に關與することが出来なかつたが、一千八百三十二年後、貴族以外の一般平民も始めて選舉權の享有を許可せられ、更に歐洲戰後女子も

亦選舉權を獲得した。英國がその屬領を遇するに當つては更に一段と退讓手段を善用し、民權の潮流に順應して來たものである。「アイルランド」は英國三島中の一つであるが、英國は當初武力を以てこれを壓迫して來たが、その後民權の風潮の擴大するを見て壓迫を熄めて却つて退讓を主とし「アイルランド」の獨立を許容した。英本國の三島の中すら斯様であるから、外部に對しては勿論のこと、埃及の如きに對しても亦退讓政策を執つたのである。埃及は歐洲大戰當時英國のために多大の力を提供したもので、當時英國は埃及人の援助を求むるがため許多の權利を允許し彼等に爾後の獨立を許容した。ところが歐洲大戰後、英國は前言を食んで曩に許容した權利を悉く履行しようとしなかつた。そこで埃及は獨立を求め前約の履行を要求した。その風潮の擴大するに及び、英國は又之に讓歩してその獨立を許すこととなつた。又印度の如きも英國に向つて選舉權の擴張を要求して居たが、英國は亦も之を一律允許した。現在では英國國內に於ても、労働黨を容納し内閣を組織せしめ労働者をして政を執らしめてゐるが、これ等の例に依つても、英國貴族の退讓政策とその民權の進歩とを證明するに足ると思ふ。英國貴族は世界に於ける民權の大勢を洞察しよくこの潮流に順應して之に逆行しなかつたからこそ、彼等の政體を今尚ほ維持することが出来、國家の現状には尙ほ何等の大なる危険も存在しないのである。

世界に於ける民権思想は、米國及び佛蘭西の革命を經過して日一日と發達した。けれども最近の民権思想は、その根本を尋ねて見ればやはり獨逸に發源したものである。從來獨國々民は民権思想に富み、従つてその勞働黨は國內の大多數を占めて居たもので、現在世界に於ける勞働團體の中でも最大なものとは云へばやはり獨逸のものであらう。元來獨國の國權思想は餘程早くから發達してゐたものではあるが、歐洲戰前當時に於ては、その民権の結果は尙ほ英佛に及ばなかつたものである。何故ならば獨逸に於て用ひられた民権對付手段が、英國の如く調和退讓的なものでなかつたがため、その得た結果も自然異ならざるを得なかつたのだ。然らば獨逸従前の民権對付手段は如何に。獨逸に於て民権の發達を阻止せるものは誰か。多數學者の研究は「ビスマーク」であると云ふことに一致してゐる。「ビスマーク」は獨國の名望高く手腕卓越せる大政治家であつて、今から三四十年前の世界に於ける大事業といへば、すべて「ビスマーク」の手によつて造り成せられたもので、世界の政治家は、一人として「ビスマーク」の影響を受けないものとはなかつた。故に三四十年前の獨國は世界最強の國家であり、當時かくも強盛を極め得た所以も全く「ビスマーク」一人のお蔭であつた。然らば「ビスマーク」執政前に於ける獨國の状態は如何なるものであつたか。當時獨國は二十有余の小邦に分れ各邦その民族を同じくしてはゐるが、各

自各様の政治を行ひ米國の十三州以上に分裂して居た。その上「ナポレオン」に征服せられて後は、人民の窮苦更に堪へ難きものがあつた。そこへ「ビスマルク」が出現し、彼の聰明才力と政治的手腕とを運用して、附近の民族を同じうする二十餘邦を聯合し、一個の大聯邦を組織し、ここに始めて後年の大富強たり得るの基礎が出来たのであつた。

十年前に於ては、獨逸は世界最強の國家であり米國は世界最富の國家であつたが、然もその兩國が何れも聯邦であつたがため、一般に中國が富強たらんがためには、やはり獨逸米國の聯邦組織を學ばなければならぬと考へてゐるやうであるが、事實獨逸が後年の大獨逸帝國となり得た原因は、三四十年前「プロシヤ」に過ぎなかつた獨逸が、「ビスマルク」執政後「プロシヤ」を基礎に軍備を整へ武を練り内政を刷新し、その他二十餘邦を聯合した點にあつて、聯邦組織そのものにある譯ではないのだ。「ビスマルク」が各邦を聯合せんとするや、佛國、奧國は極力之に反對したものである。何故奧國は獨逸聯邦に反對したか。即ち奧國は獨逸と同様「チュートン」民族であり、奧國皇帝も亦雄を歐洲に争はんとする大望を抱懷し、獨逸聯邦の強盛が奧國を凌駕するを顧はなかつたからに他ならぬ。けれども「ビスマルク」は才智人に優れ發奮して強を圖り一千八百六十六年突如疾風の如く奧國に宣戰を布告し、一戰にしてこれを打破つた。獨逸は戰勝したので

あるから、本来ならば塊國を消滅せしむることも出来たのであるが、「ビスマーク」は塊國は獨國には反對はしてゐるけれど、もともと獨國と同民族であつて、將來獨國の大患がこの國から起らうなどとは豫測出来ないと考へ、且つその遠大なる眼光は、獨國將來の大患の英佛の他になきを看破し、彼は直に極めて寛大なる條件を以て塊國と媾和し、戦勝の餘威を驅つて何等壓迫がましき態度にも出なかつたのである。そこで塊國は戦には敗れたものの、再び獨國の寛大なる態度に依つて和議することが出来たので深く彼に感謝したものであつた。その後六年一千八百七十年、獨國は佛國と戦つて「ナポレオン」三世を撃破し、巴里を占領し、媾和の際佛國は「アルサス」及び「ローレンス」の二州を獨國に割譲した。この兩次の大戦を経て、獨國の二十餘の小邦は、聯合して益々結束を固うし統一ある國家を建設したのである。かくて獨國は聯邦成立後歐洲大戦前に至る迄、實に世界最強の國家として歐洲の牛耳を執り、歐洲各國では万事獨國を目標として來たものである。獨國がよくかかる地位に迄到達し得た所以は、全く「ビスマーク」一人の力に依るものと言つても差支へない。「ビスマーク」は執政二十年ならずして弱國獨逸を變じてかくも強盛なる國家を造つた。そしてこの大功業があつたがため、獨國の民権は非常に發達しつゝあつたものの政府に反抗することが出来なかつたのである。

「ビスマーク」執政時代彼の能力は單に政治軍事及び外交方面許りではなく、其他種々なる方面に於て全世界を風靡した。即ち民權風潮に對しても亦非常な大手段を以て一般民衆に打勝つたのである。例へば十九世紀の後半普佛戰爭後、世界には民權の戰爭に揭て加へて經濟的戰爭が發生した。當時民權熱は漸次冷却し、社會主義が發生した。この主義は即ち余の主張する民生主義であるが、人民はこの主義の世に現はるるや、民權に對する熱心が漸次冷却し經濟權を争はんとする傾向になつた。この種戰爭は勞働者と資本家との階級闘争である。勞働者の團體は獨國に最も早く發達した。従つて社會主義も亦獨國に於て最も先んじて發達したものであつた。世界に於ける社會主義の最大思想家と言へば何れも獨逸人である。誰しも知つてゐる通り大社會主義者「マルクス」は獨逸人である。即ち彼は「マルクス」主義を實行した人である。露國の老革命黨の何れも「マルクス」の信徒である。獨國の社會主義は彼のときに至つて顯著なる發達を遂げた。

社會主義は元來民權主義と連帶關係にあるもので、この兩主義の發生後は、本來ならばその發達は同時でなければならぬ筈だ。然るに歐洲に於ては民權思想があつて民權革命が發生したのにも拘はらず、何が故にかくも發達した社會主義があり乍ら、その當時經濟革命が發生しなかつたのであるか。獨逸に社會主義が發生した當時は恰度「ビスマーク」の執政時代であつて、他のも

のであれば必ず政治力を以て社會主義を壓迫したであらうが、彼「ビスマーク」はさうした手段には依らなかつた。何故なれば彼は、獨國の民智は既に開け、勞働者の團體は極めて鞏固であつたがため、若しも政治力を以て之を壓迫せんか、徒に勞して功なきことを充分心得てゐたからだ。然らば本來中央集權的獨裁政治の主張者たりし當時の彼「ビスマーク」は、果して如何なる方法に依つて、當時社會の改良經濟革命の實行を提唱しつゝあつた社會主義的社會黨に對付せんとしたであらうか。「ビスマーク」は、政治的力を以てしては到底打消し得ざるを知つて、一種の國家社會主義を實行して、「マルクス」等の主張せる社會主義を防退せんとしたのである。例へば鐵道は交通上極めて重要なもので國家の一基本産業であり、各種産業の發達には不可欠のものである。例へばかの中國の津浦鐵道がその建設前直隸山東及び江北一帶地方は非常に窮苦してゐたものが、一度本鐵道の敷設せらるるや、沿線一帶は變じて非常に富饒の地と化し、又京漢鐵道敷設前には直隸、湖北、河南の諸省も亦荒涼を極めたものであるが、その後京漢鐵道に依り交通便利となりしため、沿線數省の地は變じて極めて富庶の地となつたが如きその一證左であらう。「ビスマーク」秉政當時、英佛の鐵道は過半人民の私有であり、國家の基本産業は資本家の所有に歸し、爲めに全國の産業は資本家に壟斷せられ、社會上に貧富不平均の大弊害を生じてゐたものである。

が、「ビスマルク」はかかる弊害の存在を許さず、國家社會主義を實行し全國の鐵道を買收し國有となし、それ等基本産業を國家に於て經營することとした。労働者側に對しても亦労働時間を定め、労働者の養老費及び保險金に就いて一々規定するところがあつた。元來之等の事業はすべて社會黨が實行せんとした日頃からの主張であつたが、「ビスマルク」の遠大なる眼光は、先づ國家の力を用ひて之を行ひ、更に國家が經營する鐵道銀行及び各種大産業に依て得たる利益を以て、労働者を保護し全國労働者をして衷心満足せしめた。獨國では從來年々幾十萬の労働者が外國に出稼ぎしたものであるが、「ビスマルク」のこの經濟政策の成功するに及んで、嘗に労働者の出稼を絶滅せしめ得たのみではなく、却つて多數外國労働者を獨國に入國せしむるに至つた。

「ビスマルク」は斯の如き方法を以て社會主義に對抗したが、これは事前に之を防止せんとしたのであつて、直接之を打消する方法を採つたのではない。この種防止の方法は、即ち無形の中は人民の要爭問題を消滅せしむることとなり、人民に要爭問題なきに至らんか、自然社會には革命の發生する譯がない。故にこれを稱して「ビスマルク」の民權反對の手段なりと言ふのである。

今過去に於ける世界の民權發達經過の歴史を辿つて見れば、第一次は米國革命である。米國革

命には民権を主張するものの中「ハミルトン」及び「ゼファーンソン」の兩派に分れ、「ゼファーンソン」は極端なる民権を主張し、「ハミルトン」は政府の集権を主張したものである。その後政府集権派の主張が勝利を占めたが、これ民権第一次の障礙である。第二次は佛蘭西革命である。佛蘭西革命には人民は充分なる民権に到達することが出来たが、これを濫用した結果暴民政治と變成した。これ民権第二次の障礙である。第三次の障礙は「ビスマルク」が最も巧妙を極めた大手段を以て民権を防止したそれである。これが民権第三次の障礙となつたのである。以上は即ち歐米に於ける民権思想發達經過の一切の情形である。然しながら民権思想は斯の如く三つの障礙を経過したが、尙ほ期せずして自然自然に發達を續けた。これは人力のよく阻止し得るところではなく又人力のよく助長し得るところでもない、かくて民権は今日に至つて世界の大問題となつた。そして世界の學者は其の守舊派革新派の區別なく、何れも民権思想の遂に消滅せしむる能はず然も其の發達の道程に於ては多少の流弊の免れ難きこと、恰も前述の自由の流弊に於けると同様であることを知るやうになつた。

之を要するに、歐米に於て従前自由平等を争つて得た結果が民権であつて、其の民権が發達してそこに幾多の流弊が生み出された。民権未發達の頃に於ては歐米各國は何れもこれを壓迫し制止

し、君權を以てこれを打消せんと試み、次で君權推倒後民權を主張する人々の間に民權の障礙が生み出され、其の後民權を實行するに至つて又幾多の流弊を生じ、更に民權の障礙となり、最後に「ビスマルク」が人民の民權主張を壓止し得ざるを知り、國家力を以て人民に代つて國家社會主義を實行した。そして之れ亦民權の障礙となつたのである。歐洲大戰後露、獨兩國の專制政府は何れも崩壊した。女子の選舉權も亦數ヶ國に於て獲得せられた。故に民權は今日に於ても依然解決困難なる一問題たるを失はず。

民權實行の原始に遡つて見るに、米國革命後人民の得たところの第一の民權は選舉權であつた。當時歐米人民は民權即ち選舉權位に考へ、人民として若し果して貴賤貧富賢愚の論なく、皆が選舉權を得たとするならば、それはとりもなほさず民權の充分なる目的を達したものと云はねばならぬと考へて居たものである。歐洲戰後三四年來の狀況はまた果して何うであらうか。その間少なからざる障礙を経過したとは云へ、民權に依然顯著なる發達を遂げ、何物もこれを阻止することとは出来なかつた。近來「スイス」の人民は選舉權以外に創制權及び複決權を享有してゐる。人民は官吏の選舉權を有し、法律に對しても亦當然之を創造し修改し得べき權利があるのである。創制權及び複決權は即ち法律に對して言つたもので、大多數の人民が或る一種の法律に對し非常に

便利なりと思惟する場合、人民はこれを法律として創制することが出来る。これ即ち創制權である。之に反し、非常に不便なりと思惟せらるるものは之を修改することが出来る。修改即ち複決權である。故に「スイス」の人民は、他國人民に比して二種の民權を餘計に得てゐる譯で、合計三種の民權があり、一種の民權のみでない。近來米國の新に開拓せられた西北諸州の人民は、「スイス」人民に比較して更に一種の民權を持つてゐる。その民權は罷官權である。この種民權は米國各州に普遍的のものではないが、幾多の州は既に之を實行しつつある。故に米國の多數の人民は現在では、選舉權、罷官權、創制權及び複決權の四種の民權を得てゐる譯で、此の四種の民權は既にこれ等西北諸州に實行せられ非常な好成績を擧げつつあり、將來或は全米或は全世界に擴充實行せらるるに至るやも測られない。世界各國にして將來充分なる民權を保育せんとすれば、必ず米國のこの四種の民權を學ばねばならぬ。然し乍ら此の四種の民權を實行することに依つて、將來完全に民權問題を解決し得るや否や。現在世界の學者は假令人民がこの四種の民權思想をもつことになつても、まだ民權問題は完全に解決し得るものではない、すべては時間の問題であらうと見てゐる。思ふにこの種直接的民權は發生後日尙ほ淺い。従前の神權は幾萬年を経過した。君權も幾千年を経過した。現に今でも各國の君權例へば英國及び伊太利の如きは、多少の問題を

存して居り、單にこれ等の君權なるものは將來必ず消滅すべきものと言ふだけに過ぎない。斯様な状態であるから、何分發生後數十年に過ぎぬこれ等直接的民權は、依然今日に於ても一個の解決することの出来ない大問題であると言はねばならない。

今世界に於ける民權の最も發達した國家に就いて見るに、その人民は政治上如何なる地位を占めつつあるか。幾許の民權を獲得して居るか。即ち最近二百餘年來得たところの結果は、僅々一個の選舉權に過ぎない。この場合人民は選舉せられて議員となつた後、議會に於て國事を管理し得る。凡そ國家の大事はすべて議會を通過して始めて執行し得るものにして、然らざればこれを施行することは出来ない。此の種政體を代議政體と稱する。所謂議會政治である。けれどもこの代議政體の成立後民權は果して充分なる發達を遂げ得たか何うか。代議政體成立前に於ては歐米人民は民權を争ふに當り、代議政體を得たならばまづ無上の民權と言はなければならぬ位に考へてゐたもので、それは恰度中國の革命黨が中國革命を志してからは、よく日本に學び得、又學んで歐米同様に至り得たならば大成功と言はねばならないと考へてゐたのと同様である。若し果して眞に學んで日本又は歐米同様に至ることが出来たならば、上上であると考へてもいいものであらうか何うか。之を明かにせんがためには、次の事實に聽かなければならぬ。

歐米の人民は曾て代議政體を争得したならば大體に於て満足なりとしたものであつた。我中國は革命後果してその代議政體にでも到達し得たか何うか。得たところの民權の利益は果して如何なるものであつたか。現在我代議士は豈猪仔(豚)議員に變り、彼等は錢にさへなれば身を賣り賊を分ち利を貪り、全國人民の齒せざるところとなつたのは衆知の事柄である。勿論これは各國に於て代議政體實行の結果何れも免れ得なかつた流弊が、中國に傳來してその流弊更に甚しく言ふに堪えなくなつただけのことではあるが。諸君にしてこの種政體に對し若し果して無關心であり、之が挽救策を講じなかつたならば、そして國事を擧げて彼等猪仔議員に付託し彼等のなすが儘に放任するならば、國家の前途寔に危險窺りなきものと言はなければならぬ。故に外國人の希望するところの代議政體は即ち人類と國家との長治久安の計なりと云ふことは信するに足りない。元來民權は許多の困難を経過し然る後實行せられ、又幾多の挫折を経過したが、それにも屈せず一日と發達して來たものである。然るにそれに依つて得られた結果は代議政體に過ぎなかつた。各國は代議政體に至つて殆ど行詰りの状態にあるかの如く見える。近來露國に一種の新政體が發生した。この政體は代議政體に非ずして人民獨裁の政體である。この人民獨裁政體とは抑も如何なるものであらうか。遺憾乍ら我等の手元には材料が非常に乏しいから、その究竟するところを

判断し兼ねるが、ただこの種人民獨裁政體は當然代議政體よりも遙かに改良せられたものであると言つても差支なからうと思ふ。

去り乍ら我國民黨が三民主義を提唱し中國を改造せんとして主張するところの民權は歐米のそれと同一ではない。我等は歐米の既往の歴史を材料とせんとするものであつて、彼等を學ばんとするものでも彼等の後塵を歩まんとするものでもない。我等は我等の民權主義を以て中國を改造し、一個の全民政治的民國たらしめ歐米を凌駕せんとするにある。我等にしてこの大目的を達せんがためには、須らく先づ民權主義を研究して明瞭ならしめねばならぬ。本日講義して來た大意は、諸君をして歐米先進國が民權を實行すること一百餘年、その間現在に至つて僅か一代議政體を得たるに止まり、我等がこの種制度を中國に實行して許多の流弊を發生したるを以て、民權の問題は今日尙ほ解決困難なるものとして殘されて居ることを明ならしむるにあつた。余は今後尙ほ二回に亙つて民權主義に就いて講義し、そして本問題に就いて一つの根本的な解決方法を求めたいと思ふ。我等にして之を解決することが出来なかつたならば、中國は歐米の後塵を歩まざるべからず、若し果してよく之を解決し得たならば、中國は歐米を凌駕することが出来るであらう。

第五講 民権問題解決策如何

中國人の民権思想はすべて歐米から傳來したものである。従つて近來我等は革命を實行し政治を改良するにも萬事歐米に模倣する。何が故に我等は歐米に模倣しなければならないのか。歐米近時一百年來の文化を見るに、雄飛突進一日千里の勢があり、種々なる文明は何れも中國よりも遙かに進歩してゐる。例へば武器に就いて言へば、歐米近年の武器は日一日と改良せられ中國の其れに比して遙かに進歩した。幾千年來中國の武器はすべて弓箭刀戟であつて、二三十年以前迄まだそれ等を使用してゐたものである。庚子の年發生した義和團の如き、彼等の目的は歐米勢力を排除せんとするにあり、彼等は歐米勢力を排除せんとしたがために八國の聯合軍と戦つたのであるが、當時用ひられた武器は大刀であつた。大刀を以て聯合軍の機關銃、大砲に抵抗せんとしたのであつた。この種舉動は即ち當時の中國人が歐米の新文化に對する反動であり、彼等の物質進歩に對する抵抗であつた。そして彼等は歐米文化の中國に比して進歩せるを信ぜず、且つ中國文化の尙ほ歐米に勝れるを表示せんがため、更に甚しきに至つては、彼等は歐米の銃、大砲の如き精銳なる武器さへも中國の大刀以上に猛烈なものであることを信じなかつたがため、義和團を起して

歐米に抵抗したのである。義和團の勇氣は最初の間鋭くして當るべからざるものがあつた。楊村の一戦は、英國の提督「シーモア」(Seymour)が三千の聯合軍を率ひ各國公使館救援のため天津より北京へ向ひ楊村を經過した際義和團に包圍せられて起つたのであるが、當時の戦闘の様子を見るに、義和團には小銃もなければ大砲もなく、ただ大刀許り、一方その包圍せらるる聯合軍は、精利なる銃砲を持つて居たもので、義和團側は言はば肉體相搏つの慨があつた。「シーモア」は彼等に包圍せられたため機關銃を以て義和團を掃射した。之がため義和團の打殺さるるもの數知らず、血肉飛び散り悲惨を極めたものであつたが、彼等はそれにも畏懼せず又退却もせず、後から後からと死にも狂ひになつて聯合軍を包圍すると言ふ有様であつたから、到頭「シーモア」の率ゆる三千の聯合軍は、楊村を通過して北京に直進することが出来なくなり、一旦天津に退いて時機を待ち、別に大兵の援助を請ふて纔に北京に達し各國公使館の圍を解くことを得たのである。その戦況に就いて論ずれば、「シーモア」も之を批評して、當時の義和團の勇氣に加ふるに、彼等が洋式の銃砲を使用してゐたならば、聯合軍は必ずや全軍覆滅したであらう、ただ彼等は終始外國の新式武器を信ぜず大刀と肉體とを以て聯合軍と相搏つたがため、聯合軍のため幾萬となく射殺せられたのである、然も尙ほ彼等は死骸を楯に前仆るれば後繼ぐと云ふやうに後から後からと

前進したもので、その勇氣殊に當るべからざるものあり、眞に人をして驚奇佩服せしむと言つてゐる通りである。斯様な戦況であつたから、この血戦經過後外國人は始めて中國に尙ほ民族思想の存するあり、この民族の遂に滅すべからざることを知つた。

庚子の年の義和團は中國人の最後の自信思想と最後の自信能力とを以て歐米の新文化に抵抗したものである。義和團失敗後中國人は従前の弓矢刀戟が、到底外國の小銃、大砲の敵ではないことを知り、歐米の新文明が的確に中國の舊文明に比し遙に勝れてゐることを明かにしたのである。外國の新物と中國の舊物とを比較するに、既に武器の效力の一事に就いては自然その優劣は甚だ明かである。武器以外のものに至つても、鐵道、電信の如き交通通信機關も、亦中國の挑夫驛站よりも遙かに便利である。我等が貨物を轉運せんとするにも汽車が挑夫より速にして便利なることは當然であらう。消息を通ぜんとするとき、電報は當然驛站よりも迅速に且つ靈敏である。その他種々人間の日常生活に關係ある機械及び農工商に用ひらるる種々なる方法に至る迄一つとして中國に比し遙に進歩して居ないものはない。だから義和團の失敗後中國の一般識者は、中國が強盛たらんがためには又中國が北京城下の盟の大恥辱を雪がんがためには、何事も外國に模倣しなればならない。そして單に物質科學に就いて外國を學ぶ必要がある許りでなく、一切の政治

社會上のこともすべてを外國に學ばなければならぬことを知つた。

故に義和團の變後中國人の自信力は完全に失はれ、外國崇拜の心理は日一日と高まつて行つた。外國を崇拜し外國を模倣せんとしたから、自然幾多の外國思想即ち外國人の未實行の新思想迄も受入れて我等は又之を實行せんとしたのである。十三年前の革命は外國の政治革命を模倣して民主政體を成立したが、その目的はやはり外國を見習ふにあつた。従つて外國の高遠なる政治哲理と最新の政治思想とを悉く之を實行したもので、これ中國の政治思想上の一最大の變動である。義和團以前に在つても、中外の通商は既に開始せられてゐたのであるから、夙くから外國の長所を知つてゐたものも勿論非常に多かつた。けれども一般大衆には依然外國に學ばねばならぬやうな眞文明のあることは信じられなかつた。だから義和團の際には外國を模倣した鐵道電信等は悉く破壊せられ、外國の銃砲も亦一向に信仰せられず、いざ戰爭となつても、やはり中國の昔ながらの弓矢を使用したものである。ところが失敗後は今度は又その反動で、外國信仰熱が擡頭し、何でも彼でも外國に模倣し使用せんとするに至つた。斯様に従前の中國は守舊的であり、そして守舊時代には一途に外國に反對し、中國のことと云へば何でも外國に優れてゐるやうに極端に信仰したものであつたが、義和團失敗後は、守舊的では駄目だ維新でなければならぬと言ふことにな

り、反動的に極端なる外國崇拜となり、外國のことと言へば何に限らず中國より優れてでもゐるやうに信仰するやうになつたのである。外國を信仰したがために、中國の舊物は事毎に不要となり、事毎に外國に模倣し、ただ外國のものときけば之を學ばんとし實行せんとした。民權思想に對しても亦この種流弊を免るる譯に行かず、革命後は國を擧げて之に狂奔し、外國人の説くところの民權を以て直に中國に實行せんとし、その民權の果して如何なるものなるかも根本的に研究しようとはしなかつたものである。前數回に互つて講述したところは、外國の民權争奪の歴史及び勝利後得たる結果の詳細なる説明にあつたが、それ等數回の研究に依つて我等は民權政治は外國に於てもまだ充分に實行し得ず、民權發達の中途に於ても亦幾多の障礙に遭遇してゐることを知つた。現在中國では民權を實行するがためには外國に倣はなければならぬ、即ち外國の方法を倣はなければならないと主張してゐるが、民權問題は外國の政治上に於ても今日に至る迄その根本的方法とはなく、今尙ほ一個の大問題として残されてゐる。即ち外國人は、最新發明の學問を以て民權を研究し民權問題を解決せんとして居るが、學理方面に於ては尙ほ根本的な良發見もなく又何等適切な解決方法もないのである。故に外國の民權に對する辦法は我等の標準となす能はず我等の導師となすには足らないのである。

義和團以後一般中國人は、時々刻々物々皆すべて外國を學ばねばならないものと考へるやうになつたが、結局のところ外國のものは學んでもいいものであらうか。例へば武器に就いて言へば、畢竟するに外國の機關銃が猛烈であるか、やはり中國の弓刀の方が精銳であるかと言ふことになるが、この二種のものとは比較する迄もなく、外國の機關銃の方が遙かに精銳であることはきまり切つた話である。單に外國の武器が中國のそれに比べて猛烈である許りではない。その他何ものに限らず外國の方が中國よりも遙に進歩してゐる。物質方面の科學に就いて云ふも、外國が中國に凌駕してゐると云ふことは、議論の餘地はない。けれども外國の政治方面は果して何うであらうか。外國の政治哲學と物質科學との進歩は又何づれが最も迅速であらうか。政治的進歩は遠く科學には及ばないのである。

例へば兵學は即ち一種の軍事科學であるが、單に兵學のみに就いて云ふも、外國の戰術は隨時發明せられ隨時改良せられ所謂日進月異と云ふ有様で、従つて一百餘年以前の外國の兵書を今日に使用するものはなく、嘗に一百年前の兵書を使用する人がない許りか、十年前の兵書さへ今日に至つては使用するものがないのである。外國の武器及び戰術は十年毎に大變動しつづあるのである。換言すれば、即ち外國の武器及び戰術は十年毎に一度宛革命がある譯だ。外國に於ける最大

の武器であり同時に最も高價なる武器は戰艦であるが、現在この戰艦は一隻の建造費に五千萬元乃至一億元を要する。かやうな莫大な價格ある船にして初めて軍艦と言ふことが出来る。外國の物質的進歩は武器が最も迅速であり就中戰艦が最も快かつた。戰艦の艦齡は最多十年に過ぎず、歐洲戰前の戰艦は今日では最早廢艦となつてゐる。海軍の戰艦が單にかかる大變動がある許りでなく、陸軍の銃砲も亦日々に進歩し十年に一度づつ變動し十年に一度の革命がある。十年毎に一度宛新しく變つてゆくのである。現在我等の使用する銃は外國では、既に無用の廢物となつてゐる。歐洲大戰當時各國の使用した大砲は今日ではやはり舊式の方だ。これは單に武器だけではない。歐米に於ては事々物々すべて日々進歩し新しく變つて行く。即ちその他の機械物品も亦日々改良せられ時々發明せられてゆく。故に外國の物質文明上の進歩は、眞に是れ日新月异一日と同じくないのである。

政治上に至つては、外國は中國に比較して又何れ程進歩してゐるであらうか。歐米は二三百年来幾多の革命を経過し、その政治上の進歩は中國よりも遙かに速かであるが、外國の政治關係の書物例へば二千餘年前希臘の大政治哲學者「プラトーン」の著した共和政體の書物の如きは、今尙ほ學者の研究しつゝあるところであり、現在の政體に對しても尙ほ多少參考の價值あるものとせら

れ、軍艦操典のやうに十年を過ぐれば無價値な廢物となつて了ふものとは違つてゐる。斯様に外國の物質科學は十年毎に一回の變動をなし、十年前と十年後とは非常な相違があり、その進歩は如何にも速いものであるが、政治理論に至つては二千年前「プラトーン」の著した共和政體の書が今日に至る迄研究の價値あるものとせられ尙ほ大いに役立つてゐると言つた有様である。従つて外國の政治哲學の進歩は物質の進歩には及ばず、彼等現在の政治思想は二千餘年前のそれと根本的に何等さしたる變動はないと言ふことが分からうと言ふものだ。斯様な譯であるから若し外國の政治を物質科學同様にこれを模倣せんとするならばそれこそ大間違である。外國の物質文明は日一日と進歩する。故に我等が之を學ぼうとしても追越すことは仲々容易ではない。が外國の政治的進歩に至つては、物質文明の進歩に比較してその差遙かに遠く速度亦頗る緩慢であつて、歐米革命の如く民權實行後一百五十餘年にもなるが、現在民權を實行し得る範圍は百餘年前のそれと大した變りはなく、又現在佛國の實行しつつかある民權の如きも尙ほ革命當時行はれた民權に及ばないのである。即ち佛國に於ては革命當時實行せられた民權は非常に完全なものであつたが、當時の一般人民がこれを誤れりとなし皆之に反對したため、今に至る迄一百餘年佛國の民權は依然として餘り進歩しなかつたのだ。我等にして外國をば學んとするには之等の情形を明かに區

別しなければならぬ。外國の民権がさしたる進歩なかりし原因は、外國が民権の根本的方法に對して解決するところがなかつたのである。

前數回に互り述べた情形に依つて、歐米の民権政治には今尙ほ何等適當なる方法なく、民権の眞理は依然闡明せられずにあることが判るであらう。ただ最近二三十年來民権思想漸次彰顯し、人事上考へ及ばざる問題に對しては、社會の大衆は之をその自然に聽いて、ただ潮流に順應して來た。故に近來民権が發達したのは學者がその學理を發明したが故ではなく、一般大衆がその自然に順應したところに基因する。總じてその自然に順應して行く場合には、豫め根本的方法があつた譯でもなく、又前後を充分顧慮することもなかつたため、歐米各國が民権を實行するに當つては、中途幾多の挫折に遇ひ幾多の障礙に遇つたのである。中國は革命後歐米に模倣し民権を實行せんとした。歐米の民権は現に發達して代議政體となつてゐる。故に外國に追従し民権を實行せんとした中國が、又代議政體を持つことになつたのは極めて自然な話である。然し乍ら中國は歐米の代議政體を學ぶには學んだものの、その長所は少しも學ばずに却て幾十倍の缺點のみを學び、その結果國會議員は變じて猪狩議員となり、その汚穢腐敗は世界各國古來曾てなきところで、これ眞に代議政體の一怪現象である。故に中國は外國の民権政治を學んで、ただよく學べなかつた

と言ふ段ではない、却つて學んだがために悪くなつたと云はなければならぬだらう。

前數回の講義に依つて、諸君は歐米の民權政治には未だ何等根本的辦法のないことを知つたであらう。故に我等は民權を提唱するに當つては一から十まで歐米に模倣するは不可である。我等は歐米を一から十まで模倣することが不可なりとすれば、果して如何にすべきか、現在中國には尙ほ守舊派が存在する。そしてそれ等守舊派の反動方は仲々馬鹿にならない。彼等の主張は民權を推翻して專制を恢復し復辟を圖らんとするにある。彼等は斯の如き方法に依つて始めて中國を救ひ得るものと考へてゐる。だが我等世界の潮流を明かに心得てゐるものには、斯様な辦法が非常な誤りであることが分る。故にこの辦法に反對せんがためには、世界の潮流に順應して民權を實行し政治の正しき軌道を歩まねばならぬ。我等にして政治の常道を歩まんとするには先づ政治の眞意義を知らねばならない、然らば政治とは如何なるものであるか。民權第一講の定義に依れば、政は衆人の事、治は衆人を管理することであつた。中國幾千年來社會の民情風土習慣は歐米のそれとは大いに異なるものがある。中國の社會にして既に歐米のそれと同じからずとせば、社會を管理する政治も亦自然歐米のそれと異ならねばならぬ。歐米の機械を模倣するやうに全然歐米のする通りを模倣する譯にはゆかない。歐米の機械は我等がただそれを學び得たならば、何時如

何なる場所に於ても使用することが出来る。例へば電燈の如きは中國の如何なる家屋にでも架設し使用し得る。けれども歐米の風土人情に至つては中國と大いにその趣を異にするところから、中國自身の風土人情にお構なしで、恰も外國の機械を學ぶと同様、外國の社會を管理する政治をその儘持つて來るならばそれこそ大間違ひだ。勿論人類を管理する政治法律の條理もやはり一種無形の機械であり、従て行政組織を機關と稱してゐる次第ではあるが、有形の機械は本來物理的に出來たもので、無形の機械は元來心理的に構成せられたもの、そして物理學は最近數百年來既に幾多の發明が成し遂げられてゐるが、心理學に至つては僅々二三十年來始めて起り、そして進歩したもので、今日のところ大した發明はないと言つたやうに、兩者の間には自ら差別があつて之を同一に論ずることは出來ない。だから物を管理する方法は歐米に學んでもいいが、人を管理する方法に至つては一から十迄歐米を學ぶと云ふ譯には參らない。歐米では物を管理する一切の物理に關しては、既に早くから充分な研究が遂げられて居り、それ等の根本的辦法も亦非常に夙くから解決せられてゐるから、歐米の物質文明は我等は之を完全に模倣し之に盲従しても差支へない。又これを中國に持つて來れば立派に役立つのであるが、歐米の政治道理に至つては、今尙ほ研究未熟で、一切の辦法もまだ根本的に何等解決されてゐないから、中國が今民權を實行し

て政治を改革せんとするに當つて、全然歐米その儘を模倣することは出来ない。何うしても、何か別に更に新しい方法でも考へ出さねばならない。さうでなくて若し果して無暗に盲從附和したならば、國計民生を害すること蓋し測るべからざるものがあるであらう。歐米には歐米特有の社會があり、我等には又我等特有の社會があつて、彼此の人情風土各相同じからず、我等は自己の社會の實情に照し、世界の潮流に迎合し得るならば、始めてよく社會を改良し得、國家を進歩せしむることが出来るであらう。若し然らずして自己の社會状態にお構ひなしで、ただ世界の潮流に迎合して行くならば、國家は退歩し民族は滅亡の危險に遭遇しなくてはならぬ。我等にして中國を進歩せしめ民族の前途に危險なからしめんとするならば、自ら民權を實行し自己を根本としてその上に一種の辦法を創立しなければならぬ。

我等は民權政治に對じて畢竟するに適當なる辦法を創出し得るや否や。我等が適當なる辦法を創出するためには、全然歐米を模倣するは不可であるが、やはり歐米を鑑としなければならぬ。歐米の既往の民權の經驗を研究し明瞭ならしめねばならぬ。何故なれば、歐米の民權は充分なる發達を遂げてゐないし、又根本的解決も出来てゐないが、既に幾多の學者が民權に對しては日々研究を怠らず常に新しき學理を發明しつつあり、加之一百餘年の間の實行を経て來たもので、之

に依つて得たる経験も亦少なからず、其の経験と學理とは固より参考となるべきものがあるからである。若し歐米既往の経験及び學理を参考としなかつたならば、多大の時間を空費し或は歐米の覆轍を踏まねばならないことになるであらう。

現在各國の學者は既往の民權の事實に基き研究の結果、幾多の新學理を發見した。其れは如何なる學理であらうか。最近政治問題に對し米國の一學者は言ふ。現在民權國に於て最も怕るべきは、人民が如何なる方法を以てしても之を節制することの出来ないやうな萬能政府を持つことである。又最も望ましきは、完全に人民の使用に歸し人民の爲めに幸福を謀る萬能政府を得ることであると。この所説は最新發明にかかる民權の學理である。但しその怕るところも欲するところも共に一個の萬能政府である。そして其の學理は先づ人民は彼等の管理し得ないやうな萬能政府を怕るものであることを説き、次に人民のために幸福を謀るものは萬能政府であるが、如何にしてよく政府を萬能たらしめ得るか、萬能政府たらしめたる上如何にして人民の希望を聽かしめんとするかを説いたものである。由來民權の發達した國家に於ては其の政府は無能であり、民權の發達せざる國家に於ては其の政府は有能であると言ふのが大體に於て一般の例のやうだ。例へば前にも述べたる如く、最近數十年來歐洲に於て最も有能なりし政府と言へば「ビスマーク」執

權時代の獨國政府であるが、當時の獨國政府は確かに萬能政府であつた。元來その政府は民權を主張せず寧ろ之に反對してゐたが、其れでもやはり其の政府は萬能政府となつた。其の他各國の例に照し見るに民權を主張する政府で萬能政府と言ひ得るものは一つもない。又「スイス」の一學者は言ふ。各國は民權實行後其の政府の能力は退化した。其の理由は即ち人民は有能なる政府に對し、此れを管理し得ざるを恐れ、常に政府を防範し、政府の有能なるを許さず、政府の萬能なるを許さないからである。故に民治を實行する國家は、本問題に對し何等か適當なる方法を以て之れを解決せねばならぬ。此の問題を解決せんが爲には人民の對政府態度を改めなければならぬ。従前人民が政府に對し事毎に反抗的態度を執つた理由は、民權革命經過後人民の争得した自由平等が餘りに發達し過ぎたからである。一般人民が自由平等を餘りにも無制限に使用し、自由平等のことゝ云へば充分過ぎる程やつたので、政府は少しも思ふやうに仕事をする事が出来なかつたのである。政府が思ふ存分仕事が出来ないやうでは、國家としては政府があつても政府のないと同様である。此の「スイス」學者は此の種流弊を挽救せんがためには、人民の對政府態度を改めねばならぬことを發見したが、果して彼は人民に如何なる態度を執れと要求したであらうか。人民の態度が政府に對し如何なる關係にあるか。

中國幾千年の歴史に就いて言へば、中國人は此の幾千年間政府に對して如何なる態度を採つて來たか。我等は歴史を研究するとき、そこに總じて人の堯舜禹湯文武を稱讚しつゝあるを發見する。堯舜禹湯文武の政府は之れ中國人の常に羨慕して已まざるところの政府である。中國人は何時如何なる時代に於ても、總じて人民に替つて幸福を謀つて呉れるやうな、さうした政府を希望してゐたのである。故に歐米の民權思想の中國傳來前、中國人の最も希望するものは即ち堯舜禹湯文武であり、彼等の如き皇帝さへあれば人民は安樂を得幸福を享受し得らるゝものと考へて居たものである。之れ即ち中國人從來の對政府態度でなければならぬ。近來革命經過後、人民が民權思想を得てからは、堯舜禹湯文武の諸皇帝に對しても不滿を感じるに至り、彼等は專制皇帝である美また稱するに足らずとの考へを抱くに至つた。此れを以ても民權發達後は人民が政府に對し反抗的態度に出て、如何なる善良なる政府に對しても不滿を感じるに至れるを知ることが出來よう。假りに若し斯様な態度を持続し此の儘成長させて行つたならば何うであらう。恐らく政治の進歩を望むことは至難であらう。今世界に於ける人民の對政府態度を改めしめんがためには、果して如何なる辦法を執らねばならないか。歐米の學者は、たゞ人民の對政府態度は改むべきものだと言ふ點に就いては考へ至つて居るが、肝心の其の具體的方法如何に就いては、まだ何等成案

がない。

我等の革命は民権の實行を主張してゐるが、余は研究の結果、本問題に對し一個の解決方法に到達した。余の解決辦法は實に世界に於ける學理中最初の發明であり同時に又本問題解決の一根本方法であつたのだ。それは他でもない、最近「スイス」の一學者が發明したものと同様、人民の對政府態度を改めしめんとするにある。そして最近泰西に於てこの學理が發明せられたことは從來の余の主張の錯らざるを更に裏書するものでなくて何であらう。然らばこれは如何なる方法であらうか。即ち權と能とを區別せんとするの道理である。この權と能とを區別せんとする道理は従前歐米學者の間にまだ發明せられたことのないものである。權と能とを區別するとは果して如何なることであるか。この分別を明白にならしめんがためには、余の従前の新發明にかかる人々の區別に就いて再び物語らねばならぬ。

余の人類に對する區別は何に根據して居たか。即ち各人天賦の聰明才力に根據して居たものである。余の區別に依れば三種の人はあるべき筈であつた。即ち第一種の人を先知先覺と言ふ。この種の人は卓越せる聰明さを有して居り凡そ一事を見るや直に幾多の道理を想出し得、一言を聞いて直に幾多の事業を爲し得る態の人である。この種才力ある人こそ先知先覺である。この種先

知先覺者は、豫め幾多の辨法を想出し許多の事業を爲す。そして世界は彼等に依つて始めて進歩し人類亦彼等に依つて初めて文明となる。故に先知先覺者は世界に於ける創造者であり、人類中の發明家であらねばならぬ。第二種の人を後知後覺といふ。この種の人には聰明才力共に第一種の人に比較して一段下であつて、自ら創造し發明することは出来ない。たゞ之に追隨して模倣すること、即ち第一種の人が既にやつて來た事ならば學べば出來ると言つた態の人である。第三種の人を不知不覺といふ。この種の人には聰明才力に於て更にもう一段下である。何事を人から教へられてもその道理は分らず、たゞ行ふことだけ出來ると云つた種類の人である。現今の政治運動の言葉を藉りて言へば、第一種の人には發明家であり第二種の人には宣傳家であり第三種の人には實行家である。そして世界に於ける事業の進歩は一にかゝつて實行にある。従つて世界の進歩の責任はすべて第三種の人の双肩にある譯だ。例を引いて説明して見れば、一棟の大洋館を建築する場合普通の一般素人では造ることは出来ない。何うしても先づ一人の建築技師が必要である。そして洋館の各種建築材料に關し全般の見積り計算をしなければならぬ。その見積が出来てから詳細な設計圖を畫き、更にこれを棟梁に渡し、棟梁がその設計圖に就いて充分なる研究を遂ぐるを俟つて始めて勞働者をして材料を運搬せしめ、設計圖に隨つて工事を進めなければならぬ。洋館を建

てる労働者は誰れもこの設計圖を見ることは出来ない。彼等はたゞ棟梁の命ずるがままに、棟梁の指揮に随つて煉瓦を積み瓦を葺くと云つたやうな最も簡單なる仕事に従事する。又棟梁は棟梁で、見積りをしたり設計圖を引いたりすることは出来ず、唯技師の引いた設計圖の通りに、労働者をして煉瓦をたたみ瓦を葺かしむるだけである。故にこの場合設計圖を引く技師は先知先覺であり、設計圖を見る棟梁は後知後覺であり、煉瓦をたたくみ瓦を葺く労働者は不知不覺である。現今の各都市の洋館はすべて労働者棟梁及び建築技師の三者共同して出来上つたもので、即ち世界の大事業も亦同様、すべてこれ等三種の人に依つてなされたものである。けれどもその中の大部分を占むるものはやはり實行家であり即ち不知不覺者である。次に少數なるものは後知後覺のもの最少のものは先知先覺の才人である。もし果してこの世界に先知先覺者がなかつたならば何事も發起する人はないであらう。又後知後覺者がなかつたならば何事にも賛成する人がないであらうし、又若しも不知不覺のものがなかつたならば何事も實行する人がないであらう。凡そ世界の事業には何事にも先づ發起人が必要である。然る後之に賛成する幾多の人がなければならぬ。そしてその又後に幾多の實行家を必要とする。かくて始めて成功し得る。故に世界の進歩はすべてこの三種の人に依らねばならぬ。その中何の一種の人が缺けてもすべてに不可能である。現在世

界の國家は民權を實行し政治を改革してゐるが、それ等改革の責任は、當然これ等三種の人々の分擔せねばならぬところものだ、所謂先知先覺者も後知後覺者も將又不知不覺者も各その一分の責任を負はねばならないのだ。我等は民權は天生のものではなく人の造成したものであることを知らねばならぬ。そして我等は率先して民權を造成し人民に與へねばならぬ。人民の來つてこれを争ふを待つて始めて彼等にこれと與ふるが如きことがあつてはならない。

數日前

(九 行 削 除)

元來中國人民は大部

分が不知不覺者であつて、今後幾千年経つても恐らく人民の全體が民権を争ふ程自覺するといふことは殆ど豫期し得られないから、是非とも先知先覺者及び後知後覺者を以て自任する人が、日本人の如く専ら自己の打算からではなく、率先して人民に替つて打算し全國の政權を人民に與へるやうにしなければならぬと思ふ。

これ迄語つて來た通り、歐米には今以て民権問題に對する解決辦法がない。今日我等は民権問題を解決せんとするものであるが、若し歐米その儘を見倣ふやうであればとても解決は出來ないであらう。既に歐米その儘を倣ふべきものでないと言ふことが分つて見れば、當然我等自ら一種の新方法を想出してこの問題を解決しなくてはならない。この新方法は「スイス」の學者の最新發明にかかる人民の對政府態度の改變である。然し乍ら態度を改めんがためには、即ち權と能とを分離しなければならぬ。然らば權と能との分解方法は如何に。我等はこの點明瞭に研究しなければならぬ。即ち前に繰返し述べた情形を重ねて再説する必要がある。第一には民権とは如何なるものであるか。簡言すれば民権は即ち人民が政治を管理することである。更にこれを詳論すれば、従前の政治は何人に依て管理せられたか。中國の古語に曰く「不在其位、不謀其政」と。又曰く「庶人不議」と。斯様に従前の政權は完全に皇帝の掌中にあり、人民は一切これに無關心で

あつたものだ。今日我等が民権を主張する所以は政權を人民の掌中に置かんとするにある。その場合人民は如何なるものと成るであらうか。中國は革命以來民權政體を樹立し、萬事人民を主とすることとなつた。故に現在の政治は又民主政治と云ふことも出来やう。換言すれば、共和政體の下に在つては人民を以て皇帝と爲し、人民即ち皇帝である譯だ。

中國幾千年の歴史に顧みるに實際に政治の責任を負ひ人民の爲に幸福を謀つた皇帝と云へば堯舜禹湯文武の外にない。その他の皇帝にして政治の責任を負ひ人民の爲に幸福を謀つたものとは一人もない。故に中國幾千年の皇帝の中、政治の責任を負ひ、上天に愧するなく下萬民に慚ずるところのなかつたのは、堯舜禹湯文武の諸帝のみと言はねばならぬ。彼等がよくこの目的を達し得て、我等をして幾千年後の今日、皆その功を歌ひその徳を頌せしむる原因は、彼等に二つの特別の長所があつたからである。その第一の長所は、彼等の政治的手腕が非常に卓越してゐた點である。彼等はその卓越した政治的手腕に依て、よく一個の良政府を造り人民の爲に幸福を謀ることが出来たのである。第二の長所は彼等の道徳が非常に尊敬すべきものであつたからである。所謂「仁民愛物、視民如傷、愛民如子」と云つたやうな仁慈なる道徳があつたのである。彼等にはこの二つの長所があつたがために、政治に對し完全にその責を負ひ、その目的を完全に達すること

が出来たのである。中國幾千年來たゞこれ等數人の皇帝のみが後人から崇拜せられその他の皇帝に至つてはその數は勿論のこと、甚しきはその姓名すら記憶されて居ないのである。歴代皇帝の中ただ堯舜禹湯文武のみが最も卓越せる政治的手腕と最も尊敬に値する道徳とを持つてゐたに過ぎず、その他のものは大體に於て何等その政治的手腕道徳の認むべきものがなかつたと言つてよい。斯様に手腕もなければ道徳もないと云つた皇帝ではあつたが、彼等には非常な權力があつた。

諸君は中國の無數の歴史を讀んだことがあらう。就中三國演義は殆んど總べての人が讀まれたに違ひない。我等は三國演義を藉りて、權と能とを分つべきことに就いて證明して見よう。例へば、諸葛亮は、非常なる才學、卓越したる能力才幹を持つてゐた人であるが、彼の輔佐した主と言へば、先には劉備、後にはその子阿斗である。阿斗は凡庸且つ愚昧何等の能力才幹をもつてゐなかつた。だから劉備は死に臨み諸葛亮に遺言して曰く「輔くべくんば之を輔けよ輔くべからずんば取つて之に代れ」と。劉備の死後諸葛亮の持つてゐた道徳は尙極めて善良なるものがあつたがため、阿斗は何等用をなさなかつたにも拘はらず、諸葛亮は依然忠心これを輔佐したもので、所謂鞠躬盡瘁死して後已むと云ふ風であつた。斯様に君權時代に於ては、君主は何等能力才幹はなくとも非常な權力だけは持つてゐたもので、三國の阿斗と諸葛亮との關係は此の間の消息を明かに物語

つてゐる。諸葛亮は有能ではあつたが權がなかつた。阿斗は權があつたが無能であつた。阿斗は無能ではあつても一切の政治を諸葛亮に付託して行ふことが出来、諸葛亮が非常に有能であつたがため、西蜀に在つてよく非常に善良なる政府を樹立することが出来たのである。又同時に六たび祁山を出でて北伐し吳魏と共に鼎立し天下を三分することも出来たのである。諸葛亮と阿斗との兩人を比較することに依つて我等は其處に、權と能との區別を知ることが出来ると思ふ。

專制時代に於ては、父兄の皇帝たる場合その子弟たるものは、何等能力才幹なきものもよく父兄の業を繼承して皇帝となることが出来たものであるから、無能な人も亦非常な權を有してゐたのである。現在では共和政體を樹立し民を以て主として居るが、諸君試みに看よ、この四億人は何の種類に屬する人であらうか。言ふ迄もなく此の四億人は全部が先知先覺者ではあり得ないし、又後知後覺者ともそんなに多數あらう筈もなく、大部分はすべて不知不覺の人である。現在の民權政治は人民を主とせねばならないから、此の四億人は皆非常な權を持つてゐる。全國を通じて非常な權力を有し政治を管理し得るものと言へば、とりもなほさず此の四億人の人でなければならぬ。諸君想ふても見るがいい、現在此の四億人が政權の一方面から言へば、如何なる人に相當してゐるかを。余の見るところではこの四億の人は悉く阿斗同様である。即ち現在中國には四億

の阿斗がある譯で、それ等の人々はすべてが非常な權を有つてゐるのである。阿斗は本來無能であつたが、諸葛亮てふ有能の士があつたがため、劉備の死後尙よく西蜀を治理し得たのである。現在歐米の人民は有能の政府に反對して居る。「スイス」の學者は、此の種流弊を挽救せんがために、人民の態度の改變を主張し有能の政府に反對するを不可としたのである。けれども態度が改められた後、果して如何なる辦法を用ひんとするかに就いては彼等は未だ發明してゐない。余の既に發明したところのものは、權と能とを分離せんとするにある。之に由つて人民の對政府態度は始めてよく改變せらるるものと信ずる。若しも權と能とを分つことが出来なかつたならば、人民の對政府態度は絶対に改變せしむることは出来ないのであらう。當時阿斗は自己の無能なるを知つて國家の全權を擧げて諸葛亮に託し、諸葛亮は彼に替つてこれを治理した。故に諸葛亮が出師の表を上るや、阿斗に建議して宮中府中の別を明かにすべきを以てした。此れ宮中のこと位は阿斗にでも出来るが、府中のことは阿斗自らこれを行ふことが出来ないことを慮つてのことに他ならない。府中のこととは如何なることであるか。即ち政府のことである。諸葛亮が宮中府中を區別したのは、とりもなほさず權と能とを分つたのである。故に我等も國家を治理するには必ず權と能とを分たなければならぬ。果して然らば、其の分離の方法は如何に。諸君は遠大なる眼光と冷靜な

る見解とを以て、世界の事物を觀察せねばならぬ。其れでこそ之れを明かに分開することが出来るであらう。一般に今でも政府に對して一種特別の觀念を有してゐるが、この觀念は果して如何にして發生したのであらうか。其れは幾千年來の專制政體に發因する。幾千年來の專制政體は、大體に於て無能なるものが皇帝となり人民はすべて皇帝の奴隸であつたと言へる。即ち中國四億萬人は幾千年來奴隸となつて來た譯である。故に今や專制を推翻して共和政體を樹立し表面的には如何にも解放せられてはゐるものの、人民の心目の中には依然專制當時の觀念が存在し、やはり皇帝同様の政府が專制を行ふことを怕れてゐる。皇帝同様の政府によつて專制の行はるることを恐るるが故に、彼等は之を打破せんとする。そして其處に政府反對の觀念は生れ、政府に反抗的態度は表示せらるると云ふことになる。故に現在の人民が政府に反抗するの態度は、やはり従前の皇帝崇拜の心理が一變して反動的に政府排斥の心理となつたものと言へやう。勿論従前の皇帝崇拜の心理は正しいものではなかつたが、現在の如く一概に政府を排斥せんとする態度も亦餘り憂むべき態度ではなからぬ。

我等にしてこの種正しからざる心理を打破せんとするには、幾萬年幾千年前の政治歴史を回顧しなければならぬ。回顧することに依つて始めて之を打破し得るであらう。例へば專制的皇帝の未

發達前に於ては、中國の堯舜の如きは又とない結構な皇帝であつた。彼等は公天下であつて家天下ではなかつた。當時中國の君權はまだ充分なる發達を遂げて居なかつたが、堯舜以後漸く發達の緒に就いた次第である。堯舜以前に於ては、まだ君權といふ程のものはなく、すべて有能の人を奉じて皇帝とすると云ふ風で、人民に替つて幸福を謀り得る人にして始めて政府を組織することが出来たものである。例へば、前述の人獸鬭争の野蠻時代に於ては、國家の組織も完全でなく人民は何れも「聚族而居」と云つた状態で、一人の有能な人に依て保護せられて來た。そして當時の人民は皆毒蛇猛獸の侵害を恐れたがために、一個有能の人を奉じて保護の責を負はしめんとしたのであつた。當時に於ける保護の任務と言へば、即ち能力あるものが獸と戰ふことであり、毒蛇猛獸に打勝ち得た人が當時では能力才幹あるものとされてゐた。當時人獸相鬭ふには武器とはなく赤手空拳によつたものであるから、個人は體力氣魄共に非常に強壯でなければならなかつた。従つて當時に於ては人々は體力氣魄の非常に強壯なものを奉じて皇帝としたものである。尤も中國には尙この外に例外があつて、單に鬭に強いものが皇帝たり得た以外に、例へば燧人氏の如きは、木を鑽つて火を取り人に火食を教へ動植物を生食するの危険より避けしめ、更に種々なる美味を製出して口腹の欲に適せしめたので、世人は彼を奉じて皇帝としたと言ふやうなものも

ある。木を鑽り火を取て人に火食を教へると云へば、其れは如何なる人のやる仕事であらうか。即ち料理人のやることである。故に燧人氏は木を鑽り火を取て人に火食を教へて皇帝となつたのであるから、料理人が皇帝となつたと云ふことも出来る。又神農氏は百草を嘗めて幾多の疾病を治し、起死回生せしめ得る幾多の藥性を發明した。即ち此の一事は、非常に珍らしい非常に功勞ある仕事と云はねばならぬ。故に世人は彼を奉じて皇帝とした。百草を嘗めることはどんな人のすることであらうか。即ち醫者の仕事である。故に神農氏は百草を嘗めて皇帝となつたのであつて、醫者が皇帝になつたと云ふことも出来る。更に軒轅氏は民に衣服を作ることを教へて又皇帝となつたが、これ即ち裁縫で皇帝となつたものではないか。有巢氏も亦民に宮室を營むことを教へて皇帝となつたが、之れ即ち大工で皇帝となつたものではなからうか。故に中國幾千年以前の歴史を見て來ると、單に闘ひ得る人を以て皇帝とした許りではなく、何事に限らず非常な大能力大才幹があつて新しい發明を成し遂げ、人類に貢獻した人は誰でも皇帝となることが出来、政府を組織することが出来た。即ち料理人、醫者、裁縫師、大工といつた特別の能力大才幹のある人もすべて皇帝となることが出来たのである。會て米國の一教授丁健良(William P. Martin)なる人が、或日北京西山の見物に行つたことがあるが、途中一農夫に遇つて話を交したところ、其の農夫が丁

健良に問ふて言ふには、外國人は何故中國に來て皇帝にならないのかと。了健良は之に反問して曰く、外國人でも皇帝になることが出来るかと。そこで其の農夫は、田の畦道に架設せられた電線を指して云ふやう、此のやうなものを造り得る人ならば中國の皇帝となることが出来ると語つたとのことであるが、思ふに此の農夫は、一本の鐵線で消息を通じ書信を傳へることが出来るのであるから、斯様な鐵線を造り消息を通じ得る人ならば當然非常な手腕のある人でなければならぬ。斯様な大手腕のある人ならば皇帝たり得べきは當然であると云つたやうな考へ方をして居たに違ひない。これ等から見ても中國人は一般に大手腕ある人ならば誰でも皇帝たり得るものと考へて居るであらうと言ふことが證明出来ると思ふ。

中國は堯舜以後歷代皇帝漸次專制となり、何れも家天下となつて人民が自由に手腕ある人を擁戴して皇帝とすることが許されなくなつた。假に若し今四億の人が投票の方法を以て皇帝を選挙する場合、之に與ふるに充分なる民権を以てし、人民が自由に投票することを得せしめ、絲毫も別種勢力の干渉を受けないものとし、之れと同時に又堯舜を再生せしむるものと假定したならば、人民は果して誰を皇帝に選挙するであらうか。余は必ずや堯舜を擧げて皇帝たらしむるに相違ないと考へる。元來中國の皇帝に對する心理に歐米人のそのやうに左程に深惡痛絶ではない。何

故なれば中國皇帝の專制は歐洲の其れの如く餘り猛烈ではなかつたからだ。實際歐洲に於ては二、三百年前皇帝の專制其の極に達し、人民のこれを見ること洪水猛獸の如く非常に彼等を恐れたものである。だから人民は單に皇帝を排斥せんとする計りか、皇帝と非常に接近して居る。例へば政府と言つたやうなものも亦一齊に排斥せんとするのである。歐米に於ては現に民權を實行して居り人民には大きな權があるのであるから、政府を排斥する位のことには實に極めて容易である。西蜀の阿斗の如き諸葛亮を排斥せんとすれば事更に容易ではないか。若し果して阿斗にして諸葛亮を排斥して居たならば、果して西蜀の政府は能く長久たり得たであらうか何うか。六度祁山を出で、北伐を實行し得たであらうか何うか。阿斗は此の一事を見察して居たが故に、政治の全權を悉く擧げて諸葛亮に付託し、内政の整理と云はず南征と云はず一切彼に依つた。即ち六度祁山を出で、北伐するにも亦彼に依つたのである。我等は今民權を行ふ。四億の人はすべて之れ皇帝である。即ち四億の阿斗である。そしてこれ等の阿斗は當然諸葛亮を歡迎して政事を管理せしめなければならぬ。又國家の大事業を爲さしめねばならぬ。現に歐米に於ては、民權を實行して居るが、その人民の態度は總じて政府に反抗的である。其の根本原因は即ち權と能とを分けてゐないところにある。中國にして若し歐米の覆轍を踏むことを希望しなかつたならば、余の發明にかかると

の學理に照し、權と能とを明に劃分しなければならぬ。人民が權と能とを分離すれば政府に反對するの要なきに至り、政府は之に依て始めて發展を望み得るであらう。中國に於て權と能とを分つことは、事極めて容易である。何故なれば中國には阿斗と諸葛亮の先例を援用し得るからである。若し果して政府が善良であつたならば、我等四億のものはこれを目して諸葛亮と思ひ、國家の全權を舉げて悉く彼等に委するに躊躇しないであらう。之に反し若し果して政府が不良であつたならば、我等四億人は皇帝の職權を實行して彼等を罷免し國家の大權を回收することが出来るであらう。歐米の人民は政府に對し權と能との限界を分かつことを知らぬ。故に彼等の民權問題發生して既に二三百年、今尙ほ解決することが出来ないのである。

我等は今權と能とを分つべきことを主張した。我等は更に古時と現在との事實を比較して語らねばならぬ。古時能く闘ふものは、人之を奉じて皇帝とした。現在の富豪の家庭に於ても亦幾人かの壯士を雇つて保護せしめてゐる。上海に居住する軍閥官僚が、各省に於て人民の膏血を絞つて蓄めた莫大なる財産を上海に運び租界内に居住し、人の襲撃及びユスリを恐るるため、幾人かの印度巡査を雇つて門番をさせてゐるの等はその一例だ。ところで古への道理に照して云へば、よく人を保護し得るものが皇帝となり得たのであるから、それ等官僚軍閥を保護する印度巡査も彼

等官僚軍閥の皇帝とならなければならぬ筈だ。然るに現在のそれ等印度巡查達は、皇帝になるどころか、それ等官僚軍閥の家事にさへも口を出すことを決して許されない本當の門番なのだ。従前赤手空拳の閑士が悉く皇帝となつたのであるから、本來から云へば現在の長銃をもつてゐる印度巡查も亦當然皇帝とならなければならぬ筈である。然るに彼等官僚軍閥は彼を皇帝たらしめず却て之を奴隸たらしめてゐる。この種奴隸は銃を持つてゐて非常に能力あるにも拘らず、それ等官僚軍閥は、ただ物質的に幾許かの金を與へるのみで、名前だけでも彼等を皇帝と呼ぼうとはしないのである。斯く言へば、古への皇帝は現に門番をする印度巡查と見做すことが出来、現在の印度巡查は即ち古への皇帝であると言ふことも出来る譯だ。再び一步を進めて云へば、人民を保護する皇帝を門番と見做すことが出来れば、人民として何處に彼を排斥するの必要があらうか。

現在金持等は會社を組織して工場を開辦する場合、必ず一人は手腕家を聘して總辦として工場を管理せしむる。この總辦は専門家で即ち有能の人であり、株主は即ち權を有する人である。そして工場内のことは總辦に於て一切の經營に當り、株主は單に總辦を監督するのみである。例へて云へば、現在民國の人民は即ち株主であり、民國の大統領は即ち總辦である譯だ。我等人民た

るものの政府に對する態度は、正に彼等を専門家として取扱はなければならぬ。斯様な態度で行つてこそ、株主はよく總辦を利用して工場を整理し最少の資本を以て最多の貨物を製産し、會社をして大なる利益を上げしむることが出来るのである。現在歐米の民權の發達せる國家に於て、その人民が政府に對して斯様な態度を執つてゐるところは一つもない。従つて手腕家を利用して政府を管理せしむることが出来ないものである。そしてこれがため政府の人物を悉く無能なもの許りにして了ふ。故に民權の發達を却て甚しく遲延せしむる結果となり、民主國家の進歩が却て日本及び獨逸の如き專制國家のその迅速なるに及ばず、非常に緩慢なものとなつて了ふのである。日本は明治維新後僅に數十年にして富強となり、獨逸も亦非常な貧弱な國家であつたが、「ウィルヘルム」一世及び「ビスマルク」執政のときに至つて、聯邦を結合し精勵治を圖り幾十年ならずして霸を歐洲に唱ふるに至つた。その他民權を實行する國家は、日本や獨逸の進歩の如く一日千里と云ふ譯には行かない。この原因を探究するに、即ち民權問題の根本辦法の未解決なるがために他ならない。若し果してこの問題を解決せんとするならば、須く國家の大事を擧げて手腕家に付託せねばならぬ。

現在歐米人は何事をするにもすべて専門家を使用して居る。例へば兵を練り戰爭を爲すにも軍

專家を用ひ、工場を開辦するにも技師を使用し、政治に對しても亦專家を用ひなければならぬことは知つてゐるのである。而も今日迄政治の専門家の使用を實行し得られなかつた原因は、即ち人民の舊習を未だに改良することが出来なからである。けれども現在の如き新時代に至れる以上、是非とも權と能とを分たねばならぬ。そして大抵のことは必ずこれを専門家に委せ切り、決して専門家の力を制限するやうなことがあつてはならない。最新發明せられたる最も便利な日用品たる自動車の如きは、二十餘年前始めて之が製造せられた頃は、運轉手もなければこれを修理する職工もなかつた。従前余の一友人で自動車を一臺買ったものがあつたが、彼は運轉手から機械の修繕までしなければならず、何から何まで自分でやると云ふことは仲々困難なことで非常に面倒であつたとのことだ。それが今では運轉手でも機械職工でも、自動車の持主が金を出して儲ひさへすれば、自分に替つて運轉もし修理もし呉れるのである。これ等運轉手及び機械職工は即ち自動車の運轉及び修理の専門家であつて、彼等なくては我等は自動車を動かすことも修理することも出来ない。國家は例へて言へば、一輛の自動車である。政府の官吏は即ち一大運轉手である。歐米の人民は、最初民權を獲得した頃は適當な専門家とてなく、恰も二十餘年以前に金持が一輛の自動車を買つて何から何迄自分で修理し、自分で運轉せねばならなかつたと同様であつた。併し乍

ら現在では幾多の手腕ある専門家があるのであるから、權力を有する人民は是非とも彼等を聘請しなければならぬ。然らざれば、自ら運轉し自ら修理せねばならない。所謂「自ら煩惱を尋ね自ら痛苦を探す」とは即ち正にこの比喩である。更に自動車を駛らせる運轉手は有能にして無權なるもの、自動車の主人は無能にして有權なるものと便宜區別することが出来る。この有權の主人は有能なる専門家に依て自らに代つて自動車を運轉せしめなければならぬ。民國の大事も亦これと同じ理窟であつて、國民は主人であり即ち有權の人で、政府は専門家であつて即ち有能の人なる譯である。この道理でゆけば民國の政府の官吏は、彼等が大總統であらうが内閣總理であらうが將又各部總長であらうが、我等はすべて彼等を運轉手たらしむることが出来、たゞ彼等が手腕あり忠心國家のために仕事をする人でありさへすれば、我等は安じて國家の大權を彼等に付託すべきである。その彼等の行動を制限せず萬事彼等の自由にその手腕を振はしむべきだ。斯の如くして始めて國家は進歩し、而もその進歩たるや極めて迅速なるものがあるであらう。若し然らずして、萬事萬端自ら處置せんとし、或は折角専門家を聘請し乍らもその一舉一動を牽制し、彼等の自由行動を許さなかつたならば、國家の進歩到底望み難く、よしんば進歩してもその進歩は頗る緩慢であるであらう。

這間の道理を明かにせんが爲余は最も適切なる一故事を引用して證明して見よう。以前余が上海に居た頃、一日一友人と一寸した相談があつて、ある時間迄に虹口で會ふ約束をしたことがある。ところがその日は來たが、約束した時間を何うしたとかふと忘れて了つて、やつと約定時間間の十五分前になつて想ひ出したものである。當時余は佛蘭西租界に住つてゐたが、そこから虹口迄の道程は可成り遠く仲々十五分間では行き着きさうにもなかつたので、余はすつかり狼狽して自動車の運轉手を呼んであわてて彼に十五分間に虹口迄行けるか何うかを聞いたものである。すると其の運轉手は答へて必ず行きますと云ふ。そこで余は乗車して運轉手の自由に駛らせることとして目的地に向つて出發した。余は元來上海の道路には非常な詳しかつたので、佛蘭西租界から虹口に至る間は恰度廣州の沙基から東山に至るのと同様、必ず「バンド」と蘇州河口の「ガーデンブリッヂ」を通過するのが一番の近道であることを知つて居た。ところが余の運轉手は何うしたものか發車後駛る路を見ると、「バンド」、「ガーデンブリッヂ」を通らないで、彼は先づ豊寧路から更に徳宣路を曲つて、小北門を走り然る後始めて大東門をして東山にと到着したものである。當時自動車は全速力で駛つて居り非常な爆音を立てて居たので、余には運轉手の話が判らず、心中甚だ奇怪に思ひ運轉手を恨むこと甚しく、如何にも其の運轉手が余を邪魔するために、故

意にさうした彎曲した路を駛つて時刻を遅らせやうとするものでもあるやうに考へたことであつた。これは恰度政府が特別の事情から非常のことをする場合、何にも知らない人民の間に幾多の誤解を發生して政府を非難すると同様である。ところが、案外にもその運轉手は、その道路を選んで駛り十五分足らずで虹口に到着した。余は幸じて怒氣を抑へながら、運轉手に向つて何故其の様な彎曲した道を駛つたのかと尋ねた處、其の運轉手の答へて謂ふには、若しも直線道路を駛らうとして大馬路を通せんか、大馬路は電車、自動車、人力車及び行人貨物の往來非常に激しく混雜を極め仲々駛り抜けることは出来ないからだとのことであつたので、余は始めてつい先きまで誤解して居たことが明白になり、余の駛らんとした大馬路及び「ガーデンブリヂ」のその道筋は單に距離の點のみしか老へて居なかつたことが始めて判つた。其の運轉手は自分の經驗から自動車の速力は非常に速く、一時間三四十哩を駛るのであるから少し位彎曲して數里位餘計に走つても自動車の速力さへ少し増せば一定の時間内に到着し得ることを知つて居たのである。彼の斯の如き打算是、時間の點から着想したもので、其の運轉手は元來學者ではなかつたから、時間と空間とを打算することなど知らう筈はなかつたのであるが、何しろ彼は運轉の専門家であつたがため自動車には距離を短縮する能力があり、若し速力さへ増せば、彎曲した道を多少餘計に駛つても

尙よく十五分間に虹口に至り得ることを知つて居たのである。當時假に若し余が運轉手に全權を與へて彼の自由に駛らしめず、余の走法に依らしめんとしたならば、必ずや時間迄に間に合はなかつたであらう。ただ余が彼の専門家たることを信じて彼を掣肘せず、彼の隨意の路を駛らせたが爲によく豫定の時間内に間に合ふことが出来たのである。そして其間余は此の種専門家でなかつたがため、當時その運轉手が彎曲した路を駛るのを見て、何故彎曲した路を駛らねばならぬかの道理が判らず誤解を發生したのである。民國の人民は皆國家の主人である。其の對政府態度は余の虹口に至りし際の運轉手に對せしと同様の態度を學び、彼政府をして走路の運轉手たらしめねばならぬ。斯の如き眼光を持ち得ることに依て人民の對政府態度は、初めて改變することが出来ると云ふものだ。

歐米人民は現に彼等の政府に對し反對の態度を持して居るが、これは權と能とを分たないからで、故にその民權問題も今日なほ解決することが出来ないのである。我等は民權を實行するに何等歐米を學ぶ必要はない。ただ權と能とを明かに分てばそれでいい。民權思想は歐米から傳來したものであるけれども、歐米の民權問題は今尙解決すべき辦法がない。現在我等は既に此の辦法を想出し、そして人民が如何にすれば、其の對政府態度を改變し得るやを知つた。併しながら、

人民の殆ど全部は不知不覺者であるから、我等先知先覺者たるものは、彼等を指導してやらねばならぬ、彼等を導いて軌道の上を歩ましめねばならぬ。かくて始めてよく歐米の如き紛亂を避くるを得、彼等の覆轍を踏まずに濟むであらう。現在のところ歐米の學者の研究は人民の對政府態度は正しくないから改めなければならぬと云ふところに到着して居るだけで、其の改變の具體的方法に至つては、未だ考へ及んで居ない。余は現在既にこの方法即ち權と能とを分つの方法を發明した。國家の政治に至つては、その權が人民にあることが根本的必須條件であるは固よりながら、政府を管理するには何としてもこれを有能の専門家に付託せねばならぬ。けれども、それ等専門家を非常に光榮にして且つ尊貴なる總統總長として待遇するの必要はない。ただ單に彼等を自動車の運轉手又は門番の巡查或は飯を炊く料理人或は病を診察する醫者或は衣服を作る裁縫師であると思へばいい。要するに彼等を如何なる種類の勞働者と思ふても構はない、それは隨意である。人民が斯くの如き態度を有することに依て、國家は初めて辨法あり始めて進歩することが出来るであらう。

第六講 完全なる民權政治機關は何か 結論

現在歐米の政治家及び法律學者は政府は機器であり法律は機器の中の工具であると説いてゐる。中國の政治法律の書籍は殆どすべて日本のものを翻譯したものであるが、日本人は政治組織を譯して機關と言つてゐる。機關は即ち中國人の常に言ふところの機器を意味する。我中國に於ては従前機關と云へば機會の意味であつたが、日本人が政治組織を譯して機關と言ふやうになつてからは機器の意味と同じになつた。だから従前政府衙門と言ふたものは、今では行政機關財政機關軍事機關教育機關などと言つて居る。そして此の種機關の意味は、日本人の所謂政府機關と全然同様に解釋すべきもので其の間何等差別はない。現在機關と言へば即ち機器のことである。恰も機關銃と言へば機器銃であると同様に、斯様に機關と機器との二つの名詞は全然同一の意味なのである。機關と機器との意味が同じであるところから、行政機關は行政機器と云ふことも出来る。然らば行政機器と製造機器との區別如何。即ち製造機器は完全に物質を以て造られたもので、例へば木材鋼鐵及び皮帶等種々なるものを寄せ集めて製造機器を造るのである。ところが一方行政機器は完全に人を以て組織せられたもので、其の種々な動作はすべて人力に依て發動し物力

に依て發動するものではない。従つて行政機器と製造機器とは非常な區別があり、最も緊要な區別がある譯で、即ち行政機器は人の能力に依て活動するものであり、製造機器は物の能力に依て發動するものだ。

前數次に互つて講義した民権の情形に照せば、近來の歐米文化は非常によく發達し文明も頗るよく進歩してゐることが判る譯であるが、これを分析するに、彼等の物質文明例へば製造機器の如きものの進歩は極めて速かではあるが、人爲的機器に至つては政府機關などの如く其の進歩は頗る緩慢である。此の理由は何處にあるか。即ち物質機器は之を實驗することが容易で、實驗の結果其の不良なるものはこれを放棄し不備なる點はこれを改良すると云ふことも容易であるが、これが人爲的機器になると仲々さうは行かず、これを試験すると言ふことも非常に困難で、又試験の結果、よしんば不良であつても、これを改良すると言ふことは仲々容易ではない。假りに若し改良せんとするならば革命に非ずんば不可である。若しさうでなかつたならば、不良な物質機器同様廢鐵になるのが關の山でとても改良など出來たものではない。斯うした理由で歐米の製造機器の進歩は極めて迅速であつたが、行政機器の進歩は非常に緩慢であつたのである。例へば民権の風潮が歐米に發生後、各國は何れも民権を實行せんとした。其の中最も早きものは米國であつ

た、ところが米國は開國以來今日に至る迄一百四十年にもなるに拘らず、建國當時行つた民權は現に行はれつつあるものと大した變りはない。現在の憲法は即ち建國當時の聯邦憲法である。そして其の聯邦憲法は一百餘年を経過したが、根本上何等大なる再改もなく今尙ほ應用せられて居る。ところが大多數の製造機器は何うであらう。之等は僅か一百餘年來の發明に過ぎず、それ以前の舊式機器は今では之を使用する人もないではないか。従前の舊式機器は夙の昔廢鐵と變つて了つたのである。現在農工商業に用ひらるゝ機器は十年以前のもは一つとしてない。十年毎に幾多の新發明があり幾多の新改良があつて年と共に進歩して行く。一百餘年前の行政機關に至つては今尙ほこれを適用して居る。これ即ち人を使用して活動する機器なるがため、其の中にあつて活動する人は勿論隨時取換へることが出来るけれども、其の全體の組織の根本的改造に至つては、何分因習の久しく因果相めぐる有つて、仲々容易に出來ないからだ。革命を行はずして平和裡に改造しつつ舊組織を完全に棄てて了ふと言ふことは、全く不可能なことであるのだ。かるが故に歐米の物質機器は近來非常に容易に發達し、進歩も亦頗る速かであつたに拘らず、人爲的機器に至つては從來其の進歩は仲々困難で、假令進歩はしても其の速度は極めて緩慢なるを免れ得なかつた。

余は前二回の民権の講演に於て、歐米の民権政治には今尙ほ根本的辦法なきを説いた。彼等は何が故に辦法がなかつたのであるか。即ち彼等は人爲的機器に對する精密なる實驗を缺きたるが爲に他ならない。物質的機器に至つては、發明當初より現在に至る迄に、古人は幾千回の實驗と改良とを重ねて、その結果漸く今日我等が見るやうな機械が出来たのである。現在我等が見るところの機器から最初の發明時代を回顧すれば如何なる状態にあつたであらうか。諸君の中に若し機械史を讀んだ人があれば一つの非常に興味ある故事を知つてゐるであらう。例へば發動機の歴史に就いて云へば、最初發明せられた頃は單に一方向の動力だけで、現在の如く兩方向の動力はなかつた。現在色々な工作の機器には汽車汽船の如く、すべて二方向の動力があるが、その動力を何うして起すかと言へば、水を汽罐に充しその底で石炭を燃焼せしめ火力を強くし水を沸騰せしめ水蒸汽を造る。水が水蒸汽に變ると極めて大なる膨脹力を生ずる。この水蒸汽を「パイプ」を以て汽罐中より一個の機器箱に導く。この機器箱を中國語では活塞と云ひ、外國語では「ピストン」と呼ぶが、この活塞が機器をして發動せしむるもので器機全體の中最も緊要な一部分である。機器が發動する所以はこの活塞の一端から水蒸氣を受納した後膨脹力に依て活塞を推動し活塞を前進せしめる。蒸汽力が活塞の一端に於て使用し盡された時は、更に他端より新しき蒸氣が注入せ

られ再び活塞を推戻す、かくして蒸氣は絶えず活塞を往復せしめ従つて機械全體も運動して息まないものである。従前この運動を起さしめる原料としては水を使用して居たが、現在では「ガソリン」を使用する。この油は非常に揮發し易いもので化して氣體となり活塞を推動する。各種機器の運動の原料として水を用ひても或は油を用ひても理窟は同じである。活塞の運動は往復して已まざるためこれに依つて機械を旋轉せしめ、我等は如何なる工作をも欲するままになし得る。

例へば船を動かす車を引くが如く、何んな工作でも出来るのである。即ち路を走る機器は一日よく幾千里を走ることが出来、運轉の機械は欲するだけの貨物を載せて運送することが出来るのである。これ等の機器も今日では巧妙極まるものであるが、その發明當初に於ては如何なる状態であつたらうか。發明當初に於ける活塞の構造は至極簡單なもので、ただ一端から蒸氣を接收して活塞を推して行くだけで、再び他端から蒸氣を接收して活塞を推戻すことは出来なかつたものだ。従つて當初活塞の運動は、ただ前進の一方方向を有するのみで再び回つて来る方向はなかつたのである。斯様な原因から従前機器を使用して仕事をするには尙ほ幾多の不便があつた。例へば始めて發明せられた綿打機の如きも、機械一臺毎に一人の子供を使用し機械の傍に立たしめ、活塞が前進した後子供は手を以てその活塞棒を引戻し、然る後又蒸氣が出て再び活塞を推すと云つた譯で

一佳復には一々小供の助けを借りねばならなかつた。これを現在の活塞が往復ともに人の助けを要しないのに比較して、何と云ふ不便さであつたらうか。その後何うしてかくも便利なる活塞を造ることが出来たのであらうか。その間如何なる順序を履んで來たものか。當時その種機械を製造する技師には活塞を引戻す方法が頗と判からなかつた。當時棉花工場と言つても、もともと餘り大きなものではなく、使用せられて居る機械力も唯一方向のものに限られ、その上一工場内にはただ十有餘臺の機械があつた許り、そして一臺の機械に一人の小供を使用しこれを幫助せしめて居たのであるから、十餘臺の機械があつても十數人の小供を使用するに過ぎなかつた。それ等の小供達は、日々その機械を引戻すことが仕事で、何時も同じ動作のみを繰返してゐたので、頗と興味もなく、果ては非常に倦怠を覺えるやうになつた。子供等が仕事に倦怠を覺え始めた爲に、職工長の監督が必要となり、これが爲小供等は懶けることが出来なくなつたが、その代り職工長が場を外せば、すぐ機械を引く手を止めて、イタ、ブラ、とすると言つた有様であつた。斯うした小供達の間に、一人の非常に聰明で又非常に懶怠な子供があつたが、彼は手を働かせて一々その機械を引張るのをいやがつて、一方法を案出して手に代つて引張らせたものである。それは何うしたかと言へば、一本の繩と一本の棒とをその機械の上にしばりつけ、活塞が前進した後また自動的に引戻す

ことが出来るやうにしたもので、お蔭でその小供は活塞を引戻すのに手を動かさずとも、自動的に戻つて來、そして休みなく運轉するやうになつた。その一小兒の發明が十數人の小供全體に傳はり、彼等も同様棒と繩との助けを得て機械を自動せしむることが出来るやうになり、皆仕事を放つて置いて、弄戲を始めたものである。やがて職工長が歸つて來たが、小供等が機械の傍に立つて活塞棒を引戻しもしないで遊んで居るのに拘らず、活塞が自動的に動いて居るのを見て驚き訝り乍ら、小供等は機械を引張らないのに何うして機械が自動して仕事を繼續することが出来るのであらうか、小供等は何故遊んで許り居るのか、これは全く奇怪だと叫んだものである。職工長はそのとき餘りに不思議に思はれたので、機械が自動的に回つて來る理由を考察し、その考察の結果を技師に報告したのであつた。その後技師には、その小供の發明した方法が非常に巧妙なものであることが分つたので、その方法を基礎として漸次改良を加へて行つた結果、今日の如き往復自在な機械とすることが出来たのである。

民權政治の機器は今日迄百餘年を経過するが何等改變せられてない。我等現在の民權政治の機器を見るに、各國現行の民權は、一選舉權あるに過ぎず、これ即ち人民に僅に一つの發動力よりなく、二つの發動力がない爲民權を推出することが出来てもこれを引戻すことが出来ず、恰も昔の

發動機同様なのである。けれどもその發動機は、機械の手助けをして居た一慣け小僧があつて、一本の繩と一本の棒とを以て機械そのものの力を借りて機械を自動的に往復せしむることの出来ることを知つたが、現在の民権政治に至つては、今尙ほこの種慣け小僧も居ないと見え、民権を引戻す方法はまだ發明されて居ないのである。斯うした次第で民権政治の機器は使用せらるるやうになつてから一百餘年にもなるが、今日迄に一選舉權を有するのみで、選舉權を享有してからも幾許の進歩もせず、選舉せられた人が賢からうが不肖であらうが、彼等を管理すべき他の權がなかつたのである。斯様な状態であつたから民権政治の機器は不完全で、この機器が不完全なりしがため、民権政治は今に至る迄適當な辦法もなく何等顯著なる進歩もしなかつたのである。我等はこの種機器を進歩せしめんが爲には如何なる點より着手すべきか。即ち前回述べて置いた道理に照して權と能とを明かに分つことが必要である。

今更に機械を引用して比喩ふるならば、機械の各部の權と能とは區別截然たるものがある。何の部分が仕事をし、どの部分が動力を起すのが、すべて一定の限界がある。例へば船の機械に就いて云へば、現在最大の船は五六萬噸もあり、斯様な大船を動かす機械は、發するところの力が十萬馬力以上の機械であるが、ただ一人で之を完全に管理することが出来るのである。これを管

理する人は、船を動かさうとすれば立どころに動かすことが出来、停めやうとすれば立どころに停めることが出来、その動停は全く意の儘である。現在の機械の進歩は斯様な妙境に迄到達して居るのである。ところが最初機械が發明せられた頃は、機械の出す力が幾百馬力幾千馬力あらうとも、馬力が餘り大き過ぎた爲之を管理する人なく従て致てこれを使用するものがなかつた。通常機械の大小を言ふ場合には、すべて馬力を標準として居るが、一馬力とは一體何れ程の力であらうか。八人の強壯なる人の力を集むれば一馬力である。だから若し一萬馬力と言へば八萬人の力に相當する。現在の大商船や軍艦に使用せらるる機械の發するところの原動力は十萬馬力乃至二十萬馬力あるが、斯様に大力ある機器はちよつと他に之に相當するものはあるまい。普通の機械でも一萬馬力と云へば八萬人力であるが、若し斯様な大力の機械を管理する方法にして不完全であつたならば、その機械全體が一旦發動した以上、これを收拾することが出来なくなるであらう。所謂「能發動不能收」である。斯うした理由で従前機械を發明した人は、機械を試験する際よく自ら機械に打たれて死んだもので、かうして機械の犠牲となつた發明家は、世界機械史上何れ程あることが判らない位だ。外國語で「化蘭京士丁」(Frankenstein)と言ふ言葉があるが、これは動かすことが出来ても停めることの出来ない機械のことである。その後機械の構造

は日一日と改良せられ進歩して、十萬馬力乃至は二十萬馬力の機械でも、唯の一人で従容として之を管理し得、何等の危険もなくなつたのである。十萬馬力と言へば即ち八十萬人力で、二十萬馬力と云へば一百六十萬人力であるが、若し斯様な大きい人力があつたとすれば、これを管理することは果して容易であらうか容易でないであらうか。今軍隊の力に就いて見ると、一二萬人にもなればその管理は仲々容易なことではないが、機械の力を以てすれば、一百六十萬人の多數のものを一人で従容と管理し得るのである。これに依つても機械の進歩が如何に迅速であつたか、管理の方法が如何に完全であるかが判る。

現在の政治家及び法律學者はすべて、政府を以て機器とし法律を以て工具として居る。そして近世民權時代に於ては人民を以て動力としてゐる。従前君權時代に於ては帝王を以て動力と爲し、全國の動作は王室から發源せられたものである。その時代には政府の力が大きければ大きい程、帝王の尊嚴もそれだけ餘計に顯はれたもので、そして左様な強力な政府あつて始めて帝王の號令が容易に實行せられたのである。帝王は發動機械に相當する人であつたが爲、政府の力が大きければ大きい程、帝王の地位も益々高くなり、苟しくもその爲さんと欲するものは悉くこれを爲すことが出来たのである。例へば、内治を修し遠略に勤め軍を整へ武を經するなど、彼が爲さんとする

ことは萬事出来ないことはなかつたものである。故に君權時代に於ては政府の力が如何に大であつても、帝王にとつては利こそあれ何等害はなかつたものである。民權時代には人民が政府の原動力である。而も何が故に人民は政府の能力の餘り大きくなることを願はないのであらうか。即ち政府の力が大に過ぐる場合、人民は政府を管理することが出来ず、兎もすれば政府に壓迫せられ勝て、其の上従前其の壓迫なるものが餘りに大にして受くるところの苦痛が餘りにも多かつたから、これ等の壓迫の苦痛を免れんとするには、政府の能力を防止しない譯には行かないからである。最初機械の發明せられた頃は、一個の機械を推して行つた場合、唯一人の子供を使用すれば、これを引戻すことが出来たのであるから、察する處、當時の機械の力は極めて小さいもので最大幾馬力に過ぎなかつたものに違ひない。でなければ一萬馬力以上の機械は、當然小供一人では引戻し得る筈がない。當時は機械の管理方法が不完全なりしがため、人民は何うしても斯様な小力な機械を使用するの他なかつたのだ。民權も現在はまだ初發達の時代であつて、政府を管理する方法も亦不完全である。だから勿論政府の動力は人民より發源するものではあるが、何分人民は動力を發生した後再びこれを隨時回收することが出来ねばならないのであるから、小力な政府を用ふるより他致方がないのである。若し幾萬馬力と云つたやうな非常な力を有する政府があつたな

らば、人民はとてこれを管理することは出来ず、従つて之を用ひやうとはしないであらう。斯うした譯で歐米各國の人民は強く有力な政府を恐れるのである。恰も従前の工場で大馬力の機械を恐れて居たのと同様の道理で、機械に就いて言へば、當初其の小力な機械を適當な方法を以て改良を試みなかつたならば、必ずその機械は永遠に進歩せず必ずや永遠に人をして引かしめねばならなかつたであらう。けれどもその後日日改良せられて今日に至り、人力を用ふるを要せず、唯機械それ自身の力で自動的に戻つて來ることが出来るやうになつたのである。ところが政治機關にあつては、人民には殆ど改良の法なく、一體に政府の能力が大に過ぎてはこれを引戻し得なくなるのを心配して、却て常にこれが防止の方法を講ずると言つた状態であつたから、政府は發達する能はず、民權も進歩しなかつたのである。現在の世界の潮流に照して言へば、民權思想は日一日と進歩して居るが、民權政治の機器は依然少しも進歩して居ないと言はなければならぬ。故に歐米の民權政治は今に至る迄根本的辦法がないのである。

余の前回講義したところの根本辦法から言へば、權と能とを明瞭に分かたねばならぬが、これを機械に比喩へて見れば、能力あるものとは何であるか。機械そのものがとりもなほさず能力あるものである。例へば十萬馬力の機械はそれ相當の石炭と水とを供給すれば、十萬馬力相當の能

力を發生することが出来る。次に權を有するものとは何であるか。機械を管理する技師が即ち有權の人である。何馬力の機械であらうが、機械は技師の一轉手の勞を以て、その意の儘に立どころにこれを發動せしめ停止せしむることが出来る。實に機械の管理は技師の思ふが儘である。恰も汽船汽車がちよつと機械を動かせば忽ち非常な速力で走り機械を停めれば即座にこれを停止することが出来ると言つたやうに。だから機械を以て非常な能力あるものとし、技師を以て非常な權を有する人と言ふ。人民が政府を管理せんとする場合、若し果して權と能とを分たんと欲せば、やはり技師が機械を管理すると同様にせねばならない。民權の極盛時代を想像して見るに、其の時代になれば政府を管理する方法は極めて完全なるものがあり、政府も自然大きい力を有することとなる筈で、人民はたゞ自己の意見を國民大會の席上で發表しさへすればいゝこととなり、そして政府に對しては、これに攻撃を加ふればこれを倒壊することが出来、又これを頌揚すれば其の基礎を鞏固にすることも出来ると言つた具合になるであらう。併しながら、未だ現在では權と能とを分けて居ないから、政府が専横に過ぐる場合、人民はこれを管理する方法なく、人民が何のやうに攻撃しやうが何のやうに頌揚しやうが、政府は一切お構なしであるから、何とも效力の發生しやうもないのである。現在世界の政治は進歩しては居ないが、民權思想だけは非常

に發達した。各國人民は其の政治機器の現状が一般に彼等の思想にも用途にも適しない事實を認めつゝある。

中國は今正に改革時代にある。我等は政治に對し民權の實行を主張してゐる。此の我等の民權思想は歐米から傳來したものだ。近く我等は歐米の新思想を學ばんとして、一個の完全なる民治國を造つた。當初民國建設に際し一般革命志士は、何れも完全に歐米を模倣し歐米の後塵を歩み歐米のものを完全に模倣さへすれば、中國の民權は大體に於て充分なる發達を遂げ得たものであるから、止境と云はなければならぬと考へて居た。その當初に於て斯様な考へを持つて居たことは決して全然誤りであつたとは言はれない。中國従前の專制政體は餘りにもひどく腐敗してゐた。だから若し我等にして革命を實行し專制を打破し建設的事業を爲し學んで歐米のそれの如きに至り得たならば、比較上から言へば確かに非常にいゝことに違ひない。併しながら歐米人民は自己の國家社會の現状に對して果して衷心満足して居るであらうか何うか。我等にして細心歐米の政治社會を考察するならば、所謂革命の先進國米國佛國の人民の如きも、今尙ほ政治の改良を主張し依然革命の再來を心密かに期待して居ることが分かるであらう。彼等は革命後尙一百餘年に過ぎざるに、何故に革命の再來を期待したりするのであらうか。之に依ても我等が從

前學んで歐米の如きに至れば、それが止境であると考へて居たことの誤りであつたことが判るであらう。そして又之に依て、我等が若し果して學んで米佛同様になつたならば、佛國米國が今尙ほ革命を要求しつゝある通り、我等も亦百十年の後必ずや革命の再起を免るゝことの出来ないであらうことは想像し得られる。佛國米國の現在の政治機關は尙幾多の缺點があるから依然人民の欲望を満足せしめ得ず、又完全なる幸福を享けしむることが出来ないのだ。斯様に考へて來ると、今我等の提唱する改革も、學んで現在の歐米の如きに至り得たとしても、それで止境であるなどと満足する譯には行かなくなる。若し我等が彼等の後塵を歩むとすれば、一代では濟ます更に後の代迄も之を辿らねばならず、革命の再起を見ずには濟むまい。若し革命の再起を見るやうなことでもあれば、今次の革命は徒勞であり無効ではないか。我等の現在の革命は徒勞無効であつてはならない。何うしても一個長治久安の計を樹てなければならぬ。所謂一勞永逸的のものでなければならぬ。然らば將來の後患を免れんとするには一體何うすればいゝのか。

歐米の方法を完全に中國に移し行ふことは可であるか不可であるか。試みに我等は歐米最新の物質文明に就いて言へば、例へば交通上最も緊急なものは鐵道であるが、この鐵道を最も早く模倣して敷設したものは、東方の國家の中では日本である。中國は近來纔に鐵道の重要性を知り、

漸く鐵道建設の必要を悟つたやうな次第で、從て鐵道建設は日本より後れて居る。ところが中國と日本との現有鐵道に就いて比較するに、中國と日本との汽車は、諸君も乗つたことのあるものはよく知つて居るやうに、日本の軌道は非常に狭く車も非常に小さく、中國の滬甯及び京漢鐵道等の軌道は日本のに比し非常に廣く車も亦非常に大きい。中國の鐵道敷設は日本より後であるにも拘はらず、何うして車軌道共に日本のに比べて廣く大きいのであるか。即ちそれは中國の學んだところのものは歐米の新發明であり日本のそれは歐米の舊物であつたからだ。若し中國が鐵道建設に際し歐米に學ばず日本の舊物のみを學んでゐたならば、満足することが出来たであらうか何うか。従前歐米も狹軌であつたため最初これを學んだ日本は、無形の中に非常な損失を受けて居るのである。現在我等が鐵道を建設するに、又その種不便な舊物を學ぶことが何うして出来やうか。けれども中國近來の鐵道の建設には、日本の不便なる舊物を學ばずして、非常に利便な歐米の新發明を學んだ。だから中國現在の鐵道は日本よりはいいのである。これ所謂「後の驢が先きになる」であらう。斯様な次第であるから、我等が今政治を改良するにも歐米の舊物を學ぶのは不可であつて、歐米の政治情形を明かに考察して、彼等の政治的進歩は果して如何なる程度に至つてゐるかを洞察し、我等は彼等の最新發明のものを學ぶやうに心掛けねばならぬ。かく

て始めて各國を凌駕することが出来るであらう。

余は前回の講議に於て、歐米に於ける民権問題に對する研究が未だ不徹底であり、不徹底なるがために人民と政府とが日々相衝突して居ることを説いて置いた。民権は新しい力であり、政府は舊い機械である。我等にして今民権問題を解決せんとすれば、別に一臺の新機械を造らなければならぬ。この新機械を造る原理は權と能とを分つことである。そして人民が權を有せなければならず、機械も有能でなければならぬ。今大能ある新機械を適當な人をして之を管理せしめたならば勳停意の儘である。これ歐洲に於て非常に完全な機械が發明せられたがために他ならない。併しながら、彼等は政治に就いてはまだ非常に完全なものとは發明して居ない。だから我等が今非常に完全な改革を行はんとしても學ぶよすがもない。何うしても自ら一個新しい辦法を創案しなくてはならない。我等にして一個新辦法を想出せんとせば、果して想出し得るや否や。中國人は義和團事變後完全に自信を喪失して、一般人の心理には何事も外國を信仰し自己を信せず、萬事自分で事を爲し單獨で發明するなどといふことはとても不可能である、何うしても歐米の後塵を歩まねばならぬ。歐米の辦法を倣はねばならないと考へるやうになつた。義和團事變前迄は我等の自信力は非常に豊富で、一般人の心理では中國固有の文明中國人の思想才力は歐米に超へ、

我等自ら如何なる新發明でも、やらうと思へば何でも出來ないことはない位に考へて居たものだ。然るに今日に於て何うであらう、何事も不可能のことに考へて居る。そして歐米文明の優越が、政治各方面以外の、僅に物質的の方面に限られて居ることに就いて一向知らない。勿論單に物質文明の科學の點から言へば歐米近來のそれは非常に發達して居る。一個人が一種の學問に對しては固より特長を有する。但しその他各種の學問に對しては、未だ必ずしも充分精通して居ると言ふところ迄は行つて居ない。まだまだ幾多至らない點があるやうに思はれる。一百余年來彼等の物質科學上の發明は極度に達し、許多の新發明もあり、眞に天工を巧奪するの概があり、我等の夢想だにし得なかつたところがある。が若しそれ政治學に就いて言ふならば、彼等が從前思ひ及ばなかつたものは、現在我等も亦思ひ及ばないだけのこと、別段之と云つた理由がある譯ではない。近來歐米の機械の進歩は非常に完全なものである。けれども彼等の機械が進歩して居るからと言つて、彼等の政治迄も進歩して居ると言ふ譯にはゆかない。最近二三百年來歐米の特長は、ただ科學に限られて居たがため、大科學者と言はれるものは、その專問の學問の上に於て卓越した知識を持つて居たことは勿論であるが、その他の學問、例へば政治哲學と言つたやうな方面には、未だ必ずしも兼ね長すると言ふ譯ではなかつたのである。一つの適切な故事を引用して證明して見よう。

従前英國に近世の學者の中に於ても最も傑出せる「ニュートン」と言ふ一大科學者があつた。「ニュートン」とは抑も如何なる人であつたか。彼は天性聰明にして且つ學識の非常に深かつた人で、彼は物理學上幾多の空前絶後の發明をしたが、就中最も著名なるは萬有引力である。「ニュートン」の發明にかかるこの萬有引力こそは實に世界に於ける第一回の發明であつて、今日に至る迄科學の根本原理となつて居り、近世に於ける幾多の科學原理に關する新發明も萬有引力の學說に及ぶものはない位である。斯様に「ニュートン」は科學に對しては特殊の聰明さを持つてゐたが、他のことに對しても、同様な聰明さを持つて居たのであらうか何うか。余の見るところでは全然さうではなかつたらしい。と云ふのはここに一つの興味ある故事があるが、これに依ると「ニュートン」が萬事に聰明ではあり得なかつたことを證明出來ると思ふ。彼「ニュートン」の一生は讀書と實驗であつたが、その他に尙ほ一種の嗜好があつた。彼の嗜好と言へば他でもない猫を愛することであつた。彼は大小二匹の猫を養つて居り、彼の出入には何時も猫がお伴して居たものである。彼は非常にその猫を可愛がり、彼の行くところへは何處へでも猫はお供をしたもので、彼が室内に於て讀書したり、實驗して居る際でも猫が外へ出やうとすれば、一切の仕事を放つて置いて自ら「ドア」を開けて出してやり、又部屋に入つて來やうとすれば、彼は又仕事を放つて「ドア

「」を開けて入れてやると言ふ風であつたが、斯うして一日中出たり入つたりして居たため、流石猫好きの「ニュートン」も「ドアー」の開け閉てが面倒で堪らなくなり、或日のこと一方法を考へ出して猫が自由に出入して彼の仕事の邪魔をしないやうにした。彼が考へ出した「ドアー」の開閉の方法とは一體どんな方法であつたか。即ち彼は「ドアー」に大小二つの孔を作つたもので、「ニュートン」の考へでは、大きい孔からは大猫を出入りさせ小さい孔からは小猫を出入りさせる積りであつたのである。この考へが聰明な大科學者の考案であり、この事實がやはり大科學者のやつたことであるから、何と驚くではないか。普通の常識から云へば、一つの大孔さへ開ければ、大猫も出入が出来るし小猫も亦當然出入が出来、大孔一つさへ開ければこと足る筈であつて、何處に時間を空費して迄も餘計な小孔迄開ける必要があるであらうか。常人でさへも誰でも一つの大孔さへ開ければいい位のことは知つて居るのに、大科學者の「ニュートン」ともあらうものが、却つて二つの孔を開けたりして全く可笑しいではないか。これでも科學者は萬事に聰明であるか何うか。この一例で見ても、科學者は萬事に非常に聰明ではあり得ないことが證明されるやう。科學者は専ら一藝に長ずるものであつて、未だ必ずしも種々な學問にも兼ね長じて居ると云ふ譯のものではないのである。

最近數十來年、歐米の科學の進歩は極點に達して居る。故にその科學に依つて出來た物質機械は、往復兩面の動力があり、往復とも自動的である。けれども政治の機器は唯一面の動力ばかりで、人民は政府の權力に對してただよくこれを發出することが出来る許りで、之を收回することが出来ない。今我等が民權を主張して民國を改造し將來新民國を造らんが爲には、必ず改造に徹底しなければならぬ。徹底的な新民國を造らねばならぬ。歐米先進諸國には我等にとつて何等完全に之を倣ふべきものとはない。されば我等は自ら別によりよき新方法を考へなければならぬ。この種新辦法は歐米に於てすら尙ほ完全に想到されて居ないものであるが、果して我等に想到し得るものなりや否や。この問題に答へんがためには、自ら自己を輕視するやうなことがあつてはならない。所謂妄自菲薄してはいけない。民權の潮流中國に傳來せる今このとき、我等はこの潮流を歓迎し國家を改造せんとする。自己の新しき辦法は果して完全に想到し得たであらうか何うか。中國は幾千年來今日に至る迄獨立の國家であつた。そして從前の政治の發達には、未だ曾て外國の材料を借りたことはない。中國は世界に於ける文化の先進國であつて、從來外國の材料は全然これを模倣しなければならぬ程のものは見當らないのだ。ところが歐米最近の文化は漸く中國よりも進歩した。そして我等が彼等の新文明を羨慕するやうになり、茲に始めて革命を主張

することとなつたのである。斯様に歐米の文化は發達の日尙ほ淺い。従つて我等が今直に革命を實行したならば當然中國は歐米を凌駕し、改めて世界の最新にして最も進歩した國家となることが出來ねばならぬ筈である。我等にして若しこの目的を達せんとせば、實際に於てそれだけの資格はあるのである。唯然し革命を實行するにしても、舊機關化せる歐米の民權政治を全然模倣すべからざるは勿論である。

我等が目的を達せんが爲には、何うしても別に一新機器を造り出さねばならない。我等が今新機器を造り出さんとするに當り、世界には果して之が參考たるべき新材料ありや否や。現在各國に散在する材料は頗る多い。だが先づ一個の根本的辦法を決めてかかることが先決問題である。余の前回に於て主張した權と能とを分つことは、即ち一つの根本辦法であらねばならず。根本辦法が決められた上で民權を實行し、なほ國家の組織と民權の行使とを分かつたねばならぬ。歐米では根本辦法には何等想通するなく、權と能とを分つことが出來ず、其の結果政府の能力を擴充することも出來ないのだ。我等は現に根本辦法を發見してゐる。だから更に一步を進めて政治機關を分離せねばならぬ。政治機關を分解せんとするには先ず政治の意義から明かにしてかからねばならぬ。余は第一講に於て政治と言ふ此の名詞に對し一つの定義を下して、政は衆人の事、治は衆

人の事を管理することを説明して置いた。今權と能とを分解して造成せられた政治機器には、即ち物質的機器と同様其の中には機器其のものの力と機器を管理する力とがあらねばならぬ。今新發明に依て造られた新國家を、此の二つの力にはつきり區別して見たい。何うしたらよく明かに區別することが出来やうか。それには先づ根本に遡つて、再び政治の意義から研究してかからねばならぬ。政は衆人の事で、衆人の事を集合した大きい力を即ち政權と呼ぶ。此の政權は之を民權と言ふことも出来る。治は衆人のことを管理すること、衆人の事を管理する力を集合した大きな力を即ち治權と呼び、又政府權と言ふことも出来る。

故に政治の中には、政權及び治權の二つの力が含まれてゐる譯である。そして此の二つの力は、一つは政府を管理する力で他は政府自身の力である。之れは又何う言ふ意味であつたか。例へば此處に十萬馬力の汽船の機械があるとして、其の機械が十萬馬力を出し船を動かすことが出来るとすれば、之は即ち機械其のものの力である。此の力は恰も政府自身の力と同様で、此の種自身の力が即ち治權である。斯様な大きな汽船を或は前進せしめ、或は後退せしめ或は又左右何れへなりとも回轉せしめ、或は停止せしめ又速度を速くし或は遅くせんがためには、更に技術優秀なる技師があり非常に完全なる機械を使用して初めて、之を走らしむることが出来又管理すること

も出来るのである。非常に完全な走らせる力と管理する力とがあつて、初めて新様な大汽船を欲するが儘に、動かすことも停めることも出来るのである。此の種船を動かし停止する力が、即ち汽船を管理する力である。此の力は恰度政府を管理する力と同様であつて、此の管理の大きい力即ち政權である。我等が新國家を造ることは、恰も新しく汽船を建造すると同様である。汽船の建造に就いて見るに、其の船に裝置する機械の馬力が小さければ船の速度もそれだけ緩慢で、積載貨物も亦自然少量で、従つて其の利益も當然薄くなければならぬ。之れに反し馬力が大であれば、速度も速に積載貨物も當然多量に、其の取得する利益も亦當然大であらねばならない。此處に一隻の大汽船ありと假定し、之に裝置せられた機械の馬力を十萬馬力とし、每一時間の速度を二十海里とすれば、廣東上海間の一往復二週間に十萬弗を儲けることが出来る。又別に一隻の極大の汽船を建造したりと假定し、之に裝置した新機械の馬力を一百萬とし每一時間の速度五十海里として比例計算したならば、廣州上海間一往復一週間に一百万弗の金を儲けることが出来るであらう。現在世界に於て最快速の大汽船でも一時間二三十海里を走るに過ぎないが、若し我等の建造する新汽船が一時間五十海里を走ることが出来たならば、世界のどの汽船だつても競争は出来まい。我等の汽船は即ち世界での最速にして最大の新汽船となるであらう。我

等が國家を創造するも亦之と同じ理窟である。若し國家の中に建設せらるる政府に對し、國家が非常に小さい力を發生するやう要求するならば、それは無力な政府となつて了ふであらう。そしてこんな政府のやる仕事は、當然非常に小さく其の成就する效力も極めて微々たるものであらう。之れに反し國家が非常に大きい力を出すことを要求する場合には強力にして有力な政府となるであらう、そして其の政府のやる仕事は當然非常に大にして且つ其の成就すべき效力も亦當然極めて大なるものであらねばならぬ。此處に世界に於ける最大の國家の中に一個の極めて強力なる政府を建設したるものと假定するとき、此の國家は實に各國を凌駕する國家ではなからうか、此の政府は實に天下無敵の政府ではあるまいか。

歐米に於ては今日に至る迄、何が故に唯大馬力の機械を有する國家のみを造つて、極強有力なる政府ある國家を造らなかつたのであるか。既にそれは彼等現在の人民には、たゞ大馬力の機械を管理する方法を有するのみにして、強力なる政府を管理する方法を持つて居ないからである。而して又小馬力の舊船を不要として別に一隻の大馬力の新船を建造することは、極めて容易なことであるが、奈何せん國家は、既に其の根柢深く且つ鞏固であるから、よしんばそれが無力にして舊い政府であつても、別に新しく強有力な政府を建設すると言ふことは仲々容易なことではない

からだ。我等中國は四億の人口を有し世界で最も多數の人口を有する國家であり、而も其の領土は寬濶、物産亦豊富にして萬事米國以上である。米國は今では世界の最富最強の國家となつて如何なる國も彼と比肩して競争することは出来ない程偉大な國だ。而も此の米國に對し、中國は天然の富源の點に於ては之を凌駕して居るのである。が唯現在の實情では、米國を凌駕するせぬの問題ではなく、とても米國と同日に論ずることも出来ない情けない有様である。此の原因は、とりもなほさず中國に天然の資格があつても人爲的工夫に於て缺くるところあり、從來最良な政府がなかつたからだ。されば若し我等が此の天然の資格に更に人爲の工夫を加へて一個の非常に完全且つ有力なる政府を建設したならば、それに依て發生する大力量を以て全國を動かし中國をして直に米國と比肩し競争せしむることが出来るであらう。

中國に強有力な政府が出来た後は、我等は歐米人民の如く政府の力の大に過ぎ管理し得ないことを心配する必要はないであらう。何故ならば我等の計劃しつゝある新國家は、國家政治の大權を二つに分けてあるからだ。即ち一は政權であつて、此の政權を完全に國民の手中に與へることになつて居り、若し人民に充分なる政權あらしめたならば、直接國事を管理することが出来るであらう。此の政權は即ち民權である。他は治權であつて、此の大權は完全に政府機關の手に與ふるこ

ととなつて居り、若し政府をして非常に大なる力ならしめたならば、全國の事務を治理することが出来るであらう。此の治權は即ち政府權である。斯様に人民に極めて充分なる政權があり、政府を管理する方法が非常に完全でありさへすれば、政府の力が如何に大きくても之を管理し切れないと言ふ心配はないからだ。歐洲は従前は十萬馬力以上の機械を取て造らうとはせず、十萬馬力以下のもを造つてゐたものであつた。それは機械の構造が不完全なるに加へて管理方法が周密ならざりため、萬一機械の力が大に過ぎた場合之を管理し得ないであらうと言ふ心配があつたからだ。ところが此頃では機械の進歩著しく、機械其のものも最早充分完全なものとなり、之を管理する方法も亦頗る周密となつたので、極大馬力の機械でも造るやうになつた。我等が政治機關を造らんとし、政治機關を進歩せしめんとするにも亦之と同様の道を歩まねばならぬ。若し構造頗る完全にして有力なる政治機關あらしめんとするならば、同時に又此の機關を管理するに頗る周密なる民權の方法がなければならぬ。歐米に於ては政府を管理するに非常に周密なる方法がなかつた爲に、彼等の政府機關は今尚ほ發達しないのである。我等にして彼等の覆轍を踏まさらんが爲には、其の根本に於て人民の對政府態度を權と能とに分ち、政治の大權を政府權と人民權との二つに分つことが先決要件でなければならぬ。斯様に區分すれば、政府は機械に

人民は機械技師に相當することとなり、従つて人民の對政府態度は、恰も技師が機械に對すると同様であらばいい。

現在機械の構造は非常に進歩した。そして單に機械の智識あるもの許りではなく、之が智識のない子供でもこれを管理することが出来るやうになつた。例へば現に使用せられつつある電燈はその發明された頃には何んな状態にあつたであらうか。電氣は雷と同様極めて危険なものであつたがため、管理の方法がよくなかつたら人を殺す結果となり、そんな譯で、従前電氣を發明した科學者が何れだけ犠牲になつたか分らない。斯様に犠牲が多く危険も極めて大なりしがため、電氣の發明後も随分久しい間、仲々燈用に供すると言ふところ迄は行かなかつたものである。その後非常に周密なる電氣の管理方法が發明せられ、「ボタン」により點滅自在となり、非常に便利且つ安全となつたので、何等電氣に關する智識なき人でも、町の小供であらうが、或は又田舎の極く無智なる愚民であらうが、一轉手の勞を以てよく電氣を自在にすることが出来るやうになつた。であるから現在ではこの危険極まる電光も燈用に供し得るやうになつたのである。

その他各種の機械の進歩も亦之と同じ経路を辿つて居る。例へば最新發明せられた偉大な機械は空飛ぶ飛行機であるが、これ亦非常に危険なもので、最初發明せられた頃は随分澤山の人が死

んだものである。従前廣東の悪如といふ男は何う言ふ男であつたか。彼は飛行機製造家であつて飛行機から墜落して死んだ男ではなかつたか。従前飛行機が發明された頃は、この機械で飛ぶことなど知つてゐる人のあらう筈もなく、飛行機製造家は同時に操縦者であらねばならなかつた。ところが最初飛行機製作家は、一面この種機械の管理方法周密ならず、他面又従來の経験とでもなく、その使用方法も充分判つて居なかつた爲、何時もよく澤山の人が墜落して死んだもので、餘り犠牲者が多かつたため一般に飛行機に乗らうとするものはなかつた。現在ではその操縦方法も非常に周密になり、誰でも鳥か雀同様、空中を上下左右自由自在に飛ぶことが出来、非常に便利且つ安全と言ふことも分つて來たので、誰でも平氣で乗るやうになつた。普通人が平氣でこの機械を利用することとなつたがため、近來飛行機は交通用に使用せられ、恰度我等が廣東から四川に行く場合、路は非常に遠く途中には敵が居ると言つたやうな譯で、水陸の交通不便の際は、飛行機に乗れば一氣に空中を四川に飛ばすことも出来るやうになつたのである。

現在中國には民権思想はあるが、この種思想的機械に關しては尙ほ世界何處にも完全に發明されて居ず、一般人民中誰もその使用方法を知つてゐるものがない。我等先知先覺者は、先ずこの種機械を造り便利な放水制(faucet)安全な「ボタン」等を造つて普通の人にも一轉手の勞を以て

これを使用し得るやうにせねばならない。然る後始めてこの種思想を事實に現はすことが出来るであらう。中國人の民権思想が發達したのは元來歐米より後である。恰度鐵道の建設が日本より遅れてゐたと同様に、日本の鐵道建設は我等より早かつたが、その建設せられた鐵道は舊式で今の用には適しない。そして我等が新しく建設した鐵道は至極時勢に適したものである。我等は歐米より後れて居るが如何なる方法に依つたならば民権を使用することが出来るであらうか。この方法を發見すれば、こゝに始めて民権を我等の使用に供することが出来るであらう。若しこの方法にして發見せられなかつたならば、民権を我等の用に供することは出来ないであらう。然らずして若し必ずこれを使用せなければならぬものとしたならば、それこそ寔に危険極まるもの人を殺す許りであらう。現在の世界には果してこの方法があるか何うか。歐洲の端西ではこの幾部分の方法があつて既に試験済である。之は頗る徹底した方法で直接的民権であるが、未だ完全と言ふところ迄は行つて居ない。歐洲諸大國に至つては、まだこの不完全な方法すらも試験されて居ないので。この幾部分の方法でも試験した國家と言へば、一小國瑞西の外になく、その他の大國にはないのであるところから、多數のものはこの幾部分の方法なるものは、小國には使用出来るが大國では用に足らないと言つたやうな疑を懐いて居るやうだ。だが一體歐洲諸大國は何うし

てこの幾部分の方法さへも使用して居ないのか、これ全く狭軌の鐵道を有する日本が、之を廣軌に改造するがたには長年月に巨額の經費を要し非常に不經濟であるから、ちよつとは斷行し得ないと同様な譯で、彼等先進國家も國家の治安を擾し經濟界を擾亂せんことを恐れて、これ等新式の發明の長所は充分心得て居ても、やはりこれを採用し兼ねて居るのだ。而して我等中國に至つては、民權の機關に關する限り、從前何等舊物がないので、今直に而も極めて容易に最近最良の新發明を採用することが出来る筈である。

民權の一方面に對し、今世界に何んな新式な發明があるか。第一は選舉權である。現在の所謂先進民權國家は、普遍的にただこの一個の民權を實行して居る許りであるが、専らこの一民權を行使するのみで、果して政治の用に足りるであらうか何うか。専ら此の一個だけの民權を行ふことは、恰も前進力のみで後退力のなかつた最初の舊式機械同様である。現在の新式の方法には、選舉權の外に罷免權がある。人民はこの權を有することに依つて後退力を持つこととなる。此の二つの權を以て官吏を管理するのである。人民に此の二つの權があれば、政府の一切の官吏に對し一面之を任命することが出來、他面又之を罷免することが出來て、萬事人民の自由にすることが出来るのである。之れ恰も新式機械が一進一退往復ともに自動し得ると同様である。國家にとつ

て重要なるものは官吏以外に何があるか。即ち法律がある。所謂「治人あるも尙治法あるを要す」である。人民は如何なる権を持つことに依て、よく法律を管理し得べきや。一つの法律に就いて見るに、それが人民に非常に有利と考へられる場合、若し人民に一種の権があれば、自ら決定し政府をして之を執行せしむることが出来るであらう。此の種の権を創制権と言ふ。之れ即ち第三の民権である。又若し従前の舊法律が人民に不利と考へられる場合、一種の権さへあれば、人民自ら改修し、改修の上この新法律を政府をして執行せしめ従前の舊法律を廢止することが出来るであらう。此の種の権を複決権と言ふ。之れ即ち第四の民権である。人民が此の四民権を有すれば、大體に於て先づ充分なる民権と云はなければならぬ。此の四権を實行することが出来ればまづ徹底的な直接民権と言ふべきであらう。従前充分なる民権なかりし頃は、人民は官吏又は議員を選擧した後は之れを何うすることも出来なかつたものだ。此の種民権は間接民権である。間接民権は、とりもなほさず代議政體である。此の政體に於ては代議士を以て政府を管理せしめ、人民が直接政府を管理することが出来ない。人民が直接に政府を管理することが出来るためには、人民が此の四つの民権を實行することが出来ねばならぬ。人民がよく此の四民権を實行してこそ全民政治と言ふのである。全民政治とは何を意味するか。即ち前にも説ける如く四億人を皇帝とすることであ

る。四億人を何うしたら皇帝たらしむることが出来るのであるか。即ち此の四種の民権を以て國家の大事を管理せしむるのである。故に此の四個の民権は即ち四個の放水制ホウスイであり四個の「ボタン」でもある。我等にして放水制あれば、水道の水を直接管理することが出来「ボタン」があれば直接電燈を管理することが出来、四個の民権があれば直接國家の政治を管理することが出来るのである。この四個の民権は又政權とも言はれてゐる。即ち政府を管理するの權である。

政府が政府自ら事を辨するの權は又工權と云ふことも出来る。即ち政府が人民に代つて工夫するの權である。人民に大權があれば、政府は工夫することの能否及び工夫の目的はすべて人民の希望に隨はなければならぬ。即ち政府に大權があれば、一度び發動して工夫すれば非常に大なる力を發生することが出来るのであるが、之に對して人民が意の儘に隨時これを停止せしめ得るものでなければならぬ。之を要するに人民に實際に直接政府を管理する權があれば、政府の動作は隨時人民の指揮を受けなければならぬ。其れは恰も外國の舊式軍艦に於ては、十二門の大砲を裝置してゐるものは、之れを六個の砲臺に分ち各個に準標を定め發砲することとなつてをり、敵を撃つに當つては、すべて幾多の砲手が各個に之を執行し指揮官に於て直接全部を管理することが出来なかつたものなるに反し、現在の新式軍艦に於ては、敵の遠近を測量するには、檣頭に測量

器があり標準を定め、發砲するには指揮官の部屋に電機があつて直接管理することとなつて居り、若し敵に遭遇した場合は多くの砲手が一々標準を定め發砲するの要もなく、ただ指揮官たる人が部室内に居て測量器よりの報告に基き、距離の遠近を測定し電機を發動せば、適宜の儘に何れの大砲をも發射することが出來、或は十二門の砲を同時に標準を定め一齊に發射しして皆命中せしめ得るのと同様である。斯の如くして始めて直接管理と言ふことが出来るのである。だが若し斯様に直接管理すれば、管理する人自身に於ては何等工夫する必要はない。かく自ら工夫する必要のない機械こそ、靈便なる機械と言ふことが出来る。

人民にこの四個の大權があつて政府を管理し、政府をして工夫せしめんとするならば、政府をして如何なる方法を用ひしむべきであらうか。政府をして非常に完全なる機關あらしめ非常に適切なる政策を遂行せしめんが爲には、五權憲法を用ふることが必要である。五權憲法を以て組織せられた政府にして始めて完全な政府であり政府機關と言へやう。この種政治機關があつて、人民に替つて工夫したならば、始めて非常に結構且つ完全な政策を遂行することが出来るであらう。従前米國の一學者は、政治學上に於て一最新學理を發明して云ふ、一國の中最も恐るべきは人民の管理し得ざる萬能政府をもつことであり、最も望ましきは人民の爲めに使用せられ人民の爲

めに幸福を謀る一個萬能政府をもつことであると。斯の如き政府を持つことに依て民治は始めて最も發達する。我等は、今權と能とを分かち、そして人民は技師であり政府は機械であると説いた。我等は一面機械たる政府は萬能であつて何事でもなし得、又他面技師たる人民も亦大なる力を有し萬能の機械を管理し得るものなることを欲する。では人民政府共に如何様な大權があつたなれば、之れを互に平衡せしむることが出来るか。人民の大權には、つゝいさつき説いた通り、選舉權、罷免權、創制權及び複決權の四つがある。政府方面には行政權、司法權、立法權、考試權、監察權の五つがある。人民の四個の政權を以て此の政府の五個の治權を管理してこそ完全な民權政治機關と言ふことが出来る。斯様な政治機關があつてこそ人民と政府との力を互に平衡せしむることが出来る。我等は此の二つの大權の關係を詳細且つ明瞭ならしめんが爲圖に就いて説明して見よう。



此の圖に就いて見るに政權は即ち人民權であり、治權は政府權である。人民が政府を管理するには選舉權、罷免權、創制權及び複決權を實行するのである。政府が人民に替つて工夫するには行政權、立法權、司法權、考試權及び監察權を實行するのである。此の九つの權が互に平衡を保持してこそ、民權問題は眞の解決あり、政治は始めて軌道ありと云ふべきであらう。此の九權の材料に至つては決して今日發明せられたものではなく、例へば政權に就いて言へば、瑞西の如き既に三權を實行し、たゞ罷免權がない許りであり、米國の西北數州の如きも瑞西の三權の外罷免權をも加へ行つて居るのである。更に選舉權に至つては、世界各國中最も普遍的な民權である。故に世界の民權の情形に就いて言へば、「スイス」は既に三權を實行し、米國各州の四分の一は四權を實行して居る。そしてそれ等地方は此の四個の民權を實行して非常な周密な辦法を有し、仲々の好成績を挙げつゝある。即ち此の四個の民權は、實に現に試験せられつゝある事實にして、假設的な理想ではないのである。従て我等が今之を採用するも、至極穩健であつて何等の危険はない。

政府權は従前すべて皇帝一人の壟斷するところであつたが、革命後漸く三權に分かれたのである。米國の如きは其の獨立後三權分立を實行し、其の後それが好成績を收め得たので各國は何れも

之に倣つた。斯様に従前外國では三權分立に過ぎなかつたのに、我等は今何が故に五權に分立せねばならないのか。其の他の二種の出所は如何。此の二權は實は中國固有のものに他ならない。古へ中國は考試及び監察の獨立制度を施行して非常な好成績を收めたもので、滿清時代の御史、唐朝時代の諫議大夫の如き非常に立派な監察制度であつた。此の種制度を施行する大權が即ち監察權である。監察權は即ち彈劾權である。現在外國にも此の種權利はあるにはあるが、單に立法機關の中にある許りで、獨立したる一種の治權とする迄には至つて居ない。歴史が考試を舉行して眞の人材を拔擢せることは更に中國幾千年來の特色であらねばならない。近來外國の學者が中國の制度を考察して、中國の獨立せる考試制度に對しては悉く之れを讚美し、中國の考試制度に倣つて眞の人材を拔擢せんと試みたもので、英國に於ける最近の文官試験の如きも中國を模倣せるものに他ならない。たゞ英國の考試制度は、普通文官の試験に限られ、まだ中國の考試權の如く獨立的眞精神に迄到達して居ない。故に中國の政府權の情形に就いて云へば、司法、立法、行政の三權は皇帝の掌握するところであつたが、其の他監察權及び考試權は獨立して居たものと言へる。即ち従前中國の專制政府も同じく三權分立を實行して居たもので、外國従前の專制政府と大した變りはなかつたとも云へる。従前外國の專制政府時代には一切の權は皇帝一人の壟斷すると

ころであつたが、中國では專制政府時代に於てさへも、考試權及び監察權だけは皇帝も尙ほ之を壟斷して居なかつたとも云へる。故に政府の大權を分かつて外國では三權分立、中國でも亦三權分立と言ふことが出来る。中國は従前幾千年來君權と考試權及び監察權の分立を實行して來た。外國では立法權、司法權及び行政權の分立を實行してから一百餘年になる。けれども何分之が實行は極めて最近のことに屬するため、未だ大して完全と迄は行つて居ない。中國は従前三權分立を實行して更に大なる流弊を生じた。我等が今中外の精華を集合し一切の流弊を防止せんとするには、外國の行政權、立法權及び司法權を採用し、之に中國固有の考試權及び監察權を加へて完璧と爲し、一個五權分立の政府を建設しなければならぬ。斯の如き政府にして始めて世界で最も完全にして且つ最も善良なる政府と云へやう。國家に斯様な純良な政府があつてこそ民有民治享（リンカーンの所謂 *The Government of the People, by the People, for the People.* の譯）の國家となることが出来るのである。

我等は政府の一方面に於ては四權を主張し、治權の一方面に於ては五權を主張する。此の四權と五權とは各、各の統屬があり作用があつて其の間の區別を明かにし之を混亂してはならない。だが現在のところ一般に此の區別が出来ないものが多いやうだ。普通の入許りか専門の學者にも

區別が出来ないらしい。最近余が発見した一同志の如きは、彼は米國留學を終へて歸朝したものであるが、余は彼に、貴下の革命主義に對する感想如何と問ねたところ、彼は曰く、私は衷心賛成であると答へたので、余は又、貴下の學んだ科目は何であるかと問ひたるに彼は、政治及び法律を學べりと答へたので、更に余は、然らば貴下は余の主張せる民權思想に對する御意見は如何と追究せるに、彼の答へに曰く、五權憲法は頗る結構ではないか、萬人の歡迎するところであると。思ふにこの同志は政治法律を學んで専門家であるにも拘はらず、その答ふるところは余の質問の要點ではなかつたのである。之を以ても、恐らく彼が四權と五權とを明瞭に區別して居らず、人民と政府との關係に對してもやはり甚だ曖昧であり、殊に五權は政府の權に屬するものなることを知らなかつたことが判るではないか。

政府權の作用に就いて言へば、即ち機械權である。一個極大の機械は極大なる馬力を發生する。若し此の機械のなすところの工夫を非常な成績あらしめんがためには、之れを五個の工作の方法に分たねばならぬ。民權は即ち人民が直接此の大馬力の機械を管理するために用ふる權である。故に四個の民權は即ち機械に對する四個の節制と言ふことが出来る。此の四個の節制あつて始めて其の機械の動靜を管理し得る。政府が人民に替つて仕事をするには五個の權がなければ

ばならぬ。即ち五種の工作があらねばならぬ。五個の方法に分つて仕事をしなければならぬ。人民が政府の動靜を管理するには四個の權がなければならぬ。即ち四個の節制があらねばならぬ。四方面に分つて政府を管理しなければならぬ。政府に斯の如き能力があり斯の如き仕事の方法があつてこそ、無限の威力を發揮することが出來、斯くてこそ萬能政府である。又人民に斯の如き大權力あり斯の如き多くの節制があつてこそ、政府が萬能となつても之を管理するの力なきを心配しなくてもよくなり、政府の一動一靜すべて人民が隨時指揮することが出來るのである。斯の如き状態にして始めて政府の威力を發展せしむることを得、人民の權力も亦擴張することが出來るのである。そして此の種政權と治權とがあつてこそ、米國學者の所謂萬能政府建設の目的を達成し人民の爲に幸福を謀ることが出來るのである。中國がよく此の種政權と治權とを實行し得るならば、地球上に破天荒の一新世界を建設することが出來るであらう。

民權の實情と其の行使とに關しては、選舉法、罷免法、創制法及び複決法の規定を待つて其の真相と底蘊とを悉くすることが出來るであらう。之れは此の民權主義の講演中には固より述べ盡すことは出來ないから、その詳細なる情形を知らんと欲するものは廖仲愷君所譯の「全民政治」を参考とせられたい。

第三章 民生主義

第一講 總論

諸君、今日は民生主義に就いて講義したいと思ふ。民生主義とは如何なるものであらうか。民生と言ふ字は中國に於て從來使ひならされた名詞である。我等は何時もよく國計民生と言ふことを口にする。我等の用ふる此の句は、恐らく多くは自然無意識の裡に出て來るもので、一々その解釋を考へて物言ふ譯でなく、從て其の中には別に之と言ふ意義は含まれてゐない。けれども科學の非常に發達した今日、科學の範圍内で此の名詞を社會經濟上に使用する場合には、其の意義の窺に窮りなきを覺ゆるものである。今日余は此の名詞の定義を下して見よう。民生とは即ち人民の生活、社會の生存、國民の生計、群集の生命なりと言ふことが出來る。余は今民生の二字を以て、外國に於て最近百十年來發生したところの一つの最大問題に就いて語らうと思ふ。此の問題は即ち社會問題である。故に民生主義は社會主義であり、また共產主義とも名づける。即ち大同主義である。この主義を明白にせんと欲するならば、簡単な定義などではとても明瞭に説くことは出來

ない。何うしても民生主義の講演を始めから終りまで聴かねばならない。終始聴講して、始めて徹底的に明白に了解することが出来るであらう。

民生問題は今日に於ては世界各國の潮流となつて居る。が此の問題の發生したのは、まだ一、二十年前に過ぎない。何うして近代に此の問題が發生したのであらうか。簡単に之を言へば、即ちここ數十年來、各國の物質文明が著しく進歩し工業亦大發達を遂げ、人類の生産力が忽然として増加した爲である。着實に之を言へば、即ち機械が發明せられて世界の文明先進人類は漸次人力を用ひずして天然力を用ひて仕事をするやうになつたからである。即ち天然の汽力火力水力及び電力を用ひて人間の氣力に代へ、銅鐵等の金屬を用ひて人の筋骨に替へ、機械の發明後は一人一人が一臺の機械を管理しさへすれば、一百人乃至一千人分の働きをなし得ることとなり、従て機械の生産力と人工の生産力との間に非常な差を生じた。機械のなかつた頃は、最も勤勞する人でも一人では最大三人分の働きしか出來ず、十人以上の仕事をするなどと言ふことは到底不可能であつた。だから一人一人の生産力と言ふものは如何に技術が優秀であり體力氣魂も強壯であり其の上最多の勤勞を惜しまないといふ三拍子揃つた人について言つても、普通人の十倍に過ぎない。斯様に普通人の生産力は、大體相等しく大した差別とてはないのであるが、之が機械の生

産力と人間の生産力とを比較することになると、其の差は餘りにも大きいのである。人に仕事をさせるとすれば、如何に能力才幹あり勤勞を兼ね具へた人でも、精々普通のものの十倍位のものである。ところが機械で仕事をすれば、非常な懶惰ものの尋常普通の人でも一人を使用して之を管理すれば、其の生産力はやはり一人の人力の幾百倍或は千倍を凌駕し得るであらう。故に此の幾十年來機械が發明せられてからは、生産力は従前に比較して全く非常な差である。

我等は之を證明する爲眼前の事實に就いて語りたい。例へば廣州市の市街で最も多く見受けらるる運送の苦力は、挑夫と言つて居るが、此の種挑夫の人数は廣州市勞働者の大部分を占めて居る。此の挑夫は其の中體力氣魄の最も強壯なものでも、最重二百斤のものを擔いで、一日幾十里（支那里）を歩み得るに過ぎない。だが斯様な挑夫はさうざらにある譯ではなく、普通の挑夫と言へば、まあ精々數十斤のものを擔つて數十里を歩くが關の山で、其れでさへいい加減苦しいのである。斯うした挑夫と運送用の機械とを比較して見れば何うであらうか、其の差は何んなであらうか。廣州市黄沙驛にある汽車は貨物を運送するに一臺の機關車はよく二十餘臺の貨車を牽くことが出来、一臺の貨車には幾百擔（一擔百斤）の貨物を積載することが出来るのであるが、貨車一臺で幾百擔搭載し得るとすれば、二十餘臺では一萬擔を積載するに足る譯で、この一萬擔の貨物

を一臺の機關車を以て引かせ、一人二人の機關手に機關車の機械を管理せしめ、或は其れに數人の貨車管理人さへあれば、一日に能く幾百里を走ることが出来るのである。例へば廣州の粵漢鐵道の黃沙驛から韶關迄は約五百里あるが、之を若し従前のやうに専ら人力を用ひて貨物を運送するとすれば一人一擔を擔ふとして百人では百擔、若し一萬擔の貨物があれば一萬人の挑夫が要ることとなる。更に挑夫の歩む路程を計算して見れば、一人一日大約五十里として、五百里の路程には十日間歩かねばならず、一萬擔の貨物を従前通り専ら挑夫を用ひて運送するものとすれば、一萬人の挑夫が十日間歩かねばならぬこととなる。之を今汽車を使用して運送すれば、僅か八時間を要するのみで、黃沙から韶關迄行くのに最大十人の労働者を使用しさえすればいいのである。

斯うして見ると、十人を使用してする仕事は一萬人に代え得、八時間を以て十日に替えるのである。機械と人工との差は實に驚くべきものがあるではないか。汽車を以て運送すれば單に一人を以て一千人に、一時間を以て一日に代ふることが出来、非常に便利で迅速なるのみか、運賃の點に就いて言ふも、一人の挑夫が一擔の貨物を擔つて五十里の路を行き一日大約一元を要するものとし、一萬の挑夫を使用し一萬擔の貨物を擔つて十日の路程を行くとすれば合計十萬元を要する。之を汽車で運送すれば、最大數千元に過ぎないであらう。機械と人工とを比較しての差は、單に

挑夫許りがこんなに大きな差があるのではない。其の他田を耕し布を織り家屋を建築し其の他種々な仕事にも亦幾百倍幾千倍の差がある。

故に機械の發明せられてからは世界の生産力に一大變動を生じた。此の大變動は、機械が人工を占領したことを意味する。機械を持つて居るものは、機械のないものの金を全部捲き上げて了つたものである。又廣州の如きは鴉片戰爭以前に於ては中國唯一の開港場であつた。中國各省の貨物は悉く先づ廣州に運ばれ、然る後再び廣州から外國へ運送せられ、外國の貨物も一旦は廣州へ運送せられ、然る後再び廣州から各省へ運送せられた。故に中國各省の輸出貨物は、すべて湖南江西を經、南雄樂昌に至り始めて廣州に來たものである。其の結果、南雄樂昌から韶關に至る此の二條の路は、當時沿道に挑夫が非常に多く、兩側の茶館飯店なども非常に混雜したものであつた。其の後外國貿易が開け、各省の貨物は或は海船により廣東に運ばれ、或は上海天津より直接外國に運送せられ、例の南雄樂昌から韶關に至るこの兩路をさつぱり經過しなくなつたので、其の兩路の勞働者は現在では何れも減少して、あの兩路從前の繁昌は何處へやら、今では荒涼たるものに變つて了つた。そして粵漢鐵道の開通後は更に人工に代ることとなつて、廣州韶關間の挑夫は全く其の跡を絶つに至つたのである。其の他各國の狀態もすべて同様である。従つて機械の

發明後は許多の人が一時に失業して働くべき仕事なく、食ふべき飯がないと言ふ有様となつた。此の大變動を外國では實業(産業)革命と言ふ。此の實業革命が起つたが爲に勞働者は甚大なる苦痛を受けた。で此の種苦痛を解決せんが爲に、最近數十年來社會問題なるものが發生したのである。

此の社會問題こそは、即ち今日説かんとする民生主義なのである。余は本日何が故に直接外國を學んで社會主義と言はず、民生なる中國の古い名詞を持ち來つて社會主義に替えようとするのであるか。之れは非常に道理のあることで、我等は此の點大いに研究せねばならない。機械が發明せられ實業革命を経過して社會問題が起つた。即ち社會主義を發生した。故に社會主義の發生は既に數十年前のことに屬する。けれども此の數十年の間、歐米各國では社會主義に對し未だ一つの解決方法も發見するに至らず、今も尙ほ劇烈なる鬭争の中にある。此の種學說と思想は、現在中國にも流入し來り中國の一部の新學者亦之を研究しつつある。社會主義の中に又共產主義と言ふものがある。そして現在中國には社會主義が流行を極めつつあるため、自然共產主義の名も亦盛んに流行してゐる。中國の學者は、社會主義と共產主義とを併せ研究して一つの解決方法を發見せんとしてゐるが、之れ亦非常に困難なことであらう。何故なれば此の學理が發明せられて既に數十年を経過する外國に於てさへ、今も尙解決するに至らないのに、つい此頃中國に入つて來た許

りの問題に對し我等が解決しようとするのであるから容易でないのが當然である。

我等がこの問題を研究せんとするならば、先づ本來の性質と定義とを研究して明瞭にして置かねばならない。共產主義と社會主義との二つの名詞は、現在外國では、同様に並稱せられて居るもので、その辨法は各異なつては居るが、一般通稱的名詞としては皆社會主義と言ふ字を用ひて居る。現在中國に於ては社會主義と社會學との二名詞を一樣に取扱つて居るものがあるが、これは混同も甚しい。が之は單に中國人が有して居る許りではなく外國人でも往々この種混同した觀念を有つてゐる。これは英語で社會といふ名詞は「ソサエチー」、社會學は「ソシオロジー」、社會主義は「ソシアリズム」であるが、この三字は、その前半の「アルファベット」が皆同じであるため多くの人が混合するのである。その實英語は社會主義「ソシアリズム」なる字は希臘語から變つたもので、希臘語で社會主義の原意は、同志と言つて中國で俗に言ふ夥記と言ふ字と同義である。社會學の範圍は、社會の情狀社會の進化及び群集結合の現象の研究にあり、社會主義の範圍は、社會經濟及び人類生活問題の研究即ち人民の生計問題の研究にある。故に余は民生主義を以て社會主義に替へたのである。其の本來の目的は社會問題の本を正し源を清め又此の問題の眞性質を明かに表明し、そして一般人が此の名詞を聽いて直に了解し得るやうにするにある。社

會主義發生して幾十年、此の種學理を研究する學者は其の數幾千百家ありしか、又其の著書幾千百種あるかも知れない程であるが、其の中社會問題解決に關する學說の多き、眞に聚訟紛々と言ふ有様である。だから外國では俗に社會主義に五十七種ありと言つてゐる。が果して何れの一説が正確であるか分らない。斯様に社會主義の學說が多岐多種であるところから、一般のものは何れに依るべきか其の適從するところがないのである。

歐洲大戰發生後、社會の驚くべき進歩に伴ひ、世界の潮流は今や社會問題を解決すべき時期に到達した。従つて凡そ従前社會主義に無關心であつた人も、今はやはり社會主義の路を歩みつつある。だから大勢上より論ずれば、社會黨は當然幾多の事業を爲し得、又當然社會問題を完全に解決し得べき機運に際會して居ると言へやう。ところが社會黨の内部に幾多の紛争を生じ、全國に社會黨が一時、風起雲湧、種々なる黨派を發生した。その中最も著明なるものは、所謂共產黨、國家社會黨及び社會民主黨である。これ等各黨派は非常に複雑を極め殆ど五十七種以上にも上つた。斯様な譯で、従前の傍觀者達の社會黨派別の複雑なるに對する批評が、この時になつて恰度所謂不幸にも言ひ中てたと言ふことになつたのである。歐洲大戰發生前、歐洲には社會主義に賛成するものと反對するものとの兩派があつて、之に反對するものは大多數資本家であつた。従て

従前はただ社會主義に反對した資本家と社會黨との戦争であつた。歐洲大戰發生後社會主義反對の資本家は、殆んど降服同様の状態となり、事實社會黨は機に乗じて社會問題の解決を爲し得るが如く思はれて居た。ただ奈何せん、當時尙ほ社會主義に賛成して居た人々の間に適當な辦法が想出されて居なかつたがために、社會黨内部に幾多の、従前の反對派對賛成派の紛争にも増して激烈なる紛争を發生した。斯うした譯で社會問題は今に至る迄解決することが出来ず、従て今日尙ほ之を研究しなければならないのだ。従前資本家労働者及び學者が一致して社會主義に反對してゐた頃、凡ゆる世界各國の社會主義者達は、其の國境を問はず皆同志と考へて居たものである。ところが近來では、單に獨國での社會黨が露國の社會黨に反對し、或は露國の社會黨が英米の社會黨に反對して國際的に紛争しつつある許りでなく、一國の社會黨内部にも亦種々の紛争を演出した。だから社會問題は愈々演じて愈々紛亂を極め、今尙ほ適切なる解決方法が探出されて居ないのである。

余が本日説かんとする民生主義は、究竟するに社會主義と區別があるか何うか。社會主義中最大の問題は社會經濟問題で、この問題はとりもなほさず一般人の生活問題である。機械の發明後、大部分の人の仕事は殆んど機械の奪ふところとなり、一般の労働者は生存も覺束なくなつた。そ

ここで社會問題は發生したのである。であるから元來社會問題なるものは、人民の生活問題を解決せんがために發生したものである。故に單にこの點だけの道理に就いて言へば、社會問題は即ち民生問題なのである。従て民生主義は社會主義の主題であると言ふことが出来る。現在各國の社會主義は各其の主張を異にし、従て各國の社會問題解決の方法も亦夫々同じくはない。社會主義は結局民生主義の一部であらうか。其れとも民生主義は社會主義の一部であらうか。

産業革命後、社會問題を研究するものは其の數千百を下らず、其の中研究の最も透徹し最も造詣の深かつたものは、誰しも知つて居る「マルクス」であらう。「マルクス」の社會問題に於ける地位は、恰も「ルッソー」の民權問題に對する夫れと同様である。一百餘年前歐米に於て民權を研究したものは、恰度中國に於て孔子が崇拜せらるるやうに、誰一人として「ルッソー」を民權の聖人として崇拜しないものはなかつた。と同様に現在では、苟くも社會問題を研究する程のものは、又誰一人として「マルクス」を社會主義の、として、しないものはないのである。「マルクス」の學說の發表せられなかつた以前に於ては、世界に於て社會主義を説くものは、何れも非常に高遠な、そして事實に遠い理論を陳べたものである。然し「マルクス」は専ら事實と歴史方面より研究し、終始社會問題の經濟變遷を闡明して遺すところがなかつた。故に後の學者は、社會

主義者を兩派に分類して一を「ユートピアン」派と言ふ。「ユートピアン」は中國の黃老の所說華胥の國と同じ意味である。他を科學派と言ひ、専ら科學的方法に依て社會問題の解決策を研究せんとするものである。「ユートピアン」派に至つては、専ら理想に基いて社會を改良し樂土的國家を建設せんとするものであつて、即ち此の種、子虛烏有の寄託がある。斯うした寄託は非常に徳高き天を悲しみ人を憫むの人が、人類の受くる苦痛の甚しきを見て、心忍ぶ能はず、さればとて又之を改良すべき力もなかつた爲、理想上の空話を語つて一種の寄託を造つたものに他ならぬ。中國の俗語に言ふ「天生一條蟲、地生一片葉、天生一隻鳥、地生一條蟲」と。これはすなはち虫あらば葉に養はれ鳥あらば虫に養はると言ふ意味である。人類の天然の形體は不完全であつて生來羽毛がないから、必ず衣を需めて寒を禦ぎ必ず食を需めて生を養はなければならぬ。

太古果實を食して居た頃は、地廣く人稀れに人々は皆非常に容易に食を覓むることが出来、必ずしも余計に働かなければ生活が出来ないと言ふ譯ではなかつた。漁獵時代に至ると、人民は魚を捕り獸を獵つて魚肉を得て始めて生活することが出来たのであつて、即ち働かねば飯にありつけないやうになつた。遊牧時代になると、人類は牧畜に従事しなければ生活が出来なくなつた。當時の人々は、何れも水草を逐ふて常に居を遷した。凡ゆる仕事は非常に苦しい勤勞であつた。農

業時代に至り人類は生活するために五穀を植えねばならなかつた。そして人類の生活は更に複雑を加へ、凡ゆる仕事は更に一段と苦しい勤勞であつた。工商時代に至つては、萬事に機械を使用し人力を用ひず、人類に如何に力あればとて之を用ふるところなく、勞働を賣らんと欲すれば備主は見當らないと言ふことになつた。この時に至つては、幾多の人が食ふべき飯なく、甚しきは餓死するの外なく、その受くるところの苦痛は一言を以て盡くすべからざるに至つたのである。

ここに於て一般道德家は、天然界の禽獸すら苦痛を受けずしてなほよく衣食し得るに、人類のみが苦痛を受け却て衣食を得ることの容易ならざる實情を見て、深く憐憫を催し、何等かこの痛苦を減少し人々をして悉く衣食の出来るやうにと考へた結果、社會主義の學説が發明せられこの問題を解決せんとすることとなつたのである。従て従前一般に社會主義を説く人は過半は道德家であつて、即ち一般の賛成者も亦良心あり道德ある人々であつたのだ。が經濟上既に成功を克ち得、自利以外に何等民衆の生活を顧慮するの違なき資本家だけは、これに反對し社會問題に對しては至つて無關心であつた。この問題にして既に世界最大多數のために生活を謀る問題であり、先知先覺者に依つてこの道理が發明せられた以上、多數人の同情心が之に賛成するのは極めて自然である。従てこの學説一度世に出づるや、忽ち社會黨は組織せられた。社會黨にして一たび

成立するや、その團體は日一日と發達し日一日とその大きを加へ、各國に擴充したものである。けれども従前社會主義を説くものは、何れも「ユートピアン」派で、ただ一個理想上の安樂世界を建設して人類の苦痛を消滅せしめんことを希望するに過ぎないものであつて、その消滅の具體的方法に至つては彼等は毫も想倒するところがなかつたのである。「マルクス」世に出づるに及んで、彼は彼の聰明才智と學問經驗とを以て、この問題に對し一種極めて透徹した研究をなし、古人の知らざりしところ及び解決し能はざりしところを悉く發明したのである。彼の發明は全然經濟原理に憑據した。彼は經濟原理に對する透徹した研究の結果、従前の社會主義を主張せる人々を批評して、個人的道徳心と群衆的感情作用に過ぎずとなし、事實經濟問題なるものは道徳心や感情作用を以てして解決し得るものではない、社會の實情と社會の進歩とを明かに研究することに依つてこそ解決し得るものなりとした。この種社會問題解決の原理は、すべて事實に憑り理想を尙ばざるものである。「マルクス」の著書とその學說とに至つては幾千年來の人類の思想を集めて大成したものと云ふことが出来る。

従て彼の學說一度び世に出づるや、舉世風從、各國の學者は何れも、恰も「ルッソー」が民權主義を發明してから民權を研究するものは皆「ルッソー」を信仰したと同様、彼を信仰し彼の道を歩

いたものである。「マルクス」以後社會主義は「ユートピアン」派と科學派との兩派に分れた。「ユートピアン」派の情形に就いては前述の通りであるが、科學派は科學的方法を以て社會問題を解決せんことを主張する。最近幾十年來、物質文明は極度に發達し科學亦大いに昌明となつたため、萬事科學的に解決せられ、圓滿なる目的に到達することが出来ることとなつた。即ち社會問題の解決方法も亦、科學的に研究して始めてその結果を得ることが出来たのである。

説いてここに至らば、余の學説「知るは難く行ふは易し」と言ふに歸結せねばならぬ。天下のことこれを眞に知るならば行つて到り得ることは容易である。例へば今日この講堂は非常に熱い、我等はこれに對し人力を用ひずとも煽風機を使用すれば涼しくすることが出来るが、斯うしたことで、古人とか田舎の無智なものなどが見たならば、神鬼が動かすのであると思ふであらう。所謂天工を巧奪するものとして、この奇怪なる煽風機に對し必ずや祈禱禮拜するであらう。現在諸君は煽風機の詳細なる構造に就いてはよく知らないかも知れぬが、電磁吸引の道理は知つて居るから、電氣が電扇を吸引するために電扇が廻轉する位のことには判る筈で、決して奇怪千萬なものとは考へないであらう。まさか古人の聰明が我等に及ばないと言ふ譯でもあるまいに、之は一體何うしたことであらうか。この原因を推論すれば、即ち古人は科學を知らなかつたがため、煽風

機を發明することが出来なかつたので、古人に技術がなかつたため煽風機を使用することが出来なかつた譯ではない。近來科學を知り科學者が出来たがため煽風機が發明せられ、従て一般に之を使用して涼を納ることが出来るやうになつたのである。古人にしてもし果して科學を知つて居たならば、古人の聰明才智を以てすれば、恐らくその發明は或は我等のそれに比し更に一段と巧妙を極めたものであらうと思はれる。

社會問題の解決は、「マルクス」以前に於ては、單なる一種の達し得られない希望と考へられてゐた。「マルクス」自身も亦單に社會主義的理想にのみ依つて研究すれば、やはり一種の幻想に終り、よしんば全世界の人の賛成を受くることは出来ても決して成功するものではない、之に成功せんがためには是非とも事實に憑り科學的方法を以て之を研究しなければならぬとなした。であるから彼は一生の間、社會主義の研究には常に科學的方法に基いて工夫したのである。彼の社會主義研究の仕事たるや、更に非常な苦しいことであつた。彼は英國に亡命して居た當時、英國は近世に於ける如何なる國家も之を凌駕することは出来ない程の最文明國であつた。従てその文化的施設も亦頗るよく齎備せられてゐた。一圖書館の如き幾百萬種の藏書を有し如何なる問題の書籍でも非常に豊富であつた。「マルクス」はその圖書館に通つて研究したものである。そして二

三十年の功を積み一生の精力を費して、社會主義に關する書籍を、その古人の著作たると或は時人の發表にかかるものなるとを問はず、悉くこれを搜し集めて詳細過ぎる程詳細に參考比較して其の結果を求めんとしたものである。この社會問題研究の方法は即ち科學的方法である。従て「マルクス」の發見した社會問題解決の方法は科學的社會主義と言ふべきである。

彼は斯の如き詳細にして深奥なる研究に依て一種の結果を求出して言ふ、世界各種人類の動作で凡そ文字によつて記載せられ後人に示されてあるものは總て歴史と爲すことを得ると。彼はこの歴史の中から最も重要なる一點を發明した。即ち彼は、世界一切の歴史は物質を中心として動いてゐる、物質に變動があれば世界も亦之に隨つて變動すると言ふて居る。同時に又人類の行爲はすべて物質的境遇によつて決定せられる。故に人類の文明史は物質の境遇に隨ふ變遷史なりと言ふことが出来ると言ふた。「マルクス」のこの發明を「ニュートン」の發明した天文學の重心學說と同様なりと言ふものがある。今「マルクス」は物質は歴史の重心なることを發明した。彼の透徹した研究は之を證據づける理由が充足して居たため、従前社會主義に反對して居た幾多の人々も後には皆社會主義賛成者となつた。そして更に「マルクス」の學說を仔細に研究した人は彼を信仰するに至つた。歐洲戰後世界には社會主義に反對する人は殆んどなくなつた。従て社

會黨たるものは、爲さんと欲するところを爲すことが出来、本來ならば、各國の社會問題を解決することが出来た筈である。當時最大の勢力を有する社會黨は「マルクス」派、「マルクス」派は科學派であつたが、従前は「ユートピアン」派であつた。當時各國の社會の秩序の紊亂に當り、社會黨内の科學派と「ユートピアン」派とが衝突したことは固より當然の成行であつたが、衝突は之のみに止まらず、科學派の社會黨内部に於てすら相互に衝突した。この内部的衝突に原因し社會問題は歐洲戦後今尙ほ解決するに至らないのである。

社會黨の聖人「マルクス」が物質を以て歴史の重心としたこの道理は、究竟するに如何なる理由に依るものであらうか。「マルクス」門徒は一千八百四十八年「ベルギー」に國際社會黨大會を開催し幾多の辨法を規定したが、現在各國に於ける「マルクス」派の社會黨所要の辨法は、多くは依然當時定められたところの大綱を奉行して居るのである。歐洲大戰發生後、露國はその主義を實行したが、現在では既にその主義を改變した。改變した理由は何であるか。我等は餘り露國の情形に就いて研究して居ないから大膽に之を判斷することは避けたいが、露國人自身の説に依れば、従前露國が行つた革命辨法は決して「マルクス」主義ではなく一種の戦時政策であつたからだ。この種戦時政策は獨り露國のみが行つたものでなく、英國獨國及び米國が歐洲戰爭當時、全國の

鐵道、汽船及び一切の大製造工場の如き大産業をすべて國有に收歸したのと同様の辦法である。然るに何が故に英米の實行したものに對して戰時政策と言ひ、露國が實行したところのもののみを「マルクス」主義と言ふのであらうか。その理由は即ち露國の革命黨が「マルクス」主義を信仰し、而して之を施して實行せんと欲したからである。又露國人に依れば、露國は現在のところ産業經濟共に尙ほ充分に發達して居ないので、「マルクス」主義を實行することが出来ない、英米の産業及び經濟の如く發達して始めて「マルクス」主義を實行し得ると言ふ。故に「マルクス」學說の理論に就いて「マルクス」信徒の間に、歐洲戰以後大論争を惹起するに至つた。獨佛及び露國の各社會黨は元來すべて「マルクス」主義に服従し國際派を造つて居たが、論争のときに至り、彼此互に攻撃し互に誣毀し合ひ、攻撃するものは總じて攻撃せらるる相手方を「マルクス」主義の異端者となし、一派は他の一派を攻撃し、一國の社會黨は他國の社會黨を攻撃すると言ふた具合であつた。これ等攻撃と誣毀とは「マルクス」の學說に一つの疑問を發生せしめた。即ち物質は果して歴史の重心たりや否やの問題である。

「ニュートン」は研究の結果、太陽は宇宙間に在て我等の中心であると言ふ結論に到達したが、この道理は天文學及び各種科學に照して研究すれば至極正確である。「マルクス」の發明せる物質は

歴史の重心であるといふこの道理は果して正しきや否や。歐洲戦争幾年の實驗を經過して多くの人は正しからずと言ふ。然らば結局如何なるものが歴史の中心であらうか。我等國民黨の民生主義を提唱する、既に二十餘年である。其の間社會主義を説かずして、たゞ民生主義を説いた。社會主義と民生主義との範圍は如何なる關係にあるであらうか。近來米國の一「マルクス」信徒「ウイリアム」(Whiting William)氏は深く「マルクス」主義を研究し、自己同門相互の紛争には確かに「マルクス」學説に不十分な點があるに相違ないとの結論に到達した。彼は意見を發表して言ふ、「マルクス」は物質を以て歴史の重心とした、がこれは間違ひであると。社會問題こそ歴史の重心でなければならぬ、而して又社會問題の中でも生存を以て重心とすると。生存を社會問題の重心としてこそ合理的である。民生問題は即ち生存問題である。この米國學者の最近發明せるものこそは適々我黨の主義に符節を合したものと云ふべきである。この發明は即ち民生を以て社會進化の重心とし、社會の進化は又歴史の重心を爲すと云ふにあり、歴史の重心は民生であつて物質ではないと言ふことに歸結する。我等は民生主義を提唱すること二十餘年、當初の詳細な研究から反覆思惟し、民生のこの二字こそは、凡ゆる社會問題を包括するものであり、之を社會又は共產等の名詞に比べて適當であり切實にして且つ明瞭であることを覺つた。故にこれを採

用したのであつたが、圖らずも歐洲戰發生後、事理更に明かとなり、學問更に進んで、「マルクス」
學徒の間にも亦我等と同じき點が發明せられたのである。之を以て見るも、我黨の提唱する民
生主義こそは、正しくその進化の原理に合ひ流行を追ふ學者達の口眞似ではないことを想見する
に足るであらう。

この米國學者の主張に依れば、彼は古今人類の努力はすべて自己の生存問題の解決を求むるに
あつた。人類が生存問題の解決を求むることこそは、社會進化の定律であり歴史の重心である。「マ
ルクス」の唯物主義は社會進化の定律を發明して居ない、又歴史の重心でもないと言ふ。我等が
この兩者の説の中、果して其の何れの主張が正しいかを明白にせんがためには、彼等の主義と近
世に於ける社會進化の事實とが相符合せるや否やに就き詳細なる研究を遂げなければならぬ。「マ
ルクス」は社會問題を研究して専ら物質に重きを置いた。物質を説かんとすれば、自然先づ生産
に注意しなければならぬ。過重なる生産がなかつたならば自然産業革命も起らなかつたであら
うから。故に生産は近世經濟上の第一の問題である。近世の經濟情形を知らんがためには、必ず
先づ近世の生産情形を知らねばならぬ。然らば近世の生産情形は如何に。生産品はすべて労働者と
機械とを使用し資本家と機械との合作に由り再び労働者を利用して始めて近世の大生産に到達し

た。この大生産に依る所得利益は、資本家がその大部分を獨占し、労働者の分け前は少なかつた。従つて労働者と資本家との利益は常に相衝突し、衝突した結果解決不能となつて、そこで階級闘争が生じたのである。「マルクス」の觀察に照せば、階級闘争は産業革命後に發生したものではなく、凡そ過去の歴史はすべて階級闘争の歴史ならざるはなく、古來主人と奴隸との闘争、地主と農奴との闘争及び貴族と平民との闘争、簡言すれば、壓迫者と被壓迫者との闘争の歴史であつた。

たゞ社會革命が完全に成功するに至らば、この兩者相闘争するの闘争は始めて一齊に消滅すると言ふ。斯様に「マルクス」は、階級闘争あつて始めて社會の進化があり、階級闘争は社會進化の原動力と思ひ込んで居たのである。これ階級闘争を以て因となし社會進化を果となすものに外ならない。我等にしてこの種因果の道理が社會進化の定律なりや否やを知らんがためには、近來の社會進化の事實を考察する必要がある。最近幾十年社會は非常に進化し、各種社會進化の事實は更に複雑となつた。即ち經濟の一方面の事實に就いて言ふも、亦一言にして盡くすことは出来ないが、概括的に言へば、歐米近年の經濟の進化を四種に分かつことが出来る。第一は社會と工業との改良、第二は運輸と交通との公有、第三は直接徵稅、第四は分配の社會化である。この四種の社會經濟事業は總べて改良の方法に依て進化したもので今後も引續き日々改良せられ日々進歩するで

あらう。

この四種の社會經濟事業の詳細なる情形は如何に。例へば第一に就いて言へば、即ち政府の力を以て勞働者教育の改良、勞働者の衛生の保護、工場及び機械の改良を實施して極めて安全にして極めて快適なる勞働たらしめんとするにある。斯の如き改良にして可能ならんか、勞働者の勞働能力は増大し彼等は自ら進んで勞働に従事し生産能率も非常に増大することとなるであらう。この種社會進化事業は獨國に於て最も早くから施行せられ且つ最も効果を擧げて居る。近年英米も亦これを模倣實行して居るが、これ亦同様の効果を擧げて居るやうだ。

第二の情形に就いて言へば、即ち電車、汽車、汽船及び一切の郵便電信交通の大事業をすべて政府に於て經營することを意味する。政府の絶大なる力を以てこれ等大事業を經營してこそ運輸は迅速となり交通は靈敏となる。運輸迅速となり交通靈敏とならば、各地方の原料を非常に容易に工場内に運搬してその用に供することが出来、工場の生産品も非常に容易に市場に運搬せられ販賣せられて、その間多大の時間を費し原料と製産品とを中途に停滯せしめ莫大なる損失を受くるを免れしむることが出来る、これに反し若し政府の經營とせず個人經營としたならば、個人の財力不足の爲ではなく、即ちその壟斷的阻力の極めて大なる結果、歸結するところは必ずや運輸

迅速ならず交通の敏活を缺くこととなつて、全國各種經濟事業をして無形の中に甚大なる損失を被らしめねばならぬこととなるであらう。この種事業の利害は、獨國に於ては夙くから明白であつたので、彼等は各種の大運輸交通事業を夙に國家に於て經營したのである。米國も亦歐洲戰時、その私有大運輸交通事業を政府の經營に收歸した。

第三種の直接徵稅も亦最近進化して出來た社會經濟の方法である。その實施方法は、累進稅率を適用して資本家の所得稅及び遺産稅から多徵するにある。この稅法を行へば國家の財源をして多く直接資本家から求むることが出來る。これは資本家の收益が莫大であるがため國家が直接徵稅せんとするもので、所謂「多取之而不爲虐」である。従前の舊式の稅法では、ただ錢糧と關稅との二種に過ぎず、この種稅法を行ふことは、即ち國家の財源を完全にこれを一般貧民より取らんとするものであり、資本家は國家に對してただ權利を享有するのみにて毫も義務を盡さざることとなる。これでは餘りに不公平である。獨國英國には非常に早くからこの種不公平な事實が發現して居たので、彼等は夙に直接徵稅の方法を實行して來たものである。獨國政府の歲入は所得稅及び遺産稅より得るものが全國收入の約百分の六十乃至八十を占め、英國政府に於ても歐洲戰争開始當時この種收入は百分の五十八に達して居た。米國がこの種稅法を實行したのは前二國

とは大分後れ、十年前漸くこの法律が出来た。この法律制定後、國家の收入は年々著しく増加を示し、千九百十八年には所得税一項の收入のみにても約四十億米弗に上つたものである。その他歐米各國も近年直接徵税を實行して大財源を加へ、従つてその財力を以て種々なる社會事業を改良して居る。

第四種の分配の社會化は更に歐米社會最近の進歩した一事業に屬する。人類が金錢を發明し、買賣制度が出来てから、日常一切の消耗品は多くは商人の手より間接に買ふこととなつてゐる。商人は極めて低廉なる價格を以て生産者から貨物を仕入れ、再び消費者に賣る一轉手の勞にて、莫大な口錢を儲けるのである。この種貨物の分配制度は買賣制度と言ふことが出来、又商人の分配制度と言ふことも出来る。消費者はこの種商人の分配制度の下にあつて、莫大なる損失を受けつつある。であるから近來この種制度を研究した結果、その改良に成功し、必ずしも商人から分配して貰はなくともよくなり、社會團體を組織して分配し、或は政府から直接分配することが出来るやうになつた。例へば英國の新發明にかかる消費組合（合作社）の如きは、即ち社會團體を組織して貨物を分配するものである。歐米各國最新都市の政府の如きも、水道、電氣、石炭及び「パン」、牛乳、「バター」の食料品に至る迄政府に於て貨物の分配をして居る。斯の如き分配の

新方法を採用すれば、商人の口錢を省略し消費者の受くる損失を免れしむることが出来るのである。この種新分配方法の原理は分配の社會化と言ふことが出来る。即ち社會主義を實行して貨物を分配することである。以上説くところの社會と工業の改良、運輸及び交通の公有、直接徵稅及び分配の社會化とのこの四種の社會經濟の進化は、種々なる舊制度を打破し種々なる新制度を發生した。社會は常に新制度を發生するために常に進化する。

この種社會進化の原因は如何なるものであらうか。何うして社會にこの種變化が起るものであらうか。若し「マルクス」の學說に照して判斷すれば、自然階級闘争からと言はなければならぬ。又社會上の階級闘争の起る原因はと言へば、自然資本家が労働者を壓制するからと言はなければならぬ。資本家と労働者との利益は總じて相衝突するものであつて調和することが出来ない。故に闘争が起る。そして社會はこの闘争あるが爲に始めて進化すると言はなければならぬ。けれども歐米最近幾十年來の社會進化の事實を見るに、特筆すべきものは、分配の社會化に由る商人の壟斷の消滅、資本家の所得稅及び遺產稅の多徴による國家財源富力の増加、更にこの財源の利用に依る運輸の公有及び労働者の教育衛生及び交通工場設備の改良に伴ふ社會の生産力の増加である。社會の生産力が増大したため一切の生産は何れも豊富となり資本家の莫大

なる利益は固よりながら、労働者も亦多額の勞銀を得た。かく見來れば、資本家は労働者の生活を改良し労働者の生産力を増加せしめ、労働者に大生産力があつたがため資本家のために生産を多からしめ、結果資本家側の出産を増加することか出來、労働者側に於ても亦多額の勞銀を得ることが出來たのであつて、これ資本家と労働者との利益を相調和せるものにして相衝突したものである。思ふに社會の進化する所以は、社會の大多數の經濟利益の相調和するところにある、社會の大多數の經濟利益が衝突するからではない。社會の大多數の經濟利益を調和することとは、即ち大多數の爲に利益を謀ることである。大多數の利益があつて、始めて社會に進歩がある。社會の大多數の經濟利益を調和せねばならぬ所以は、即ち人類の生存問題を解決せなければならぬからだ。古今一切人類の努力を必要とした理由は即ち生存を要求するが爲であつた。人類の間斷なき生存あるが故に、社會に停止せざる進化がある。故に社會進化の定律は人類の生存を求むるにある。人類が生存を求むることこそ社會進化の原因であつて、階級闘争は社會進化の原因ではない。階級闘争は社會進化途上に發生する一種の病症である。この病症の原因は人類が生存することが出來ない點にある。人類が生存し能はざるがために、この種病症の結果として闘争を起すのである。「マルクス」が社會問題を研究して會得したところは、單に社會進化の病

症に限られ社會進化の原理ではない。故に「マルクス」はただ一個の社會病理家と言ふべきで、社會生理家と言ふことは出来ないのである。

再び「マルクス」の階級闘争の學說に照して言へば、彼は資本家の剩餘價值はすべて労働者の労働中から剝奪して來たものであると説く。そして一切の生産の功勞を完全に労働者の労働に歸すべきものとして、社會のその他各種有用分子の労働を忽略にして居る。例へば中國の最新工業と言へば、上海、南通州、天津及び漢口等各地に經營せらるる紡績工場、紡織工場であるが、之等工場は歐洲戰に際し非常な利益を擧げたもので、各工場毎年の殘すところの剩餘價值は少くも數十萬、多きは數百萬に達して居たものである。斯様な莫大なる剩餘價值は果して何人の功勞に屬するものであらうか。それは紡績工場、紡織工場の僅の労働者の労働のみから得られたものであるか何うか。それは紡績工場、紡織工場の僅の労働者の労働のみから得られたものであるか何うか。紡績紡織に就いて論ずるに、我等は棉糸棉布の原料に就いて考へて見なければならぬ。棉糸、棉布と言へば自然我等は棉花に推及しなければならぬ。棉花の來源を研究せんとするには、我等は種々なる農業問題に推及しなければならぬ。棉花の農業問題を詳細に語らんが爲には、自ら棉花の種子並に棉花を播植栽培する農業家の研究に迄及ばざるを得ない。棉種を播かんとするには、各種道具及び土地耕耘の機械を使用せざる能はず、及び播種後は又これを

培養し棉花を枝幹に結ばしむるため肥料を使用しなければならぬ。斯の如く我等が一度それを等機械及び肥料に想到すれば、其の功はそれ等機械と肥料との製造家と發明家に歸せざるを得ない。更に棉花收穫後これを工場に運んで糸を紡ぎ布を織らねばならぬ。布及び糸を製造せられた後、再び各地市場に運送して販賣するには、自然之を運輸する汽船、汽車に想到せねばならぬ。而も汽車汽船が何うして動くかを研究するならば、第一にその功はそれ等蒸汽及び電氣の發明家に歸せざるを得ず。汽船汽車の構造材料を研究すれば、自然その功を金屬の採鑛家、製造家及び木材の種植家に歸せざるを得ないのである。斯様にして棉布及び棉糸が製造せらるるもの、社會に於て勞働者以外その他各界の人民が其の棉布を着せす其の棉糸を使用しなかつたならば、棉布及び棉糸は之を賣捌くことが出来ないであらう。棉布、棉糸の大販路がなかつたならば、紡績工場及び紡織工場を経営する資本家は何うして金を儲けることが出来やうか。何うして多くの剩餘價值を取得することが出来やうか。之等諸情形に就いて考へて見た場合、これ等紡績工場及び紡織工場の資本家が取得する剩餘價值なるものは、果して誰に屬すべきものであらうか。嘗に棉糸棉布工業の剩餘價值の情形が斯くある許りではない、各種工業の剩餘價值の情形もすべて同様であるのだ。之に依ても凡ゆる工業生産の剩餘價值なるものは、單に工場内の勞働者の勞働の結果のみで

ないことが判るかと思ふ。凡そ社會に於ける各種有用有能の分子はその直接たると間接たると論なく、生産方面に或は消費方面に在つて、總て多少の貢獻をなしつつあり、然もこの種有用有能の分子が社會の大部分を占めて居るのである。

専ら勞働者に就いて言へば、即ち工業の極めてよく發達した米國でさへも、その勞働者の數は二千餘萬人に過ぎずして全米人口の五分の一に過ぎないのである。若しそれその他工業不發達の國家に至らんか、例へば中國の勞働者の數の如きは更に寥々として少ないであらう。この見地からすれば、工業の極めてよく發達したる國家に於て全國の經濟利益が相調和せず、衝突を發生し鬭争を惹起した場合には、一勞働者階級と一資本家階級との鬭争に非ずして、社會の大多數を占むる有用有能なる分子全體と一資本家階級との鬭争であらねばならぬ。之等社會の大多數の有用有能の分子の生存要求に對し經濟的鬭争を免れしめんが爲なればこそ、政府に於て貨物の分配をなし、資本家の所得税遺產税を多徴して全國の運輸及び交通事業を發達せしめ及び勞働者の生活及び工場の工作を改良し種々大多數の經濟利益調和の事業を爲したのである。そして歐米各國がこの種々なる經濟利益を調和する事業を實行してより、彼等の社會は非常な進歩をなし大多數は幸福を享け得たのである。故に「マルクス」の社會問題の研究は、ただ社會の一部分の病氣を求む

るに止まり何等社會進化の定律を發明するところはなかつた。この米國學者の發明せるところの人類が生存を求むることこそ、社會進化の定律であり歴史の重心なのである。然らば人類が生存を求むるとは如何なる問題であらうか。民生問題即ち之れである。故に民生問題こそは社會進化の原動力と言ひ得る。我等はこの社會進化の原動力を明白にしてこそ初めて容易に社會問題を解決することが出来るのである。

「マルクス」は、階級闘争こそは社會進化の原因なりと認定したが、これ果を倒にして因となすものである。「マルクス」の學説は因果を顛倒し本源が明かでない爲に、彼の學説が世に出でて後、各國の社會に發生した事實は悉く彼の學説と阻礙し、或るときは又相反したのである。例へば彼の門徒が一千八百四十八年第一次國際共產大會を開催し種々の主張を發表した。その際組織せる國際共產黨は普佛戦争のとき消滅せられて了つた。その後又第二次の國際共產黨が生成した。第二次國際共產黨と第一次のそれとの異なる點は、第一次國際共產黨は、完全に階級闘争の原理に基き革命手段を以て社會問題を解決せんとし資本家と調和せざること所謂絕對的不妥協を主張し、又共產黨員の國會加入を許さず議會加入を以て科學的方法にあらずと爲すところにある。けれども其の後獨國の共產黨は皆國會に活動して今日に至り、英國の労働黨亦君主立憲政府の下

に内閣を組織してゐる。之等の事實は、世界に發生せる幾多政治經濟の變動は何れも第一次國際共產黨所定の辦法に依つたものではないことを示す。第一次國際共產黨及び第二次國際共產黨の主張に大なる相違があつたがために、其の後「マルクス」黨徒の粉争は更に激烈となつたのであるが、これなどは「マルクス」の當時思ひも寄らなかつたところであらう。斯様に「マルクス」でさへも思ひも寄らざることがあつたのである。眞に余の學說の通り、知るは難く行ふは易しである。

「マルクス」は科學を以て社會問題を解決せんことを主張した。彼の最も力を致した點は、第一次共產黨成立前に在つて、多大の精力を費し従前の歴史及び當時の事實を悉く研究しこれを明瞭にし得たところにある。彼は従前の歴史及び當時の事實を研究し之を綜合した結果一つの判断を下して言ふ、將來資本制度は必ず消滅すべきものであると。彼は資本主義の發達せる時代に於ては、資本家は彼此の利害關係に依て、大資本家は必ず小資本家を呑滅し、その結果社會は極富の資本家と極窮の勞働者との二つになつて了ふ、そして資本の發達が極度に達すれば自ら分裂して一個資本國家が形成せられる、更に社會主義に依り自然に順應して解決せられ、一自由社會的な國家を形成するものと考へて居た。彼の判断によれば資本の極度に發達した國家は今正に消滅すべき時期にあり、革命が起らなければならぬと云ふことになる。併しながら彼のときより今に至る迄七十

餘年、我等が見るところの歐米各國の事實と彼の判斷とは事毎に正反對の現象を示した。即ち「マルクス」の當時、英國の労働者は八時間労働を要求し罷工手段を用ひて資本家に對抗した。「マルクス」は之を批評して一種の夢想となし資本家は必ずや許可せざるべしと云ひ、八時間労働の要求を貫徹せしめんがためには、革命手段あるのみと考へた。其の後英國労働者の八時間労働の要求は、嘗に事實となつて現はれたのみか、その上英國では、之が法律を制定して全國の大工場銀行鐵道關係労働者に至る迄八時間労働制を適用したのである。その他幾多の事實に就いて見るも、當時「マルクス」自ら豫見し得たりと考へて居たことも、その後事毎に相符合せず、「マルクス」自らでさへも亦彼の豫見の適中しなかつたことを認めない譯には行かなかつたものである。他の事實はさて措き、ただ資本の一項に就いて言へば、「マルクス」の見解では、資本主義の發達後資本家は相互に併呑し自滅するものとせられて居たが、事實は之に反し今日に至る迄各國資本家は奮に消滅せざるのみか、更に一段と發達して止まるところがない。これを以ても「マルクス」の學理なるものを證明することが出來ると言ふものだ。

我等は再び獨國の社會狀態に就いて語りたい。獨國は「ビスマルク」執政當時、國家力を以て労働者の苦痛を救濟し、國家に於て八時間労働を規定し、少年及び婦女子の労働に對しては、その

年齢及び時間に種々なる制限を定めた。労働者の養老費及び保険費に關しても亦國家は種々規定するところあり、全國資本家をして之を負擔實行せしめんとした。當時資本家の幾多の反對はあつたが、鐵血宰相「ビスマルク」は彼の鐵血的手腕を以て強制的に執行したものである。實行の當初一般のものは、國家が労働者保護の方法を改良し労働時間を減少すれば、労働者側には有利で資本家側には損であらう。更に之を推理して従前十六時間の生産力は自然八時間の生産力より大きいであらうなどと考へて居たものである。ところが實行の結果は何うであつたか。實際に於ては八時間労働の方が十六時間労働よりも生産高が多かつたのである。この理は即ち労働者が一日八時間労働に従事するとせば、彼の精神體力を一杯一杯に使用しないため、衛生によく自然健康を害することなく、労働者の精神體力が常に健康たり得る。その結果工場内の機械を管理するにも自然周到となり、機械の損壞も甚しく減少し、機械の損壞が減少すれば従つて停工修繕の必要もなくなつて、生産を繼續し得ることとなり生産は自然に増加する。之に反し一日十六時間労働に従事する場合は、彼等の精神體力は過勞し、その結果非常に衰弱し、機械の管理も周到を缺き、従つて機械も常時破損し勝となり、停工修理せねばならなくなつて生産も繼續することが出來ず、生産力は自然減少することとなるからである。若し這間の理窟を信じられない人には、余は一つ

の比喩をあげて説明しやうから、諸君各自に於て自分で試験して見るがいい。例へば人が一日十五六時間も讀書すれば、精神疲倦の結果無理に多讀してもはつきり記憶することは容易であるまい。これに反して若し一日の讀書を八時間と制限すれば、その餘ます時間を休息に遊戯に精神を保養し得て讀書の際必ずや記憶も了解も容易に出来るやうになるであらう。時間の關係に就いては、當時「マルクス」は八時間労働とすれば生産力は必ず減少すべきものと考へて居た。ところが其の後獨國の實行した労働時間の減少政策は、却つて生産力を増加し各國を凌駕した。ここに於て英米は疑問を起し、労働時間を減少し労働者の保護を増加すれば生産力は當然減少しなければならぬ。然るに何うして獨はこの種政策を以て却て生産力を増加したのであらうかと考へたものである。彼等は不思議に思つたが爲に獨國の情形を考察した。そして纏て英米もこの道理が明白となつたので獨國の辨法に倣つたのである。「マルクス」は當時この道理を全然明白にしなかつたがため、彼は非常な錯誤に陥つたのであつたのである。

再び「マルクス」の研究に照せば、彼は資本家が剩餘價值を多からしめんがためには三つの條件が必要である。即ち一は労働者の勞銀の減少、二は労働時間の延長、三は製産品價格の釣上げが必要であると言ふ。この三條件は合理的であるか何うか。我等は近來巨利を得た工業家を藉りて

之を證明することが出来る。諸君も御承知の通り米國に「フォード」自動車工場と言ふのがある。その工場は非常に大規模で自動車の製品も極めて多量にして、世界各地に賣捌かれ、該工場年々の利益は一億弗に上る。然らば本工場の製造及び營業の狀態は何うであるか。製造工場たると事務所たるを問はず、一切の機械施設は非常に完備し非常に精緻にして又非常に勞働者の衛生に適して居る。勞働者の勞働時間は最長八時間に過ぎない。最も一般的な仕事に従事するものでも一日の勞銀は五弗、即ち中國の十元に相當する。稍重要な職員一日の給料はそれ以上である。工場では勞働者の勞銀給料の外に尙ほ種々な遊戯場を設備し勞働者の娛樂の用に供して居る。又醫藥衛生室の設があつて、勞働者の疾病を調治するやうになつて居る。學校を開設し新入の勞働者及びその子弟を教育して居る。又全勞働者に代つて生命保險に加入し勞働者の死亡後は遺族は保險金を取得することが出来、又撫卹金を得ることが出来るやうになつてゐる。此の工場から製産する自動車の價格は、自動車を買つたものならば誰しも知つて居るやうに、普通一臺價格は五千元位にするが、「フォード」自動車は最高一千五百元に過ぎない。斯様に自動車の價格は頗る低廉ではあるが、機械は非常に丈夫で其の特長とするところは、よく山路を走り使用久しきに及ぶも仲々壞れないところにある。斯の如く本工場の自動車が價格低廉にして品質も勝れて居ると云

ふので、全世界を風靡し販路極めて廣く、その結果巨利を博することゝなつたのである。

我等はこの成金工場の所持する工業經濟の原理と「マルクス」の剩餘價値の理論とを比較するとき、少くも三個の條件に於て相反するものあるを見る。即ち「マルクス」の所説に依れば、資本家は労働時間を延長せねばならぬと云ふが、「フオード」工場の實行したところは労働時間の短縮であつた。又「マルクス」の所説に依れば、資本家は労働者の労働を減少せねばならないと言ふが、「フオード」工場の實行したところは労働の増加であつた。更に又「マルクス」の所説には、資本家は製産品の價格を釣り上げなければならぬとあるが、「フオード」工場では却つて製産品の價格の引下げを實行したのである。「マルクス」は之等相反する道理の如きは何等豫見するところがなかつた。これ彼の従前の主張が非常な錯誤を來した所以ではなからうか。「マルクス」が社會問題を研究すること刻苦幾十年、知るところは總て既往の事實であつて、將來の事實に至つては何等思ひ及ぶところがなかつたのである。故に彼の信徒は彼の學説を變更せんとした。「マルクス」社會主義の根本的目的は資本主義の推倒にある。然し乍ら資本家果して推倒すべきものなりや否やは極めて重大なる問題であつて、今後の詳細なる研究に俟て始めて知るべきである。これに依つても非常に困難に行ふことの非常に容易なることが判るであらう。

「マルクス」の剩餘價值説の精華は、資本家の所得利益は労働者の剩餘を剝奪したものであると言ふ點にある。これに依れば、資本家の生産は労働者に依らねばならず、労働者の生産は物質に依らねばならず、物質の賣買には商人に依らねばならぬ事實から推論し、凡そ生産の利益は、資本家と商人とで労働者の血と汗との結晶である金を剝奪してゐると言ふ譯になる。果してさうであれば、資本家と商人はすべて労働者に取つて有害で世界にも有害であるから當然消滅せしめねばならぬと言ふことになる。此の點「マルクス」は先づ資本家を滅ぼさねばならぬ、資本家が滅びて始めて商人を消滅することが出来ると判斷した。然し事實は何うであらうか。現在世界は日々進歩し改良せられて行く。前述の分配の社會化と言ふことも新に發明せられた。即ち組合（合作社）の發明である。組合は多數の労働者が聯合して組織したので、労働者の需要する衣服飲食物の如きは、若し商人から間接に買入ることとせば、其の間に立つ商人は非常な金を儲けることとなり労働者はそれだけ餘計に高い品物を買はねばならぬ、だから労働者は廉價にして而も品質優良な品物を買はんが爲に、彼等は集つて自ら賣店を開設し店内にて販賣する品物はすべて労働者の需要するものを用意した。故に労働者は年中需要する品物はすべて自分等の開いた店にて買ふこととなつた。供給既に便利となれば價格亦自ら低廉となる。毎年末に賣店の上げた剩餘利

益は購買者の消費額の多寡に依つて利益分配をしたものである。此の店の利益の分配を購買者の消費高の比例に據つた爲に之を消費組合と言ふて居る。現に英國の幾多の銀行及び生産工場に於ては、すべてこの消費組合に依て辨理せられてゐる。消費組合發生の爲幾多の商店は消滅した。従前商店としては何等重要視せられなかつたこの種組合も今日では極めて有效なる組織と見做さるに至つた。英國ではこの組織が非常によく發達したが故に國家の大商家も現在では皆生産家と變つた。即ち米國の「スタンダード」石油會社の如きも中國に於ては一賣油商店に過ぎないが本國では石油製造の生産家なのである。其の他英國の各種大商家も現在では皆生産家と變る趨勢となつた。この種組合を以て社會問題を解決せんとすることは、何等問題解決の根本に觸るゝなき枝葉の感なき能はぬが、當時「マルクス」の資本家先づ滅びて商人も始めて消滅するとの判断は、見事裏切られて、現在では組合が發生して商人が先づ消滅したのである。こゝにも亦「マルクス」の判断と事實との相符合せざるを見る。「マルクス」の判断すらも事實と合はなかつたとすれば、余の「知るは難く行ふは易し」の學說の確として磨滅し得ざるを見るべきである。

再び「マルクス」の學說に照して言へば、世界の大工業は生産に依らなければならぬ生産は又資本家に依らなければならぬとの一節は、即ち良生産と大資本家とがあつて工業は發展し得、

利益を上げ得るものなることを意味する。我等中國の工業の狀態に就いて證明すれば何うなるであらう。中國最大の工業は漢冶萍公司である。漢冶萍公司是専ら鋼鐵を製造する大工場である。この公司の最大資本家は以前は盛宣懷であつた。本工場に於て年々製産せらるる鋼鐵は平時に在ては或は米國「シヤトル」港へ或は濠洲へ運ばれて賣られるが、歐洲大戰當時は全部日本に賣られたものである。鋼鐵は元來中國の最大輸出品の一であり、既に漢冶萍があつて之を製造することが出るのに、何が故に尙も外國の鋼鐵を買はなければならぬであらうか。それは中國の市場に於て需要せらるる鋼鐵はすべて、品質の最も優良なる建築用銃袍用及び工具用の鋼鐵であるが、漢冶萍の製造する鋼軌及び生鐵では、之等用途に適合しないからだ。従て市場では外來の輸入品を買はんとし漢冶萍の鋼鐵を買はうとはしないのである。米國は鋼四千萬噸鐵四五千萬噸を年々産出する。然るに漢冶萍に於て年々僅か鐵二十萬噸鋼十幾萬噸を産出するに過ぎない中國が、この少量の鋼鐵を米國に迄運んで賣らねばならぬとは、一體何うした譯であらうか。又米國は斯くも多量の鋼鐵を産出しながら尙も中國の鋼鐵を購入するのは何うした譯か。即ち漢冶萍には優秀な鍊鋼工場なく、製産せられた生鐵は幾多の方法を經過して製造せられなければ役に立たないのであるから、中國の用途には適合しない。従て外國に運んで賣らねばならないのだ。之に反

し米國には極多の製鋼廠があつて、廉くさへあれば何處から來た鐵でも辨はず購入し良質な鋼を製造して利益を擧ぐることが出来る。従て本國に多量の鋼鐵を産出するけれども、尙中國から運ばれた廉い鐵を買ふことが出来るのだ。斯の如く漢冶萍公司所産の鋼鐵は外國に賣却せらるゝため、歐洲戰爭當時は、勞働者の勞働時間を短縮し勞銀を増加しても尙多大の利益を擧げ得たものである。ところが現在では缺損續きで多數の失業勞働者を出した。「マルクス」の學理に照して言へば、漢冶萍公司是既に多量の鋼鐵を産出し又大資本を擁してゐるから、當然利益が上がらなくてはならず、大いに發展も爲し得なくてはならない筈であるのに、何うして缺損續きの悲境に陥らねばならなかつたか。漢冶萍なる此の公司の情形に就いて考究するに、産業の中心は何處にあるであらうか。即ち産業の中心は之を消費する社會にあつて單なる生産資本にあるのではない。漢冶萍は大資本を擁しては居るが、その生産するところの鋼鐵に對し、中國には之を消費すべき社會がない。従て發展も出來ず總じて利益を擧げることも出來ないのである。産業の中心が消費社會にあるところから、近來世界の大工業都市に於ては、すべて消費者の需要に應じて物品を製造して居る。近來智識ある勞働者も亦消費者を幫助してゐる。消費とは果して如何なる問題であらうか。即ち衆人の生存を解決する問題であり、又とりもなほさず民生問題である。従て産業の

基礎は民生に置かれなければならぬと言ふのが實際であらう。

民生は即ち政治の中心であり經濟の中心であり將又種々なる歴史活動の中心である。従前の社會主義は謬つて物質を以て歴史の中心とした爲めに幾多の紛亂を惹起した。それは恰も従前の天文學が誤つて地球を以て宇宙の中心とし、其の結果曆數の計算に三年毎に一ヶ月の大差を生じたのと同様である。その後太陽を宇宙の中心に改正したので每三年後の曆數には僅か一日の差より起らなくなつた。我等は今社會問題中の紛亂を解除せんとせばこの種錯誤を改正しなければならぬ。再び物質問題を歴史の中心なりと説くは不可である。歴史上の政治及び社會經濟等の種々の中心を、すべて民生問題に歸せなければならぬ。民生を以て社會歴史の中心と爲すには、先ず中心の民生問題をはつきり研究しなければならぬ。民生問題を充分研究してこそ始めて社會問題解決の方法はあるであらう。

第二講 地權の平均と資本の節制

民生主義なる問題は、若し之を學理的に詳細に講義すれば、十日や二十日では到底完全に講義が出来ぬものではない。況んやこの學理は現在に於ても尙ほ定論なく、従て單に學理に就いて講

議することは徒に多大の時間を空費するのみならず、講演の理論を一層難解ならしむる惧れあるを以て、本日は暫く學理より離れて専ら辦法に就いて語りたいと思ふ。

民生主義の辦法は夙に國民黨の黨綱中に確定せられてゐる。國民黨は民生主義に對し二つの辦法を規定して居る。第一は地權の平均であり、第二は資本の節制である。中國の民生問題は唯この二つの辦法に依てのみ解決し得らるるものである。けれども世界各國に至つては、其の情勢同じがらず、資本發達の程度も亦各相異なるを以て、各國の民生問題解決の辦法も亦自ら相異ならざるを得ない。近來穀米からこの種學問を得た我中國の多くの學者は、中國の民生問題の解決にも亦穀米の辦法を倣はんとするものがあるが、彼等は實際に於て穀米社會黨の社會問題解決の辦法は今尙ほ諸説紛紛一も是とするものなき状態に就いては毫も知るところがない。「マルクス」派の辦法に照せば、すべての社會問題は「プロレタリア」の專制に依て解決すべく、又一切の政治經濟問題は革命手段を用ひて解決すべきことを主張してゐる。これ過激派である。他の一派の社會黨は和平辦法を主張し、政治運動と妥協手段とを以て解決せんとするものである。歐米に於てはこの兩派常に大衝突を惹起したもので、各其の是と信ずるところを行つて來た。革命手段を以て政治經濟問題を解決せんとする辦法は、露國革命に於て既に使用せられた。露國は革命後

六年に過ぎないが、余の所見に依れば、彼等は革命手段を以て政治問題だけは解決した。革命手段を以て政治問題を解決することには、露國は確かに完全に成功したと言はなければならぬ。けれども革命手段を以て經濟問題を解決すると言ふ點に至つては、尙ほ成功と言ふことは出来ない。最近露國は新經濟政策を樹立して今尙ほ試験中にある。これに依ても純粹の革命手段を以てしては、完全に經濟問題を解決することの出来ないことが分るであらう。かるが故に幾多歐米の學者は、露國の如く革命手段を以て經濟問題解決の方法となすことには賛成せず、政治運動に依らんことを主張する。だが政治運動を以て政治經濟問題を解決することは、短日月間にその實現を期待し得らるるものではない。故にこの派の人はすべて漸進を主張する。この派漸進を主張するものは、即ち妥協家と和平派である。彼等の想得せる方法は、英米の如く資本の發達した國家に於ては「マルクス」の方法を以て立どころに社會問題を解決することは出来ない。和平的方法に依て始めて完全に解決し得るものなりとするにある。

この和平的方法は即ち前回に述べた社會と工業の改良、運輸と交通事業の公有、直接徵稅即ち所得稅の徵收及び分配の社會化即ち組合の四種の方法である。この四種の方法は何れも「マルクス」の辨法とは異なるものにして、この方法を實行して經濟問題を改良せんと主張するものであ

り、即ち「マルクス」の革命手段を以て經濟問題を解決せんとするに反對するものである。歐米各國に於ては、既に陸續此の四種の方法を實行してはゐるが、たゞ現在のところ、尙ほ完全に所期の目的に到達して居ない。けれども一般大衆はすべて此の方法に依て社會問題が解決し得べきことを信じて居る。そして英米に於ては幾多の社會黨も此の四種の方法に賛成してゐる。この四種の方法は何れも和平手段である。故に彼等は極力「マルクス」の革命手段に反對する。

露國革命當初の目的は、元來社會問題の解決にあり、政治問題は何ちらかと言へば第二義的のものであつた。が革命の結果は、最初の希望に反して、政治問題は解決せられたが、社會問題の解決を見るに至らなかつたのである。この事實に依て「マルクス」反對の一派は言ふ。露國は「マルクス」の辨法を行ひ今回の試験を経過し之を實施し得ずして失敗に歸したと。これに對し「マルクス」の黨徒は答へて言ふ、露國が革命手段を行つて社會問題を解決せんとしたことは失敗ではない。露國の商工業がまだ英米の程度に迄發達して居らず、其の經濟組織もなほ未成熟であつたから「マルクス」の方法を行ふことが出来なかつたのである。若し之に反し商工業の極めてよく發達し、經濟組織の充分成熟したる國家に於てならば、「マルクス」の辨法は必ずよく實行し得るであらう。故に「マルクス」の方法を若し英米の如き國家に於て實行したならば、必ず充分なる成

功を収め社會問題は必ずや根本的に解決せらるべきであらうと。この兩派の學說を比較對照するに、「マルクス」の方法は所謂快刀亂麻の手段であり、「マルクス」反對派の方法は和平手段である。

我等にして社會問題を解決せんがためには、果して快刀亂麻の手段を用ふべきか。それとも和平手段を用ひて前述の四種の政策に依るべきか。此の兩派の辨法は何れも社會黨の主張するところにして又共に資本家の反對するところである。今や歐米の商工業は急速に進歩し資本は極めて高度に迄發達し、資本家の專制は極度に達し一般人民の到底忍受し得ざるに立ち至つた。こゝに於てか社會黨は人民の爲に之等專制の苦痛を解除し、社會問題を解決せんとし、和平手段を採用するものも過激手段に依らんとするものも一様に悉く資本家に反對したのである。だが結局のところ、歐米に於ては將來社會問題を解決せんがためには如何なる方法を採用すべきや、其の具體的方法は今尙ほ發明されてゐない。たゞ和平手段を主張する人々が資本家の幾多の反對、種々の刺激を受けて和平手段を用ひて社會を改良せんとしつゝあるに過ぎないと言つた現狀だ。そして斯の如く人類に非常な利益を齎らすものであり、然も毫も資本家の利益を害することなきものすら尙ほ且つ實行し得ない。其の結果多くの社會主義者達は漸次從來の主張を變更して過激な辦法に贊成

し又、、を用ひて社會問題を解決せんとするに至つた。「マルクス」黨徒の説に照せば、英國勞働者にして若し眞に覺醒し一致團結し得て「マルクス」の辨法を實行し社會問題を解決せんとするならば、英國に於ては必ずや成功するであらう。米國に於ける資本の發達も英國と同様なるを以て、假りに若し米國勞働者にして「マルクス」主義を實行し得るならば、又目的を達するこゝとが出来る筈である。ところが事實現在に於ては、專制極りなき英米各國の資本家達は、之が對抗策を講じ、社會問題解決の進行に反對し、彼等自身の權利を保守せんとしつゝあり、然も其の資本家が其の權利を保守するの情形たるや、恰も従前の專制皇帝が彼等の皇位を保たんと試みたと同様である。彼等が王位を保守せんとするや、反對黨の來つて其の地位を動搖するを慮り極端なる專制的威權を用ひ極めて殘忍なる手段を以て彼等の反對黨を撃滅せんとした。現在資本家も自己の私利を擁護せんとし亦種々なる專制的手段を用ひて社會黨に反對し横行無道の限りを盡してゐる。故に「マルクス」黨徒の言ふが如く、極めて容易に「マルクス」辨法を實行し得るものではない。かやうな有様であるから歐米の社會黨は將來勢ひの迫るところ或は「マルクス」の辨法を採用して經濟問題を解決せんとするの擧に出づるやも測られない。

共產のこの制度は、原人時代に既に實行せられて居たが、果して何の時代に於て打破せられた

ものであらうか。余の觀察に依れば、金錢發生後は金さへあれば自由に賣買が出来、必しも物々交換を要せざるに至り、物々交換は變じて賣買となつたのであるが、此の時に至つて共產制度は漸次消滅したものと思はれる。金錢が生れ自由に賣買を爲し得るに至り漸次大商業者を發生した。當時に於ては工業未だ發達せず商人即ち資本家であつた。その後工業發達し機械生産の行はるるに至り機械を所有するものが資本家となつた。だがら従前の資本家は金錢の所有者であり、現在の資本家は機械の所有者であると言へよう。斯様に古代は貨を以て貨に易へ、所謂「日中爲市、交易而退、各得其所」の時代であつて尙ほ金錢なく一切物々交換が行はれ賣買制度はなく彼此有無相通じたもので、やはり共產時代であつたと言はなければならぬ。其の後貨幣が生れ金錢が發生した。そこで金錢を以て貨に易へ、茲に賣買制度が生れたのである。當時金錢を有する商人は資本家であつた。近世機械の發明あり一切の貨物はすべて機械によつて生産せらるるに至り、機械を有する人は更に金錢を有するものを凌駕した。故に金錢の發生に依り共產は打破せられ、機械の發明に依り商人が打破せらるることとなつた。現在の資本家は機械を有し労働者に依て生産し、労働者の、、、、貧富の懸隔相絶する二個の階級を生み出した。この二つの階級は常に相衝突した。即ち階級闘争を發生したのである。こゝに於て一般悲天憫人の道德家は、労働者の

痛苦を見るに忍びず、何等か適當なる方法を以てこの種闘争を解除し労働者の苦痛を減少せしめんとした。彼等は何なる方法を用ひたか。即ち、、、、を恢復せんとしたのである。何となれば、従前人類の最も快活なる時代と言へば、始めて禽獸時代を脱退して建設せられた、、、、であつたからである。當時人類の競争といへば天と闘ひ或は獸と闘ふことのみであつた。其の後工業發達し機械創出せらるるに及んで人と人との闘となつたのである。人類が天と獸とに戰勝した後、久しからずして金錢が發生した。

近來又機械が創出せられ、聰明なる人々は世界の物質を壟斷し、彼等個人の私利を圖り、一般人を皆彼等の奴隸とした。ここに於て人と人との争の極めて劇烈なる時代は現出した。此の種闘争は如何なる時期に至らば解決し得るであらうか。之が爲には必ず再び一種の、、、、、、、、、、、、斯くて始めて解決は可能となる。所謂人と人との争とは果して如何なる争ひであらうか。即ち「パン」の争ひ飯碗の争ひである。、、、、、、、、、、、一般大衆は皆「パン」と飯とを有する。即ち争ひに至らない。即ち人と人との争ひを免かることが出来る。故に、、、、、、、、、、、、、、、、。我等國民黨の提唱するところの民生主義は、常に最高の理想たるのみならず、同時に社會の原動力であり、一切の歴史活動の重心である。民生主義にし

てよく實行するに足らんか、社會問題は始めて解決し得る。社會問題にしてよく解決し得んか、人類は始めて無限の幸福を享けることが出来るのである。、、、、民主主義とを區別して見れば、、、、、民生の理想であり、民生主義は、、、、言ふことが出来やう。故に結局この、、、、區別ありとすれば、その方法であらう。

國民黨の中國に於ける地位、處するところの此の時機に鑑み、民生問題を解決せんとするには、我等は將に如何なる方法を用ふべきか。此の方法は一種の玄妙なる理想にあらず、一種空洞なる學問でもない、一つの事實に基かねばならぬ。この事實は外國許りが有つてゐる譯ではない、中國も亦之を有する。我等は事實を持來つて材料と爲し、始めてよく方法を定出し得る。單に學理のみを以て方法を定めんとするならば、それに依つて得たる方法は信するに足りないであらう。此の理由は、とりもなほさず學理には眞なるもあり假なるもあつて實驗して始めてその正しきと正しからざるとを識別し得るものなるが故である。之れ恰も科學上一種の學理が発見せられた場合、其の學理が果して正しきか正しからざるかは、必ず事實としてよく實行するに足るものなるか否かを檢せざるべからず、其の實行するに足るものにして始めて眞學理と言ふことが出来ると同様である。實際科學上最初發明せられた幾多の學理は、百中九十九迄は實行不可能のもので實

行し得たものは僅に百分の一に過ぎなかつた。従つて悉く學理のみに照して定められたる辦法は必ず實行覺束ないであらう。故に我等は社會問題の解決に當つては必ず事實に根據すべく單に學理のみに依ることは出來ないのである。中國にある此の種事實とは何であるか。即ち一般民衆の受くるところの貧窮の苦痛である。中國人はすべて貧民であり、富豪と言つたやうな特殊階級の全然なく、ただ一般普通の貧あるのみである。中國人の所謂貧富不均なるものも、單に貧の階級を分つて大貧と小貧とするに過ぎない。中國の最大資本家の如きもこれを外國の資本家に比較すれば一小貧に過ぎず、その他の窮人はすべて大貧と言はなければならぬ。中國の大資本家も世界では、すでに一貧人に過ぎないとすれば、中國人は悉く貧であり大富豪は一人もなく、唯其の間大貧と小貧との區別あるに過ぎないことが判かるであらう。我等は此の區別を平均して大貧なからしめんがためには如何なる方法を用ひなければならぬのか。凡そ社會の變化と資本發達の過程に就いて見るに、先づ地主に始まり、次で地主より商人に至り最後に商人より資本家に達する。地主は封建時代に於て發生した。歐洲では今尙封建制度を脱してゐないが、中國の封建制度は秦以後既に打破せられてゐる。封建制度時代に於ては、土地を所有する貴族即ち富人であり、土地を所有せざるもの即ち貧民であつた。中國は二千餘年前既に封建制度を脱離してゐ

るが、商工業の發達せざる爲、今日の社會狀態は依然として二千餘年前の其れと同様である。中國は今日に至つても大地主はないけれども小地主は存在する。此の小地主時代に在つては、多數の地方は尙相安無事であり、人民と地主との間の紛争はない。然し乍ら近來歐米の經濟潮流が日一日と侵入し來り、各種制度に變動が起つた。其の中最初にして最大なる影響は、即ち土地問題である。例へば現在の廣州市の土地に就いて見るに、馬路開通後に於ける長堤の地價は二十年前の其れに比し其の差幾許であらうか。又上海の黃浦灘の地價の如き八十年前の其れに比べて其の差又果して幾許であらうか。凡そ一萬倍の差はあるであらう。即ち従前の土地は一方丈一弗であつたが現在では一萬弗に賣買せられ、例へば上海の黃浦灘の土地の如きは現在每畝の價格幾十萬、廣州長堤の土地の如きも每畝十幾萬と言ふ價格である。故に中國の土地は眞先に歐米の經濟的影響を受け、地主は變じて成金となり穀米資本家同様となつたのである。經濟の發達に影響せられ土地の受けた此の變動は、獨り中國のみ然るにあらず、従前の各國にも亦此の事實はあつた。たと初時さして注意も惹かず關心せられざりしに過ぎない。そして其の後變動の益々大なるに連れ初めて一般の注意を喚起するやうになつたが、最早容易に之を改むるを得ず所謂積重難返と言ふ次第であつた。我等國民黨は、中國の此の種地價の影響に對し其の患を豫防せんと欲する。

故に何等か適切なる方法を設けて之れを解決せねばならぬ。

土地問題に就いては、穀米の社會主義の書物中に常に幾多の興味ある故事が載せられて居る。其の中にこんな一例がある。濠洲の一地方に起つた事實であるが、その地方は市場の出来ない前地價が非常に廉かつたものである。或時政府がある土地を競賣に付した。が何分その土地は當時ひどい荒蕪の土地で芥塵捨場となり他に何等用途もない土地であつたことゝて、誰も高い値段で買はうとするものはなかつたものである。ところが其の競賣場へ忽然一人の醉漢が闖入した。恰度其のとき競賣官は大聲で賣値を呼ばはつてゐる際であつたが、衆人のつけ値は百元のものあり二百元のものもあり到頭二百五十元まで驪り上つた。二百五十元になつてからはもう其れ以上の高値を言ふものがなかつたので、競賣者は三百元で買ふものはないかと問ねたものだ。すると其のへとへとに酔拂つてゐた件の醉漢は、よし自分が三百元出さうと答へたものである。彼のつけ値によつて競賣官は其の土地を彼の名義としこゝに土地は賣却濟となつたので、衆人も散じ彼れ醉漢も其の場を立ち去つた、ところが其の翌日になつて競賣官は領收書持參の上彼を訪ね彼に地價の支拂を要求したところ、彼は昨日酔餘にやつたことであるので何うしても思ひ出せず其の支拂を承知しなかつた。後から醉中にしたことを回憶して大いに後悔したが、何分相手が政府のこ

とであり滞納する譯にもゆかず、色々苦面して持物を悉く賣拂ひ、やつとのことで三百元を湊めて競賣官に渡したものであつた。彼は此の土地を買つてから、永い間何うする能力もなく放つて置いた。其の後十數年は経過した。其して其の土地の周圍には大厦高樓が建築せられ地價は非常に騰貴した。彼に向つて其の土地を數百萬弗で譲受けんとするものもあつたが、彼は尙ほ手放さうとしなかつた。そして彼は其の土地を分割貸與して自ら地租を收めて居たものである。其の後地價は愈騰貴して幾千萬弗となり、此の醉漢は一躍して濠洲第一の大富豪となつた。此の濠洲の幾千萬弗の財産を有する大富豪も、元をたゞせばやはり三百元の土地がモトである。説いて此の事實に至れば、此の地主たるものは當然非常に愉快であらねばならぬ。

けれども此の大富豪が最初三百元を以て其の土地を買ひ其の後何等の改良も加へず毫も關心せず、たゞ眠つて居る間に幾千萬弗の成金となつた事實に就いて考究するに、此の幾千萬弗は果して何人に歸すべきものであらうか。余は之れを大衆の手に歸すべきものと考へる。何となれば社會の大衆が其の土地を使用して商工業の中心とし之れを改良したため、其の地價は逐次増加することとなり遂にかくも高價となつたからである。之れ恰も我等が上海地方を中國中部の商工業の中心としたればこそ、上海の地價が従前に比し幾萬倍となり、又我等が廣州を中國南部の

商工業の中心地とした爲に、廣州の地價が従前に比し幾萬倍したのと同様である。上海の人口は百餘萬に過ぎず廣州のそれも亦二百餘萬であるが、若し上海の住民が悉く上海より移轉し廣州の人も完全に廣州から移轉し或は他の天災人禍が發生して上海の人又は廣州の人をして悉く消滅せしむるものと假定するならば、上海廣州の地價は尙ほも現在の如く斯くも高價であり得るか何うか。之れに由ても地價増加の原因は、衆人の功勞であり衆人の力量であつて、地主の如きは地價の騰落に對しては何等關係はないことが判るであらう。故に外國の學者は、地主が地價の増高に因つて獲たる利益を名づけて勞せずして獲たる利益と言ふ。之を商工業が心を勞し力を勞し廉きを買つて高く賣り多大の打算と多大の經費とを費して、始めて利益を擧げ得るものに比すれば、其の差幾許なるやを知らないのである。商工業者が物質の價値を壟斷し利益を上げつゝあることすら不公平なりと感じつゝある我等も、尙彼等商工業者の努力は認めざるを得ず。然るに地主に至つては、唯坐して其の成を守りさへすれば、毫も心力を用ひずして莫大なる利益を獲得することが出来るのである。然も此の地價たるや如何なる方法に依て騰貴したものであらうか。それは言ふまでもない、衆人が其の土地を改良し其の土地を争ひ用ひて始めて地價は騰貴したるものに外ならず、地價一たび騰貴するや其の地方の百穀の物價之れに伴て騰貴するのである。故に

衆人は其の地方を經營したることに依つて受くべき利益を、地主のために間接無形の中に悉く之れを掠め奪はれて居ると言ふことが出来る。

中國に於ける社會問題の現状は如何。一般社會問題研究家及び社會問題解決提唱家が所有する思想學説は悉く歐米輸入のものなるが故に、我等は社會問題解決辦法と言へば、歐米各國に於て主張せらるる和平辦法並に「マルクス」の過激辦法以外に何等新發明を持合せて居ない。今社會主義と言へば、流行を追ふ人々は直に「マルクス」の辦法に賛成する。從て、一度社會問題を説くや、多數の青年は共產黨に賛成し、「マルクス」主義を以て直に中國に實行せんとする。然らば「マルクス」主義に賛成する、彼等青年志士の用心果して如何。彼等の用心たるや極めてよし。彼等の主張は根本的解決にある。彼等は政治社會問題の本を正し源を清め根本的解決に依らずんば不可なりとして居る。故に彼等は極力、、、組織に努力し中國に活動せんとする。

我等國民黨の舊同志は現在共產黨に對し幾多の誤解を有して居り、國民黨の提唱せる三民主義は共產主義と相容れないものと考へてゐる。彼等は我等一般同志が、二十年前すべて三民主義に賛成し互に結合したものであることを覺らない。革命以前に於ては大多數の觀念では、ただ民族主義あるを知つて居た。例へば當時同盟會に参加せる各同志の目的はすべて排滿にあつた。入會

の際余は彼等に三民主義に賛成なる旨の宣誓を爲さしめたものであるが、彼等本人の意思では大部分皆民族主義に注意し清朝の推覆を考へてゐた。彼等は滿清さへ推覆すれば、其の後は中國人が皇帝にならうとすれば又之を歓迎すると言ふ風であつた。即ち彼等宣誓の目的は、元來三民主義の實行にあつたが、又同時に中國人の皇帝になることにも賛成して居たのである。之れ民族主義に反對するものではないが、勿論思想極めて豊富なる同志の中には、三民主義に賛成し三民主義の三主義がそれぞれ相異なるものなることを明かにし、革命手段を以て主義を實行せんとしたものであるが、其れでさへ當時に於ては、若し滿清の排斥さへ實行し得れば民族主義の目的を達するに足り、民権民生主義の如きは之に隨て自然解決し得るものにして別様の工夫など不要であると考へて居たものである。だから當時民権主義及び民生主義に對しては何等詳細に研究せられず、當時詳細に研究せられなかつたがため、自然民権主義は理解せられず、民生主義に對しては猶更に其の妙を明かにすべき由もなかつたのである。革命成功後民國成立し共和制度を採用したが一般のものは何が故に民國を成立すべきか之を知らうとしなかつたものである。之はまだしものこと、現在に於てすらも尙眞に誠心悅服して民権を實行し共和に賛成する同志は甚だ少な

一般のものは何故に又當初民國に賛成し、共和に反對しなかつたのであるか。此の最大の原因は完全に彼等の皇帝思想にある排滿成功後各省の同志、革命に依つて新しく發生した軍人或は革命黨に投降せる滿清の舊軍人は各一方に據り一個軍閥と成り一地方の小皇帝となり其の地盤を根據として更に地盤擴張を行はんとした。廣東を地盤とせる軍人が廣東の地盤を擴張せんとせるが如き、雲南湖前を地盤とせる軍人が雲南湖前の地盤を擴張せんとせしが如き、又山東直隸を地盤とせる軍人が山東直隸の地盤を擴張せんとせしが如き其の例である。彼等は内心地盤を極度に擴張し、羽毛豐滿のときに至らば自己の力を以て中國を統一し露骨に共和を推覆せんとして居た。此の種革命に依つて出來た軍閥又は民國に投降した滿清の軍閥は、何れも此の種心事を抱懐して居たが、何にしる彼等一己の力を以てしては中國を統一することは出來ず、さりとて又他のものの中國を統一することをも欲せずと言ふ次第であつたから、彼等はただただ機會の到來を靜かに待つてゐたものである。自體斯うした有様であつたから、此の種軍閥は當時既に共和に對する理解がなかつたのは勿論のこと、民國に賛成せる所になるものも、實際のところ皇帝たらんとする野望より出でたもので、唯表面民國賛成を看板として彼等は彼等で地盤が極度に擴張せられた曉、時機一度到らんか、民國に反對し國家問題を解決せんとして其の期を待つてゐたに過ぎな

かつたのである。斯うした原因から民國は成立後十三年來幾多の民國推倒を企つるものが現はれたのだ。ただ幸にして彼等の力がさまで大きくなかつたが爲、民國の名は尙よく餘喘を保ち現在迄繼續することが出来たのである。斯様に當時同盟會員の多くは民權主義に對する判別を缺き民生主義に對しては猶更のこと毫も心得するところはなかつたのである。

再び現下の状態に就き詳細に解剖を試みやう。革命成功後、大清帝國を改めて中華民國と爲し、我等國民黨は今尙民國を尊重して居るが、一般の革命同志の國民黨の三民主義に對する態度は何うであるか。我民國は政治上十三年の變動と十三年の經驗を経過した。従て今や各位同志は民權のこの兩主義に對しては萬事明白に心得て居らるる筈だ。ところが民生主義に對する理解に至ては、恐らく恰度革命後に於ける革命黨の兵權を有してゐた人々の民權主義に對せんと同様、其の可否の辨別もなく一切何も判て居ないであらうと思はれる。何が故に余は敢て我等革命同志が民生主義に對して未だ之を明白にするなしと言はんとするや。即ち幾多の同志は今次の國民黨の改組に當り、共產黨に反對し居然として言ふ。共產主義と三民主義とは同じからず、中國には三民主義を行はば足る共產主義は斷じて容納する能はずと。然らば即ち民生主義とは結局如何なるものであらうか。余は前回の講演に於て之に言及して置いた。即ち社會の文明の發達、經濟組織の改

た爲地價は不自然なる昂騰を來し、此の騰貴はいやが上にも地價を不平均ならしめた。

土地問題から發生する弊害に對しては、歐米に於ても今尙完全なる解決方法はない。我等にして此の問題を解決せんがためには此の機に乗じなければならぬ。若し果して將來商工業の發達後を待たんか、之が解決方法なきに至るであらう。現在中國は歐米の影響を受け商工業は大變動し、普に人民の貧富齊はざるのみか、土地を有するものにも亦懸隔を生じた。例へば甲は上海黃浦灘に一畝の土地を所有し、乙は上海の田舎に同じく一畝の土地を所有すると假定する。乙の土地は自ら耕種すれば或は年に一二十元の收入を得らるるかも知れない。之を人に貸しても多くて五元乃至十元より得られないであらう。然るに甲の上海の土地は一畝に付一萬數千元の借料が取れるのである。斯様に同じく一畝の土地ではありながら上海の土地は幾千倍を得ることが出來、田舎の土地はただの一倍より得ることが出來ないと言ふ大なる不公平が生ずるのである。我等國民黨の民生主義の目的は社會上の財源を平均せんとするにある。故に民生主義は、、、、の法は土地問題の解決である。

土地問題解決の辦法は各國に於て異なり且つ各國のは非常に繁雜である。之に反し今我等が用

ひんとする辦法は頗る簡單にして又甚だ容易である。此の辦法は即ち地權の平均である。土地問題とか、地權の平均とか聞けば、自然一般地主は之を恐れるであらう。恰も社會主義と言へば、一般資本家が之を恐れ起つて反對せんとすると同様に。従て我等の地主が歐洲の大地主の如く既に非常な大勢力を養成して居るものとすれば、土地問題の解決は頗る困難であらう。ところが幸ひ中國は今の處、斯の如き大地主とはなく一般小地主の權方も尙ほさして大ならず、現在に於て之を解決せんか、容易に其の目的を達し得るであらう。若し果して今日に於て此の好機會を逸したならば、將來再び解決することは出來なくなる。此の問題を説けば勿論地主は一種の恐怖心に襲はるるであらう。併しながら我等國民黨の辦法を以てすれば現在の地主は尙ほ以て安んずべきである。

然らば此の種辦法とは如何。即ち政府に於て地價に照して收税し地價に照して買收する方法である。地價は何を標準とすべきか。余の主張に依れば、地價は地主自らをして定めしむべきである。例へば廣州長堤の地價は一畝十萬元のものもあり、一萬元のものもあるが、之をすべて地主自身をして政府に申告せしむるのである。各國の土地税法に依れば、税率は大抵百分の一で地價百元のものならば一元の税を徴し十萬元のものならば一千元を徴する。之れ各國に於て一般に

行はるる地價税である。現在我等所定の辦法も亦この種税率に照し徵税せんとするものであつて、地價はすべて地主より政府に申告することとし、政府は地主の申告せる地價に基き徵税するのである。これ丈では人々は或は地主の任意申告に依るものとせば、彼等は多きを以て少なく申告し政府は損をするのではないかと懸念するかも知れない。例へば地主が十萬元の土地を政府に對し一萬元と申告するとせば、十萬元の地價に照せば政府は當然一千元の税を徵し得べきにも拘らず、地主の虚偽の申告にかかる一萬元の地價に基いて徵税せんか政府は僅に一百元を徵し得るに過ぎず、徵税機關の方面に於ては自然九百元の損失となる。けれども政府に於て二種の條例を定め一面地價に照して徵税すると共に他面又地價に照して買收し得ることにして置けばいい。すれば假りに地主が十萬元の土地をただの一萬元に申告して政府から九百元の税を騙らんとすれば安くて濟む譯であるが、その場合、之に對し政府に於て一萬元の價格でその土地を買ふこととすれば、彼は九萬元の土地を失はねばならぬこととなり非常な損失となる。故に余の辦法を以てすれば、地主が若し多きを以て少なく申告するときは、彼は必ず政府に依り申告價格に従て買收せられ地價の損失を受くるを惧るるであらうし、又之に反して少きを以て多く申告する場合には、政府が申告價格に基いて徵税するため、重税負擔の損失を受くることを惧るることとなるであら

う。だから地主に於ては利害兩面を比較して、彼は必ず多くの申告することも願はず又少く申告することも欲せず、一個折衷價格を定むることを餘儀なくせられ、結局實際の市價を政府に申告することとなるであらう。地主に於て既に折衷の價格を申告するものとせば、そこで自然政府も地主も共に損をせず済むこととなる。

地價定まつた後、我等は更に一種の法律の規定がなければならぬ。この規定とは何であるか。即ち地價確定後幾年かの後にはその土地の價格は再び騰貴するであらう。之に對し各國に於てはすべて別に加税することとなつて居るが、我等の辦法は、即ち以後の價格の騰貴の分を全部公有に歸せしめんとするにある。何となれば、地價の騰貴は社會の改良と商工業の進歩とに基くものであるからである。中國の商工業は幾千年來何等大なる進歩もなく従て地價も幾多の年代を經過したるに拘らず大なる改變もなかつた。けれども若し一度進歩し一度改良せられんか、必ずや現在の新都市のその如く、日々に變動しその地價は幾千倍幾萬倍にも増加するであらう。而してこの種進歩と改良との功勞は、やはりこれが爲努力經營した衆人に歸すべきものであり、従てこの改良と進歩の後に騰貴した地價は當然之を大衆に歸すべく之を私人の所有に歸すべきではない。例へばここに一地主があり現在の申告地價を一萬元なりとする。その後幾十年後その地價が二百

ある。例へば現在の廣州市の如きも、若し地價に照して收税するならば政府は莫大なる收入を有することとなり、政府にしてかかる莫大なる收入を有せんか、行政費もここに財源を確立し得て、地方を整理し、一切の雜税をも減免することが出来る。即ち人民所用の水道電氣の費用の如きは、すべて政府に於て負擔し必しも人民自ら負擔するを要せざることとなり、その他道路の修築費及び警察の給養費も亦地價に依る收入より支辦することを得、別に人民から警察捐及び道路修築費を徴する必要もなくなるであらう。然しながら現在廣州の騰貴した地價は、悉く地主個人の所有に歸し政府の所有ではない。政府は大口の收入なきため一切の費用はすべて人民から種々の雜捐として徴收せざるを得ず、従て一般普通人法の負擔すべき雜捐は餘りにも重く、然も何うしても納税しなければならぬので非常な窮乏に陥つて居るのである。故に中國の窮人は非常に多いのである。この種貧窮人の負擔の過重なる原因は即ち政府の徵税が不公平にして地權が平均せられず、土地問題の解決せざるが故に外ならない。若し果して地價税を完全に實行し土地問題を解決することが出来たならば一般平民のこの種苦痛はなくなるであらう。外國では地價が非常に騰貴し地主の收入が非常に多額に上るけれども、科學の進歩と機械の發達とに依り機械を所有する資本家は、極大なる生産を有し、この極大なる生産より得らるる彼等資本家の收入は地主の收入よ

りも更に鉅大である。中國に於ては現在のところ、最大の收入ある資本家と言へば地主のみにして機械を擁有する大資本家は一人もないから、我等このときに乗じ、地權を平均し資本を節制して、土地問題を解決することは極めて容易なことである。

價に照し徵稅し價に照して買收すると言へば、まだ重要な一事があるから、はつきり區劃して置かねばならぬ。即ち地價は單に土地そのもののみを指して言ひ、人工の改良及び地面の建築を含んでは居ないから、この點誤解なきやう望む。例へば一區劃の土地があつてその價格を一萬元とする。そして地面の建築物は一百萬元とすれば、この場合、價に照して徵稅し百分の一を徵收すれば僅に一百元を得るに止まる。之に反して若し價に照して買收せんとすれば、一萬元の地價の外に、建築物の價格一百萬元の補償を要する。其他の土地にあつても、若し樹木堤防溝等各種人工が加えられ改良せられたるものあるときも亦この例に照して類推しなければならぬ。

我等が中國の民生問題を解決し、これをして一勞永逸ならしめんと想へば、單に資本節制の辦法のみを以てしては足りない。現在外國に於て行はるる所得稅は、即ち資本を節制するの一つの方法である。去り乍ら彼等の民生問題は果して解決せられしや否や、勿論一概に中國を外國と

比較することは出来ぬが、やはり單に資本の節制を行ふのみにては不足である。何となれば外國は富み中國は貧しいからだ。外國は生産過剰なるも中國は生産不足なるがためだ。だから中國は單に個人の資本を節制する許りでは駄目である。やはり其の上國家資本をも發達せしめなければならぬ。我等の國家は現に四分五裂の状態にある。従つて假令資本を發達せしめやうとしても、果して何れの道を進むべきものなりや、現在のところ殆ど其の方法を發見し得ず、考へることさへ出来ないやうに見える。然し乍ら四分五裂の状態は一時的局面に過ぎず、將來は必ず統一せらるべきものである。そして統一後に於て民生問題を解決せんがためには必ず國家資本を發達せしめ産業を振興しなければならぬ。産業を振興せしむる方法は頗る多い。第一は交通事業である。鐵道、運河の如くすべて大規模なる工事を興さねばならぬ。第二は鑛産である。中國の鑛産は極めて豊富であるが、之等はすべて地中に埋藏せられて居て寔に惜しいものだ。故に必ず之を採掘しなければならぬ。第三は工業である。中國の工業は速に振興するに非ずんば不可である。中國には勞働者は多いが機械がない。だから外國と競争することが出来ない。全國所用の貨物はすべて外國に於て製造し輸送せられ、其の結果利権は悉く外溢して居る。我等はこの種利権を挽回せんとせば、速に國家の力を以て工業を振興し機械を以て生産し全國勞働者をして悉くその仕事あ

らしめねばならぬ。全國の労働者にして、すべて爲すべき仕事あり機械を使用して生産し得るに至らんか、其れこそ一つの巨大なる新財源であらねばならない。之に反し若し國家の力を用ひて經營することなく、中國の個人又は外國商人の經營に委したならば、將來又個人の資本を發達せしめ、大富豪階級を生み、社會の不均等を齎すの結果を招來するに過ないであらう。故に我等が民生主義を説くに當り、勿論「マルクス」の學問を非常に、、、、が、「マルクス」の辨法を以て中國に實行することは出來ない。この理由は極めて明瞭である。即ち現に露國は「マルクス」の辨法を實行し革命後今日迄行つて來たが、經濟問題に對してはやはり新經濟政策に改めなければならなかつたではないか。露國が新經濟政策に改めねばならなかつた理由は、即ち我等の社會經濟の程度が英米の其れの如く充分發達して居なかつたがため、「マルクス」の辨法を實行するに足らなかつたのである。露國の社會經濟の程度すら、尙ほ且つ英米に比すべくもなかつた。況や我等中國の社會經濟の程度が何うして之等と比較出來やうぞ。又何うしてよく「マルクス」の辨法を行ひ得やうぞ。故に「マルクス」學徒のやる通り、「マルクス」の辨法を以て、中國の社會問題を解決せんことは不可能である。

余は三十餘年前余が廣州に於ける學生時代のことを記憶してゐる。當時西關の金持の子弟は多

季になると皮衣を着たものである。元來廣州冬の氣候は左迄寒くはないから皮衣など着なくてもいいのである。それなのに金持の子弟達は毎年冬になると皮衣を着て彼等の金持振りを見せたがり、初冷の候には毛の少ないものを着、稍寒冷を覺ゆる頃になれば毛の多いものを着、冬の眞盛り頃には、何んな天氣であらうが彼等は毎日毛の多いものを着て居たものだ。或日彼等は皆毛の多い皮衣を着て一會場に行つたが、天氣が急に變つて暖くなつた。そこで彼等は、こう暖くでは北風が吹かないことには、人民が身體を壞して了ふだらうと不平を並べてゐたものである。斯様に北風が吹かなかつたならば人民が身體を壞して了ふだらうと言ふやうなことを口にする彼等の心理を忖度するに、社會の一般民衆は皆皮衣を着てゐるから北風が吹かなかつたならば皆が暑さのため衛生上害があるであらうと考へて居たものに違ひない。ところがその實社會の何の階級の人が皮衣なんかを着てゐるのだらう。廣州の人民は冬には綿入れを着て居るものもあり、袴を着て居るものもあり、甚しきに至つては唯の單衣を着てゐるものさへあるのである。斯うした連中の中に何處に北風の吹かないのを心配するものなどあらうか。現在の一般青年學者にして「マルクス」主義を信仰し社會主義を説くものは、直ぐ「マルクス」の辦法を以て中國の社會經濟問題を解決すべしと主張する。これ即ち前述廣東の金持の子弟か北風が吹かなかつたならば人民が

健康を害すると言つた、その口調と何等異なるところは無い。彼等は現に中國の患ふところは貧であつて決して貧富の不平均なることではないことを知らないのである。貧富不平均の社會に在つては、「、、、」之を平かにしなければならぬ。だが中國の如く産業の尙ほ未發達のときに在ては「マルクス」の階級闘争や、無産者の専制は不必要である。故に我等は今日「マルクス」の意を師とすればそれでいいのだ。「マルクス」の法則を用ふるのは不可なのだ。我等が主張する民生問題解決方法は、時勢に率も適應せざる過激辯法を先づ提出し、更に産業の發達を待つて之を適用せんとするものではない。一種患を豫防する方法を考へ個人の大資本を阻止し、將來の社會上の貧富不平均の大なる弊害を防止せんとするにある。これ今日の中國の社會問題を正當に解決する方法であつて、毛の澤山ある皮衣を着乍ら北風の吹かんことを希望する方法ではないのである。

余の今中國今日の民生問題を解決せんが爲には、今日の中國は單に資本を節制するのみにては足らず、必ず加之に國家資本を製造せねばならぬことを説いた。何をか國家資本の製造と言ふや。即ち國家の實業を發展せしむることである。其の計劃は既に建國方略第二卷の物質建設又の名を實業計劃（産業計劃）の項に詳かである。そして本書には已に國家資本製造の大要に就いて述

べられてある。前にも言へる如く、商業時代の資本は金銭であり工業時代の資本は機械である。故に國家に於て經營し種々の生産機械を設備し國家の所有となさねばならぬ。恰も歐洲戰爭當時各國の戰時政策に於て大産業及び工場をすべて國有に收歸したと同様に。ただ彼等の場合には、この種政策は試みに實行せられ久しからずして停止せられて了つたが。中國には元來大資本家は無い。若し國家に於て資本を管理し、資本を發達せしめ、所得利益を人民に歸し大衆の所有とすると假定したならば、斯く如き辦法を以てすれば、資本家と相衝突することはなく、極めて容易にその目的を達することが出来るであらう。米國に於ては其の資本は、第一は鐵道、第二は工業、第三は鑛産の三大實業に依つて發達した。この三種の大實業を發達せしめんが爲には、我等中國の資本學問及び經濟を以てしては駄目である。何うしても外國の既成資本に依らなければならぬ。若し我等が中國將來の、、、を建設せんがため外國の既成資本を利用したならば事半にして功之に倍するであらう。我等にして自己の資本が出来るのを待つて然る後實業の發展に着手するが如きは迂遠至極な話である。中國に今は機械がない。交通も僅か六七千哩の鐵道があるに過ぎない。鐵道を全國の需要に應じ得るがためには、現在の十倍少くとも六七萬哩は當然必要である。従て外資の助を借りて交通運輸事業を發展せしめざる能はず、又外國の學問經驗ある人材

を借りて之等産業を經營せしめねばならない。

鑛産に至ては我等の尙ほ開闢せざるところのもの。中國の人民は米國に比し多く土地亦大である。然るに米國の石炭は年産額六億噸鋼鐵九千萬噸に達し、中國の石炭の年産額は米國の千分の一にも及ばないのである。故に速に鑛區を開採しなければならぬ。之がためにも亦外費を借るべきである。その他汽船の建造・航業の發展及び種々なる産業の大工場建設のためにも、すべて外國資本の援助を受くるに非ずんば不可である。若し果して交通鑛産及び工業の三種大産業にして非常なる發達を遂げんか、この三種のかにて年々莫大なる收入があるのであらう。假りに若し之を國家に於て經營すれば、所得前益は一般人民の共享に歸し、斯くて全國人民は資本の利を享くるを得ることとなり、資本の害を受くること外國の現狀のそれの如くなるを免ることが出来るであらう。外國に於ては大資本は個人の所有であるため、大多數の人民は資本の害毒を受け悉く之に苦しみつつあり、故に階級鬭争を發生してこの種痛苦を解除せんとするに至つたのである。

我等が中國の社會問題を解決せんとするも外國と何等其の目標を異にするものではない。そしてこの目標たるや、即ち全國人民のすべてが安樂を得ることが出来るものであり、財産分配の平均の苦痛を味はずに濟むべきものでなければならぬ。斯の如き苦痛を受けざらんがためには、

ること能はずんば、民生主義を解決すべき方法はないのである。故に民生主義の第一の問題は即ち吃飯問題であらねばならぬ。古人言ふ「國以民爲本、民以食爲天」と。吃飯問題の最も重要なものを見るべきである。歐洲戦前迄は各國の政治家は一體に吃飯問題には餘り留意しなかつたものである。我等心を歐洲大戰に留むるものは、ここ十年間何が故に獨國は失敗したかを研究した。

歐洲大戰の酣なる當時、獨國は戦へば必ず勝ち、凡そ兩軍の鋒を交ふところ、陸軍の歩兵隊砲隊騎兵隊、海軍の驅逐艦潛水艇及び一切の戰團艦、空中飛行機、飛行艇等の戦は悉く獨國の勝に歸し、終始敗れたことはなかつたものである。然も歐洲戦争の結果は遂に獨國の大敗に歸した。これ如何なる原因に由るのであらうか。獨國失敗の原因は即ち吃飯問題であつたのだ。獨國の港口は悉く聯合軍側の封鎖するところとなり、國內の糧食漸次缺乏し、全國の人民兵士は總て食ふべき「パン」なく、甚しきは餓死するに至り、最後迄支持することが出来なかつたのである。故に遂に失敗に歸したのである。吃飯問題が國家の生死存亡に關係あるを想見すべきではないか。

近來食糧の最も豊富なる國家は第一は米國であらう。米國は年々許多の食糧を歐洲に運送して其の不足を補ふてゐる。其の次は露國である。露國は地廣く人稀にして、全國の食糧製産額亦頗る豊富である。其の他濠洲「カナダ」及び南米「アルゼンチン」等の國家は、何れも食糧の生産を以

て國家の富源とし、年々多額の食糧品を外國に供給して各國の食糧不足を補つて居る。ところが、ただ歐洲戰當時に於ては、平時運輸に供せられつゝあつた幾多の汽船が、悉く國家に徵發管理せられ、軍事輸送に使用せられたので商船に甚しき缺乏を來し、濠洲「カナダ」及び「アルゼンチン」地方の過剩なる食糧を、歐洲に送ることが出來なかつたがため、歐洲各國に食ふべき「パン」がなく苦しんだものである。幸にも中國は、歐洲戰當時洪水旱魃の天災もなく、農民が良好な收穫を得た爲飢饉を免がれたのである。が若し當時本年の如き水災に遭遇し農民の收穫がなかつたならば、中國も必ずや又食ふべき飯もなかつたであらう。當時中國がよくこの種災害を逃がることを得て食糧なきに至らざりしは、眞に之れ一種の天幸でなければならぬ。現在世界各國の中、食糧を自給自足し得る國は數國に過ぎず、多くは自足し得ないもののみである。例へば西方三島の英國の如き、一ヶ年中の食糧生産額は三ヶ月の用に足るのみにして、九ヶ月分の食糧はすべて之を外國に仰がなくてはならぬ。従て歐洲戰まさに劇烈なりし頃、獨逸潜水艇に海口を封鎖せられた英國は、殆ど食糧なきにたち至つたものであつた。東方三島の日本も亦年々食糧不足を憂へてゐる。ただ日本の食糧缺乏の憂愁は英國のそれの如く、しかく深刻ではない。日本本國の食糧は一年の中十一ヶ月迄自給し得、約一ヶ月分が不足するだけである。獨國の食糧は、一年の

中十ヶ月分を自給し得、約二ヶ月分の不足である。その他歐洲各小國の食糧は多くは不足してゐる。獨國の食糧は平時すら不足してゐたものが、歐洲戰爭に際しては、幾多の農民は悉く兵士に徵發せられたので、生産は減少し食糧は更に不足を告げたのだ。故に大戰四年、歸するところの結果は失敗であつたのだ。これに依ても全國の吃飯問題が如何に重要なかが分るであらう。

若し一人が食ふべき飯がないのなら解決は容易である。一家に飯がない場合にも亦解決は容易であらう。ところが若し全國人民にすべて食ふべき飯があり、恰も中國四億の人が食足れりと言つたやうな場合に、この食糧が不足すると言ふことになる問題は非常に重要なものとなり、容易に解決し難いものとなるであらう。結局中國の食糧は不足してゐるか何うか。果して中國人は食ふべき飯がないのであらうか。廣東地方の如きは年々移輸入する食糧は七千萬元に達する。若し一ヶ月間も外米の輸入せらるるものがなかつたならば、廣東は忽ち飢饉に襲はれるであらう。斯様に廣東は食糧が不足して居るのである。之は單に廣東一省に就いて言つた許りであるが、其の他の省も多くは皆廣東同様の状態にある。中國の土地面積は米國に比して非常に大きい、人口も三四倍はある。今假に吃飯問題に就いて、中國と米國とを比較すると云ふことになる。然中國は米國には及ばない。けれども之を歐洲各國と比較すれば何うであらう。獨國は食糧不足

である。故に歐洲戰開始後二三年にして國內に飢饉が起つた。佛國は食糧自足である。従て平時外國から食糧を輸入しなくとも尙ほ食するに足る。中國と佛國とを比較すれば佛國の人口は四千萬にして中國の其れは四億である。佛國の土地面積は中國の其れの二十分の一である。故に中國の人口は佛國の十倍、土地は二十倍だけ大きい。佛國四千萬の人口はよく其の農業を改良し得たがために、中國の二十分の一の土地を以て、尙よく食料を自給し得るのである。中國の土地面積は佛國の二十倍である。若し果してよく佛國に倣つて農業を經營し出産を増加することが出来たならば、生産せられた食糧は少くとも佛國に二十倍するであらう。そして佛國は現に四千萬人を養ひ得るのであるから、我中國も亦少くとも八億人を養ふことが出来るであらう。さうなれば全國人口をして飢饉の憂なからしむるのみならず、同時に食糧の剩餘を得ることが出来、之を他國に供給することが出来るであらう。

併し乍ら中國は今當に民窮財盡の状態にある。吃飯問題の現状は果して如何であらうか。全國人口は現在すべて食糧不足に苦しみ年々餓死するもの凡そ千萬を過ぐ。然も之は平時の數にして、一旦洪水旱魃の天災に遇はんか、餓死するものは千萬に止まらないのである。外國の確實なる調査に照せば、本年の中國の人口は僅に三億一千萬と言ふことである。中國の人口は十年前には

四億あり、現在僅に三億一千萬とすれば、この十年間に九千萬減少したことになる。これ寔に憂慮に堪へざる寒心事ではないか。之れ正に研究されなければならない一大問題ではないか。中國の人口がこの十年間に九千萬の減少を見た原因を簡單に説明すれば、即ち食糧の不足による。

中國に於ける食糧不足の原因は甚だ多いが、其の最大の原因は即ち農業の不進歩である。其の次は外國の經濟的壓迫を受けたからである。曩に民族問題を説くに當て、余は曾て外國が經濟勢力を以て中國を壓迫し、毎年中國の利權を掠奪しつつあるもの十二億元に及ぶことを語つて置いた。即ち中國は外國の經濟力の壓迫を受けて、年々十二億元の損失を蒙つて居るのである。中國はこの十二億元を、如何なる方法を以て外國に貢獻してゐるのであらうか。十二億元の現金を外國に送つて居るのであらうか。此の十二億元の損失は全然現金を用ふる譯ではなく、一部分は食糧を以てして居るのである。元來中國の食糧は本國に供給するのみにて、既に不足を告げてゐる。然るに何が故に、尙ほも食糧を外國に運送するのであらうか。其の理由は何處から發見し得らるであらうか。數日前發行の外國の貿易報告に依れば、中國の鶏卵類の輸出中、蛋白質に製成されたものを除き、單に雞卵其の儘のものにして年々米國に送らるるもの十億個、日本及び英國に送らるるもの亦非常な多額に上ると言ふことである。諸君にしてもし南京を通過したことのあ

るものは、下關に一宏壯な建物があるのを發見したであらう。あの建築物は、外國人の經營にかかる製肉工場で、中國の豚鶏鴨鵝など各種家畜を其の工場内に於て肉類に製成し外國に送つてゐるのである。又北支の大麥小麥及び大豆の如きも、年々輸出せらるるもの亦少なからず、三年前北支に大旱魃があつて京漢京奉鐵道沿線一帶に多數の餓死人を出したことがあるが、當時すら尙ほ牛莊大連より盛んに麥豆を多量に外國に輸出して居たものである。之は一體如何なる理由に依るのであらうか。即ち外國の經濟的壓迫を受けて居るからである。外國の經濟的壓迫を受け外國に送るべき金がなかつたが爲に、自らの餓死をも顧みず外國に食糧を送らねばならなくなつたのである。中國の吃飯問題の今尙ほ解決し得ざるは怪むに足りない。

今我等が民生主義を説くは即ち四億人をしてすべて食ふべき食あらしめ且つ非常に廉價なる食糧を得せしめんがためである。若し全國の一人一人が皆廉價なる食糧を得ることが出来るやうになるならば、其れでこそ始めて民生問題は解決せられたりと言ふべきであらう。よく此の問題を解決し得んには、果して何れの點から研究し始むべきであらうか。本來飯を食ふことは非常に容易なことであり、誰でも日々睡眠を取り飯を食ふて居るのであるから、別に問題とはしてゐない。だが中國の貧乏人の常に言ふ俗話に「日々門を開ければ七つのことがある、柴米油鹽醬醋茶の事

これである」と言ふのがある。斯様に飯を食ふことも伸々の問題である。我等にして此の問題を解決せんとせば、詳細なる研究をなさねばならぬ。

我等人類は果して何を食ふことに依て生存し得るのであらうか。人類の食ふものは多くは非常に重要な材料であるが、我等は何時も之を忽略にしてゐる。我等が毎日依て以て生を養ふところの食糧を分類すれば、最も重要なものが四種あるのである。第一は空氣を食ふことである。淺白に之を言へば即ち風を食ふのである。風を食ふと言へば、人は笑話位に思ふであらう。俗話によく「お前風でも食つて來い」と言ふのは、輕薄な人達の一口話であるが、實際に於ては、風を食ふことは飯を食ふことよりも更に重要なことである。第二は水を飲むことである。第三は動物即ち肉を食ふことである。第四は植物即ち五穀果實蔬菜を食ふことである。この風水動植の四種のもものは、即ち人類の重要な食糧である。今其の一々に就いて説明して見よう。

第一の風を食ふことであるが、諸君は笑ひ話と思つてはいけない。若し諸君が、風を食ふことが最も重要な一事であることを信じられなかつたならば、諸君は鼻孔をみな閉して一分間でもいゝ、空氣を吸はないでゐて見るがよい、諸君は果して如何なる感覺を受けるであらうか。辛榨出來るか何うか。我等は空氣を食ふこと毎分十六回である。即ち毎分十六回食べねばならぬ。

普通飯は一日に多くて三度より食べない。廣東人のやうに夜食迄食べるものでも一日四回に過ぎず、一般貧乏人に至つては大抵二度である。食ふべき飯もないやうな人は一回でも生活出来るのである。然るに空氣は毎日二萬三千〇四十回吸はねばならないのだ。そして一回だけ少なくとも氣持が悪いのだ。若し數分間も吸はなかつたならば死ぬことは請け合ひである。斯様に空氣は人類養生の第一に重要な物質なのである。第二は水を飲むことである。我等は單に飯許り食べて水を飲まないでは生を養ふことが出来ない。人は五六日位飯は食べなくても死ななくてもすむ。けれども飲むべき水がなかつたならば、五日を保つことは難しからう。人は五日間水を飲まずに居れば死ぬ。

第三は植物を食ふことである。植物は人類が生を養ふ上最も緊要な食糧である。元來植物を食べることは人類の生活方法が非常に進歩して後始めて覚えられたものだ。中國は極めて古い文明を有する國家である。従て中國人の多くは植物を食ふ。野蠻人になると多くは動物を食べる。従て動物も亦人類の一種の食糧である。風水動植の此の四種の物質はすべて人類の生を養ふ材料である。ただ風と水とは何處にもあり、人の居住するところならば海邊と言はず陸地と言はず、河水のないところには泉水があり井水があり或は雨水があると言つたやうな譯で到る處に水があ

り、更に空氣に至つてはないところはないのである。斯様に空氣と水とは非常に重要な材料で一刻も缺くべからざる物質であり乍ら、之を取つても盡くるなく之れを用ふれど竭きず、天の人類に與へ人力を煩はさざるもの所謂一種の天賜なるが故に問題にはならないのである。けれども動物植物質は問題になる。原始時代の人類は、現在の野蠻人もさうであるが、漁獵時代である。生を謀る方法としてはたゞ魚を捕へ獸を獵し水陸の動物を捕へて食糧としたのである。その後文明進歩し農業時代に至つて、五穀を種ることを知り、そこで植物に依て生を養ふ様になつたのである。四千餘年の文明を有する中國は、その吃飯(食糧)文化に於ては遙かに歐米よりも進歩してゐる。だから我等の食糧は多くは植物に依つてゐるのだ。植物は土地に生長するものではあるが、其の上に幾多の工夫を費し幾多の生産方法を經過して始めて得られるものである。故に植物の食糧問題を解決せんがためには先づ生産問題を研究しなければならぬ。

中國は古來農を以て國を立てゝ居る。故に農業は食糧を生産する一つの大工業である。我等にして植物の生産を増加せしめんがためには如何なる方法に依つて其の目的を達し得べきか。中國の農業は從來すべて人工に依つて生産せられたものである。人工生産は中國に於ては頗るよく進歩し收穫するところの各種出品は何れも非常に優美である。だから各國の學者は皆中國の農業

を極力稱讚してゐる。元來中國の食糧の生産は農民の力に依り、然も其の農民たるや、又非常に辛々苦々の勤勞に従事してゐるのであるから、中國にして食糧の生産を増加せんとせば、政治法律上の種々なる規定を定めて農業を保護しなければならぬ。中國の人口は農民其の大部分を占め、少くとも八九割に達するであらう。けれども彼等の辛苦勤勞より得た食糧は、大半地主に奪はれ、自ら手にするものは殆ど自らを養ふに足りない有様である。之では非常に不公平である。我等が食糧の生産を増加せんとするには、法律を規定して、農民の權利に對し一つの獎勵あり一つの保障あらしめ農民自身をして收穫の多くを得せしめ得るやうにしなければならぬ。我等は如何にしてよく農民の權利を保障し、如何にして農民自身の得る收得を多からしむべきか。それは即ち地權平均に關する問題である。數日前我國國民黨は此の高等師範學校に於て一農民聯歡大會を開催し、一つの農民運動たらしめたが、之はたゞ本問題解決の起點たらしめしものに過ぎず、將來民生主義が眞に其の目的に到達するときこそ農民問題の眞の完全なる解決はあるであらう。農民問題の完全なる解決は「耕者有其田」でなければならぬ。斯くて始めて我等の農民問題の最終の結果と言ふべきであらう。

中國の農民の現狀は如何に。現在中國には大地主がない。一方又一般農民の九割迄は田を有つ

て居ない。彼等の耕す田は殆ど地主の所有に屬する。田を有するものは多くは自ら耕さない。道理から云へば、農民は自らの爲に田を耕さねばならず、耕して出來た農作物は自己の所有に歸すべきが當然であらねばならぬ筈だ。ところが現在の農民はすべて自己の田を耕すのではなく、地主に替つて田を耕してゐるのだ。そして生産した農作物は大半地主に奪はれて了つてゐる。之れ一つの非常に重大なる問題でなければならぬ。我等は速に政治と法律とを以て之を解決しなければならぬ。若し果して此の問題にして解決し得なかつたならば、隨て民生問題も解決し得ないだらう。農民が田を耕して得る食糧は、最近の我農村の調査に依れば、十分の六は地主に歸し農民自らの所得は十分の四に過ぎないと言ふことである。之れでは餘りに不公平である若し此の儘で行くものとすれば、農民に智識の出來た曉、誰が再び辛苦して田を耕す事などを願ふだらうか。假りに若し所得食糧の全部が農民の所有に歸することになれば、彼等農民は必ず更に愉快に田を耕すことであらう。そして斯様に農民のすべてが愉快に田を耕すやうになれば、生産を増加せしむることも出來るのである。けれども奈何せん、現在のところでは多數の生産も悉く地主に歸し、農民の得るところは僅か四割に過ぎず、彼等農民が一年中辛苦を重ねて收穫した食糧も、却つて其の大半を地主に歸せしめねばならぬ結果となる有様であるから、多くの農民は愉

快に田を耕さうとはせず、從て幾多の田地は漸次荒蕪の地と化し生産することが出来なくなるのである。

我等は農業生産に對し、上述の農民解放問題の外に、尙七個の研究を要すべき生産増加の方法を有する。即ち第一機械問題、第二肥料問題、第三換種問題、第四除害問題、第五製造問題、第六運送問題、第七防災問題である。第一の方法は即ち機械問題である。中國は幾千年來耕田にはすべて人工を用ひ機械を使用したことはない。若し機械を使用して耕田したならば、生産は少くも倍加し費用は十乃至百倍を軽減し得るであらう。從來人工を以て生産し四億人を養ひ得たとすれば若し機械を使用して生産したならば八億人を養ひ得べきであらう。故に我等が食糧の生産方法に對し若し機械を以て人工に代えんか、現在中國にある地勢高く灌漑の甫なきため耕種し得ざる幾多の耕田に、機械を使用して水をとり、低地の水を高地に引いたならば、高地でも灌漑し得ることとなり、之を開墾して耕種することが出来るであらう。既に開墾せられた良田は、旱魃の災害がなくなり更に生産を増加し得ることとなり、之れ等從來耕種し得ざりし荒田もよく耕種に適することとなり、食糧生産は自然大々的增加を來たすであらう。現在幾多の耕田の抽水用の機械は、皆外國より輸入せらるゝものであるが、若し一般に機械を使用することとなり需要

が増加するやうになれば、更に我等自身に於て機械を製造して利權の外溢を挽回する必要が出來て來るであらう。

第二の方法は即ち肥料問題である。中國に於て從來用ひられて來た肥料は、總て人と動物の糞及び各種の腐敗植物にして化學肥料を使用したことはない。近來漸次智利硝石を肥料に使用するやうになり、廣東の河南地方では近來甘蔗の栽培にはすべて智利硝石を使用してゐる。甘蔗は肥料として智利硝石を用ふれば、生成の速度を倍加し成長した甘蔗其のもの大きさも幾倍にもなるのであるが、智利硝石を用ひない甘蔗は、生長も緩慢である許りでなく餘り大きくもならない。こと程左様に智利硝石は肥料として好適である。けれども智利硝石は南米智利國から輸入せらるるもので原價が非常に高く、従て賣價も亦頗る高いので、ただ甘蔗を栽培する人々のみが使用し得るに過ぎず、其の他の普通の農業では、とても使用する譯にはゆかないのである。智利硝石の外、海中の各種甲殻動物の磷質及び鑛石中の石灰質も亦非常にいい肥料であつて、若しも硝質磷質及び石灰質の三種を混合すれば、更に一段と良好な肥料となり、如何なる植物の栽培にも其の生長を非常に容易ならしめ生産を又大々的に増加せしむることが出來るであらう。例へば一畝の田を耕す場合、肥料を用ひずとせば五籾穀を收穫し得るものが、肥料を用ふれば二三倍の收穫を

擧げ得ると言つたやうなものだ。故に農業の生産を増加するが爲には肥料を用ひなければならぬ。肥料を用ひんとすれば、我等は科學を研究し化學的方法を以て肥料を製造しなくてはならない。肥料の製造の原料は中國には至つて豊富にして、智利硝石の如き原料は、中國に於ては夙くより火藥の製造に使用せられて來たものである。從來世界に於て使用せらるる肥料はすべて南米智利産のものであつたが、近來科學の發達に伴ひ一種の新方法が發明せられ、何處でも電氣を以て硝石を造る事が出来るやうになつた。従つて現在では、各國は智利から態々天然の硝石を輸入せず、多くは電氣を以て人工硝石を製造する。この種人工硝石は、天然の硝石と效用は同じで原價が極めて低廉なるため、各國では一般にこの肥料が歡迎せられてゐる。

だが電氣は又何を以て造るのであらうか。普通値段の高い電氣は蒸汽力から造られたものであるが、近來の廉い電氣はすべて水力で造られる。近來外國では瀑布及び灘（急流）の水力を利用して發電機を發動せしめ、非常に大なる電力を發生せしめ、更にその電力を以て人工硝石を製造するやうになつた。瀑布や灘の天然力には一文の費用もかからぬため、發生した電力も非常に廉價で、電力が廉ければ之に依つて製造せらるる人工硝石も、非常に廉い譯である。中國には此の種瀑布及び灘が非常に多い。西江梧州上流の如きは幾多の灘があり、南寧地方には伏波灘がある

が、此の灘の水力は非常に大であり往來の船の如きは非常な危險に阻礙せられてゐる。假りに若し灘の水を蓄へて電力を發生せしめ別に一航路を開鑿して船舶の往來に當てたならば、二つ乍ら其の利を全くすることが出來所謂一舉兩得ではないか。此の灘の水力は或人の計算したところに依れば、一百万馬力の電氣を發生することが出來ると言ふことである。其の他廣西の撫河紅河にも亦幾多の灘があるが、之等も亦利用して電力を發生せしむることが出來る。更に廣東北部の翁江の如きは、技師の測量に依れば、數萬馬力の電力を起すことが出來ると言ふことであるが、此の電力を以てすれば、廣州全市の電燈及び各工場の電機の使用に供給するは勿論、粵漢鐵道を外國最新の方法に倣て完全に電化するにも結構使用することが出來るであらう。

又楊子江上流の夔峽の水力の如きは更に偉大なるものがあり、或る人の調査に依れば宜昌萬縣間一帶の水力は三千萬馬力の電力を起すことが出來ると言ふ事であるが、斯様に大なる電力は現在各國に於て起されてゐる電力よりも遙に大きいものであつて、單に全國の汽車電車及び各種工場の用に供給し得るのみではなく同時に之を用ひて多量の肥料を製造し得るであらう。又黃河の龍門の如きも、幾千萬馬力の電力を發生し得、新式の方法を以てすれば、大約一億馬力を發生し得るとのことである。一馬力が強壯なる八人の力に等しいものとすれば、一億馬力は即ち八億人の

力である。一人力のものの労働は、現在各國の普通の規定に依れば、一日八時間とされてあるが、若し人力を以て労働すれば、八時間以上に互るときは、労働者の衛生上有害にして生産も亦之がために減少するものである。此の理由は前回に於て既に述べて置いた。斯様に人力を以てすれば一日八時間の労働より出来ないのに、馬力を以てすれば一日二十四時間中労働することが出来る譯で、この計算で行けば、一馬力の労働は一晝夜の中に二十四人分の労働をすることとなる。若し果して揚子江及び黄河の水力を利用して一億馬力の電力を發生せしめ得るとせば、それは即ち二十四億の労働者を以て労働するに匹敵することとなるであらう。其のときに至らば、汽車自動車を駛らせ肥料を製造し、其他種々な工場の工作などすべてに供給することが出来るであらう。韓愈曰く、工の家一にして器を用ふる家六なれば國家は日一日と貧乏するであらうと。中國四億人の中労働するものは果して幾許であらうか。中國の小供や老人は勿論労働は出来ない。又假令年若く強壯なものでも、田租を収める地主階級のもの、他人の労働に依つて養はれてゐる。だから中國人の大部分は、労働せず利益の分配に預つてはゐるが、利益を生まない連中許りであると言はねばならない。斯様な状態であるから中國は甚しく窮乏したのである。若し果して揚子江及び黄河の水力を利用して一億馬力の電力を起すことが出来たならば、そして一億馬力即ち二十

四億人力の斯くも大なる電力を以て我等に替て勞働せしめ得たならば、莫大なる生産をなし得、
中國は必ずや貧を變じて富となすことが出来るであらう。故に農業生産に在ては、人工を改良し
機械を利用し更に電力を用ひて肥料を製造することが出来たならば、農業生産は自然に増加する
ことが出来る筈である。

第三の方法は即ち換種問題である。之は或る一地方に今年この種植物を種ゆれば明年は別種の
植物を種え、或は同じ種の植物でも、今年は廣東の種子を播いたならば明年は湖南の種子を播き
明後年には四川の種子を播くと言つたやうに、種子を交換する方法である。斯様な種子を交換
する方法は何處がいいのであらうか。即ち土壤を交替に休息せしむることが出来、その生産力を
増加することを得る。然も種子は新土壤に播かるれば新しい空氣を生じ、必ず強壯を加え必ず結
實を多からしむる故に換種することが出来れば生産を増加するのである。

第四の方法は物害除去の問題である。農業上には尙ほ二種の物害がある。一つは植物の害であり
他は動物の害である。稲田は元來五穀を種ゆべきものである。ところが五穀を種えるときになれ
ば常に許多の稗ヒダ及び雜草が生ひ繁る。そしてそれ等の雜草及び稗の生長は、禾に比べて非常な速
であるがため、一面禾の生長を阻止すると共に他面田中の肥料を吸収し、禾稻には非常に有害であ

る。従て農民は科學の道理を應用し、如何にすればそれ等秕草を除去して植物の災害を避けしむべきかを研究しなければならぬ。又それと同時に、如何にして秕草を利用して五穀の結實を増加せしむべきかも研究せねばならないのである。動物の害とは何であるか。植物を害する動物は非常に多いが、最も普通なるものは蝗虫及びその他各種害蟲である。植物が成熟するとき當つて、若し害虫に襲はれたならば、虫のために蝕壞せられて收穫がなくなつて了ふであらう。今年の廣東の荔枝の如きは、その結實の際に當つて適々毛虫の害に遇つた爲、その花は全部食はれて了つたので今年の荔枝の生産は非常に少なかつたのである。その他植物を害する虫は非常に多い。國家は専門家をして其れ等害虫に就いて詳細なる研究をなさしめ、何等か適正なる方法を講じて之を消除しなければならぬ。米國の如きは、現に本件を一個の大問題視し、國家は年々巨額の費用を消耗して害虫消除の方法を研究して居る。斯くてこそ米國農業の收入は、年々幾億弗の増加を見ることが出来るのである。現在南京に一昆虫局が設立せられ、この種災害の消除方研究中ではあるが、何分規模が餘りに小さくして大した効果を收むることも出来ないやうだ。我等は國家の大なる力を以て、米國の辦法に倣て、害虫を消除しなければならぬ。斯くて始めて全國農業の災害を減少し得べく、全國の生産を増加することが出来るであらう。

第五の方法は即ち製造問題である。食糧は之を久しく保存する必要もあり、又遠方に運送する必要もある。従て一度はこれを製造（加工）して置かねばならぬ。我國に於ける最も普通の製造方法は日乾と鹽漬との二種である。恰も菜乾、乾魚、乾肉、鹹菜、鹹魚、鹹肉と言つたやうなもののである。近頃では外國の製造新法即ち食物を煮たり焼いたりして罐詰にして保存する方法がある。斯うすれば、如何に永い間保存して置いても開けて食べるときは、その味常に新の如きものがある。これ食物を製造する最良の方法である。魚肉と言はず果物蔬菜と言はず「ピステット」と言はず、何でも皆罐詰にして全國に分配し又は之を海外に輸出すべきである。

第六の方法は即ち運送問題である。食糧に剩餘を生じた場合、我等は之を彼此調和しこの地に餘りあるものを以て彼の地の不足を補はねばならぬ。例へば東三省及び北方は豆麥を産するが米がない。南方は米を産するが豆麥がない。依つて我等は北方東三省に過剩なる豆麥を南方に供給し更に南方に過剩する米を以て北方及び東三省に供給しなければならぬ。斯様に食糧を調和するには運輸に依らなければならぬ。現在中國最大の問題は即ち運輸にある。運輸が不便なるために幾多の浪費を生ずる。現に中國の多くの地方では貨物の運送にはすべて挑夫に依つてゐる。一人の挑夫の力は最も強壯なるものでも一日僅に一百斤を擔つて百里の路を歩むに過ぎない。之に要

する勞銀も一元はかかる。この浪費は單に金錢を空費するのみでなく同時に時間をも空費する。従て中國の財富の大部分は無形の中に運輸方面に消耗されて居るのだ。中國の農業問題は、假令眞によく敍上所説の五種の改良方法を實行し得、生産を増加せしむるを得たとしても、此の運輸にして敏活を缺かんか、結果に於て如何なる状態を呈するであらうか。數年前余は雲南の一土司に會つたことがある。彼は非常に廣大なる土地を所有し毎年租穀(年貢米)の收入も非常に多かつたものであるが、その彼が余に語るところに依れば、毎年幾千擔の穀を燒棄てて居るとのことであつたから、余は大切な食糧である穀を何うして燒棄てたりするのであるかと尋ねた。之に對する彼の言分は斯うである。毎年穀の收入が多過ぎて自分では食べ切れぬ、それかと言つて附近の人民も皆食足つてゐるから之を販賣すると言ふ譯にも行かず、運轉の方法と言へば、ただ幾十里を擔はせる位のものでそれ以上遠く迄運んで賣ることが出來ない、遠くへ賣買することが出來ないから、自然毎年新穀は舊穀を壓倒し又之を蓄える倉庫もそんなに多くはないし、新穀の市場に出廻はる頃になれば、人民は總じて新穀を好んで舊穀を食べなくなり、従つて舊穀は使ひどころがなくなる、使ひどころがなくなるために、毎年新穀の收穫期になれば舊穀はただ之を焼いて倉を空けて新穀を貯へるより外仕方がないと言ふにあつた。この穀を燒棄てなければならぬ理由こそ

は、即ち生産過剰にして然も運輸敏活を缺くがために外ならないのである。従來中國に於ける最大の浪費は挑夫にあつた。この廣東地方の如きも従前又非常に挑夫が多かつたものである。ところが現在では城内に馬路が開け手車が出來、大概のことは挑夫を使用しなくともよく、そして一臺の手車は挑夫の數人分の代りになり、數人の挑夫の費用を節約することが出来る。一臺の自動車に至ては十數人の挑夫に相當し、十數の挑夫の費用を省略することが出來、手車及び自動車を以て貨物を運送すれば、ただに冗費を減少し得るのみか同時に時間を節約することが出来ることとなつた。ただ西關に至るにはまだ馬路が出來て居ないからやはり挑夫の手で運搬せねばならぬ。若し夫れ田舎に於て一百斤のものを數十里もの路を運ぼうとしやうものなら、猶更のこと挑夫を使用しなければならぬ。金持などになると路を歩くのに皆驕夫を用ひて居る。之を要するにこれ迄中國は運輸方法が不完全であつたがため、極めて重要な食糧ですら、やはり運輸し切れず、食糧が運輸出來なかつたがために自然吃飯問題を解決することが出來なかつたのである。

古時中國の食糧運送の最良の方法は水道及び運河に依るにあつた。大運河は杭州に起て蘇州、鎮江、揚州、山東、天津を過ぎて北通州に至り殆ど北京に達せんとしその延長三千餘里實に世界最長の運河である。そしてこの水運の便は非常なもので、若しこの上に近來の大汽船及び發動汽船

を利用したならば、更に一層便利になるであらうと思はれるが、近來この運河のこのほど殆ど顧みられもせぬ。だが我等にしてこの將來の吃飯問題を解決し食糧の運輸を可能ならしめんとするには、運河制度を恢復することは必要である。そして既に存在する運河は之を修理し、運河なき地方には更に之を推廣し開鑿しなければならぬ。海上の運轉には更に大なる汽船を用ひなければならぬ。何故ならば水運は世界に於ける最も低廉なる運輸方法であるからである。

其の次に低廉なる方法は鐵道である。若し中國十八省及び新疆、滿洲、青海、西藏、内外蒙古に悉く鐵道を敷設し到る處聯絡するものと假定せば、中國の食糧は四處交通することが出来、各地の人民は低廉なる食糧を得ることが出来るであらう。故に鐵道も亦吃飯問題解決の一良法である。併し乍ら元來鐵道は繁盛なる地方に於てのみ利益を上げ得るものであつて、窮郷僻壤の地方を經過する場合は、何等運輸すべき貨物も亦旅客の來往もないのであるから鐵道側は單に利益を上げ得ない許りでなく却つて損をせねばならぬ。だから僻壤の地方には鐵道を敷設する譯にはゆかず、ただ車道を築設する可能性がある許りである。鐵道はなくとも車道さへあれば自動車を駛らせることが出来る。斯様に大都市には鐵道、小村落には車道があつて、路線の聯絡さへ完全に行けば、大都市に於ては食糧を運搬するに汽車を以てし、小村落に於ては自動車を以てすることが出来る

のである。故に廣東の粵漢鐵道の如き、黃沙韶關間鐵道兩沿線には村落が非常に多いが、若し之等村落に悉く車道を開設し粵漢鐵道とそれぞれ聯絡せしめたならば、嘗に粵漢鐵道が多額の利益を上げ得るのみならず、各村落の交通も非常に便利となるであらう。でなくて若し兩沿線の各村落にも幾多の支線を敷設し汽車を以て運送せしめ自動車運送に代はらしめたならば、必ずや損失を招くであらう。故に現在外國の村落では既成鐵道の通じて居るところでも、その經營思はしからざるため、自動車に改めやうとして居るものがある。其の理由は、汽車を一度動かすには多量の石炭の燃焼を要し經費徒に大にして利益を上げるのが容易でないのに反し、自動車は經費も少なく利益を上げることも極めて容易であるからである。之は近來交通事業を經營せんとする人の知らざるべからざる點である。

又廣州澳門間は從來すべて汽船に依て居たものであるが、近來廣漢鐵道の敷設を計劃するものが出來て來た。けれども廣州澳門間はその距離二百餘里に過ぎず、若し鐵道を敷設せんか、一日往復三回としても尙ほ利益を上げ得ないであらう。二回往復にすれば損をしなければならぬであらう。然も且つ經費を節約するため發車度數を少なくすれば交通はそれだけ不便となるであらう。だから結局、廣州澳門間は車路を築設して自動車を駛らせることが一番の得策と言ふことに

なる。何故ならば、車路の築設は鐵道敷設に比して資本は少なくて済み、加之汽車は機關車が少くとも七八臺の車を牽かないことには引合はず、費すところの人工と石炭の消耗は非常なもので、乗客でも少なかつた日には逆も利益を上げることが出来ぬ。ところが自動車と言ふことになる、何臺でも隨意に發車することが出来、乗客の多いときは大きい車、更に多いときには二臺でも三臺でも、乗客の少ないときは小さい車を發車すると言つたやうな按配に、客さへあれば隨時發車が出来るので、汽車の如く發車時間の定まつて居り、若し定まつて居らぬものなら衝突の危険ありと言ふ物騒千萬なものとは、比べものにならない程便利である。だから廣州澳門間は、鐵道を敷設するよりも車道を築設した方が、餘程經濟的でもあり便利でもある。車道が出来ても自動車も通はないやうな僻陬の地方に於て始めて挑夫を用ふる事とする。之に依つて見ても我等が食糧の運輸問題を解決するためには、第一は運河第二は鐵道第三は車道第四は挑夫この四つの問題を解決する必要があることが分かるであらう。この四つの問題が圓滿に解決してこそ、我等四億人は極めて廉價なる食糧を得ることが出来るであらう。

第七の方法は天災防止問題である。今度の廣東水災を見給へ。ここ十數日内には第一期米の收穫も出来ると言ふ時であつたのに折悪しく、その第一期米が將に成熟せんとする頃になつて、完

全に水に淹つて了つたのである。一畝の田からとれる米は最少十元のものはあるが、今之が完全に水に淹つて了ひ十元の損失となつたのである。今年廣東全省に於て水災を受けた田は一體何畝位に上るべきか。大概數百萬畝にも上ることであらう。そしてこの損失は數千萬元に上るであらう。従て吃飯問題を完全に解決するには災害の防止は一つの非常に重大なる問題であらねばならぬ。然らば水災の豫防方法は如何に。現在廣東に於ける水災防止方法としては、治河處を設立して、既に各江兩岸に於ける各低處地方に澤山の高堤を修築した。そしてそれ等築堤工事は何れも非常に堅固であつて、よく毎次の大水が兩岸の田畑に氾濫することを防止してゐる。昨年余が東江で競争した際それ等の高堤を實見した。それ等は何れも非常に堅固に出来て居りよく水患を防止して水に衝破せらるるに至らない。これ築堤して水災を防止する方法であつて一種の治標方法である。この治標方法は唯水災防止法の一半に過ぎず、完全なるものではない。高堤を築く外に尙ほ河道及び海口一帶を浚渫し滑道に推積せる土砂を除去し海口が土砂の推積の爲に河口を阻碍することなからしめねばならぬ。又河道も深くして河水の流通を容易ならしめねばならぬ。斯くて始めて大水のとき各地に氾濫せしめず水災を減少することが出来るのである。故に河道の浚渫と兩岸の高堤の築造との兩工事を同時に實行してこそ完全なる治標方法と言はねばならぬ。

然らば水災防止の根本的方法は如何に。近來の水災は何が故に年一年と増加しつつあるのだろうか。何うして古時の水災は非常に少なかつたのであらうか。この原因は即ち古代には非常に多數の森林があつたのに反し、現在の人民は材木を濫伐し伐採後も之を補種しない爲、森林が非常に減少し多くの山嶺は皆禿山となつてゐるから、一度大雨に遇へば、山上には雨水を吸収し之を阻止すべき森林なく、山上の水は直に流れて河中に至り河水は忽ち泛濫を來し水災となるのである。従て水災の防止には、森林の種植は非常な關係があり、森林を多く種うことは水災防止の根本的方法でなければならぬ。森林があれば大雨に遇つたとき樹木の枝葉は空中の水を吸収し樹木の根株は地下の水を吸収する。若しそれが密林であれば、更に非常に大量な水を吸収するこゝとが出来らう。之等の大水は、すべて森林に蓄積せられて徐々に河中に流れ來り、すぐ様直接に河中に流れ込まないから水災の心配はないのである。故に水災防止の根本方法はやはり森林でなければならぬ。従て吃飯問題解決の一策として水災を防止せんがためには、まづ森林を造らねばならぬと言ふことになる。森林があれば全國は水禍より免れることが出来るのである。全國森林の種植問題も歸するところは國家の經營に依らなければならぬ。國家に於て經營してこそ、本問題は成功し得るであらう。本年中國南北各省に互つて皆大水災があつたが、この大水災

に依る全國の損害は數億元にも上るであらう。今既に民窮財盡の時代であるのだ、更に斯様な大損害を加へて居ては、當面の吃飯問題の解決も仲々容易であるまい。

水災の外に尙ほ旱災がある。旱災問題は如何にして解決すべきか。露國は這次の革命後兩三年に亙る旱魃があり、この大旱魃の爲に多數の人民が餓死し、露國革命は之が爲殆ど失敗せんとした。これを以て見ても旱魃の災害が又如何に激烈であるかが分かるであらう。この旱災は従前では天命として挽救することの出来ないものとされて居たが、今日では科學の進歩した結果、如何なる天災も救ふことが出来るやうになつた。たがこの種の旱災の防止方法の如きは何うしても全國的な大きな力を以て統一的計劃を樹てて防止することが必要である。然らばこの種方法とは何であるか。その根本方法はやはり森林の種植にある。森林があれば、空中の水分を調和することが出来、即ち四時雨を降らすことを得、旱災を減少せしむることが出来るのである。若し夫れ地勢高く水源稀少なる地方に至ては、我等は更に機械を使用して水を掲げ、高地の水飢饉を救済しなければならぬ。この種旱災防止の方法は恰も堤防を築いて水災を防止すると同様の治標方法である。この種の治標方法さへあれば、一時的の洪水旱魃の天災は皆挽救し得るのである。故に我等が研究せんとする水災及旱魃防止の根本方法はすべて森林を造るにある。全國的に大規模なる殖林をなさね

ばならぬ。水旱雨災の治標方法は、すべて機械を使用して水を抽き及び高提を築き河道を浚渫する事であらねばならぬ。この種治標及び治本方法にしてよく完全に實施せられんか、水旱の天災は共に免るるを得べく、斯くてこそ食糧の生産に損失を受くる患なきに至るであらう。

中國にして果してよく農民を解決し以上七個の生産増加の方法を實行し得たならば、吃飯問題は結局解決したものと云ふべきであらうか、否假々令以上種々なる生産問題がよく圓滿なる解決を告げ得たとしても、尙ほ吃飯問題は完全に解決した譯ではないのである。諸君は皆歐米諸國が商工を以て國を立てて居る事を知つて居るであらうが、これ等商工政府でも亦農業問題に對しては多大の研究をなしつつあることに就いては或は知らないかも知れぬ。ところが事實米國の如きは、農業に對しては如何に些細なる點でも改良せられ研究もされて居る。且つ單に本國の農業に對し詳細なる研究を試みてゐる許りではなく、常に専門家を中國内地並滿洲蒙古各地方に派遣して考察研究し、中國の農業工作の方法及び一切の種子を携へ米國に歸り参考にし應用すると言つた有様である。斯様に米國は、近來農業を重視することは非常なもので、凡ゆる農業に關する運輸の鐵道、防災方法及び種々科學的設備等すべて完全極まるものではあるが、米國の吃飯問題は果して解決せられて居るであらうか何うか。余は米國の吃飯問題は尙ほ解決されて居ないと思ふ。米國

は年々多量の食糧を外國に輸出し食糧は充足して居る筈であるのに、何うして又吃飯問題が未だに解決して居ないのであらうか。この原因は、即ち米國の農業が今尙ほ資本家の手にあり、依然個人資本制度の下に在るからである。それ等個人資本制度の下にあつては、生産の方法は非常に發達はしたが、分配方法が全然棄てて顧みられずに來た。従て民生問題を解決することが出來なかつたのである。

我等が完全に民生問題を解決せんとするならば、常に生産問題の解決のみならず同時に分配問題にも亦注意しなければならぬ。だが公平なる分配方法なるものは、個人資本制度の下では實行することは出來ない。何故なれば個人資本制度の下に於ては、種々なる生産の方法も、目指すは一個の目標に過ぎないからだ。目標とは何であるか。即ち金をもうけることだ。食糧生産の目標が金をもうけることにあるのだ。故に本國に於て食糧の價格が下落したときには外國に賣る。そして餘計に金をもうけんとするのである。個人が餘計に金をもうけやうとするが爲に、本國は飢饉となり、人民は食ふべき食糧がなくて非常に多くの人々が餓死せねばならなくなる。然も資本家は一向お構なしである。斯様な分配方法は、専ら金もうけを目標として居るのであるから民生問題は何時迄たつても完全に解決することが出來る筈がないのである。故に我等が民生主義を實行す

るがためには、やはり分配問題に重きを置かなければならない。我等の重要視する分配方法の目標は金も、うけであつてはならない。一般民衆に供給して之を使用せしむるのでなくてはならない。現在中國の食糧はもともと不足してゐる。それにも拘らず、毎年尙ほ數十億個の鶏卵及び穀米大豆は日本及び歐米各國へ輸出せられて居るのである。この種現象は全く印度と同然で、印度では食糧が不足してゐるのみではなく年々飢饉さへある。然も年々歐洲に輸入せらるる食糧の數量は印度が第三位を占めてゐる。これは一體如何なる原因に由るのであらうか。この原因はとりもなほさず印度が歐洲の經濟的壓迫を受けて居るからのものである。印度は今尙ほ資本制度時代にも拘らず、それ等生産資本家は食糧を以て饑民を救済して居ては金も、うけにならず、其れを歐洲に運送して賣却すれば金も、うけになることを知つて居るので、從て其れ等資本家は、土地の飢えたる民が餓死するのにもお構ひなく、食糧を歐洲に運送し賣却せんとするのである。我等の民生主義の目的は資本制度の打破にある。中國は今既に食糧の不足を告げつつある。それにも拘らず年々多量の食糧が一般資本家の金も、うけのために外國に輸出せられて居る。

我等にして若し民生主義を實行せんとせば、食糧生産の目標を金も、うけでなく、人民の給養に置

かねばならぬ。我等にして此の目的を達せんとすれば、年々の生産の剩餘をすべて貯蓄しなければならぬ。外國に輸出するには單に今年の食糧が足りたと云ふ許りではいけない。明年も明後年も非常に充足し三年後になつて食糧が非常に充足したときを待たねばならぬ。もし三年後になつて餘り充足しないときには、外國に輸出することは禁じなければならぬ。若し此の調子で民生主義を實行し民を養ふを以て目標とし金も、う、け、を以て目標としなかつたならば、中國の食糧は始めて非常に充足することが出来るであらう。故に民生主義と資本主義とは根本的に相容れないものである。即資本主義は金も、う、け、を目的とし民生主義は民を養ふを以て目的とするの差がある。此の民を養ふを以て目的とする良主義があれば従前の不良なる資本主義制度を打破することが出来るであらう。

けれども我等が民生主義を實行して中國の吃飯問題を解決せんがためには、資本主義制度に對しては、ただ漸進的改良のみを以てすべく、直に之を倒壊してはならない。元來我等の目的は、中國の食糧を非常に充足せしめんとするにある。中國の食糧にして充足したならば、其の後は更に一步を進むれば、食糧の價格をして低廉ならしむることは容易である。現在中國は正に米珠薪桂の秋にある。此米珠薪桂の原因は即ち中國の食糧の一部分が外國に奪はれ、輸出入貨物の價

格相平均せず常に輸入超過であり、外國の經濟的壓迫を受けて何にも他に賣るべき貨物もないところから、僅に人民の食べねばならぬ食糧で埋め合せて居るからである。斯うした譯で、現在の中國には食ふべき飯のない人間が非常に多いのである。そして食糧不足のため、死亡率は増加し出生率は減少して、全國の人口は漸次減少し四億から三億一千萬へと減じたのである。詮ずる處吃飯問題解決のため民生主義は實行されないのである。

食糧分配問題の解決策は如何に。食糧は即ち民生の第一の需要であり、民生の需要は従前の經濟學者は衣食住の三種と言ふてゐるが、余の研究に照せば四種でなければならぬ。衣食住の外に尙ほ一種即ち行があらねばならない。行も亦一種の重要な需要である。行(第一編第六講參照)は即ち走路である。我等にして民生問題を解決せんとせば、單にこの四種の需要を非常に經濟的に需要出来るやうにする許りではなく、同時に全國人民悉く之を享受し得るものとせねばならぬ、故に我等が三民主義を實行して一個の新世界を建設せんがためには、一般人民はこの四種の需要の中どれ一つでも缺くるところがあつてはならない。必ず國家は此の責任を負擔しなければならぬ。もし國家が此の四種の需要に對し供給を不足せしむるならば何人でも國家に向て之を要求することが出来る。そして國家は人民の需要に對して勿論責任を負はなければならない。次

に人民の國家に對する責任は如何なるものか。人民は國家に對して當然一定の義務を盡さねばならぬ。例へば農業に従事するものは食糧を生産し、工業に従事するものは器具を製造し、商業に従事するものは有無相通じ、士たるものは才智を盡さねばならぬ。一般人民にして、各其の義務を盡さば、自然衣食住の四種の需要を充足することが出来るのである。

我等は民生主義を研究し此の四種の需要の問題を解決しなければならぬ。今日は先づ吃飯問題に就いて語つた。吃飯問題の第一歩は生産問題の解決である。生産問題が解決した後に食糧の分配問題があるのである。此の問題を解決せんとせば、毎年貯蓄して全國人民の三年間の食糧を造らねばならぬ。三年分の食糧が出来たならば、其の後始めて剩餘の食糧を外國に輸出することが出来るのである。この食糧貯蓄の方法は即ち古への義倉制度である。此の義倉制度は近來に至り既に打破せられ、加之歐米の經濟的壓迫に依り中國は變じて民窮財盡の状態となつた。故に今は民生問題解決の最も急を要するのときである。若し此の機に乗じ、民生問題を解決しなかつたならば、之を將來に於て解決すると言ふことは一層困難となるであらう。我等國民黨は三民主義を以て國を立てんことを主張して居る。今民生主義を説くに當つては、常に學理の研究に注意するのみでなく更に實行の事實にも注意しなければならぬ。事實上の第一に最も重要な問題は即ち

吃飯である。我等にして此の吃飯問題を解決せんとするには、食糧の生産を充足せしむることが先決問題であり、第二に重要なるは食糧分配の平均である。食糧の生産と分配との二問題にして解決したならば、尚ほその上に人民は皆義務を盡すことが必要である。人民が國家に對しよく其の義務を盡くすことが出来たならば、自然家給に人足り吃飯問題も始めて眞の解決ありと言はなければならぬ。吃飯問題にしてよく解決せんか、其の他別種の問題も亦之に隨つて解決することが出来るであらう。

第四講 衣服問題

今日は穿衣問題（衣服問題）に就いて語りたい。民生主義の中で第一に重要なるは吃飯の問題であり、第二に重要なるは穿衣の問題である。故に吃飯問題の後には穿衣問題を説くのが順序であらう。我等は進化の見地から宇宙間の萬物を觀察するに、如何なる動物でも植物でも物を食べねばならぬ、養料に依り始めて生存し得るもので、養料がなかつたら死ぬより他ない。だから吃飯問題は、單に動物にとつて極めて重要なる許りでなく、植物にとつても亦同様重要なものである。ところが穿衣問題になると、宇宙萬物の中衣服を着るものは人類だけであり、然も文明人だけが着るも

のであつて、他の動植物は勿論のこと、同じく人類の中でも野蠻人も亦衣服を着ないのである。従つて吃飯が民生の第一重要問題であり衣服を着るのは民生の第二の重要問題と言ふことが分かる。現在「アフリカ」及び南洋各地の野蠻人は皆衣服を着て居ないが、之から見ても我等の祖先にも亦衣服がなかつたことが分かる。従つて衣服を着ると云ふことは、文明が進歩してから始まつたもので、文明の度が進歩するに隨て穿衣問題も愈々複雑となつて來たのである。原人時代に於て人類が着てゐた衣服は天衣であつた。何故天衣と云ふのであらうか。例へば、飛禽走獸は天生の羽毛を以て身體を保して居るが、此の羽毛は即ち禽獸の天然の衣服であつて、その羽毛は自然に生えたものであるから天衣と言ふ。原人時代の人類にも亦之と同様澤山の毛が生えて居たが、其の毛が即ち人類の天衣である。其の後人類の文化が進歩して游牧時代に至り魚を捕へ獸を獵することを覚え、そこで獸皮を以て衣服を作つた。獸皮を以て衣服を作るやうになつたので、身體に生えてゐた毛は、漸次其の效用を失ひ逐次脱落し、人類の文明が進歩すればする程衣服も愈々完備し身體の毛も愈々少なくなつた。故に文明の進歩した人類程身體の毛は少なく、野蠻人及び進化の久しからざる人程身體に毛が多いのである。中國人と歐洲人とを比較すれば歐洲人の方が中國人よりは多い。之れ歐洲の天然の進化の程度が未だ中國人に及ばないのに原因する。斯様に

衣服の始まりは、最初は人類の身體に天然に生長した毛であり、其の後人類が進化して猛獸を打ち殺し獸肉を食ひ獸皮を着るやうになつて、獸皮が始めて人類の衣服となつたのである。俗に「肉を食ひ皮に寝ね」と言ふが、之れは非常に古い言葉で、此の意味は元來人を獸類と罵るにあるが、又以て古代の人が獸類を打殺して其の肉を食糧として皮を以て衣服を作つてゐたものと言ふことが分かるであらう。其の後人類は漸次増加し獸類は漸次減少し、單に獸皮だけでは衣服の用に足りなくなつたので、別の材料を以て衣服を作らんとし、別に衣服材料を發明したのである。何を衣服の材料としたのであらうか。余は前回の講議に於て、吃飯の普通の材料は動物の肉及び植物の果實であると説いて置いたが、穿衣の材料も吃飯の材料と來源を同じくし、吃飯の材料が動植物に依らねばならぬと同様、穿衣の材料も動植物に依らねばならず、動植物以外には、餘り吃飯及び穿衣の來源とてはないのである。

我等が今穿衣問題を解決せんとするには結局何の程度に達すればいいのであるか。衣服を着ると言ふことは人人の一種の生活需要である。人類の生活程度は、文明の進化過程に在て之を三級に分つことが出来る。第一級は需要である。人類は需要（必需）を得なかつたならば生活することが出来ないのは勿論のこと、得るところの需要が不満足であつても亦充分なる生活は出來ず、

之は半死半活とでも言ふべきであらう。従つて第一級の需要は、人類の生活には少なくてはないものである。人類は第一級の需要を得て生活する外更に一步を進むると第二級である。此の第二級を安適と言ふ。人類の此の級の生活は生活のための必需ではない、必需の外に更に安樂を求むるのである。舒服（心持よき）を求むるのである。故に此の級の生活程度を安適と言ふのが適當だらう。再び更に一步を進むれば即ち奢侈を想ふことになる。例へば衣服を着ることに就いて言へば、古代の衣服は所謂夏は葛冬は裘で、それで以て需要を満してゐたものである。ところが安適の程度になると、夏は葛冬は裘と言たやうに僅に必需を求むると言ふだけでは濟まなくなり更に體に適せしめんとし、着て心持がいゝものでなくてはならなくなる。安適の程度を超えるると、身體に適する以外尙ほ一步を進めて又美しく且つ優雅なものを要求するやうになり、夏の葛は軽いウ、ス、ギ、ヌ、幼絹となり、冬裘は海虎貂鼠の皮と言ふ事になる。斯様に必需から進んで安適を求め安適から更に進んで雅觀として體裁のいゝものを求めることとなり、恰も吃飯問題に於て最初清菜淡飯で飽食してゐたものが、後には飽食から進んで酒肉甘美を求め更に進んで山海の珍味を求むると同様な譯である。山海の珍味と言へば、恰度現在の廣西料理の如きは、飛禽走獸、魚翅、奇有らざるはなく美具わらざるはなく奢を窮め慾を極めてゐるが、之れ等は奢侈の極と言

ふべきであらう。

我等が今民生問題を解決せんとするのは、決して安適問題を解決しやうが爲でなく、又奢侈問題を解決せんとする爲でもない。唯必需問題を解決せんとするにある。即ち全國四億人をして悉く必需衣服を得せしめ、四億人の衣食を豊足せしめんがために他ならない。前に話して置いた通り、中國の人口數は四億から三億一千萬に減少してゐる。此の三億一千万人の穿衣問題に對し、今我等は生産上及び製造上全般に亘つて計劃を立て一種の方法を研究して解決せねばならぬ。もし果して今日に於て之を解決する方法がなかつたならば、三億一千万の人間は恐らく一兩年後には更に幾千萬を減するであらう。今年の調査で既に三億一千万とすれば、更に幾年かの後には更に不足せねばならぬ筈だ。此の計算でゆけば、現在はたゞの三億を算するに過ぎないであらう。我等は此の三億の人のために、總括的な一大計劃を立て、此の衣服問題を解決しなければならぬ。本問題解決の方法を求めんとせば、先づ第一に研究すべきは衣服の材料の生産に就いてでなければならぬ。穿衣問題に就いて言へば、穿衣に需要せらるゝ原料は動物と植物とである。動物及び植物の原料は併せて四種ある。此の四種の原料の中、二種は動物より他の二種は植物より得るものである。此の四種の原料中第一は絲(生糸)第二は麻第三は棉第四は毛である。棉と麻と

は植物を原料とし、絲及び毛は動物を原料とする。絲は蠶の吐くもの、毛は駱駝及び其の他の獸類より採取するもの、絲、毛、棉及び麻此の四つは即ち人生穿衣の必需的原料である。

今絲（生糸）に就いて言へば、絲は衣服の好材料であるが、之は中國が最も先きに發明したものである。中國人は極く古い時代から絲を着てゐたものである。現在歐米列強の文化は我等に比し遙に進歩してゐるが、中國に於て絲が發明せられた頃は、歐米各國はまだ毛のついた肉を食ひ血を飲むと言つた野蠻時代で、單に絲を着て居なかつた許りか衣服さへも着ず、衣服を着ない許りか、身體には澤山の毛さへ生えて居り所謂天衣を着て居た一種の野蠻人であつたのだ。其れが近々二百年來漸く我等の文化よりも進歩し、始めて絲を以てよき衣服の材料とすることを覺えたのである。彼等の使用する絲は必需品としてではなく、多くは奢侈品として用ひられて居る。

中國に於て絲が發明せられ衣服の原料としてから幾千年になるが、我等三億人の穿衣問題は仲々まだ絲の問題に迄進んで居ない。我等の衣服の必需品は絲ではない。全國人民の大多數はまだ絲を用ひるところ迄行つてゐないのだ。年々我中國に産出される絲の大部分は外國に輸出せられ供給せられ、彼等の奢侈品となつてゐる。中國が外國と通商を開始した當時、絲は第一位重要輸出品であつた。當時は絲の輸出は頗る多量に上り、外國輸出品は至つて少なかつた。中國の

輸出貨物と外國の輸入貨物とを價格を比較すれば、同じどころか却つて輸出超過を示して居た。中國の輸出品中絲を除けば重要なものは茶である。絲と茶とは従前外國には産出しなかつたもので、従て中國の最大輸出品となつて居たものである。茶を用ひなかつた以前、外國人は皆酒を常用して居たものであるが、其の後中國の茶の輸入せらるゝに及んで酒の代りに茶を飲むやうになり、其の後茶を飲む習慣が出来、茶は一種の必需品となつたのである。かやうに従前は絲及び茶は中國の特産品で外國にはなかつたものであり、且つ當時中國人の外國品に對する需要も亦左迄大きくもなく、加之外國の生産品とてもそんなに多く出る譯でもなかつたので、通商開始後幾十年の間は、外國と貨物を交換するに當り、我等の輸出品たる絲及び茶の價格を以て結構外國輸入品の價格と相殺することが出来たのである。之れ即ち輸出入品價格の平均したものと云ふべきであらう。ところが近年外國品の輸入は日々増加し中國の絲及び茶の輸出は日々減少するに至り、我輸出品の價格を以てしては輸入品の價格を償ふことが出来なくなつた。近來外國に於ては中國の製絲法の秘訣を覺えて了つた。歐洲の佛蘭西、伊太利の如きは多量の絲を産出し、その養蠶紡絲及び製絲方法も頗る詳細に研究せられつゝあり、幾多の發明があり幾多の目覺しき改良が遂げられつゝある。日本の絲業は、中國製法を倣つた許りか、更に歐洲各國の新發明を採用したもの

である。故に日本絲は品質の進歩著しく其の産額は中國を凌駕し品質亦中國のそれよりも優良である。斯うした幾つかの原因に依り、中國の絲及び茶は、國際貿易に買手が少なくなり、外國品の爲其の地位を奪はれて了つた。現在輸出額は更に日々減少しつつある。絲茶の輸出にして既に減少した以上、他に外國に賣つて外國輸入額と相殺すべきものなく、毎年通商貿易上各國に進貢するもの約五億元に上る。之れ即ち外國の經濟的壓迫を受けてゐるのである。中國は外國の經濟的壓迫が激しければ激しい程、民生問題は益々解決することが出来なくなるであらう。中國の絲は國際貿易上外國品のため完全に其の地位を奪はれて了つた。品質は外國品程良くなく價格も外國品程高くないが、何しろ之等を以て我等の必需品たる外國の棉糸棉布と代へる必要があつた爲自ら絲を使用することが出来ず、外國に輸出して更に價格の低廉なる外國の棉糸布と交換せねばならなかつたのである。

製絲工業に於て従前我等の發明した生産と製造との方法は、共に非常に優秀なものであつた。けれども原狀維持の儘一向改良と言ふことを知らなかつた。ところが其の後外國が之れを習得し近來最近の科學を應用し科學的方法を以て種々改良を施した結果、彼等の製産する絲は遂に中國品を凌駕し、中國の蠶絲工業を侵占するに至つた。中國絲業の失敗の原因を考究するに、我等は

生産方法の不良なりしを發見する。中國の蠶は大部分病蠶であり、事實一萬の蠶の中大半は結果不良にして中途に死んで了ふ。然も幸にして死ななかつたとしても、其れ等病蠶の結ぶ繭から吐かるる絲の良からう筈はなく、品質は不良色澤は少ない。其の上絲を繰取る方法が不完全と來てゐる。従つて切れ目が非常に多く外國の織網機械の用に適しない。斯うした原因から中國の絲は漸次失敗を重ね外國絲に敵することが出来なくなつたのである。數十年前には外國の養蠶方法も亦中國と同じであつた。中國農民の養蠶は、或時は非常に優秀な成績を收め又或る時は完全に失敗した。斯様に其の結果に非常なむらがあつたが、農民は別に改良方法を研究するでもなく、之を運命の勢に歸し、養蠶の收穫が不良の際は之を運命よからずと言つたものである。外國でも當初は之と同様であつた。其の後科學者が生物學なるものを發見し、一切の生物を仔細に考察し、肉眼で見える生物を詳細考究したのは勿論のこと、肉服で見えないもので幾千倍の顯微鏡を使用してやつと見えると言つたやうな生物迄も詳細に考究したものである。

其の結果佛國のパスド(Pasteur)なる一科學者は一つの發明をした。此の發明に依れば、一切の動物の病は其の人の病氣たると蠶の病たるとを問はず、すべて病は一種の微生物から起るもので、此の微生物を除去することが出来なかつたならば、病動物は死なねばならぬと言ふのである。

彼は長い年月と幾多研究の結果、微生物の正體を明確にして之れを撲滅する方法を發見し、蠶病の治療方法を發明した。此の方法が佛國及び伊太利の養蠶家に傳はり、佛伊の人民は此の方法に依り蠶病を醫することを知り、之より病蠶は著しく減少し、絲を繰取るときになつて成績頗る良好となり蠶絲業は非常な進歩を遂げた。其の後日本も亦此の方法を學ぶところがあり、彼等の絲業も漸次進歩したのである。中國の農家は守舊的で新法を考究しない。故に我等の絲業は日一日と退歩したのである。現在上海の絲商は一生絲檢査所を設立し絲質を考究し改良を企ててゐる。廣東嶺南大學に於ても亦科學的方法を以て蠶種を改良したが、蠶種改良後は絲の收穫も頗る多く品質亦極めて優良となつた。けれども斯く如き科學的蠶種改良方法を知つて居るものは尙ほ少なく、大多數の養蠶家は今尙ほ之を知らないのである。

だから若し中國の絲業を改良し生産を増加せんとすれば、一般養蠶家に於て外國の科學的方法を學び蠶種及び桑葉を改良しなければならぬ。蠶種及び桑葉の改良後は更に紡絲方法を詳細に研究し絲の種類品質及び色澤を夫々改良しなければならぬ。斯くて中國の絲業は漸次進歩する事が出來、ここに始めて外國絲と競争し得るに至るであらう。若し果して中國の桑葉蠶及び絲質にして何等改良せらるることなく、依然何時迄も舊法を固守して居たならば、中國の絲業は單に失

敗のみに止まらず、恐らく天然に淘汰せられ完全に消滅せねばならないであらう。現在中國は自ら大部分の絲を用ひず、之を輸出して外國の綿糸綿布と交換して居るが、若し果して中國の絲質にして不良ならんか、纏ては外國は中國絲を使用しなくなり中國は販路を失つて、單に一大富源を奪ふのみか、外國の棉糸綿布と交換すべき糸の輸出がなくなるところから、肝心の中國の衣服の材料すら手に入らなくなつて了ふであらう。故に中國にして一般人の衣服の材料有らしめ穿衣問題を解決せんが爲には固有の工業を保守し蠶絲桑葉を改良し紡絲方法を改良しなければならぬ。曾ては中國の綾羅綢緞は非常に優秀で外國品の及ばざるところであつたが、現在では外國が機械を使用して紡織し製造するところの絲製品の方が中國品に比して更に遙かに優秀であつて、近來中國の金持等の使用する最も華美なる絹織物の如きは總て外國より輸入せられたものである。惜むべし、中國國粹の工業も現に既に失敗して居るのである。我等にして絲業問題を解決せんが爲には桑葉蠶種の改良、養蠶及び紡絲の方法を改良して優良なる絲を造らねばならぬのみならず、尙ほ其の上外國を學んで機械を用ひて綢緞を織らねばならない。機械を用ひてこそ最も華美なる絹織物を造り大衆の使用に供することが出来、大衆の需要を充足して後始めて過剩の絹織物を外國に輸出して別種の貨物と換へることが出来るであらう。

衣服の材料としては、絲の外第二種は麻である。麻も亦中國に於て最も夙く發明せられたものである。中國は古代既に麻を以て布を織る方法を發明し、今日に至つても一般に尙ほ舊法を踏襲してゐる。中國の農業は總じて進歩してゐない。従て製麻業も亦外國に奪はれて了つた。近日外國では新しい機械を用ひ製麻し、麻を以て麻紗を製造するやうになつたが、この機械製麻紗は色澤美しく糸もよい。外國では更に麻と絲とを混合して種々なものを織るやうになつた。そして外國人の間には之が愛用されてゐる。この種麻絲交織の各種製品は、近來中國にも澤山輸入せられ中國人も亦非常に之を歡迎してゐる。斯様に中國の製麻工業は外國の爲め奪はれて了つた。中國各省からは多量の麻を産するが、麻から製造せられたものは夏の衣服用に供せらるる許りで、一年四季の中一季より用ふることが出来ない。我等にして製麻工業を改良せんが爲めには、如何に種植すべきか、如何に施肥すべきか、如何に細麻糸を製造すべきかと云つた具合に、之を根本的に詳細研究しなければならぬ。斯くて麻業は始めて進歩し得、製産品も始めて非常に廉價となるであらう。中國の製麻工業は全然手工に依り機械で製造して居るものはない、だから多大の時間を浪費する許りか、製出せられた麻布の品質も不良にして原價も從て非常に高くつく。我等にして麻業を改良し良麻を製造せんが爲には、是非とも一大計畫を樹てねばならぬ。この計劃とは先

づ第一に農業から研究し種植から麻布の製造に至る迄一步一步と工夫し總て科學的な新方法を探用することである。若し斯の如く改良することが出来たならば、我等は始めて優良なる麻を得ることが出来、始めて非常に廉價な衣服の材料を製造することが出来るであらう。

絲及び麻のこの二つは衣服製作材料としては中國が眞先きに發明したものである。けれども現在の衣服材料としては絲麻許りでではなく大多數は棉を用ひてをり最近では追々毛を用ふるやうになつて、棉及び毛のこの二つの材料は現在では人々の衣服の必需品となつた。元來中國には棉はなかつたものでこの種吉貝棉は印度から傳來したものである。印度から棉花の種子を得た中國は、之を各地に種植して糸を紡ぎ布を織ることを覚え、一種の棉花工業となつたのである。近來外國の洋布(外國製棉布)が中國に輸入せらるるところ、洋布は中國の土布(支那産棉布)よりも品質も良く價格も亦低廉であるので、中國人は洋布を愛用して土布を喜ばず、中國の土布工業も洋布のため倒せられて了ひ、従つて中國は衣服の必需材料迄も外國の供給を仰がねばならなくなつた。故に土布の小工業に於ても亦洋布(外國製棉糸)を以て織布するやうになつた。斯様に中國の棉業は根本的に外國のため奪はれて了つたのである。

中國では印度の棉種を輸入してから、各地の栽培振りも頗る良好で、年々棉花の産額も非常に

増加した。世界の棉産國と云へば、第一は米國で、其の次は印度、中國は世界第三位にある。斯様に中國所産の棉は、少ないといふ譯ではなく、天然の品質も亦頗る優良ではあるが、工業が進歩して居ない爲、自らこの棉花を以て優良な棉糸棉布を製造することが出来ず、棉花の儘外國に輸出せねばならぬ。中國の輸出棉花の大部分は日本へ向けられ其の他歐米各國にも運ばれる。日本及び歐米各國は中國の棉花を購入して本國の棉花を混合し、始めて優良なる棉布を織る事が出来る、日本の大阪各紡績織布工場所用の原料の過半は中國棉花である。彼等は中國の棉花を以て織布した後再び其の棉布を中國に輸出して金をもうけるのである。本來中國の勞働者は非常に多く勞銀も亦各國に比べて安い。斯様に中國は自ら棉花を産し又勞銀も低廉な勞働者もあるのにも拘らず、何故棉花を日本に運んで織布しなくてはならないのであらうか。何故自ら織布しないのであらうか。日本は勞働者も少なく勞銀も亦高い。それにも拘らず日本は何うして中國の棉花を買ひ洋布を織造して中國に送り回して金をもうけることが出来るのであらうか。この原因を推究すれば即ち中國の工業が進歩せず價格低廉なる布を製造することが出来ないのに反し、日本の工業は非常に進歩し頗る廉價なる布を製造することが出来るからだ。従つて穿衣問題を解決せんとすれば、何うしても農業及び工業の二問題から解決してかからねばならぬ。若し農業及び工業の二問題に

して解決することが出来なかつたならば、生産を増加する能はず安い衣服を着ることも出来ないであらう。中國は既に自ら安い布を織造することが出来ないで、外國棉布の輸入に待たなくてはならないが、外國が布を中國に運んで来るのは彼等の義務を盡す譯でもなく又進貢でもない。彼等の目的は金もうけにある。一弗の品物で二弗の中國の金と換へやうと云ふのだ。斯うして中國の錢は外國のために奪はれて了う。即ち外國の經濟的壓迫を受けて居るのであるが、この壓迫の原因を追究するに、やはり工業の不發達がその原因である。工業不發達のために中國の棉花を悉く外國に輸出しなければならぬ。そして外國の粗なる棉布でも輸入しなければならぬこととなり、中國人の日常の衣服迄、非常に高い代價を支拂つて、外國品の輸入に依らなければならぬことになるのだ。然も此の非常に高價なる代價は、非常に貴重なる金銀食糧を外國に輸出することに依て支拂はねばならないのである。この有様は、道樂息子が自ら生産することを知らず、自ら衣食を謀る能はずして、祖先の遺して置いた珍寶骨董等を賣つて衣服に換へねばならないのと恰度そつくりの状態で、これ即ち中國が外國の經濟的壓迫を受けつつある現狀である。

余が従前民族主義の中で既に説いて置いた通り、中國は外國の經濟的壓迫を受けて毎年外國のため十二億乃至十五億元を奪はれねばならぬ。この十五億元の損失の中最大なるものは輸出入品

の均衡がとれないために起るもので、ここ兩三年の海關貿易年報の報告に照せば、輸出品は輸入品より三億餘兩程少ない。此の兩數は海關で云ふところのもので、この海關兩で所謂三億餘兩と言へば、上海の大洋に換算すれば五億元に相當し、若し之を廣東の毫銀に換算すれば六億元に相當するものであるが、之だけが即ち輸出品と輸入品との相殺することの出来ない價格なのである。輸入品は究竟何んな品物であるか。最大輸入品は洋紗洋布で、之はすべて棉花から造られたものだ。故に中國毎年の輸入に依る損失の大部分は棉製品に依る譯である。海關貿易年報の報告に依れば、此の種棉製品の輸入額は毎年二億海關兩に上るさうで、上海の大洋に換算すれば三億元になる。即ち中國の用ふる外國棉布は年々三億元に上り、之を中國最近の人口數に比較して見れば、一人に付一元宛の洋布を着て居ることになる譯だ。斯様に現在では、民生にとつては第二の必需品であるものを、すべて外國の材料を用ひて居るのである。元來中國には棉花はある。勞働者も非常に多い。勞銀も亦やすい。が唯奈何せん、工業を振興して利權を挽回することを知らない。従て衣服に洋布を用ひなければならず、其の結果莫大な錢を外國人に送らねばならないのである。外國人に錢を送らねばならないのは、とりもなほさず外國の經濟壓迫を受けて居るのである。之に對し何等か適切な解決方法がなかつたらなば、我等直接の衣服の民生問題は更に解決は困難となる

であらう。

諸君にして若し利權を挽回せんとするならば、先づ穿衣問題を解決するために、洋紗洋布の輸入減少に努力しなければならぬ。然らばこの問題解決のために如何なる適切なる手段ありや。かの歐洲戦争當時に於ては、歐米各國の洋布は少しも中國に輸出せられず、中國の洋布は悉く日本から來たものであつた。日本はその頃歐洲協商國に種々なる軍需品を供給して居り、その方が中國へ洋布を輸出するよりも利益が多かつたので、日本の大工場では、皆軍用品を製造して協商國へ供給し、ただ少數の工場のみが僅に洋紗洋布を製造して中國へ輸出すると云ふ有様であつた。

従て中國の市場に於ける棉布は人民の需要を充すに足らず、棉布の價格は非常に騰貴した。そこで當時の中國の商人は、投機事業でもするやうな考へで、幾多の紡績工場紡績工場を發起設立して自國産の棉花を以て洋紗を紡ぎ更に洋布を紡織したものである。其の後上海には幾十の工場設立せられ、何れも莫大な利益を上げ一弗の資本で殆ど三四弗の利益を上げ得、幾倍の利息になつた。そこで一般の資本家は此の大もうけを見て、皆巨利を博せんものと更に莫大な資本を投じて紡績紡織の工場を開辦したものである。故に當時上海に於ける紡績工場紡織工場は一時隆盛を極めたもので、それ等工場を開いて新に大もうけした資本家の中には幾多棉花大王と稱せられたも

のもある。ところが現在では何んな状態であらうか。従前の幾千萬の大富豪は今では皆莫大な損失を蒙りすつかり貧乏になり變つて了ひ、従前開かれたところの紡績工場紡織工場は、今では缺損のため大多數は停業し、休業しなければ更に損失を重ねると言つた状態で、甚しきに至つては完全に破産せんとして居る。

之は抑も如何なる原因に依るものであらうか。一般の人の中には外國が洋布洋紗を中國へ輸出し得る原因は、外國では機械を用ひて糸を紡ぎ布を織つてゐるからだと考へてゐるものがある。機械を以て紡糸し織布することは、手工を以てするよりも製品の品質は佳良で原價も少くて済む。

だから外國では中國の棉花を輸入して本國に於て洋布を織成した後再び中國に輸出すると言つたやうな往復曲折を繰返しても尙ほ利益を上げる事が出来るのである。彼等の利益を上げ得る原因を推究するに一に機械を用ふるにある。故に中國の一般資本家も亦皆彼等を學んで、機械を用ひて布を織り紗を紡ぎ幾多新式の大紡績工場大織布工場を開いた。其の投下資本は大は千萬小さくて百數十萬に達する。歐洲戰爭當時それ等紡績工場及び織布工場の上げた利益は實に莫大なものである。ところが現在では皆損失続きで大多數は停工し従前の棉花大王も今では窮措大となり變つた。斯様に現在我等の紡績工場織布工場も同じく機械を使用して居るに拘らず、何故に彼等外

國人は利益を上げ得、我等中國人のみ損をしなければならぬのであるか。然も外國の織布に用ふる棉花は、やはり中國から買ったもので、外國が本國にそれを輸入するがためには運賃を要し且つ洋布に織れば再び之を中國に輸出するにも亦運賃を要し、斯様に往復に多大の運賃を費さねばならず、その上外國労働者の勞銀は又中國のそれよりも高いのである。之に反し中國では本地産の棉花を以て貨物を製造し、用ふるところの機械も外國と同様、而も且つ勞銀は廉いと言つたやうな極めて有利な立場にある譯であるから、理窟から言へば、中國の紡績工場織布工場は當然利益を上げ得なくてはならず、外國の工場は損をしなければならぬ筈だ。然るに何うして其の結果が全然反對になるのであらうか。

此の原因は即ち中國の棉業が外國の政治經濟的壓迫を受けつつあるが故に外ならない。外國の中國を壓迫するや、専ら經濟力―經濟力は一種の天然力にして即ち中國の所謂王道である―を用ふるのみに非ず、經濟力が時あつて窮まりその目的を達し得ざるときは、政治力を以て壓迫する。此の種政治力はとりもなほさず中國の所謂霸道である。従前中國が手工を以て外國の機械と競争し中國の工業が失敗に歸して居た其の時代は尙ほ純然たる經濟問題であつた。ところが歐洲戰爭後外國に學んで機械を用ひ彼等と競等した中國の紡績織布工場も結局失敗に歸したが、事茲

に至つては、最早經濟問題ではなく政治問題である。外國が政治力を用ひて中國を壓迫するには如何なる手段に依るであらうか。従前中國の滿清政府は外國と戦ひ敗れたので、外國は中國を強迫して不平等條約を締結し、今に至る迄それ等條約を以て中國を束縛しつゝある。中國はそれ等條約の束縛を受くるが故に萬事何事にも失敗しなければならぬ。中國が若し外國と政治上平等の地位に立つならば、經濟方面に於ては外國と自由競争をすることが出來、中國は何うにか斯うにか自らを支持し得、或は少くとも失敗することはないであらう。然し乍ら外國が一度政治力を用ひ政治力を以て經濟力の後楯としたならば、中國は之に抵抗し競争することは出來ないであらう。

外國の中國の束縛する條約が、棉業問題に何う云ふ關係を有して居るか。現在外國が洋紗を中國に輸入するときは五分の輸入税及び内地通過税として二分五厘の釐金を徴收せられ、外國の棉糸布は合計僅に七分五厘の關税を支拂ふのみにて、中國各地到る處何の阻げもなく賣捌かれる。然るに中國の紡績織布工場に於て製造せられた洋布は又如何なる状態にあるであらうか。滿清時代中國人は皆ただただ夢の裡にあつた。そして萬事萬端外國人の主持に聽従して居たもので、凡そ中國上海その他各地の工場より生産する棉布は、悉く外國棉布同様、百分の五の關税を納めな

ければならず、その上内地通過に際しては、外國棉布の様に一度の釐金では濟まず、地方地方に於て其の都度釐金を納付しなければならぬ。數個の地方を通過すれば數回の釐金を納付する必要があると言つた有様で、簡言すれば、中國の土布は外國の棉布同様の海關稅を納付した上に、外國棉布と異なり數次の釐金を納付しなければならないのである。従て中國の土布の價格は非常に高價なものとなり、價格が高ければ各省に行渡らず、敢に同じく機械に依て織られた布もやはり外國棉布と競争することが出来ないのだ。外國は條約を以て海關釐金を束縛する。海關及び釐金は外國品に對しては隨意に増稅することが出来ないが、中國品に對しては勝手に加稅することが出来る。例へば此の廣東の海關は中國人に管理せられず外國人管理の下にあり、其のために我等は外國品に對し自由に加稅することが出来ない、然るに外國人は中國品が海關を通過する場合には任意に徵稅する。加之各釐金局に於ても外國品ならば一度納稅すれば濟むものを、中國品の場合には更に數次の釐金を納付しなければならぬ。これ即ち中外貨物の稅率上の不均等である。斯様に中外貨物の稅率が不均等なるがため中國の土布は失敗したのである。

歐米の平等且つ獨立の國家に於ては、互に自由に關稅を課し得、何等條約に依て束縛せられない。各國政府は何れも其の自由に關稅を増稅し得る。此の關稅の變更は本國と外國との經濟狀態

に照して決定するものである。若し外國品の輸入が激増し本國品を壓倒するが如き場合には、直に苛重に關稅を増徴して外國品の侵入を抑壓し、外國品を抑壓することに依て本國品を保護する。之を保護稅法と云ふ。一例を擧ぐれば、中國の貨物を日本に輸出する場合、日本は中國品に對し最少百分の三十の輸入稅を徵するのであるが、彼等本國の貨物からは徵稅しない。だから日本の貨物は、原價が百元のものならば、納稅が不要なのであるから依然百元であつて、その日本品を百二十元に賣れば二十元の利益となる。然るに日本に輸入した百元の中國品を百二十元に賣らんか、十元だけ原價より損をしなければならぬ。斯様に日本では中國品を抵制することが出来、本國品を保護することが出来るのである。此の種本國品の發達を保護し外國品の輸入を抵制する方法は、各國に共通な經濟政策である。

我等にして民生問題を解決し本國の工業を保護し外國の侵奪を防止せんがためには、先づ政治力を以て自ら工業を保護することが出来ねばならない。然るに現在の中國は條約の束縛を受け政治主權を失つて居るから、本國の工業を保護し得ざるのみか、却て外國の工業を保護せねばならぬと言ふ情ない状態にある。之は外國の資本の發達と機械の進歩とそして優越なる經濟的地位に搦て、加へてその經濟力は背後から政治力を以て支持せられて居るからである。従つて歐洲戰爭

當時歐米の洋布洋紗の競争がなかつた間こそ、中國の紡績工場織布工場も利益を上げることが出来たが、歐洲戰後等の洋布洋紗が再び中國に輸入せられ競争するに及んではとても問題にならず、我等は損失を受けねばならなかつたのである。窓衣問題の中最大なるものは棉業問題である。我等は現在の處差當り棉業問題に對し何等解決方法がない。何故ならば中國の棉業尙幼穉なるを至れず、機械も外國のその如く精良ではなく、工場の訓練及び組織も亦外國のその如く完備してゐない。従て中國の棉業は、假令釐金關稅を徵收せらるゝことなしとするも、やはり外國と競争することは困難であらう。

だから若し外國と競争しやうとするならば、歐米各國の關稅政策を學ばねばならぬ。然らば歐米各國關稅政策の經過は何のやうであつたか。數十年前に在ては英國の工業は世界第一位であり、世界の需要貨物は、悉く之を英國の供給に仰がねばならなかつたものである。當時米國はまだ農業時代にあり、凡ゆる小工業は完全に英國のために壓迫せられ發達の望がなかつた。その後米國は保護政策を採用して保護稅法を實行し、凡そ英國より米國に輸入さるゝ一切の貨物に對し百分の五十乃至百分の百の重稅を徵することゝした。之が爲英國品の原價は極めて高いものとなり米國品と競争することが出来ず、従つて英國は多量の貨物を米國に輸出することが出来なく

なり、米本國の工業は之により發達し、現在では正に英國を凌駕するに至つた。獨國も亦數十年以前迄は、やはり農業國であつて人民の需要貨物は亦英國から輸入せねばならず、従て英國の壓迫を受けねばならなかつたものである。之亦その後保護政策を實行したため、その工業も漸次發達し近來では更に各國を凌駕するに至つた。

之に由ても我等が工業を發達せしめんとせば、何うしても米獨の保護政策を倣つて外國品を抵制し本國の土貨を保護しなければならぬことが分るであらう。現在歐米列強は皆中國を殖民地的市場と見做し、中國の主權と金融とは擧げて彼等の掌握するところとなつてゐる。我等にして民生問題を解決せんとするに當り、若し單に經濟の範圍内のみから着手しては必ず解決し得ないだらう。民生問題をよく解決せんとせば、何うしても先づ政治方面から着手して一切の不平等條約を打破し、外人の管理する海關を回收しなければならぬ。そして我等が自由に加税し保護政策を實行することが出來たならば、こゝに始めて外國品は侵入すること能はず、本國の工業は自然發達することゝなるのであらう。

中國は須らく土貨を提唱し外國品を抵制しなければならぬ。だが従前この運動は幾度なされたか判らない。けれども之は全國の運調を一にすることが出來なかつたために成功しなかつ

た。だが又全國の運動をしてよく一致せしむることが出来ても、成功は仲々容易なことではないであらう。その原因は、國家の政治力が餘りに薄弱であつて、自ら海關を管理する能はず外國人をして管理せしめ我等の自由に税率を増減することが出来ない現状にあるからだ。税率を自由に増減することが出来なければ、洋布の價格を高からしめ土布を廉からしむる方法もない。だから現在の洋布は土布よりも廉いのである。事實洋布が土布よりも廉ければ、國民に如何に愛國を提倡して見たところで、永久に洋布の代りに土布を着ると言ふやうにはならない。若し果して國民をして永久に洋布を用ひしめず土布を着よと要求するならば、それは個人の經濟原則に反するものであり、従つて實行は不可能であるであらう。例へば一家毎年の所用洋布を三十元とする場合若し洋布を抵制して土布を改用せしむることゝすれば、土布の價格高きため毎年の費用は三十元ではきかなくなり五六十元を要することになるであらう。これ即ち土布を用ふことに依り年々二三十元餘計に費すことゝなる。この二三十元の浪費は、或は一時的愛國心の激動するところ、その犠牲も厭はないであらう。けれども斯の如き感情の衝動な經濟原則と相反するが故に、決して持久することは出来ないであらう。我等にして經濟原則に合致せしめ持久策を講ぜんとするならば、先づ不平等條約を打破し自ら海關を管理し自由の税率を増減し中國品と外國品の價格を

平等ならしめねばならぬ。例へば、一家毎年の洋布の費用を三十元とするならば、土布に對する費用も亦三十元に止めしめねばならぬ。それでこそ正當の辦法と言ふべく、それでこそ持久し得るのである。我等にして若し果して更に一步を進むるを得、洋布をして土布より高からしめ外國洋布を着るものをして一年三十元を費さしめ本國土布を用ふるものにして一年の費用二十元に止まらしむることが出來たならば、外國の洋布工業に打勝つことを得、本國の土布工業を大いに發達せしむることが出來るであらう。斯様に我等が民生主義を説き穿衣問題を解決せんとするには、全國皆土布を穿ち外國洋布の輸入を禁止しなければならぬ。其れが爲には國家に政治權力があらねばならぬ。其れでこそ始めて穿衣問題を解決し得るのである。

民生主義の穿衣問題に於て現在最も重要なる材料は絲麻棉毛の四種である。此の四種の材料中毛も亦中國に多量に産する。そして其の品質も亦外國のそれに比し佳良である。が、ただ中國に於ける此の種工業が未發達なるため、自ら製造せず、年々之を外國に輸出して居る。外國に於ては此の輸入した中國の毛を以て絨呢（毛織物）を製造し再び中國に輸出して中國の金をもうけて行く。我等にして若し主權を恢復し國家の力を以て經營したならば、毛工業も亦棉業と共に發達せしむることが出來るであらう。毛工業にしてよく發達せんか、中國人が冬季需要する絨呢は外國品

せらるるものでなくてはならぬ。野蠻時代に於ては人々は身體を裝飾する衣服とてなく、その身體に圖を描いたものである。即ち繪具を用ひて身體に塗畫したもので、古人の所謂文身之である。現在文明は進歩したけれども衣服の重要な作用は依然身體の裝飾にある。そして防寒保護の作用は却つて忽略にされる傾がある。近頃では奢侈に流れ獨り材料の模様が時々變化する許りではなく、衣裳の様式も亦年々寛狹を異にし、そして習俗の好尚亦人の衣飾を見てその人の優劣を區別するやうになつた。故に衣冠文物があると言ふことは、即ち文化の進歩を意味する。

その後君權の發生するに及んでは、又衣服を以て等級を識別した。故に衣服の第三の作用は階級の符號たるにある。現在に至り民權發生し階級は打破せられたが然も共和國に於ける陸海軍すら尚ほ服飾を以て等級を表はす習慣を除去する事は出来ない。以上の如く衣服には一、護體、二、裝飾、三、差等の作用がある外、今日我等が衣服を以て人民の必需とする以上、階級平等、勞働神聖の現下の潮流に鑑み、民衆のために衣服の需要に就いて考慮するならば、又一作用を加えなければならぬ。この作用は即ち便利と言ふ作用でなければならぬ。故に今日民衆の需要する衣服の完全なる作用と言へば、必ずよく身體を護り、美觀であり又同時に便利にして勞働を妨礙せざるものでなければならぬ。この諸條件を完備したものが即ち衣服である。

を用ふるの要なく、更に剩餘ある際は、之を絲同様外國に販路を擴張することが出来るであらう。現在中國の毛織工業は發達して居ないので、ただ毛皮として使用するのみである。そして散毛のままでは中國に於ては使用するところもないので、外國が之を廉く買つて絨氈及び各種氈料に製造し再び中國に輸出して我等の錢をもうけて行く。斯様に中國の棉業及び毛織業は、共に外國の政治經濟の壓迫を受けて居るのである。故に我等にして穿衣問題を解決せんとするならば、全國の力を擧げて大々的計畫を立て、先づ政治的主權を恢復し國家力を以て絲麻棉毛の農業及び工業を經營しなければならぬ。そして更に、海關を回收し、此の四種の農業及び工業を保護し原料の輸出税を加重し及び外國品の輸入税を増加しなければならぬ。斯の如くすれば、我國の紡織工業は立どころに發達すべきは必定であつて、衣服材料の問題もここに始めて解決することが出来るであらう。

衣服の材料問題が解決することが出来るとすれば、そこで我等は衣服本題に就いて語らねばならぬ。穿衣の起源は前にも述べたる如く、防寒用として起つたものである。故に衣服の作用は第一に身體の保護用としてである。然し乍ら、その後文明漸次進歩し、衣服を身體の裝飾用とするやうになつた。故に第二の作用は見て體裁のいいものでなくてはならぬ。呼んで立派であると

民生主義を實行する爲には、この衣服の三作用に基き、國家は大規模の裁縫工場を各地に開設し、民數の多少、寒暑の時候に適應して必需の衣服を製造し人民の用に供し、人々をしてすべて必需衣服あらしめ、一人でも缺くるものあらしめてはならぬ。これ即ち三民主義國家の政府が、その人民の衣服の需要に對する義務である。而して人民も亦國家に對して當然國民たるの義務を盡さなければならぬ。然らざれば國民の資格を失ふであらう。凡そ國民の資格を失ふことは主人たるの資格を失ふことであつて、之等遊惰の流氓は、國家人群の蠹賊である。政府は必ず法律を執行し之を強迫してこれ等流氓をして漸次神聖なる勞動に従事せしめ、均しく國民の權利を享けしむるやう仕向けなければならぬ。斯の如き流氓にしてその跡を絶ち人々皆生産の一分子とならんか、必ずや衣豊かにして食足り家給に人足り、民生問題は解決することが出来るであらう。

(未完)

註、三民主義は孫文が民國十三年國民黨改組に際し、其の宣傳資料として多年の蘊蓄を傾けて講述したるものにして後之が單行本として、出版されしものなるも、講演半ばにして孫が病を得中絶の餘儀なきに至りたる爲、一部未講の儘となるものなり。

孫文の提唱せる「イデオロギー」は現代支那の指導精神として過去三十年の間、支那國民を支配し來りたるのみならず、斯の如き動向は今後とも相當の期間繼續するものと觀測せられ、從つて其の主義主張の全貌を闡明することは所論の當否は別とし、現代支那の認識上又我對支外交違行上の參考として裨益する所尠からざるべしと認めらるゝに依り、中山叢書及び胡漢民の總理全集其他に依つて、孫文の遺したる文獻を網羅翻譯し印刷に附することとせり。

昭和十年九月

調査部 第三課

471

(註) 本文中の削除又は伏字の箇所は第一公論社編輯部に於て適當に處置したるものなり。

御諒承を乞ふ。

次 目 集 全 文 孫

第三卷	第二卷	第一卷
革命方略 大亞細亞主義 自治開始實行法 地方建國大綱 國民黨政綱 五權憲法 孫文主要著作年表 並案引	建國方略	三民主義
	本配回次	刊 既
第六卷	第五卷	第四卷
遺書 電文 雜言 孫文主要著作年表 並案引	雜言	講演及談話(下)

昭和十四年九月廿三日 印刷
昭和十四年九月廿七日 發行

不 許
複 製

「孫文全集」(第一卷)

定價 壹圓六十錢

譯者 外務省調查部

發行者 上村 哲 彌

印刷者 並木 順 作

東京市京橋區銀座三丁目二番地三

發行所

第一 公 論 社

電話 東京橋六四七三番
振替 東京六一八八六番

